

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—IV—

(本文編)

1 9 7 4

福岡県教育委員会

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—IV—

(本文編)

昭和49年3月

福岡県教育委員会

## 序

本県における九州縦貫道関係の調査は、昭和44年度から開始され、このうち昭和48年度中には、粕屋郡古賀町の古賀インターチェンジから大牟田市までの間の調査が、筑紫野市の一部を除いてほぼ終了する予定であります。

当委員会では、これに先行して昭和41年度に路線内の分布調査を実施いたしました。しかしもともと表面観察をもとにする分布調査そのものが完全なものではなく、調査開始後に多くの調査追加地点、予想をうわまわる重要遺跡の発見が相次ぐにいたりしました。

更にこの分布調査の成果がルート決定に際して、必ずしも有効に対応していないという事情もあって、今日の調査と保存の問題を非常に困難なものにしております。

本書の刊行も、道路の供用開始の時期との関連で、調査日数が年間300日に近いという状況のなかでなされたという実態を御理解のうえ、本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

昭和49年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和47年度及び昭和48年度に発掘した粕屋郡古賀町所在遺跡群と筑紫野市所在塔ノ原遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。

I	酒井仁夫
II	石山 勲・川述昭人
III	酒井仁夫・中間研志
IV	酒井仁夫・高橋 章・川述昭人
4. 図版目次、挿図目次は各遺跡ごとに記載する。
5. 昭和47年度に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として、植田実主事と、西谷正・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・森田勉各技師があたり、昭和48年度は主として瀧龍二主事と、石山勲・酒井仁夫・川述昭人・中間研志各技師があたった。
6. 本書の編集は、石山勲・酒井仁夫が担当した。

## 目 次

I は し が き .....	1
II 古賀町所在遺跡群 .....	10
III 塔ノ原遺跡 .....	67
IV 附 編 .....	113
1 杉塚廃寺の調査 .....	113
2 八並住居址出土遺物 .....	122

## I は し が き

九州縦貫高速自動車道建設に伴う発掘調査はすでに5年を経過した。昭和51年全線供用開始を目指す建設工事は年々ピッチを上げ、それに伴って下記のとおり発掘調査件数、面積、費用も年ごとに増加の一途にある。

調査年次	調査件数	調査面積( $m^2$ )	調査費(千円)
昭和44年	9	2,919	11,467
45	31	12,271	32,324
46	21	48,966	47,700
47	51	52,512	70,216
48	10	23,958	70,690

昭和47年度の調査経過を日を追って概略述べてみよう。

4月早々より久留米市所在祇園山1号墳、八女郡瀬高町所在日掛、大道端両遺跡で先年度の調査を継続した。また大野城市所在22遺跡の調査も同時に開始した。いずれもすでに建設工事が始まっており、発掘調査と工事は一寸刻みに並行して進展していった。

6月に祇園山古墳の発掘調査を終了し、当古墳の保存方法については継続検討することとなった。

8月には小郡市の土取り場内遺跡群の調査を開始した。昭和46年度に種畜場遺跡の保存問題が起き、その結果代替地として周辺の丘陵が削平されることになったのである。5遺跡、計30,000 $m^2$ がまさに人海作戦によって調査された。

9月末には大道端遺跡の調査が終了した。弥生時代から古墳時代にかけての住居址150数軒を検出した。このうち古墳時代後期の住居址は10数軒よりなる単住集団に区分され、律令制施行以前の集落構造を知る上で、重要な資料を提供した。

大野城市内での発掘調査は夏から冬にかけて最盛期をむかえ、裏の田で26軒の古墳時代住居址を、乙金では17基の後期古墳を発掘した。乙金古墳群は昭和45年度に調査を実施した8基と合わせて計25基の調査を全て終了したことになる。

6月からは粕屋郡内の遺跡発掘調査が開始された。須恵町乙植木古墳群、粕屋町西尾山古墳群、辻畑甕棺群、古賀町川原庵山古墳群と調査を継続し、昭和48年3月に至っている。

11月からはいよいよ筑紫野市内所在遺跡の調査を開始した。この調査は昭和48年度予定の調査の前哨をなすものであった。

新たに追加された路線外遺跡として太宰府町長浦窯跡、大野城市雉ヶ尾窯跡がある。いずれも土取り場内で発見されたものである。路線内のみではなく、附属施設や土取り場の予定地内の

遺跡についても、事前に工事担当者と十分に打合せをする必要性をつくづく感じさせられた。

当年度をもって福岡東インターチェンジから南インターチェンジの間及び鳥栖インターチェンジ以南の調査は全て終了した。また懸案であった祇園山1号墳は工事の一部設計の変更によって主体部を含む約4分の3の墳丘が保存されることになった。

昭和47年度の調査内容は次のとおりである。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	内 容
古1		粕屋郡久山町	1/9 ~ 1/17	85	遺構なし
古2	道田1号墳	粕屋郡古賀町	3/9 ~ 3/20	400	円墳, 横穴式石室
古3	川原庵山6号墳	粕屋郡古賀町大字新原	1/6 ~ 3/20	130	円墳, 木棺
古4	川原庵山7号墳	"	"	100	"
古追1	川原庵山遺跡	"	2/1 ~ 3/8	450	弥生時代ピット群
古追2	下別当1号墳	"	3/9 ~ 3/20	130	円墳, 堅穴式石室?
古追4	川原庵山8号墳	"	1/6 ~ 3/20	50	" 木棺
22	原口遺跡	大野城市大字乙金	4/10~ 4/12	40	遺構なし
23	雉ヶ尾遺跡	"	4/6 4/12~ 4/13	121	"
26	釜蓋原遺跡	大野城市大字瓦田字釜蓋	4/14~ 4/19	290	"
27	裏ノ田遺跡	筑紫郡太宰府町大字水城	4/21~ 8/2	4,980	須惠窯, 古墳時代後期 住居址
28	成屋形遺跡	"	8/1 ~ 8/4 10/3 ~ 10/6 12/11~12/26	1,913	先土器時代石器
29	小柳遺跡	"	10/23~11/11	600	遺構なし
30	水城	"	6/2 ~ 8/15	600	掘状落込み
36	前田遺跡	筑紫野市大字杉塚	11/27~12/28	773	柱穴群
37	唐人塚遺跡	"	12/21~12/27	560	土坑, 小堅穴
55	祇園山1号墳	久留米市御井町	4/1 ~ 6/1	900	方墳, 箱式石棺
69	日掛遺跡	山門郡瀬高町	4/1 ~ 4/9	532	遺構なし
追8	乙金古墳群	大野城市大字乙金	10/9 ~ 10/16	120	円墳, 横穴式石室
追22	"	"	10/14~11/2	75	"
追23	"	"	10/14~11/2		遺構なし
追25	"	"	10/11~11/15	108	円墳, 横穴式石室
追26	"	"	10/9 ~ 11/11	143	"
追27	"	"	9/26~10/16	218	"
追28	"	"	9/23~10/14	120	"
追29	"	"	10/7 ~ 12/1	96	"
追30	"	"	8/5 ~ 10/5	120	"
追31	"	"	8/5 ~ 10/6	78	"

追32	乙金古墳群	大野城市大字乙金	8/5～10/7	120	円墳、横穴式石室
追33	〃	〃	8/1～8/29	90	〃
追34	〃	〃	8/1～8/29	90	〃
追41	萩原遺跡	筑紫野市大字萩原	5/1～5/25	2,227	遺構なし
追42	大道端遺跡	山門郡瀬高町	4/10～9/30	12,463	弥生～古墳時代住居址
追43	西尾山1号墳	粕屋郡粕屋町大字西尾山	8/26～11/14	400	円墳、横穴式石室
追44	西尾山2号墳	〃	8/26～11/14	1,600	〃
追45	西尾山3号墳	〃	8/26～11/14	800	〃
追46	辻畑遺跡	〃	10/1～11/14	500	甕棺群
追48	唐山古墳	大野城市大字乙金	6/15～8/5	108	円墳、横穴式石室
追51	乙金古墳群	〃	8/1～8/12	210	〃
追59	松尾口遺跡	小郡市大字三沢	8/17～11/3	13,500	円墳3基、横穴1、弥生時代住居址
追60	乙植木2号墳	粕屋郡須恵町乙植木	6/15～8/17	80	円墳、竖穴系横口式石室
追61	乙植木3号墳	〃	6/15～8/17	80	円墳、横穴式石室
追62	乙植木4号墳	〃	6/15～8/17	100	〃
追63	萩原古墳	筑紫郡大字萩原	5/26～6/13	262	〃
追64	乙植木1号墳	粕屋郡須恵町	6/15～8/17	80	円墳、竖穴系横口式石室
追65	種畜場遺跡	小郡市大字三沢	8/8～9/6	1,078	弥生時代集落
追66	乙金古墳群	大野城市大字乙金	10/27～11/18	84	円墳、横穴式石室
追68	〃	〃	11/16～12/1	94	〃
追69	長浦窯跡	筑紫郡太宰府町大字向佐野	12/1～12/13	700	奈良時代須恵窯
追70	ハサコの宮遺跡	小郡市大字三沢	9/27～1/25	701	弥生時代住居址、円墳
追71	北牟田遺跡	〃	10/23～1/24	4,800	甕棺、木棺
追72	雉ヶ尾窯跡	大野城市大字乙金	11/9～2/28	315	古墳時代須恵窯

注 追 追加地点の意  
古 古賀地区の意

昭和48年度の調査経過を概略述べてみよう。

当年度の発掘調査は古賀町の残留分と筑紫野市分に集中した。工事と並行して調査を実施した点は昨年同様である。

4～5月は古賀町大田町遺跡と筑紫野市塔ノ原遺跡の調査を並行した。6月からは筑紫野市内各遺跡の調査を3地点ずつ並行して実施して49年3月に至った。なお唐人塚遺跡については福岡教育大学波多野院三教授を中心とした学生諸氏によって完徹していただき八熊遺跡については東京教育大学博士課程松浦宥一郎氏を中心とした学生諸氏の手によって調査を進展していただいた。



剣塚遺跡は須恵器散布地、円墳、前方後円墳の計3地点を当初の調査目的として6月15日発掘を開始したが、調査の進展につれて各種の遺構が検出された。弥生時代住居址・貯蔵穴・甕棺・瓦窯址が追加された。また前方後円墳々丘下からは箱式石棺を主体とする前方後方墳・方墳各1基が発見され、県内2番目の前方後方墳とあって保存についての協議が県教育委員会と日本道路公団の間でなされた。しかし至近距離まで工事が進行しており工事の変更はとても不可能だという点から調査を引き伸ばすことによって記録を詳細に残すに留まった。そのため調査期間は9月終了の予定が49年3月まで延長された。

唐人塚遺跡は土師器、須恵器散布地及び円墳1基の調査を目的として6月20日開始された。しかし発掘の結果円墳6基と木棺・箱式石棺・石蓋土壙墓・土壙墓・中世墓を計33、貯蔵穴2検出するに到った。

八熊遺跡は円墳2基と弥生式土器散布地の計3地点の調査を目的に8月1日開始された。しかし円墳の上に中・近世の遺構が重なっていたり、弥生式土器散布地と予想した地域内から墳丘がほとんど残っていない古墳が7基検出されるなど剣塚遺跡同様予想外の遺構が数多く発見されたため、工事の進行を止めない範囲内でできる限りの日数を費して調査を実施した。

また八熊遺跡で中・近世の遺構が確認されたことから、南に広がる3個所の丘陵鞍部の調査の必要性が痛感され、11月より調査を開始した。山ノ口遺跡の調査残留分及び路線外削平分と畑添第1・第2地点である。

工事の進行中新たに発見され、調査した遺跡には水城遺跡と道場山追加地点がある。6月に水城では橋脚建設用の掘り方を掘削中に多量の礫が出土したことから一時工事をストップして調査を開始したが、その結果石壘及び木杭多数が発見された。12月、道場山追加地点では丘陵を削平中、甕棺多数が露出したことから調査を行った。しかし甕棺内の人骨保存状態が極めて良好であり、まだ多数の甕棺の出土が予想されることから、その場では崖断面の調査のみに留め、その間は工事をストップして、本格的調査は3月になって実施した。

今年度も新たに発見された遺跡が多数あり、事前の調査の不完全さが今さらながら痛感させられた。また剣塚・唐人塚・八熊各遺跡のように何層にもわたって重複する遺跡の調査についても事前に試掘しておれば、ある程度の予想は立ったものと考えられる。

昭和48年度の調査内容は次のとおりである。

番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	調査面積 (㎡)	内 容
古追3	原口1号墳	粕屋郡古賀町	5/11～6/10	150	円墳、横穴式石室
古追5	大田町遺跡	〃	4/6～5/10	714	弥生～平安住居跡
30	水 城	筑紫郡太宰府町大字水城	6/20～7/13	22	石壘、木杭
33	剣塚遺跡	筑紫野市大字杉塚	6/15～3/30	420	
34	〃	〃	6/15～3/30	2,700	

35	剣塚古墳	筑紫野市大字杉塚	6/15～3/30	4,000	
37	唐人塚遺跡	〃	6/20～10/8	2,800	
38	唐人塚古墳	〃	7/15～10/8	190	
39	塔ノ原遺跡	筑紫野市大字塔ノ原	4/5～5/7	1,476	
39'	〃	〃	5/7～6/23	835	
41	八熊遺跡	筑紫野市大字武蔵	8/1～3/30	7,140	
42	八熊2号墳	〃	8/1～3/30	133	
43	八熊1号墳	〃	8/1～12/17	350	
44	山ノ口遺跡	筑紫野市大字古賀	11/12～12/6	505	
追35	扇祇3号墳	〃	5/31	130	
追73	畑添1地点	筑紫野市大字武蔵	12/6～1/26	940	
追74	畑添2地点	〃	1/7～3/20	1,575	
追75	八熊3号墳	〃	11/21～3/30	50	
追76	八熊4号墳	〃	12/11～3/30	50	
追77	八熊5号墳	〃	12/19～3/30	50	
追78	八熊6号墳	〃	1/29～3/30	50	
追79	八熊7号墳	〃	2/13～3/30	50	
追80	八熊8号墳	〃	2/18～3/30	50	
追81	八熊9号墳	〃	3/3～3/30	5	
追82	道場山 B地 点	〃	3/9～3/30	900	

注 追 追加地点の意  
古 古賀地区の意

調査は、福岡県教育委員会文化課の技師が主としてあつたが、唐人塚遺跡については福岡教育大学の、八熊遺跡については東京教育大学の、水城・塔ノ原両遺跡については県立九州歴史資料館の協力をうけた。なお、人骨の鑑定には、九州大学解剖学教室助手の橋口達也氏をわずらわせた。

遺跡の調査関係者はつぎのとおりである。

#### 総括

教 育 長	森 田 実	教 育 次 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	森 英 俊	文 化 課 課 長 補 佐 (前任)	菅 隆
文 化 課 課 長 補 佐	今 井 岩 雄	文 化 課 課 長 技 術 補 佐	藤 井 功
調 査 係 長	松 岡 史	技 術 主 査	鶴 久 嗣 郎

#### 庶務会計

文化課庶務係長	前田 栄一	文化課庶務係主査	小川 浩一郎
文化課庶務係長(前任)	姫野 博		
文化課庶務主事	瀧 龍二	嘱託	因 将太

**発掘調査員**

福岡教育大学教授	波多野 皖三	東京教育大学博士課程	松浦 宥一郎
九州歴史資料館	亀井 明德	九州歴史資料館	横田 賢二郎
同	高橋 章		
文化課技師	石山 勲	文化課技師	酒井 仁夫
同	川述 昭人	同	中間 研志

**発掘調査補助員**

	次郎丸 達朗	中牟田 賢治
	川述 公紀	岩崎(佐土原)逸男
	佐々木 隆彦	瀬戸 孝司
	内田 始	副島 源司
	山本 信夫	菊池 法信
	馬田 弘稔	高田 一弘
	山下 和美	晃 治
	中司 照世	
福岡教育大学学生		東京教育大学学生
国学院大学学生		明治大学学生
九州産業大学学生		佐賀大学学生

**日本道路公団福岡建設局**

局長	吉田 喜市	次長	塩坂 富司
総務部長	中川 了一	技術一課長	森原 稠
総務課長	遠藤 明美	総務課長代理	石川 雄三
総務課員	桜木 幸重		

**同福岡工事事務所**

所長(前任)	福田 隆	所長	山本 隆義
古賀工事長(前任)	造士 則幸	古賀工事長	瀬之口 賢彦
大野工事長	青島 輝	筑紫野工事長	吉井 宏幸
庶務課長	西田 建治	工務課長	八尋 勇次
所員	小村 浩		

**同久留米工事事務所**

所 長	椿 喜久夫	工 事 長	矢 部 昌 夫
用 地 課 長	山 崎 欣 一		

**同瀬高工事事務所**

所 長	飛 永 良 一	工 事 長	柳 瀬 達 雄
庶 務 課 長	石 橋 善 衛 門	用 地 課 長	広 田 運 吉

**建設工事受託業者**

粕屋郡古賀町・粕屋町	KK大林組・住友建設KK・共同企業体，佐藤工業KK
大野城市・宇美町	大成建設KK・梅林建設KK・共同企業体
筑紫野市・太宰府町	五洋建設KK・飛島建設KK・共同企業体
筑紫野市	オリエンタルコンクリートKK
同	飯田建設KK・不動建設KK・共同企業体
同	前田建設工業KK・小松建設工業KK・共同企業体
小郡市	大成建設KK
久留米市	KK大本組
山門郡瀬高町	中国土木KK・大日本土木KK・共同企業体

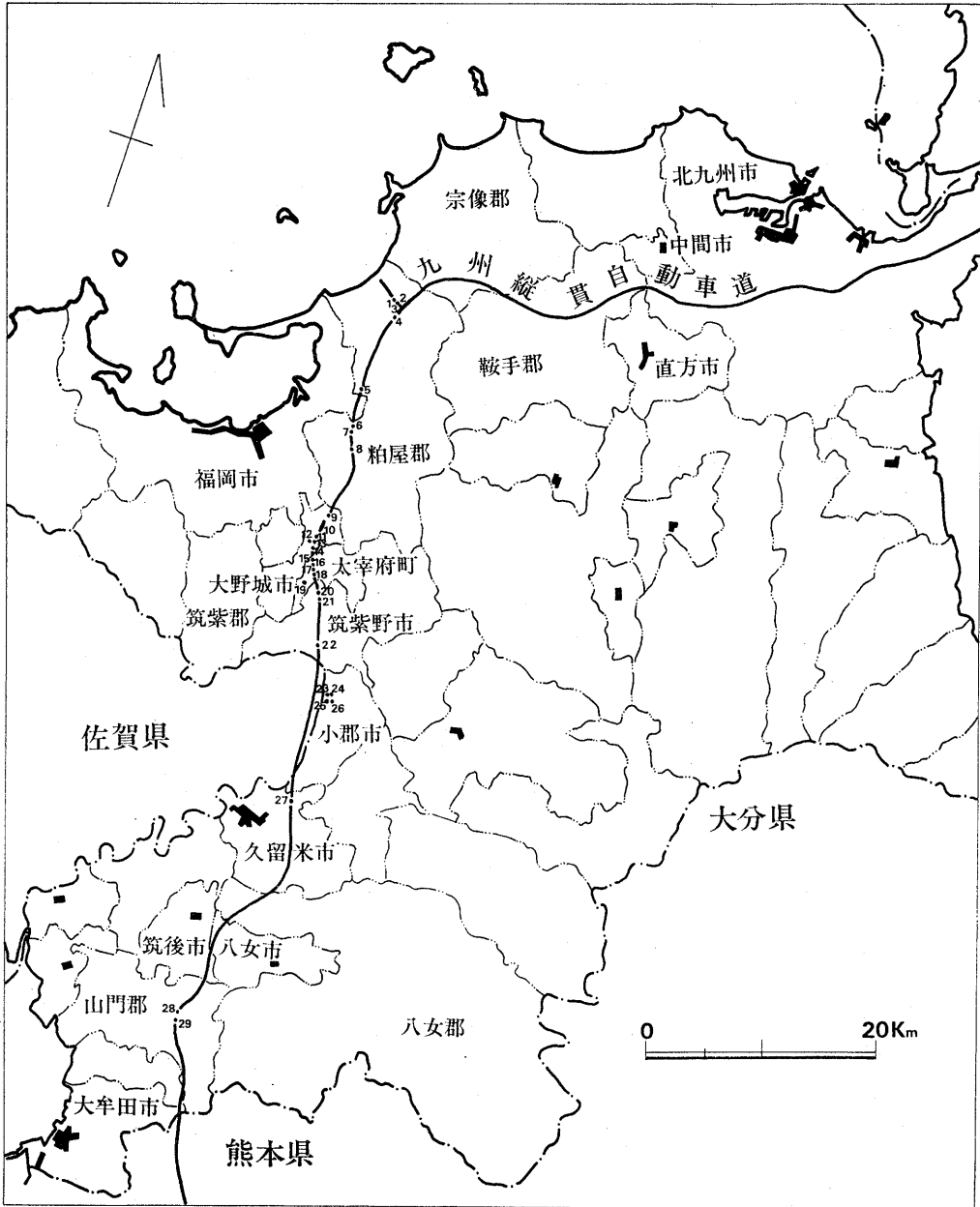


Fig1 昭和47年度調査遺跡分布図

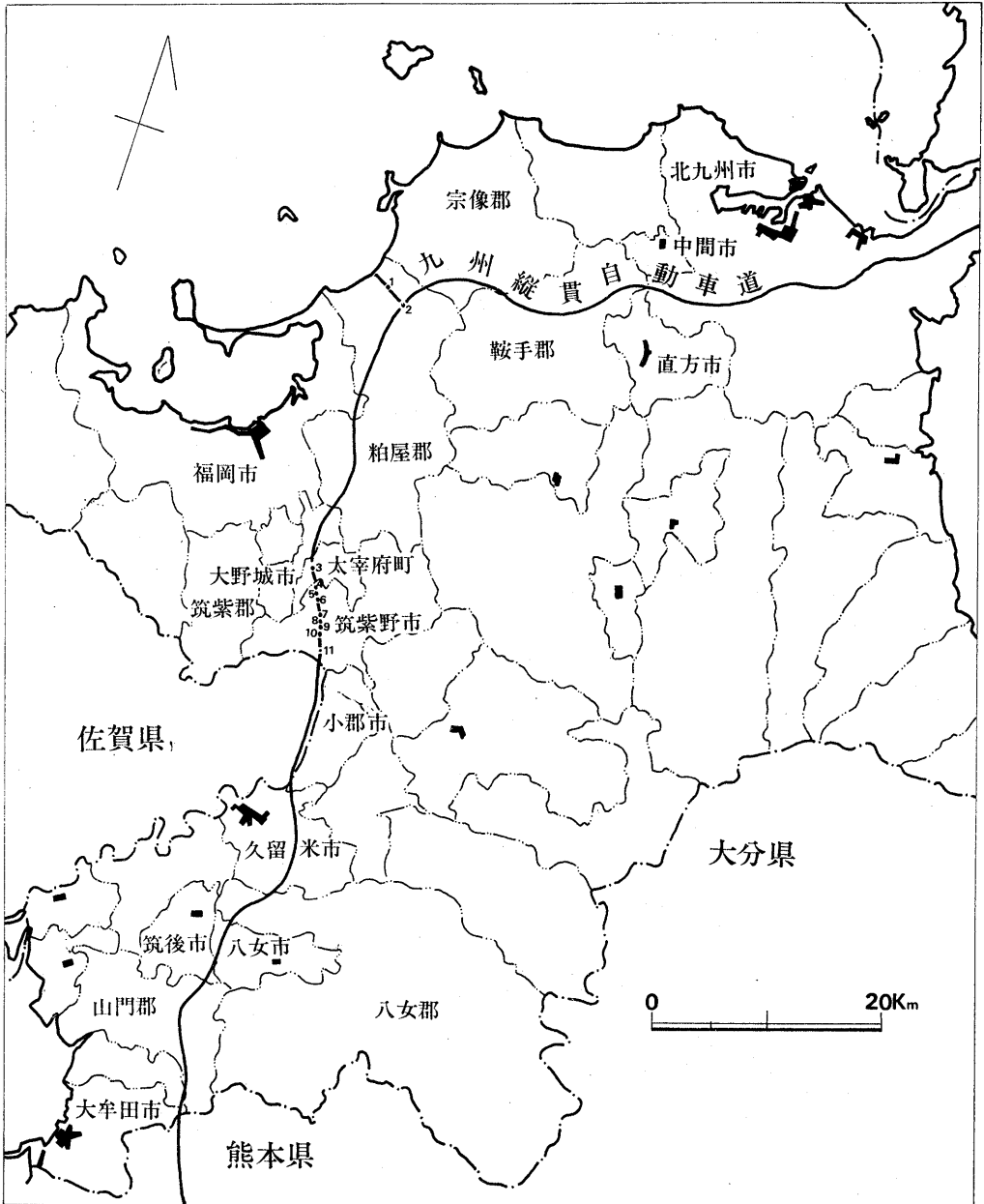


Fig2 昭和48年度調査遺跡分布図

## II 古賀町所在遺跡群

- 世<sup>せ</sup>びん<sup>だ</sup>や<sup>ま</sup>  
川原庵山 6・7・8号墳 (粕屋郡古賀町大字青柳字川原庵)
- 下別当 1号墳 (粕屋郡古賀町大字青柳字下別当)
- 道田 1号墳 (粕屋郡古賀町大字青柳字道田)
- 原口 1号墳 (粕屋郡古賀町大字新原字原口)

## 目 次

1. 調査の経過	11
2. 位置と環境	13
3. 川原庵山古墳群の調査	14
(1) 川原庵山6号墳	14
(2) 川原庵山7号墳	21
(3) 川原庵山8号墳	23
(4) 小 結	25
4. 下別当1号墳	27
5. 道田1号墳	31
6. 原口1号墳	40
7. 結 語	62



## 図 版 目 次

本文対照頁

P L . 1	(1)	川原庵山古墳群全景 北西から(石山勲撮影) .....	14
	(2)	川原庵山6・7・8号墳全景 北東から(石山撮影) .....	14
P L . 2	(1)	川原庵山6・7号墳近景 北東から(石山撮影) .....	14
	(2)	川原庵山7号墳全景(石山撮影) .....	21
P L . 3	(1)	川原庵山8号墳全景(石山撮影) .....	23
	(2)	川原庵山5号墳近景 6号墳から(石山撮影) .....	17
P L . 4	(1)	川原庵山6号墳墓壇全景(石山撮影) .....	17
	(2)	川原庵山6号墳礫床全景(石山撮影) .....	17
P L . 5	(1)	川原庵山6号墳木棺南端(石山撮影) .....	17
	(2)	川原庵山6号墳木棺北端(石山撮影) .....	17
P L . 6	(1)	川原庵山6号墳南群櫛出土状態(石山撮影) .....	18
	(2)	川原庵山6号墳北群櫛出土状態(石山撮影) .....	18
P L . 7	(1)	川原庵山6号墳出土南群櫛(酒井仁夫撮影) .....	19
	(2)	川原庵山6号墳出土北群櫛(酒井撮影) .....	19
P L . 8	(1)	川原庵山7号墳墓壇全景(石山撮影) .....	21
	(2)	川原庵山7号墳礫床全景(石山撮影) .....	21
P L . 9	(1)	川原庵山7号墳墓壇南~北断面(石山撮影) .....	22
	(2)	川原庵山7号墳遺物出土状態(石山撮影) .....	22
P L . 10	(1)	川原庵山8号墳木棺全景(石山撮影) .....	23
	(2)	川原庵山8号墳木棺全景(石山撮影) .....	23
P L . 11	(1)	川原庵山8号墳木棺(石山撮影) .....	23
	(2)	川原庵山8号墳遺物出土状態全景(石山撮影) .....	24
P L . 12	(1)	川原庵山8号墳遺物出土状態(石山撮影) .....	24
	(2)	川原庵山8号墳, 手斧鋏, 鉋, 刀子等出土状態(石山撮影) .....	24
P L . 13	(1)	川原庵山8号墳U字形鋤先出土状態(石山撮影) .....	24
	(2)	川原庵山8号墳鋤出土状態遠景(石山撮影) .....	24
P L . 14	(1)	川原庵山8号墳鋤出土状態(石山撮影) .....	24
	(2)	川原庵山8号墳墓壇全景(石山撮影) .....	23
P L . 15	(1)	川原庵山8号墳墓壇全景(石山撮影) .....	23
	(2)	川原庵山6号墳出土鉄鏃, 8号墳出土U字形鋤先(酒井仁夫撮影) .....	25
P L . 16	(1)	川原庵山出土8号墳手斧鋏 表(酒井撮影) .....	24
	(2)	川原庵山出土8号墳手斧鋏 裏(酒井撮影) .....	24

PL. 17	(1)	川原庵山8号墳出土鉈, 鉈 (酒井撮影) .....	25
	(2)	川原庵山8号墳出土鉈, 鉈 側面 (酒井撮影) .....	25
PL. 18	(1)	川原庵山5・6・7・8号墳全景 (柳田康雄撮影) .....	14
	(2)	川原庵山6・7・8号墳全景 (柳田撮影) .....	14
PL. 19	(1)	下別当1号墳全景 (石山撮影) .....	27
	(2)	下別当1号墳石室全景 (石山撮影) .....	29
PL. 20	(1)	下別当1号墳石室西側壁 (石山撮影) .....	29
	(2)	下別当1号墳西側斜面集石遺構全景 (石山撮影) .....	30
PL. 21	(1)	下別当1号墳西側斜面集石遺構近景 (石山撮影) .....	30
	(2)	下別当1号墳出土鉄鏃, ガラス玉, 滑石製白玉 (酒井撮影) .....	29
PL. 22	(1)	下別当1号墳全景 北西から (柳田撮影) .....	28
	(2)	下別当1号墳全景 南から (柳田撮影) .....	28
PL. 23	(1)	道田1号墳全景 (石山撮影) .....	31
	(2)	道田1号墳全景 2号墳から (石山撮影) .....	31
PL. 24	(1)	道田1号墳墓壇全景 (石山撮影) .....	31
	(2)	道田1号墳墓道 (石山撮影) .....	33
PL. 25	(1)	道田1号墳全景 (柳田撮影) .....	31
	(2)	道田1号墳全景 (柳田撮影) .....	31
PL. 26	(1)	道田1号墳墓壇壁面工具使用痕 (石山撮影) .....	34
	(2)	道田1号墳墓壇壁面工具使用痕 (石山撮影) .....	34
PL. 27	(1)	道田1号墳墓壇壁面工具使用痕 (石山撮影) .....	34
	(2)	道田1号墳墓壇壁面工具使用痕 (石山撮影) .....	34
PL. 28	(1)	原口1号墳全景 (石山撮影) .....	40
	(2)	原口1号墳全景 下別当1号墳から (川述昭人撮影) .....	40
PL. 29	(1)	原口1号墳石室正面全景 (川述昭人撮影) .....	40
	(2)	原口1号墳石室正面 (川述撮影) .....	40
PL. 30	(1)	原口1号墳墓道左壁 (川述撮影) .....	44
	(2)	原口1号墳墓道右壁 (川述撮影) .....	44
PL. 31	(1)	原口1号墳墓道全景 (川述撮影) .....	44
	(2)	原口1号墳奥壁 (石山撮影) .....	42
PL. 32	(1)	原口1号墳奥壁 調査前 (川述撮影) .....	40
	(2)	原口1号墳墓壇断面 (石山撮影) .....	40
PL. 33	(1)	原口1号墳前壁 (川述撮影) .....	44
	(2)	原口1号墳玄室床面 (川述撮影) .....	42
PL. 34	(1)	原口1号墳奥壁腰石 (川述撮影) .....	42

	(2)	原口1号墳奥壁腰石(川述撮影)	42
P.L. 35	(1)	原口1号墳玄室左側壁(石山撮影)	41
	(2)	原口1号墳玄室左袖石根締状態(川述撮影)	42
P.L. 36	(1)	原口1号墳墓坑壁面工具使用痕全景(石山撮影)	40
	(2)	原口1号墳墓坑壁面工具使用痕(石山撮影)	40
P.L. 37	(1)	原口1号墳出土鉄鏃(1)(酒井撮影)	46
	(2)	原口1号墳出土鉄鏃(2)(酒井撮影)	46
P.L. 38	(1)	原口1号墳出土馬具, 刀子(酒井撮影)	46
	(2)	原口1号墳出土鉄矛, 磁器(川述撮影)	46
P.L. 39	(1)	原口1号墳出土土師器, 須恵器(川述撮影)	48
P.L. 40	(1)	原口1号墳出土玉類(酒井撮影)	45
	(2)	原口1号墳出土用途不明空玉(酒井撮影)	45

## 挿 図 目 次

Fig. 1	古賀町遺跡分布図(作成石山)	13
Fig. 2	川原庵山古墳群周辺地形図(川述作成)	15
Fig. 3	川原庵山5・6・7・8号墳墳丘測量図(瀬戸・副島実測, 石山製図)	16
Fig. 4	川原庵山5・6・7・8号墳墳丘全体図(瀬戸・副島実測, 石山製図)	17
Fig. 5	川原庵山6号墳墳丘東~西断面図(副島・蔵中実測, 石山製図)	18
Fig. 6	川原庵山6号墳墳丘出土状態実測図(実測・製図石山)	19
Fig. 7	川原庵山6号墳南群櫛出土状態実測図(実測・製図石山)	19
Fig. 8	川原庵山6号墳北群櫛出土状態実測図(実測・製図石山)	19
Fig. 9	川原庵山6号墳墳丘内出土抉入石斧実測図(佐々木実測, 中間製図)	20
Fig. 10	川原庵山6号墳墳丘内出土弥生式土器実測図(実測・製図佐々木)	20
Fig. 11	川原庵山7号墳墓坑南~北断面図(渡部実測, 石山製図)	22
Fig. 12	川原庵山7号墳遺物出土状態実測図(土川・蔵中実測, 石山製図)	22
Fig. 13	川原庵山7号墳出土鉄鏃実測図(実測・製図石山)	22
Fig. 14	川原庵山8号墳墓坑北東~南西断面図(菊池実測, 石山製図)	23
Fig. 15	川原庵山8号墳遺物出土状態実測図(実測・製図石山)	24
Fig. 16	川原庵山8号墳出土鉄器実測図(佐々木実測, 石山製図)	25
Fig. 17	川原庵山8号墳墓坑上面出土土師器実測図(実測・製図石山)	25
Fig. 18	下別当1号墳墳丘測量図(瀬戸実測, 石山製図)	27
Fig. 19	下別当1号墳墳丘南~北断面図(川述公・副島実測, 石山製図)	28

Fig. 20	下別当1号墳墳丘東～西断面図(瀬戸・蔵中実測, 石山製図) ……………	28
Fig. 21	下別当1号墳石室内出土遺物実測図(実測・製図石山) ……………	29
Fig. 22	下別当1号墳墳丘西側斜面集石遺構実測図(岩崎・瀬戸・高田・蔵中実測, 石山製図) ……………	30
Fig. 23	道田1号墳周辺地形図(川述作成) ……………	32
Fig. 24	道田1号墳墳丘実測図(副島・内田・高田実測, 石山製図) ……………	33
Fig. 25	道田1号墳全体図(内田・副島実測, 石山製図) ……………	34
Fig. 26	道田1号墳石室復元図(石山作成) ……………	35
Fig. 27	道田1号墳墓壇壁面鉄製工具使用痕実測図(石山作成) ……………	35
Fig. 28	道田1号墳出土須恵器土師器実測図(実測・製図川述) ……………	36
Fig. 29	道田1号墳出土須恵器実測図(実測・製図川述) ……………	37
Fig. 30	下別当1号墳・原口1号墳周辺地形図(作成川述昭人) ……………	41
Fig. 31	原口1号墳墳丘測量図(副島・川述公・瀬戸実測, 石山製図) ……………	41
Fig. 32	原口1号墳墳丘全体図(副島・川述昭・川述公・瀬戸実測, 石山製図) ……………	42
Fig. 33	原口1号墳石室平面図及び遺物出土状態実測図(石山実測, 製図) ……………	43
Fig. 34	原口1号墳出土装身具その他実測図(佐々木実測, 石山製図) ……………	46
Fig. 35	原口1号墳出土鉄器実測図1(実測・製図川述) ……………	47
Fig. 36	原口1号墳出土鉄器実測図2(実測・製図川述) ……………	48
Fig. 37	原口1号墳出土須恵器実測図1(実測・製図川述) ……………	49
Fig. 38	原口1号墳出土須恵器実測図2(実測・製図川述) ……………	50
Fig. 39	原口1号墳出土須恵器実測図3(実測・製図川述) ……………	53
Fig. 40	原口1号墳出土須恵器実測図4(実測・製図川述) ……………	54
Fig. 41	原口1号墳出土須恵器実測図5(実測・製図川述) ……………	56
Fig. 42	原口1号墳出土土師器・磁器実測図(実測・製図川述) ……………	58
Fig. 43	原口1号墳周辺出土弥生式土器実測図(実測・製図川述) ……………	59

## 付 図 目 次

Fig. 1	川原庵山6号墳墳丘北東～南西断面図(菊池・瀬戸・内田・副島・石山実測, 石山製図) ……………	14
Fig. 2	川原庵山6号墳墳丘北西～南東断面図(土川・高田実測, 石山製図) ……………	14
Fig. 3	川原庵山6号墳内部主体実測図(森田実測, 石山製図) ……………	15
Fig. 4	川原庵山7号墳墳丘南～北断面図(副島・蔵中実測, 石山製図) ……………	15
Fig. 5	川原庵山7号墳内部主体実測図(土川・蔵中実測, 石山製図) ……………	21
Fig. 6	川原庵山7号墳墓壇実測図(土川・蔵中実測, 石山製図) ……………	21
Fig. 7	川原庵山8号墳内部主体実測図(実測菊池, 製図石山) ……………	23

Fig. 8	川原庵山 8 号墳墓坑実測図（菊池実測，石山製図）	23
Fig. 9	下別当 1 号墳内部主体実測図（岩崎・瀬戸・蔵中実測，石山製図）	27
Fig. 10	道田 1 号墳墳丘北東～南西断面図（川述公・佐々木・副島・土川実測，石山製図）	31
Fig. 11	道田 1 号墳墳丘北西～南東断面図（副島・土川実測，石山製図）	31
Fig. 12	道田 1 号墳内部主体実測図（石山・佐々木・内田実測，石山製図）	40
Fig. 13	原口 1 号墳墳丘南～北断面図（瀬戸・川述公・佐々木・副島実測，石山製図）	40
Fig. 14	原口 1 号墳内部主体実測図（川述昭人・川述公・石山・瀬戸・佐々木・副島実測，石山製図）	40

## 付 表 目 次

1. 付図断面図色名表

## 1 調査の経過

九州縦貫道のうち昭和49年秋を供用開始期とする古賀I.C.～鳥栖I.C.間の建設工事は、現在急ピッチで進められている。ここで報告する各遺跡は、いずれも古賀I.C.から福岡東I.C.までの区間に所在する。これらが含まれる筑豊東I.C.から福岡東I.C.区間の分布調査は、昭和44・45年度に実施された。その後、担当職員の移動・転勤があり、このため、昭和47年12月に発掘予定地点の確認が道路公団福岡支社（現福岡建設局）職員立会のもとに行なわれた。既往の分布調査は本線のみについてのものであったが、この時点で初めて、古賀I.C.と香椎バイパスとを結ぶアクセス建設計画があり既に着工されていること知り、急遽古賀工事区造土工事長立会のもとに分布調査を実施した。

この結果川原庵山古墳群中の6・7号両墳が路線内に含まれることが確認された。公団側は、発掘予定地点に含まれていないことから、昭和48年1月早々から川原庵山<sup>せげんだやま</sup>の切土工事を実施する計画を立てており、一方当委員会では、47年度の当初の調査計画に古賀工事区所在遺跡を含めていなかったのであるが、工事を急ぐ公団側との協議の結果、明けて48年1月早々から、まず川原庵山6・7号墳を、続いて道田1号墳の調査を行なうこととした。調査着手直後に、47年暮の踏査時にマークしていた7号墳隣接地が古墳であることが判明し、これを8号墳（古賀地区追加第4地点）とし、さらに、本群の東約100mの北側斜面からは、構造物構築のためのブルドーザによる切土作業中弥生式土器片が出土したので、これを川原庵山遺跡（追加第1地点）とした。そこであらためてアクセス内を一巡したところ、下別当1号墳、原口1号墳（追加第2地点、第3地点）が発見された。加えて、県道二日市～古賀線と香椎バイパスとにはさまれた区間のアクセス建設現場から大量の土器片が作業員によってもたらされた。現地へ赴くと、巾・深1m足らずの側溝壁に住居跡・柱穴を思わせる落込多数と大量の土器片が認められた。この地点については、47年暮の踏査時に川原庵山上から望見し、地形的に遺構の存在が予測されたのであるが、盛土工事その他が進行していることから、現地へ行かずに調査を断念したという経緯があった。該地点は、大田町遺跡（追加第5地点）である。

相次いで追加地点が出たため、造土工事長および施行業者の佐藤工業と、これら遺跡の調査の実施について協議を重ねた。その結果、川原庵山6～8号墳の調査を急ぎ、下別当1号墳・川原庵山遺跡・道田1号墳を3月下旬までの期限とし、原口1号墳・大田町遺跡については48年4月以降に調査を実施することとした。48年3月20日を以て、計6地点の調査は終了し、公団側の工程上の要望から、同年4月2日からまず大田町遺跡の調査を開始し、終了翌日の5月

11日から原口1号墳へ移動した。

以上に述べたように、調査の必要が聊か唐突に生じたため、必然的に各種の無理、困難を伴なうこととなり、特に当委員会・公団・施工業者の三者の工程の調整が難問となった。調査の性質上、所要日数を確言することは不可能に近く、事実変更に変更を重ねたのであるが、完成予定日に変更がない限り、これは公団・業者にとっては簡単には容認できないものであった。しかし、この間、時に感情的なやりとりを交えながらもとにかく協議を重ね、数回にわたる工程の変更、あるいは、ブルドーザ・クレーン車・鉄骨等の重機・器材の提供を通じて、調査へのご協力をいただいた。これらは当然といえば当然のことであるが、異常が日常化しつつある状況を考えれば容易ではなく、公団古賀工事区ならびに佐藤工業の方々のご配慮は有難く、心から御礼申し上げる次第である。

ただ、結果として、日時の制約はいかんともし難く、本来徹底的になすべき記録保存が充分行なえず、疑問点を解明できないまま調査を終了せざるを得ず、この点慙慙にたえない。

調査の期間中、古賀町文化財研究会の方々には、現地にて御教示いただいた。また古賀町教育委員会の城井晴典氏には、調査の円滑な進捗についてご配慮いただいた。記して感謝の意を表する次第である。

なお、第1地点については、昭和48年1月9日から、文化課技師川述昭人担当にて調査を行なったが、開墾により1m以上の深さまで削平されており、何らの遺物・遺構をも検出し得なかった。従って本報告では特にとりあげないこととした。

調査団の構成は下記のとおりである。

#### 川原庵山6・7・8号墳、道田1号墳、下別当1号墳

調査担当者	福岡県教育庁文化課 技師	石 山 勲	
調査補助員		岩 崎 逸 男	川 述 公 紀
		菊 池 法 信	佐々木 隆 彦
		瀬 戸 孝 司	
		内 田 始	(九州産業大学学生)
		副 島 源 司	( " )
		土 川 修 平	(国学院大学学生)
		高 田 博	( " )
		蔵 中	(早稲田大学学生)
庶務・会計	福岡県教育庁文化課 主事	植 田 実	

#### 原口1号墳

調査担当者	福岡県教育庁文化課	技師	石山 勲	
			川述 昭人	
調査補助員			川述 公紀	佐々木 隆彦
			瀬戸 孝司	副島 源司
庶務・会計	福岡県教育庁文化課	主事	滝 龍二	
		囑託	因 将太	

なお、川原庵山6号墳内部主体実測については、文化課技師森田勉の、同7号墳内部主体実測については、九州大学大学院生渡部明夫氏の来援を受けた。

## 2 位置と環境 (Fig. 1)

青柳川と大根川とによって形成された平野の中央部に、ゆるやかに起伏する段丘上、あるいは縁辺の丘陵頂部および山麓に、各時代の遺構が営なまれている。立花山塊に連なり、この平野の略西端にあたる<sup>ししぶやま</sup>鹿部山は、細形銅剣・銅戈を出土した甕棺および支石墓を想起させる巨石の存在することで夙に著名であった。1972年には、九州大学を中心として、住宅公団による団地造成工事に伴う事前発掘調査が実施され、弥生～古墳～平安時代にわたる多種多様の遺構遺物が検出され、該遺跡1例をとっても古賀町所在遺跡群の重要性が知られるのである(註1)。また、平野の北端にあたる段丘上に営なまれた久保長崎遺跡は、福岡バイパス工事に伴う事前調査が行なわれ、弥生後期の住居跡とこれと同期と見られる銅戈製造用大炉跡・銅戈溶范が検出されている(註2)。

これに対して、中央部の段丘上および東・南端にあたる犬鳴山系の山麓一帯については、古墳・散布地が知られているものの、発掘調査は行なわれておらず、その実態については、必しも明らかになっていない。当委員会が、47・48年度にわたって調査した遺跡のうち、道田1号墳は南縁にあたる丘陵上に位置し、大田町遺跡・川原庵山古墳群・川原庵山遺跡・下別当1号墳・原口1号墳は、中央部に起伏する段丘・丘陵上に位置している。現在縁辺に新原の集落が営なまれている丘陵上には、甕棺・箱式石棺の所在が知られ、後者からは鉄刀の出土が伝えられるが、それらのかかりは、県道拡中・採土・開墾によって既に消滅してしまった。大田町遺跡は、この西端に位置する。川原庵山古墳群調査中の昭和48年2月には、原口1号墳北方の丘陵の一部が果樹園造成のためのブル工事によって削平され、低墳丘を有する円墳数基が破壊された。現場には、板石・赤色顔料塗彩扁平割石が散乱しており、箱式石棺・竪穴式石室を主体



とすると見られる。

なお、古賀I.C.と玄海S.A.の間には、円墳群あるいは良好な段丘があり、49年度以降に調査が予定されている。従ってこれらの調査結果の報告時にあらためて分布図の充実を図ることとし、ここでは簡略にとどめたい。

註 1 鹿部山遺跡調査会『鹿部山遺跡』1973年12月

註 2 松岡史・宮原種生「久保長崎遺跡」『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』所収1973年3月  
なお、分布図の作成にあたっては、松岡史氏のご教示を得た。

### 3 川原庵山古墳群の調査

#### (1) 川原庵山6号墳

水田との比高22mを測る川原庵山の尾根上に接続して営なまれた計8基の円墳から本群は構成されている。本群東接地には現在ミカン園が営なまれており、この造成時に「モリモリとしたふくれがあり、これをブルドーザで押したが石は出なかった」とのことであるが、地形と後述する本群の内部主体の構造からみて、なお数基が存在していたことが考えられる。現在8基のうち南端の最高所を占める1号墳は、規模においても6号墳と共に他を押し、径約20mを測る。2～5、7～8号墳はどれも径約9～13m程度で、高さも1m前後のものが多い。1・2・4・5号墳には陥没が認められるが、石材の露出するものはない。5号墳と6号墳との間が若干あく程度で、他はどれも裾を接し合わんばかりである。

#### 墳丘の構造 (付図1・2)

昭和47年暮の踏査時には、既に伐採が終了しており、没頭円錐形の綺麗な墳丘が観察された。墳頂部は径約10mの平坦面となる。北側に浅い陥没があり、西側斜面に封土の流失によると思われる若干のふくらみがある他は、残存度極めて良好な、未盗掘墳である。規模は径約21m、西側で2.9m、北側で2.1mの高さを有する。旧表土は、墳頂部の一部にしか認められず、盛土作業に先行して整地作業を行なっている。北西および北東側では地山がカットされて、墳丘裾部を明確にしている。動かす土量の割にみかけを高くしようとする意識のもとに、内部主体のある中心部は少量づつきめ細く盛られるが、外側では稍粗雑となっている。土質の異なるものを互層に積むという手法はとられていない。埴輪・葺石・周濠のいづれをも有さないが、これは本群全体に共通する。

#### 内部主体の構造 (付図3)

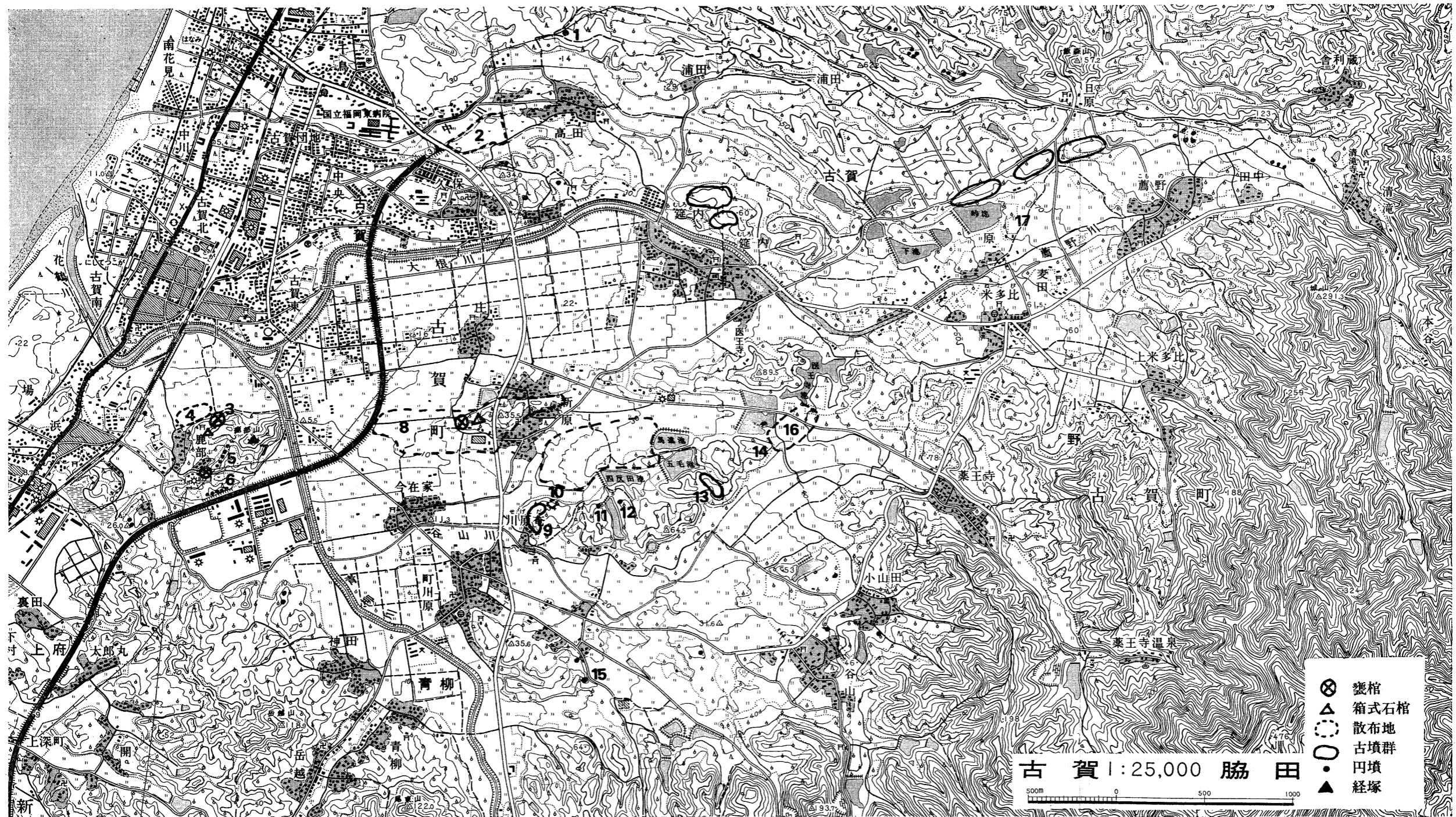


Fig. 1 古賀町周辺遺跡分布図

- |           |              |                |            |           |                |              |
|-----------|--------------|----------------|------------|-----------|----------------|--------------|
| 1. 佐谷古墳   | 2. 久保長崎遺跡    | 3. 皇石神社甕棺墓地    | 4. 東町遺跡    | 5. 唐ヶ坪古墳群 | 6. 浦口古墳群       | 7. 鹿部山経塚     |
| 8. 大田町遺跡  | 9. 川原庵山古墳群   | 10. 川原庵山遺跡     | 11. 下別当1号墳 | 12. 原口1号墳 | 13. 古賀地区第5・6地点 | 14. 古賀地区第7地点 |
| 15. 道田1号墳 | 16. 古賀地区第8地点 | 17. 古賀地区追加第7地点 |            |           |                |              |

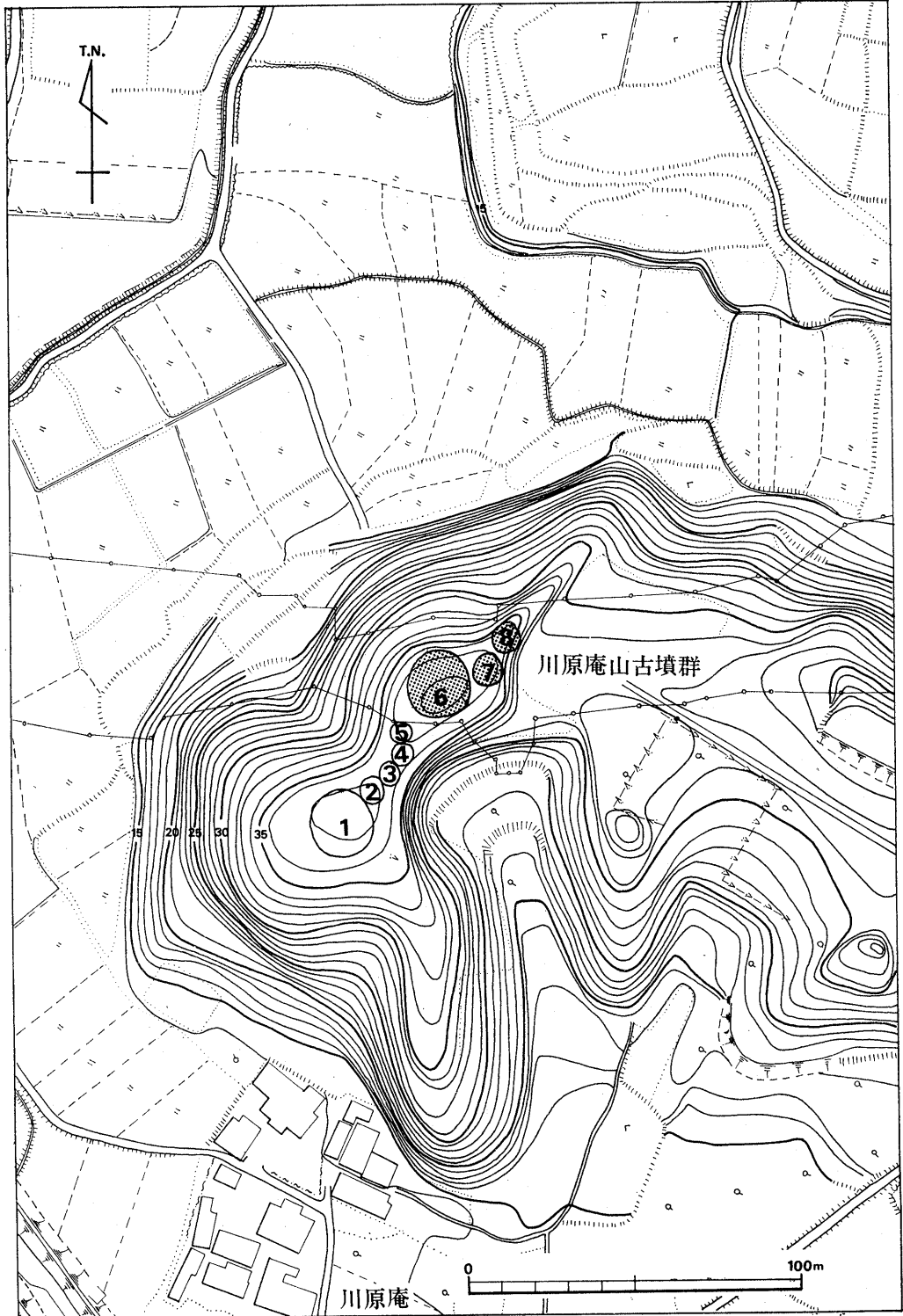


Fig. 2 川原庵山古墳群周辺地形図 (縮尺 $\frac{1}{2000}$ )

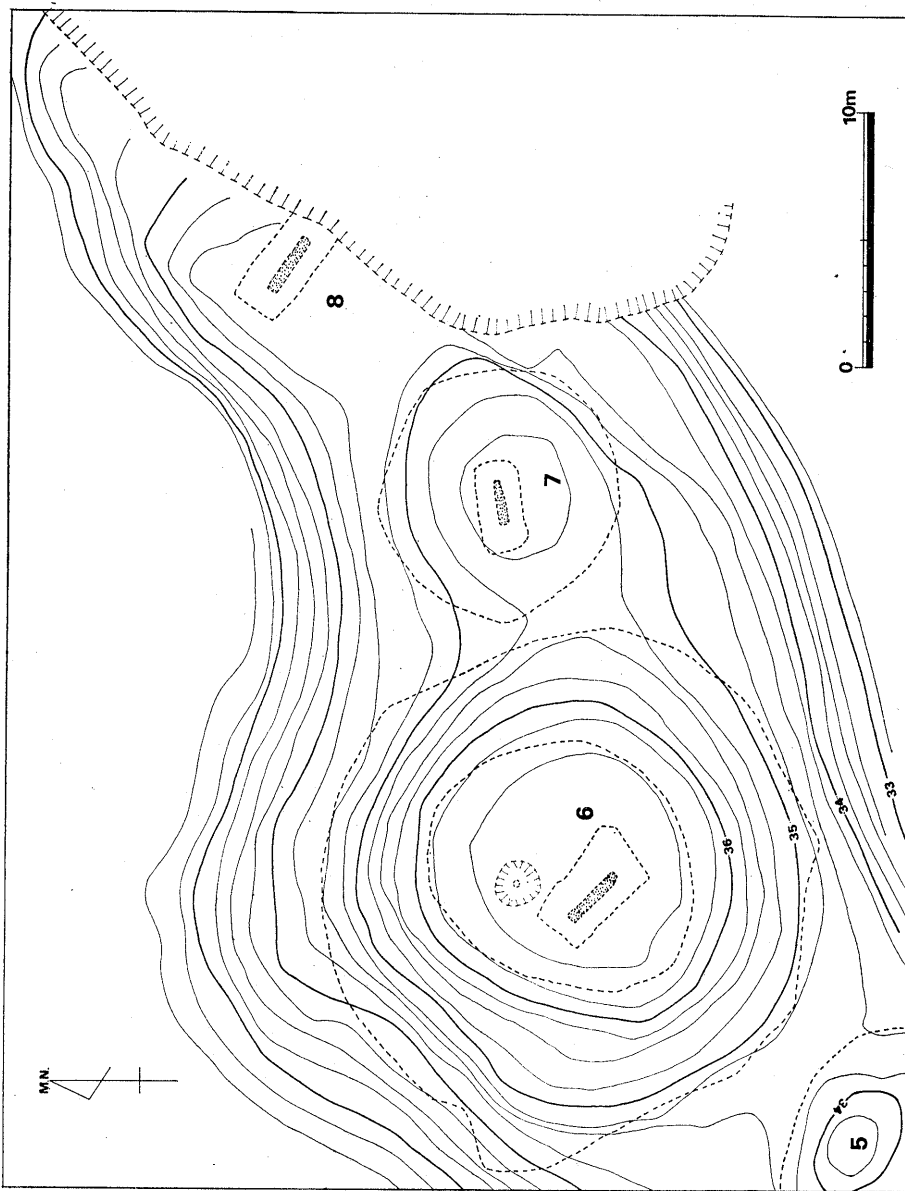


Fig. 3 川原庵山5・6・7・8号墳丘測量図（縮尺 $\frac{1}{300}$ ）

トレンチ設定前に、ボーリング棒を打ちこんだが、それらしき石材は探知されず、石室以外の構造をとることが予測されたので、墳頂部に1辺2mのグリッド4個を設定して掘り下げた。墳頂下0.9mでようやく赤色顔料の塗られた円礫群（南東の棺外礫）を検出したが、この時南半は稍掘り過ぎていることに気がつされた。

主体は、主軸をN41°Wにとり、墓壙内に築かれた狭長な木棺1基である。墳央より稍西に

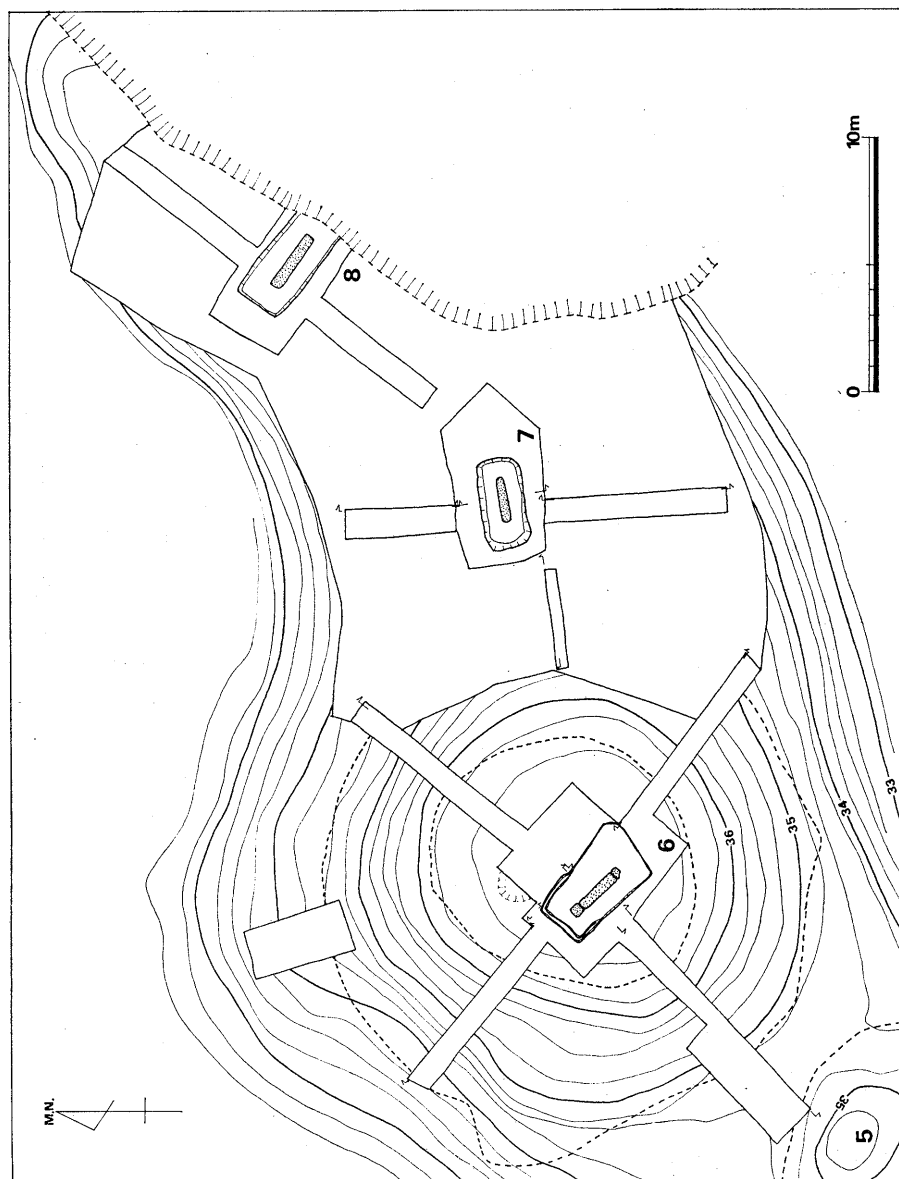


Fig. 4 川原庵山5・6・7・8号墳全体図 (1/300)

外れた位置にあって地山を29~39 cmの深さに穿った墓壇のプランは、北西端（以下北端と略す）は、矩形をなすが、対辺はこれと平行せず、不整四辺形を呈する。巾は南辺で2.15 m、北辺で約3 mで、長さは中央部で約4.4 m（いずれも上端値）あり、かなり長大なものである。壇底は、平坦ではなく、多少凹凸があり、主軸方向では南端が、横断方向では中央部がそれぞれ少くく高くなっている。

この壇底直上に、中軸より稍南西に偏して、墓壇長辺と略平行に礎床が営なまれている。長

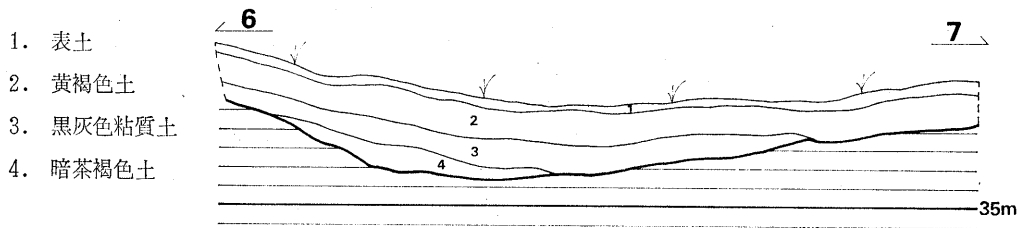


Fig. 5 川原庵山6号墳填丘東～西断面図（縮尺 $\frac{1}{40}$ ）

さは2.19m, 巾は南端で39cm, 中央で44cm, 北端で41cmを測る。概ね平坦であるが, 南端と北端とでは, 前者が2～4cm程度高いが, 中央から北端にかけての0.8m寄った部分はこちらより幾分高くなっている。円礫1層から成るが, 中央から南端にかけて, 細礫が敷かれている部分が2カ所ある。礫床から数cm隔って, 略直立する裏込土の壁が検出された。巾は場所によって異なり, 南辺では2～4cm, 西辺では2～7cm, 北辺では4cm, 東辺1～4cmとバラツキがある。

未盗掘墳であることと, 上記を勘察すれば本墳の内部主体は組合式木棺と考えられる。従って巾のバラツキおよび礫床縁の出入は, 使用した木材の厚薄と原木から板材を割いた際に生じた木目・節等による凹凸に因るものと見られる。南端では, 東側板11cm, 西側板が31cmそれぞれ延びており, 小口板を側板がはさみこんで外方へ突出する。対して北端では, 側板の突出は認められないという変則的な組合法をとる。北端での側板と小口板の処理法が不明であるが, 東側板の長さは2.49～2.53m, 西側板のそれは2.26～2.3mと推定される。側板を延長補強する位置に側板底面より浅い溝があるが, 北端の東側には認められない。また, 南北両端の小口板の外方に1群の礫が置かれている。これは, 礫床より10～11cm上位にあって面は略等高であって, 小口板材外面に密着して敷かれたものであろう。礫床材よりひとまわり大きく, 赤色顔料が塗られている。南端のそれは, 27×33cmの範囲それも東半にしか認められない。北端では, 50×40cmの範囲にあって, 礫床のほぼ全幅にあたる。西辺の南半には, やはり礫床材より稍大形の礫が側板に沿って置かれ, 小口板のそれよりは低位にある。ただし, 東辺外方には全く認められず, 規格の厳密性を欠く。裏込土の状況から, 本棺の高さは30cm前後と思われ, 低いことが注意される。

#### 遺物出土状態 (Fig. 6～8)

礫床南端近く西辺寄りに計12個からなる南群, 北端から約22cm離れた西辺寄を中心として計11個からなる北群, 2群計23個の櫛を検出し得たとどまる。南群櫛の頭部は区々で, S1は南東, S3は南西, S9は北西に, S11・12は東に, 爾余は北東にある。北群では, N8のみが北東にある他は全て北西～西にある。

#### 遺物

櫛 どれも篋を曲げ頭部を漆で固めた通有のもので、頭部しか遺存していない。南群では、S1が頭部端で巾26mm、S12が16mmを測る。S5はS1よりひとまわり大形で、S1と同大と見られるのはS2~4・6・10・11、S9・8はS12と同大と思われる。S7はS12より小形である。従って本群は4類に分れる。なおS4の歯数は $34 + \alpha$ 、S1・2は $32 + \alpha$ である。北群ではN3が最大で、巾30mm、N9はこれに次ぎ20mm、この他N7が14mm、N10は13mmをそれぞれ測る。従って大・中・小の3類となり、中にはN2・8、小にはN1・5・6が含まれる。歯数は不明。小形品ばかりであるので、ヘア・ピンとしての機能を果たしたと思われる。

この他  
墳丘中より  
石器お  
よび弥生  
式土器片  
が出土し  
た。  
(石山)

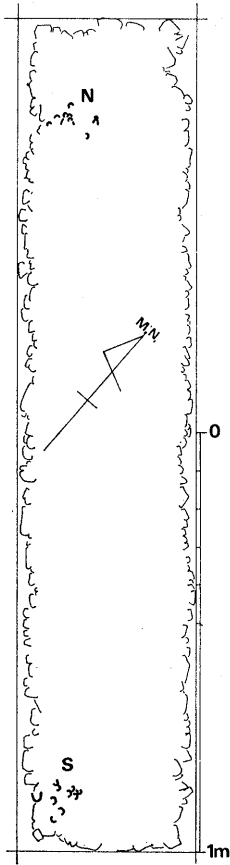


Fig. 6 川原庵山6号  
墳櫛出土状態実測図  
(縮尺1/20)

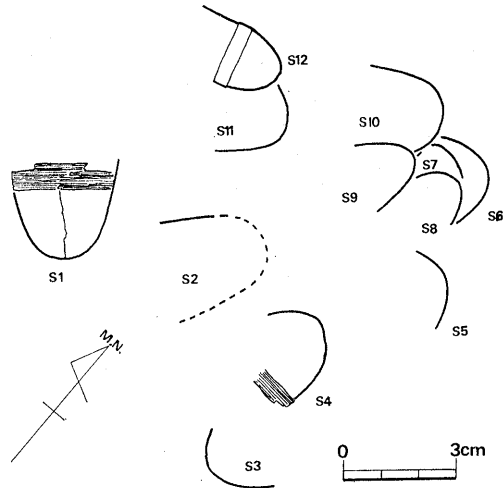


Fig. 7 川原庵山6号墳南群櫛出土状態実測図 (縮尺1/2)

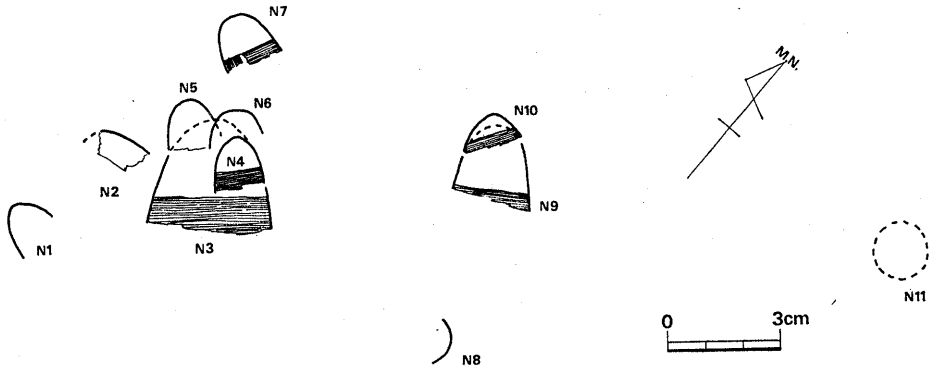


Fig. 8 川原庵山6号墳北群櫛出土状態実測図 (縮尺1/2)

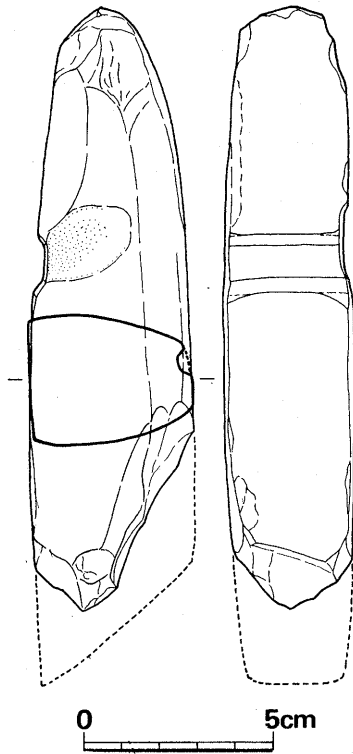


Fig. 9 川原庵山6号墳丘内  
出土抉入石斧実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

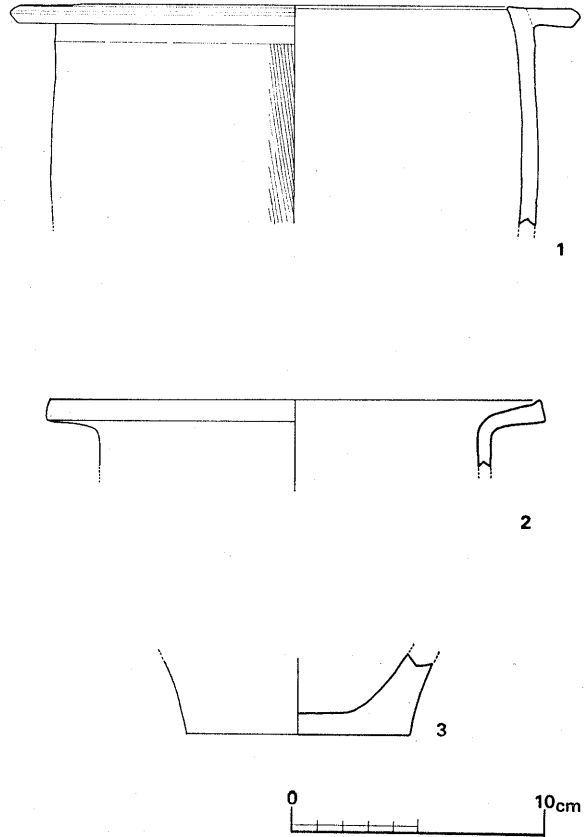


Fig. 10 川原庵山6号墳丘内出土弥生式土器実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）

#### 抉入石斧（Fig. 9）

現存長15.7cm，幅3.5cm，厚さ最大4.3cmを測り刃部は欠損しているが，抉入片刃石斧であろう。石材は頁岩を用い，全体的に風化著しく，刃部近辺の使用擦痕等は不明である。頭部よりの5.9cmに，幅1.5cm，深さ3mmの抉りを有する。快り部両側面及び快り部上縁においては，磨滅が顕著であり実際の使用に供されたことを物語る。（中間）

**弥生式土器（Fig. 10）** 1は口径22.6cmを測る甕形土器で，胴部以下を欠損している。口縁部は下り気味で，頸部及び口縁部内面にはわずかに稜を有す。整形手法は，口縁部及び内面は横ナデで，稜を境にして上部は，ハケ目の手法を用いた後に横ナデでハケ目を擦り消している。下部はハケ目で整形している。胎土は良好で，内外面とも赤黄褐色を呈し，ススの付着を見る。砂粒を含み焼成も良好である。2は口径19.6cmを測る甕形土器で，頸部以下を欠損している。口縁部は，はね上げ気味でかなり外反し，端に行くに従って厚味を増す。整形は，内・



外面とも横ナデ手法を用いている。胎土は良好で、赤味の強い赤黄褐色を呈し、砂粒を含み焼成も良好である。3は底径8.8cmを測る甕形土器の底部で、上部は欠損している。整形は内面横ナデ手法を用いているが、外面は風化が激しく明瞭でない。胎土は悪い。赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。部分的に二次的な火を受けており、内面にススの付着を見る。（佐々木）

### 葬法

木棺の規模および櫛の出土状態からみて、2体差違い葬と見られる。当然ながら、主体の構造からみて同時に埋葬されたと考えられる。（石山）

## (2) 川原庵山7号墳

### 墳丘の構造（付図4）

6号墳に東接し、僅かではあるが径約10mの高まりが、分布調査時に確認された。北側では墓壙北端から2.75m、南側では墓壙南端から約3.2mの径約7.9mの範囲が、盛土に先行する整形作業によって、52~76cmの高さに削り出されている。裾部は明確にし難いが、一応南北方向では13m前後と見られるが、東西方向就中西側では、6号墳に制約を受けて寸詰りとなり、全体としては長円形を呈していたのではないかと推定される。盛土は、流失にも一因はあろうが、最厚部で0.4mと低い。しかし後述する墓壙の深さと木棺の推定高を勘案すれば、当初からそれ程高い盛土は必要とされなかった可能性があり、みかけの高さは、北側から見て2m弱と推定される。

### 内部主体の構造（付図5・6, Fig. 7）

円の中心より稍北側に偏し、主軸をN84°Eとし、略東西方向に営まれた木棺を主体とする。墓壙は2段から成り、上段は、上端値で長さ3.59m、巾1.75~1.9mを測り、不整長方形プランを呈する。これは地山を58~65cmの深さに穿ったものであり、周壁の傾斜も一定せず、また下端線も出入激しく粗雑な感を受ける。この壙底をさらに一段20cm程穿ち、上端値で、長さ1.87m、巾東端で50cm、西端で57cmの壙を設けている。壙底は東部が6cm程高く、中央から西にかけて3cm程の落差がついている。

この壙底直上に、長さ1.75mの礫床が設けられている。巾は、東端で39cm、西端で36cmと極めて狭い。縁辺は直線をなさず出入が著しく、最も狭い所では巾28cmに過ぎない。6号墳と同様に礫床上面に木質の遺存は認められない。礫床の縁辺と、墓壙の下端とは極めて接近しており、南辺西半では密着している。両小口では最大で2cm程度。墓壙内は、礫床面から約40cm上位までの高さといったん埋め戻されており、これは木棺の側、小口板を組立てた後内部に礫を敷き、棺材の裏込がなされたことを示唆する。従って、木棺の高さは約40cm、内法は大略礫床

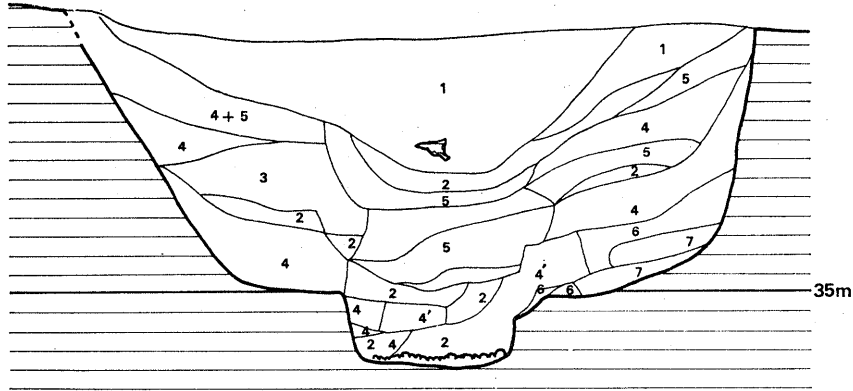


Fig. 11 川原庵山7号墳墓南～北断面図(縮尺 $\frac{1}{20}$ )

1. 暗灰褐色土 2. 灰黒色粘質土 3. 灰褐色土 4. 暗赤褐色土  
5. 暗灰色土 6. 暗褐色土 7. 混地山ブロック暗褐色土

に一致し、側板、小口板が突出しない箱形のタイプを主体として想定できる。

#### 遺物出土状態 (Fig. 12)

未盗掘墳であったにも不拘、礫床上から鉄鏃1, 刀子片?を検出したとどまる。鉄鏃は鋒を西端に向け、東端から約21cm離れた中軸上から出土した。刀子片?は、北辺東端寄から出土したが、不注意により取り上前に紛失した。

#### 遺物 (Fig. 13)

鉄鏃 全長4.7cm, 最大巾2.6cm。厚さは中央部で3mm弱。茎長9mmで、篋の先端が遺存している。従って、本器が原位置を保つとすれば、篋が折れた(折られた)状態で副葬されたことを示唆すると思われる。

#### 葬法

東部が少しく高く、巾も稍広く、遺物の集中することから、頭部をここに置いた1体の被葬者を想定できる。巾が狭いので小児の可能性もある。

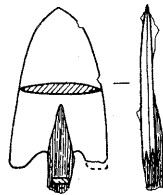


Fig. 13 川原庵山7号墳出土鉄鏃実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$ )

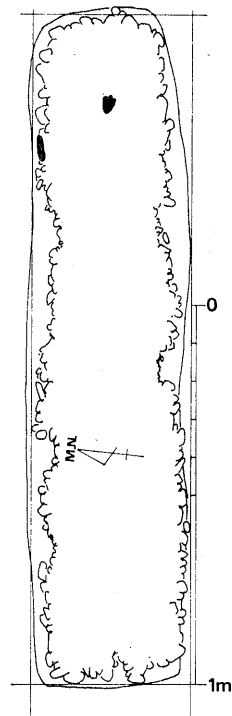


Fig. 12 川原庵山7号墳遺物出土状態実測図(縮尺 $\frac{1}{20}$ )

## (3) 川原庵山 8 号墳

7号墳の北東に、高まりこそ認められなかったが、地形からみてさらに1基の古墳の存在が予測されたので、尾根筋に沿って、巾1mのトレンチを設けたところ、円墳が検出されたので、これを8号墳とした。東接する果樹園の風除のための地下工事による切通しによって、墓壙小口の一方を切られてはいるが、未盗掘墳である。

## 墳丘の構造

封土の流失著しく、規模を確定できない。後述する墓壙の規模就中深さからみて、7号墳と同様本来的に盛土量は少く、径で若干7号墳を上回ったものと推定される。

## 内部主体の構造 (付図 7・8, Fig. 14)

6号墳と同工の、主軸をN51°Wにとり、略北西～南東に横たわる組合式木棺である。墓壙は、地山を40～58cmの深さに穿った不整長方形プランとみられ、北西側の小口を失なっている。現存長は上端で3.75m、巾は1.9～2.12mを算する。壙底は、南東端(以下南端と略す)が稍高く、中軸から少しく西に偏して狭長な礫床が設けられている。

礫床は、長さ2.46m、巾は南端および中央部で49cm、北端では稍狭まり45cmで、径3～4cmの円礫1層から成る。壙底同様南端が僅かに高い。礫には、6・7号墳と同様に木質の付着は認められない。縁辺は、やはり多少の出入を有するが、僅かであり、整齊な感を受ける。裏込土との間は6～9cmあり、3基中では、最も広い。組合法としては、南小口については、側板が小口板をはさみこみ、稍突出することは確実である。北小口では、西側は側板が小口板をはさみこむが突出しないとみられるが、東側では、側板と小口板は下端に関する限りほとんどか

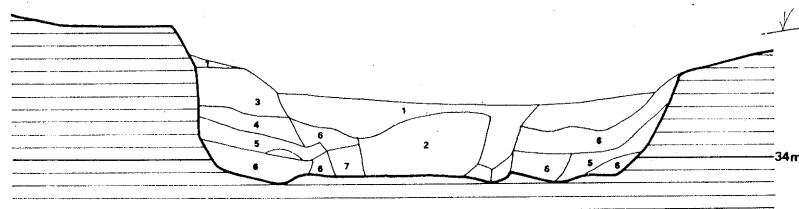


Fig. 14 川原庵山8号墳墓壙北東～南西断面図(縮尺 $\frac{1}{30}$ )

- |               |             |                    |
|---------------|-------------|--------------------|
| 1. 黒斑暗緑黄色砂質粘土 | 2. 暗緑黄色砂質粘土 | 3. 緑黄斑黄褐色砂質粘土      |
| 4. 暗黄褐色粘質土    | 5. 緑黄色砂質粘土  | 6. 緑黄色砂質粘土+黄褐色砂質粘土 |
| 7. 淡緑黄色砂質粘土   | 8. 4+5      |                    |

み合わない。両小口外方には、6号墳木棺と同様別材によって側板の延長部が設けられている。北小口では、51~60cmの長さを有する。従って、これを含めた全長は3.6m強となり、3.2m強の6号墳を上まわる。高さは、礫床から30cm上位まで埋め戻されているので、これと大略一致すると思われる。

#### 遺物出土状態 (Fig. 15)

礫床直上から、2群に分れた鉄器が検出された。南辺から1.5~1.7mの西縁辺ではU字形鋤先1が、この東、南端から1.35~1.55mの東縁辺からは、鉄斧形鉄器3、鉈1、刀子2+ $\alpha$ その他が集積された状態で出土した。刀子2が北端に、U字形鋤先・鉄斧形鉄器・鉈は南端に刃部を向ける。鉄斧形鉄器は、大を一番下にし、これに中・小と重ねられていた。鋤先および鉄斧形鉄器の袋部には、木質が遺存せず、使用痕のあることから意識的に柄を抜いて副葬したとみられる。なお、いずれの鉄器にも、底板と思われる木質の付着は認められない。

棺外の南小口東縁からは、鋒を礫床南端線と一致させた鉈1口が検出された。袋部に木質が遺存しているので、柄を着葬して東側板に平行して置かれたことになる。なお、身の一部に、側板と思われる木質が錆着している。

この他、墓壙上部堆積土中から、土師器小形器種片若干を検出したがFig17の他は細片で復元不可能である。

#### 遺物 (Fig. 16)

鉄斧形鉄器 大・中・小の三種各1個。1は、全長12cm、最大巾8.5cm、刃部長7.5cmの有肩形。袋部断面は5.6×2.5cmの隅丸長方形で、合せ目は判然としない。縦断面は略二等辺三角形を呈する。片側に、顕著な摩滅が認められる。2は、全長8.2cm、最大巾6.5cm、刃部長4.4cmの有肩形。袋部は、3.8×2.4cmの長円形。肩部は撫肩でなく、いからせている。刃部の一端は使用による摩滅が認められる。他端は錆落しの際欠失し、明らかでない。縦断面は二等辺三角形ではなく、刃部は袋部合せ目寄に偏る。3は、最大巾3.3cmで、本

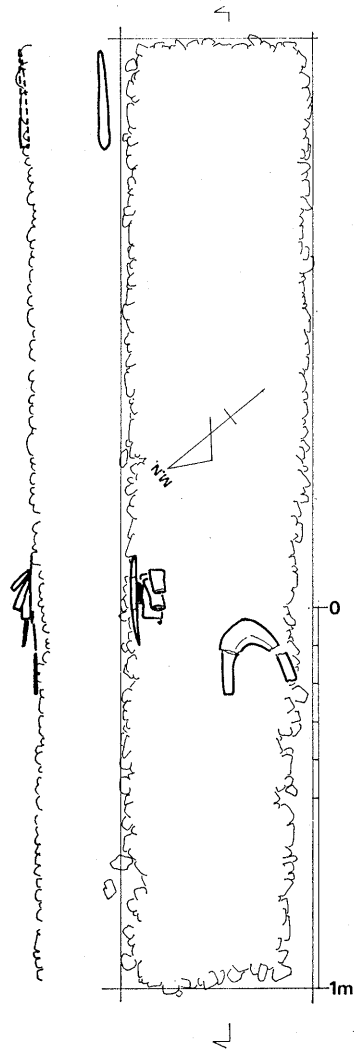


Fig. 15 川原庵山8号墳遺物出土状態実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )

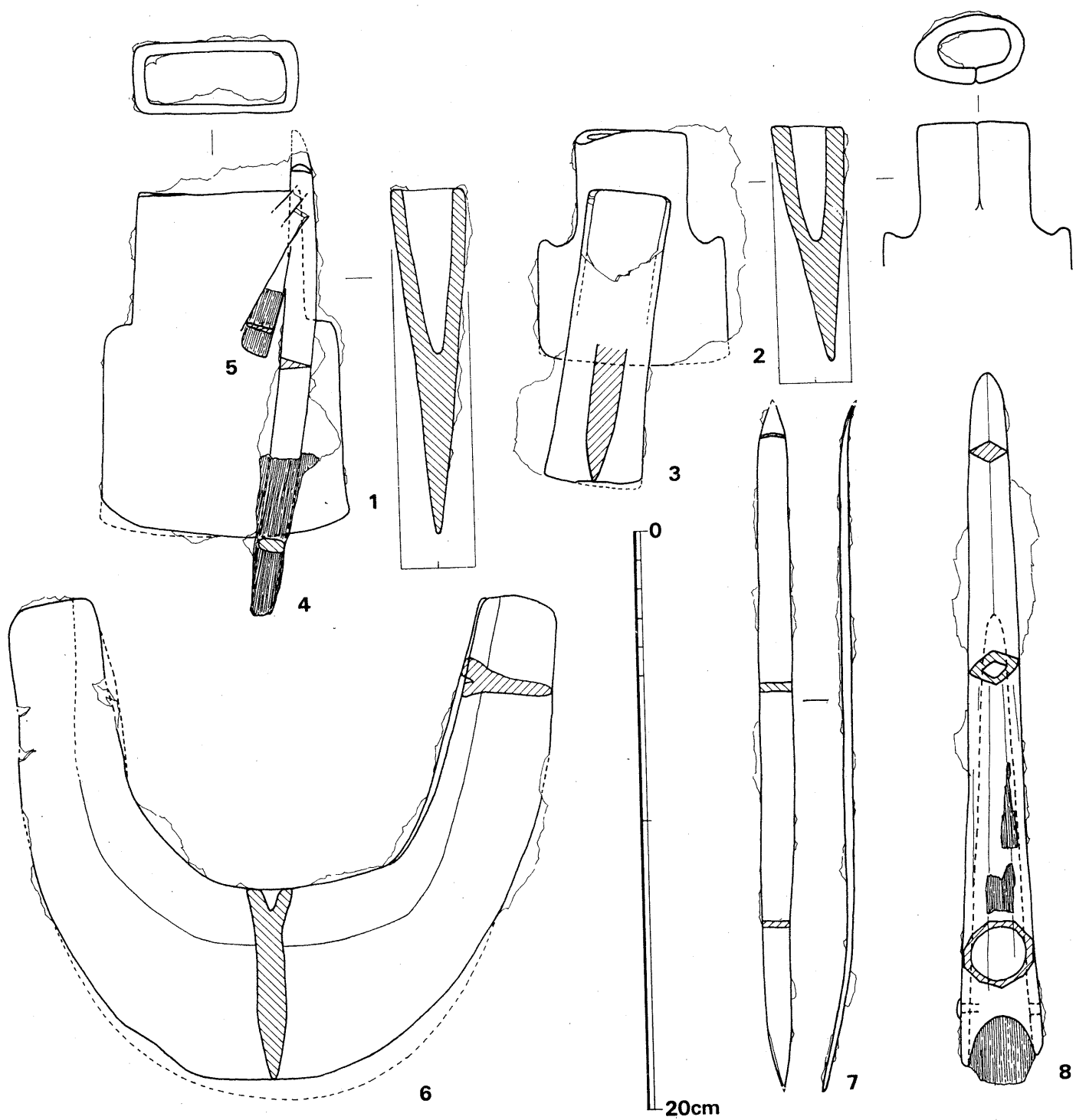


Fig. 16 川原庵山 8 号墳出土鉄器実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

器のみ肩を持たない。刃部は著しく片減りし、現存長10.2cm。

刀子 2口が確認されている。4は、全長16.7cm、刃部現存長10.6cm。鋒を欠くが、片丸造となっている。5は、その他の形成不明の鉄器と共に鉄斧形鉄器1に銹着しているため全容は不明。茎長2.3cmで、全長6cm前後か。短小であるが、これは砥ぎ減りによるものであろう。

U字形鋤先 6は、長さ16.3cm、身巾18.7cm。刃部の厚さは10mmもあり、鋤先にしては重厚に過ぎるくらいがある。使用による摩滅が著しい。耳部は若干反っている。都出比呂志氏分類の「U字形クワ・スキ先A類」に該当する<sup>①</sup>。

鉈 現存長23.7cm。鋒を1mm程欠く。最厚部で3mm強、茎部で2mm。最大巾は12mm弱。鋒部には僅かに裏すきがある。三木文雄氏分類の「F類」にあたる<sup>②</sup>。

鉾 全長24cm、身長9.5cm前後。鋒は鋭く断面は竊高の菱形。袋部には刻り込みがあり、十稜を有する。目釘は両側から打たれている。木・鹿角装の類は認められない。

土師器 (Fig. 17) 胎土に砂粒を含む。この他に小形壺の胴部片2個体分を検出した。いずれも、焼成・胎土とも良好で、器表に刷毛目を有する。

#### 葬法

頭を東端に置き、鋒を棺外副葬する1体は確実である。規模からみて、差違い2体埋葬の可能性を残す。

註 ① 同氏「農具鉄器化の二つの画期」〈考古学研究13-3〉1967年2月

註 ② 同氏「古墳出土の鉈に就いて」〈考古学雑誌42-3〉1957年3月



Fig. 17 川原庵山  
8号墳墓壙上面出土  
土師器実測図 (縮尺  
1/4)

(石山)

#### (4) 小 結

内部主体の構造上では、調査した3基はいずれも小異はあるが、同工の中の狭い組合式木棺である点が注意される。これらは、棺体を組立てた後、棺内に円礫を詰め、底板を持たない点に特色がある。これは、壙底に底板の痕跡が確認されないばかりでなく、8号墳出土鉄器に底板の存在を思わせる木質の銹着が確認されないことから明らかである。小口部付属板の性格は不明である。箱式石棺では、往々にして長側材の補充材として、あるいは副葬品埋納用のスペースとして設けられたりするが、本群では少くとも後者の機能を果してはいない。棺体の高さは、小規模な7号墳のそれが40cmであるのに対して規模の大きな6・8号墳では30cmに過ぎな

い。主体の規模では、長さにおいては8号墳が優るが、視覚的な規模のみならず、古墳築造に要する労働量では、盛土量の多い6号墳が、数倍多いことは明白である。7・8号墳の墓壙が6号墳に比して深いのは、木棺を覆う盛土作業の省力化、換言すれば投入可能な労働量がより小さいこと意味すると思われる。

副葬品では、いずれも処女墳であったにも不拘、実用品のみで質・量・組合いづれも極めて貧弱であり、①櫛以外の装飾品を全く持たない②武器が少ない③土器が皆無に近い④鉄製生産用具が集中して副葬される。の4点に特色を集約できる。玉類の欠落については奇異の感を受ける。本群に先行する4世紀中頃～5世紀初頭の炭焼・油田古墳群でも玉類の欠落現象が指摘され、鏡・玉・剣のセット説の批判がなされたが、該期では全く副葬品を持たない場合はともかく、まず玉類副葬は普遍化しつつあるとあって良い。しかし、本群と同期とみられる片山1号墳でも、処女墳であったにも不拘、鉄剣1口を副葬するのみであった<sup>④</sup>。背景は明らかでないが留意すべき現象と考えられる。

葬法では、6号墳では、2体差違同時埋葬が確実であり、7号墳は巾が狭く一応小児1体と考えられる。8号墳の礎床の長さは、2体差違葬は不可能ではないが6・7号墳例からみて、全く副葬品を伴わない遺体は考えにくく、棺内副葬品は1体に伴うものと見られる。

所属年代であるが、上限を示すものとしては8号墳出土のU字形鉤先が、下限については6号墳の櫛がそれぞれ挙げられよう。前者については、A類は5世紀中葉が上限とされている。櫛は、本県では浮羽郡吉井町所在塚堂古墳前方部石室出土例が最も降る例の一つとみられる。同石室からは、三角板鋸留式と横剣板鋸留式短甲が共伴し、「5世紀後半頃」に所属するとみられている。また須恵器を全く伴出せず、7号墳出土鉄鏃の型式も通有の横穴式石室から出土する細根式とは異なり、古式の様相を帯びることは、上記の下限と矛盾するものではない。鉤のF類は、ほぼ全期間にわたって使用されているので、年代決定の資料とはならない。3墳間に築造期の前後はあっても、四半世紀の間におさまるとみられ、従って所属年代は大略5世紀後半代に比定される。

本群の他の5基の円墳は、主体を石室以外とし、3墳同様組合式木棺である可能性が強く、本群は5世紀後半代を前後する時期に継起的に営なまれた群集墳といえる。視覚的には、1・6号墳を盟主とする不均等な構成であるが、副葬品からは、より小規模墳の8号墳が6号墳を凌駕するという変則性を有する。7号墳被葬者は小児、6号墳のそれは女性である可能性もあって三者を同列に論じることとはできない。が、8号墳出土の副葬品が、銚を除けば、いずれも使用痕をとどめる鉄製農工具であることは、被葬者の生前の生産活動への関わり方を示唆するものであり、対して6号墳被葬者は性別を問わず、8号墳被葬者とは性格を異にすることは明らかである。

註 ① 柳田康雄・亀井勇・宮小路賀宏・永井昌文『炭焼古墳群』〈福岡県文化財調査報告書37〉1968

年3月

- 註 ② 亀井勇・柳田康雄・高田一美・渡辺正気『油田古墳群』〈福岡県文化財調査報告書42〉1969年3月
- 註 ③ 松本正信・加藤史郎・岸本雅敏『天坊山古墳』〈加古川市文化財調査報告5〉1970年6月
- 註 ④ 松岡史・前川成洋・副島邦弘・石山『片山古墳群』〈福岡県文化財調査報告46〉1970年3月
- 註 ⑤ 都山比呂志「農具鉄器化の二つの画期」〈考古学研究13-3〉1967年2月
- 註 ⑥ 本墳からの櫛出土は、齊藤忠『古代の装身具』1963年11月によって知った。
- 註 ⑦ 小田富士雄、石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表」〈九州考古学23〉1964年10月
- 註 ⑧ 三木文雄「古墳出土の鉈に就いて」〈考古学雑誌42-3〉1955年2月

## 4 下別当1号墳

果樹園造成により破壊され、風除のための崖に、石材を露出させていた。

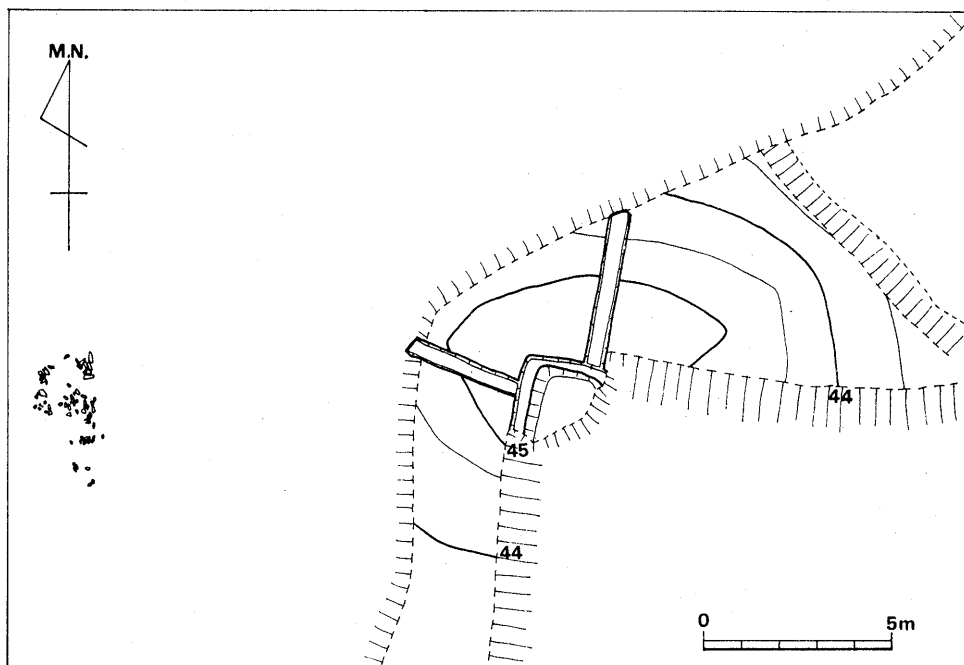


Fig. 18 下別当1号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)



### 墳丘の構造 (Fig. 19・20)

墳丘は径12m前後と推定される。旧表をとり除く整地作業は行なわれず、直に盛土を行なっている。裾部には、カルデラ状の土盛が認められ、傾斜の強い北側では特に著しい。盛土の厚さは現状の0.6m前後であるが当初は1m程のものであったと推定される。周濠は認められない。

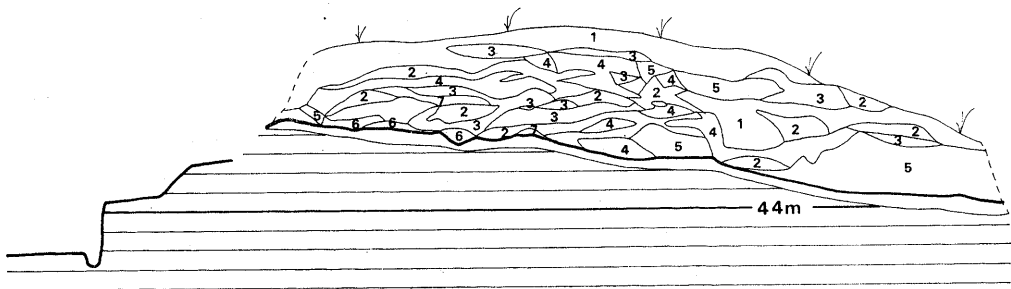


Fig. 19 下別当1号墳墳丘南～北断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

1. 赤褐色土 2. 暗赤褐色土 3. 黒赤褐色土 4. 灰褐色土  
5. 淡赤褐色土 6. 明黒褐色土 7. 黒褐色土

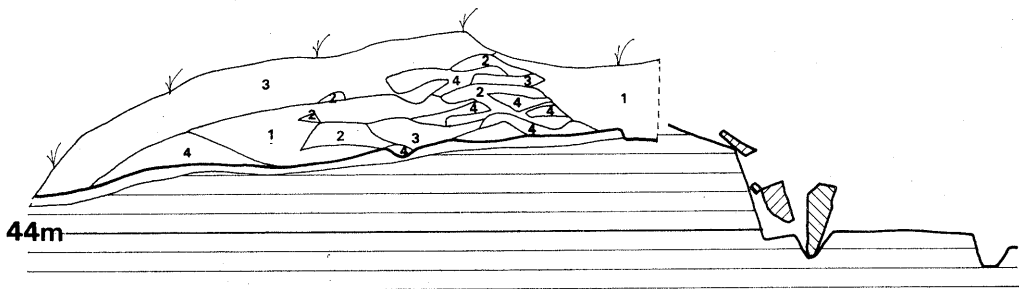


Fig. 20 下別当1号墳墳丘東～西断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

1. 赤褐色土 2. 淡黒褐色土 3. 茶褐色土 4. 灰褐色土  
5. 明黒褐色土 6. 黒褐色土

### 内部主体の構造 (付図 9)

主軸を N8°45'E にとる小石室であるが、過半を開墾により欠失している。地山を約45cmの厚さに穿った墓壙の中は上端で1.8 m 下端で1.3 m、現存最大長は2.1 m である。この壙底に小石室が営なまれている。現存する小口端のみは途中で段がつく。石室の中は、小口寄で約75cm であるが、対辺は稍幅広となる可能性がある。周壁は1石が現存するのみである。この石と壙底を現況コの字状に囲繞する小溝が穿たれていることより推して、最下段に板石を立て、この上に更に数段小口積されていたものと考えられる。控え積は、壙底近くでは施されなかった模様で、墓壙上端近くは巾いっぱい認められる。西辺では、下部にも認められたが、これは内側から周壁材が抜き取られた際に落下したものであろう。床面には一面に小礫が敷かれている。これらの一部には赤色顔料が認められた。

### 遺物 (Fig. 21)

礫床の間から、鉄鏃1、滑石製白玉21+αガラス小玉2個が検出されたにとどまる。

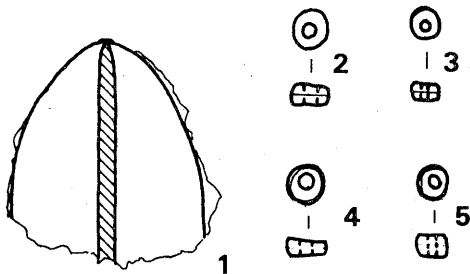


Fig. 21 下別当1号墳石室内出土遺物実測図  
(実大)

鉄鏃 現存長29mm、最大巾25mm。川原庵山7号墳出土品と数似する。

ガラス小玉 いずれも濃紺色を呈し、孔の周囲は殆ど摩滅していない。

滑石製白玉 風化の進んだ14個+αと、当初の肌を残す7個の2グループに分れる。後者(4・5)の径は1個のみが3mmで他は全て4mm前後であって、4~5mm前後の前者に比してひとまわり小形である。両者とも、管玉状に仕上げた

素材からカットされる前につけられた稜が明瞭に認められる。

本墳の西側、石室中心から14~12.5m離れた斜面に、石が多数露出していたので、破壊された石室を想定して、これらの清掃、範囲確認を行なった。この結果、これらの石は、石室ではなく、5群に分れた集石遺構ともいべきものであることが判明した。石の間には粉化した骨が認められ、墓と見られるが所属時期は不明である。最近、古墳の裾部に、これをとり囲むかのように中世墓が累々と営なまれる例が各地で発見されており、あるいは本遺構も同様なものかと思われる。

なお、これらの下に土壙が認められたが、精査するゆとりなく、性格・所属時期を明確にすることはできなかった。

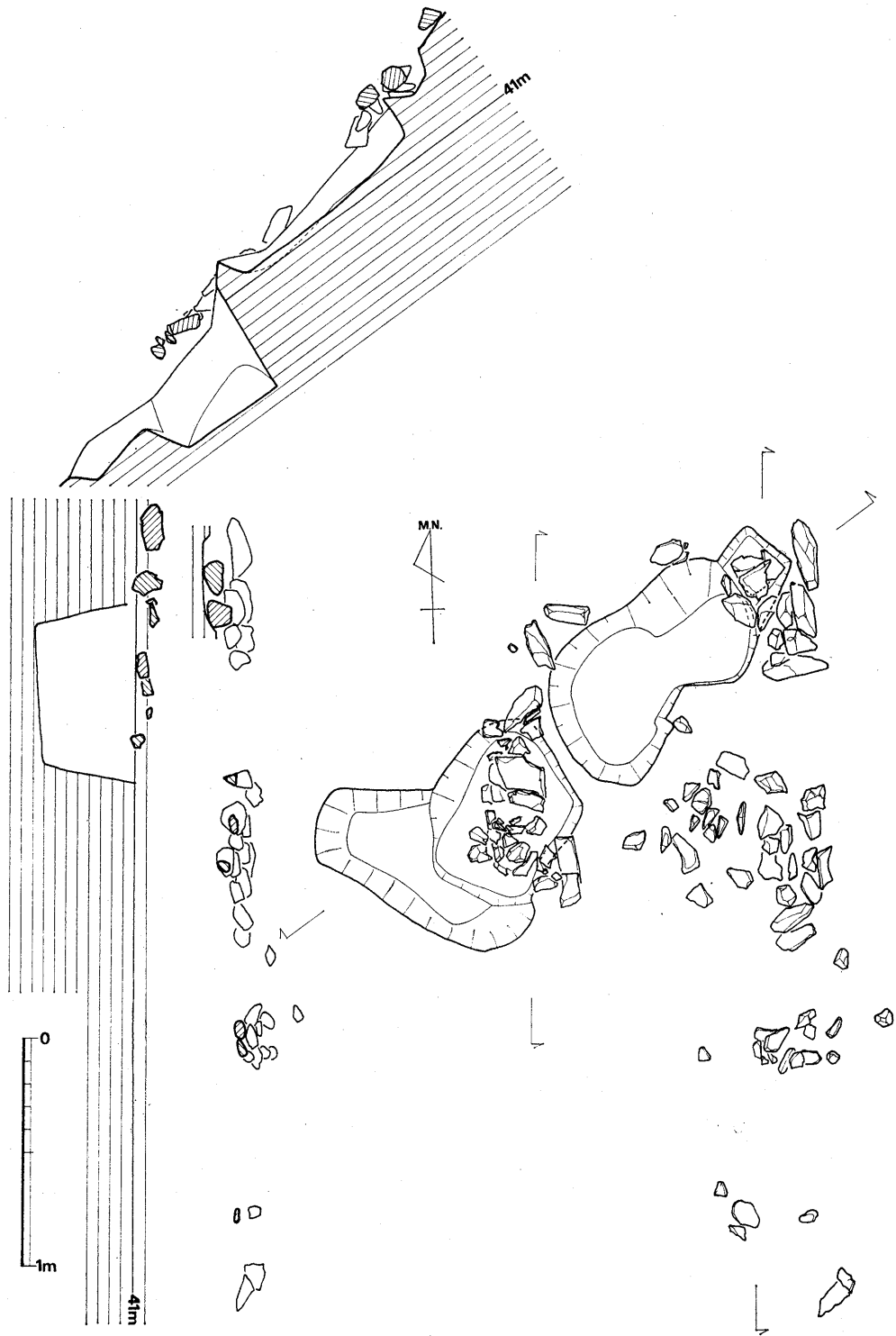


Fig. 22 下别当1号墳丘西側斜面集石遺構実測図(縮尺 $\frac{1}{30}$ )

## 5 道田 1 号 墳

本墳は分布調査時には、墳丘の過半を失ない、主体もまた全壊した円墳と思われ、墓壙の一  
部でも検出できたらと思いつつ調査を開始した。案に相違して、墓壙は略完存し、深さ3mに  
及び、日数の関係もあって、ベルコン・ユンボ・ブルドーザを使用しての調査となった。本墳  
の東側にある採土によって作られた崖面に、石材の露出が認められ、直下に腰石と思われる石  
材が転落しており、ここに1基の古墳が存在していたことが辛じて知られる。

### 墳丘の構造 (Fig. 24~25, 付図10・11)

径約27mの円墳。墳輪・周濠は認められない。高さは、墳頂部が標高41.5m前後とみられ、  
傾斜面の南東裾からは4.3m前後であったと推定される。盛土作業の第一段階としては、表土  
を剥ぎ取り、窪みに土砂を充填する整地作業が行なわれ、第二段階として築造予定円周の内側  
に地山と同質の赤褐色土を敷き、この内部に赤色土層が置かれたものと思われる。後述するよ  
うに天井石底面は、墓壙上端に大略一致すると思われるので、以下の盛土作業は、石室構築  
後、墳丘壮大化を意図して行なわれている。墳丘中央部の盛土にあたっては、外周に沿って、  
まずカルデラ状に盛り上げ、次にこの内部を少量の土砂を根気よく充填する作業をくり返して  
いる。こうして墳丘の核を作り、次に裾に向って一気に大量の土砂を運びこんで墳丘を完成さ  
せている。注意されるのは、核の完成時に、なんらかの儀礼に伴なうとみられる須恵器群が、  
北東から検出されたことである。

なお、墳丘下に、先行するV字形の落せみが認められたが、性格解明のための調査は日時の  
制約でできなかった。墓壙左壁には認められないので、少くとも長い溝ではないと思われる。

### 内部主体の構造 (付図12, Fig. 26~27)

主軸をN69°Eにとり、略北東に開口する横穴式石室であるが、徹底的な攪乱を受け、根締  
用材とみられる花崗岩小石数個を残すにとどまる。墓壙およびこれに付設された切通状墓道は  
略完存する。墓壙は、上端で長さ約7m、巾約4mの不整長方形プランを呈し、深さ2.85mを  
測る。床面には、腰石裾付のための窪みが認められ、盗掘により変容してはいても、石室の概  
略を想定することは可能である。くぼみのうち、1~4は、奥壁、5・7・8は左側壁、16・  
15は右側壁のそれぞれの腰石の大略の位置を示すと思われる。14は右袖石、12・13は羨道右側  
壁にあたると見做される。6・9は控積石材の裾付痕か。とすれば、後述する、原口1号墳石室  
との比較から、本石室は、全長5.7m前後、玄室巾2.2m前後、玄室長3.2m前後の単室横穴式  
石室と推定される。本石室の場合は、左袖石、羨道部各仕切石の裾付痕は検出されず攪乱のみ

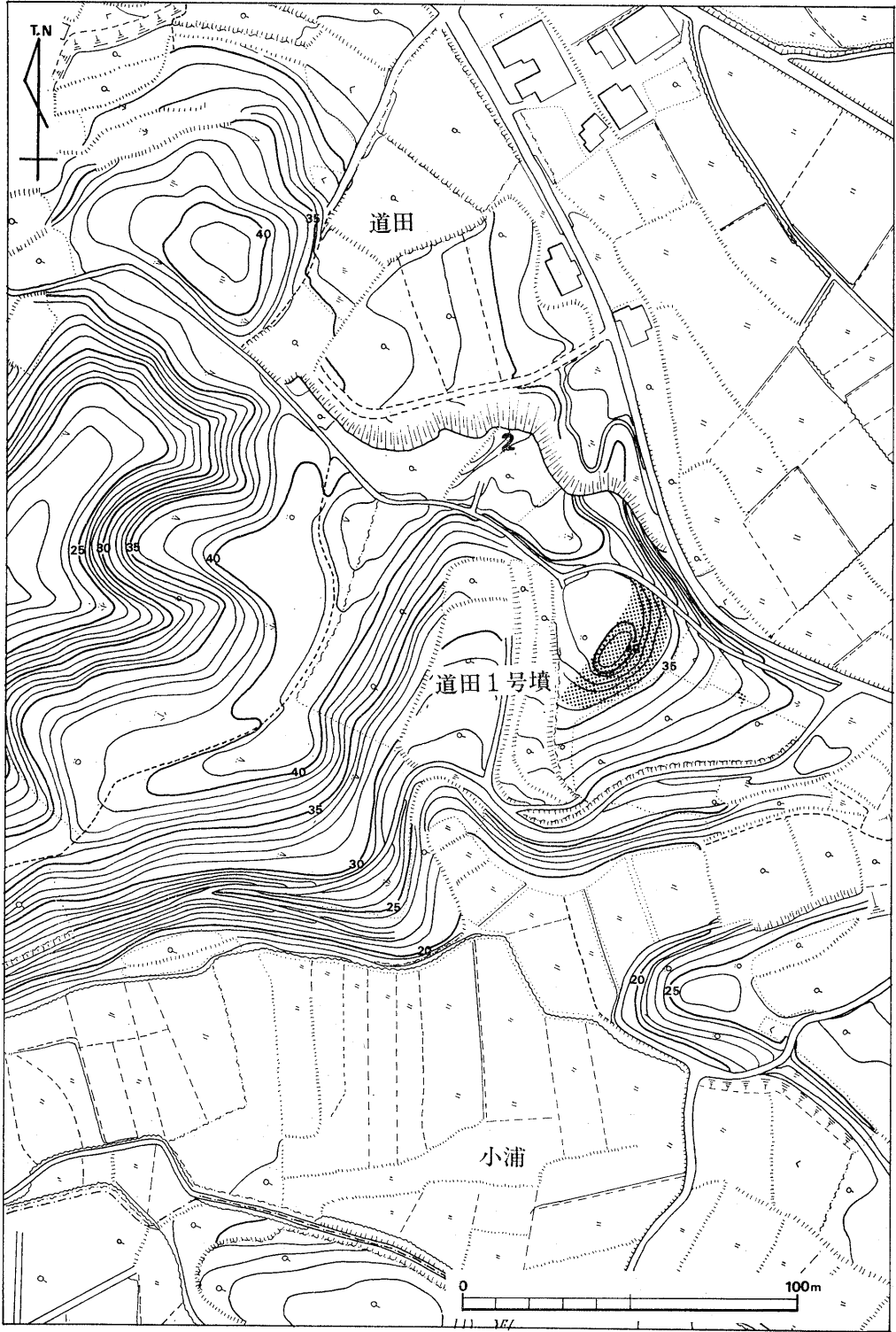


Fig. 23 道田1号墳周辺地形実測図 (縮尺1/2000)

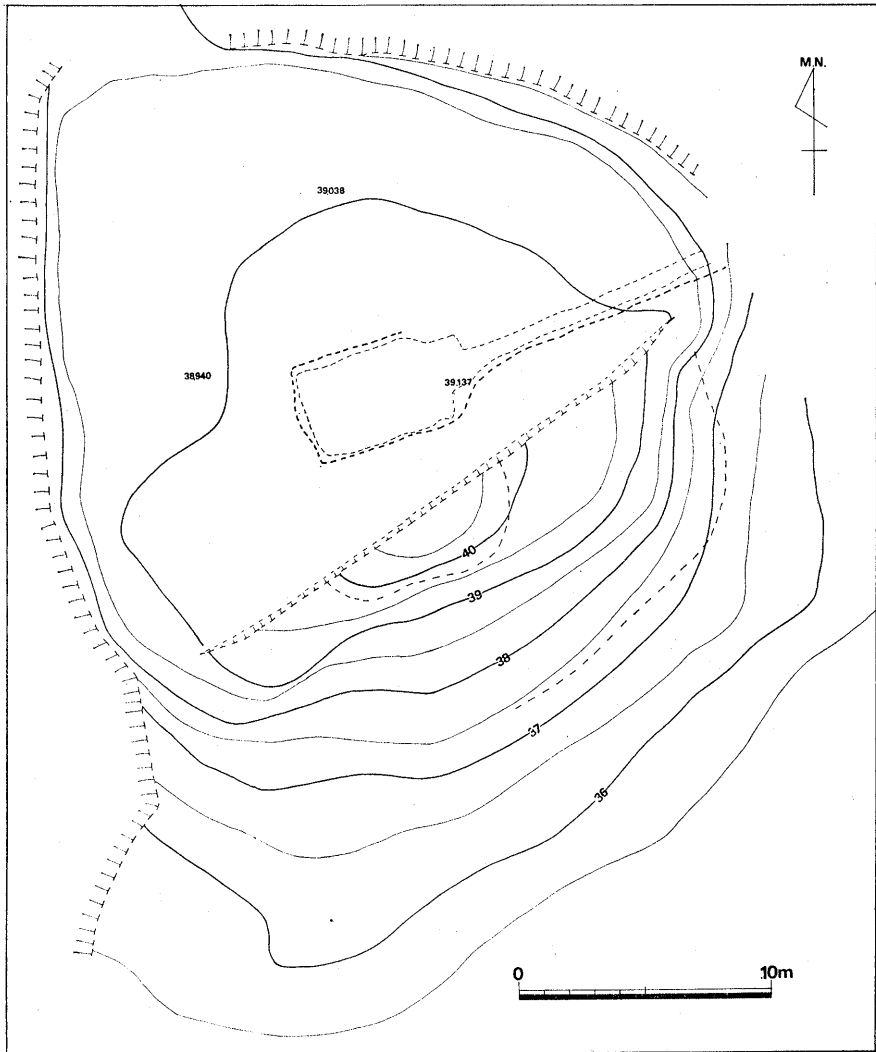


Fig. 24 道田1号墳墳丘測量図(縮尺 $\frac{1}{300}$ )

に帰すべきものとは思われない。石室高は、後述する原口1号墳例からみて、墓壙上端に略一致するとみられ、3 m強と思われる。

本石室を特徴づけるのは、極めて狭長な切通状の墓道にある。巾は上端で1~1.5 m、下端では0.65~0.68 mに過ぎず、長さは現存11.3 mに及ぶ。また墓道の玄室寄と最先端とでは底面に0.95 mの落差がつく。調査時の墓道壁は、シンメトリーとならず、右壁は大きく北側にズレており、これは盗掘の際石材搬出のためこの部分を削平したものと考え、深く追究しなかったのであるが、原口1号墳でのあり方からみて、切通状墓道底面より約1 m高いこの面が、当初

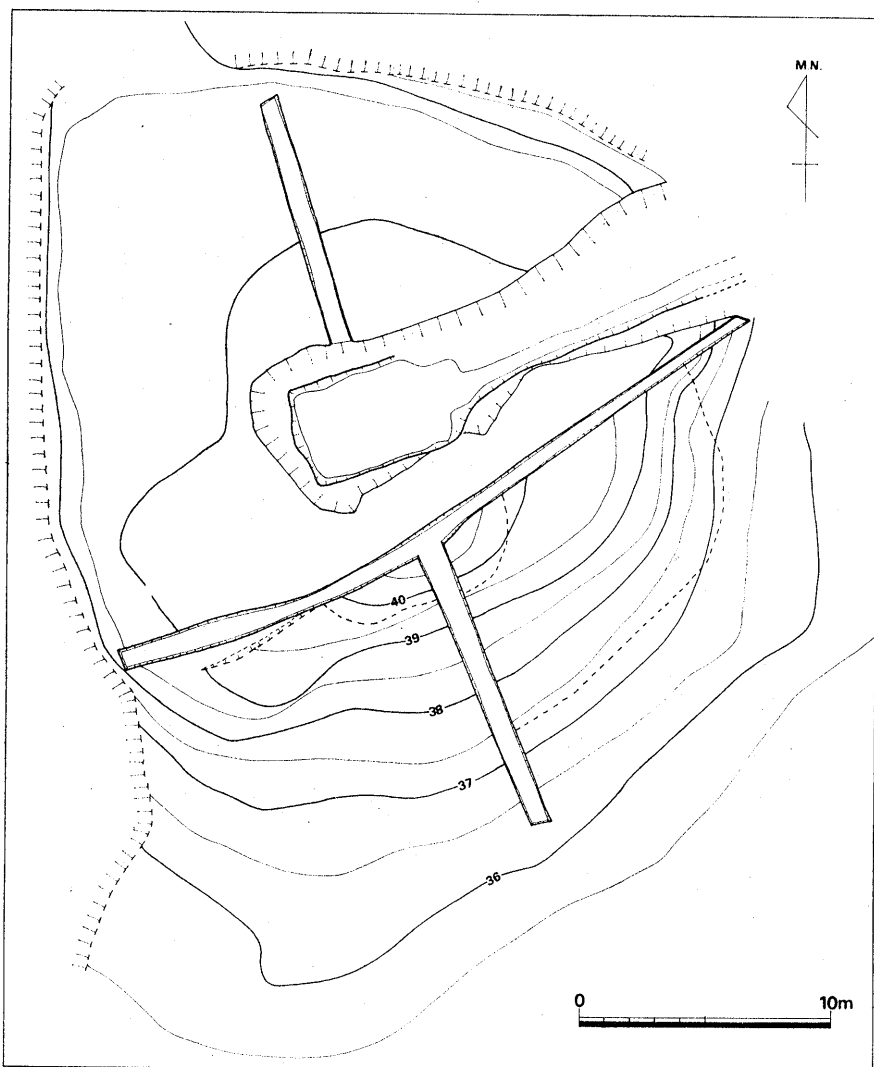


Fig. 25 道田1号墳全体図 (縮尺 $\frac{1}{300}$ )

から作業通路として設けられた可能性が強く感じられる。

墓壙壁面各所に、掘削具の痕跡が明瞭に残っていた (Fig. 26)。これらは大別すると

I— a, b

II— c, d, e

の2タイプとなる。Iのうち、aは巾6.2 cm, bは5.4 cmで使用工具は同一でない。IIの3者も各々異なる。また前二者は、後三者よりも上位にその痕跡をとどめており、床面近くの低位には認められないことは示唆的である。これについては後述する。(石山)

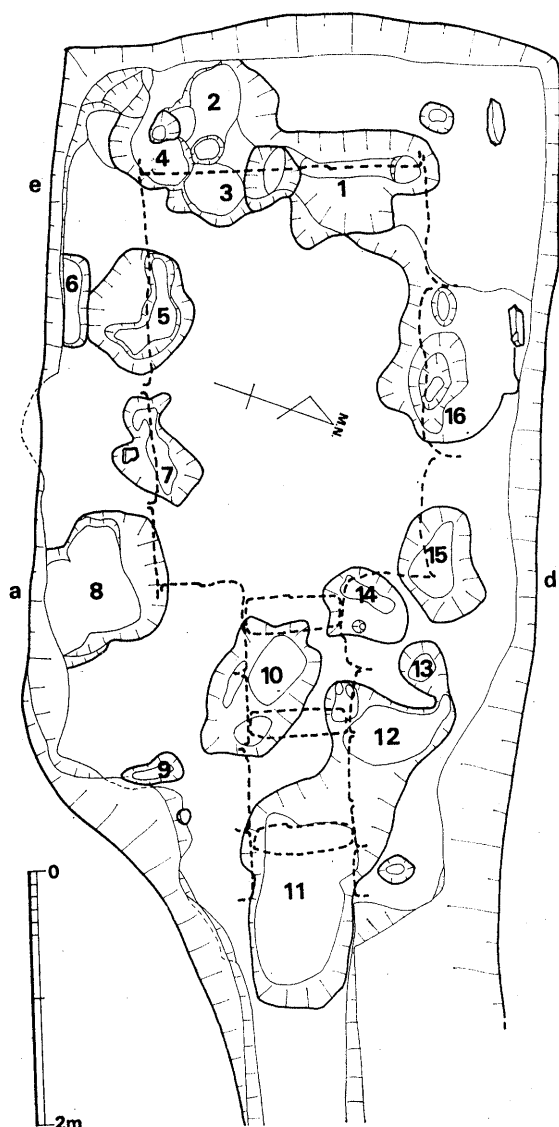


Fig. 26 道田1号墳石室復元図(縮尺 $\frac{1}{60}$ )

須恵器

杯の蓋

I a類 (Fig. 28-1)

口縁部は細味であり外湾する。口縁部内面には、わずかに段がつき古式の特徴を残す。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土にはわずかだが小砂粒を含む。復元口径は13cmを測る。

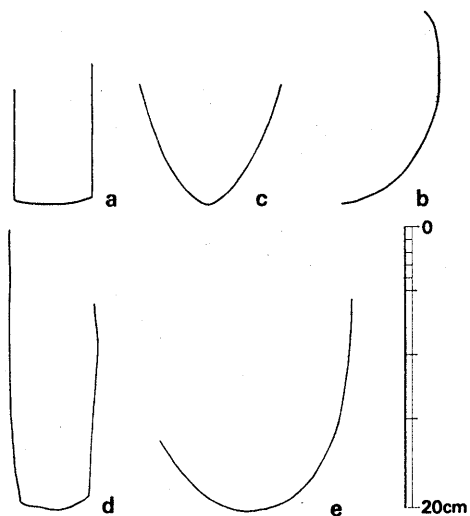


Fig. 27 道田1号墳墓壁面鉄製工具使用痕実測図(縮尺 $\frac{1}{6}$ )

遺物

出土した遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器

須恵器	杯蓋	4 個体
	杯身	5 "
	埴	3 "
	碇	1 "
	台付壺	1 "
	平瓶	1 "
	壺	3 "
	甕	2 "
土師器	高杯	1 個体



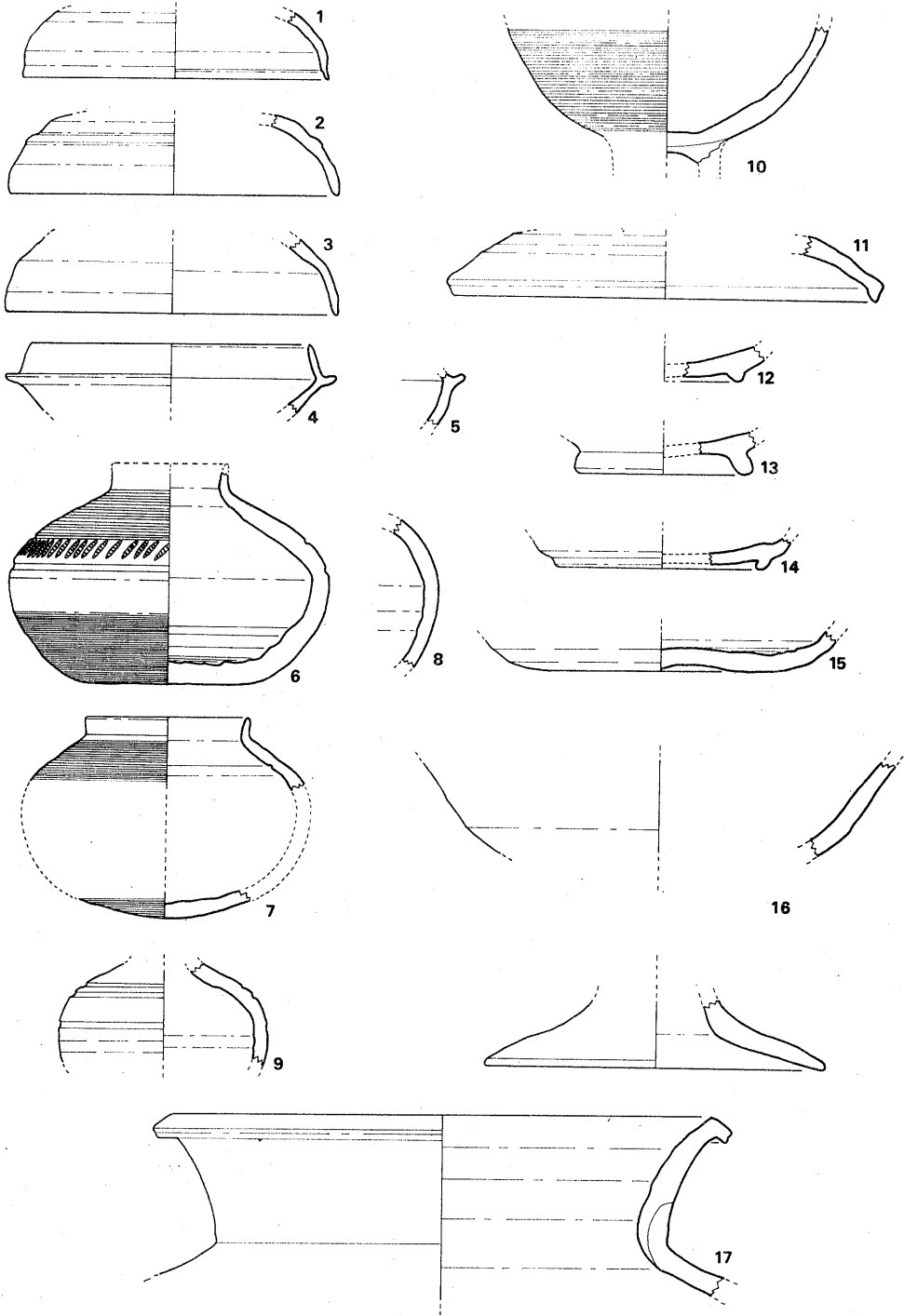


Fig. 28 道田1号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

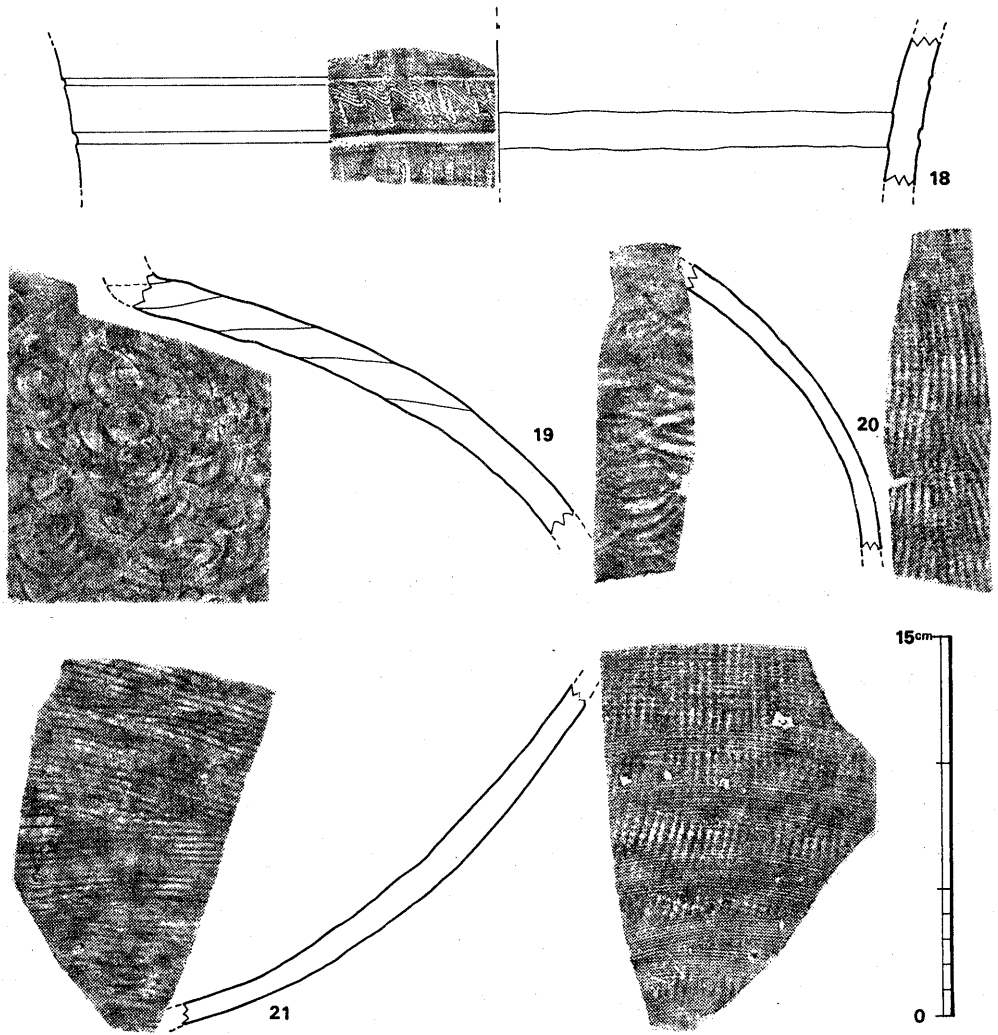


Fig. 29 道田1号墳出土須恵器実測図(縮尺 $\frac{1}{3}$ )

## I b 類 (Fig. 28—2・3)

口縁部はやや内湾きみであり端部は丸くつくられている。口縁部と体部の境は高位置にある。色調は2は灰黒色を、3は淡小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を多く含んでいる。復元口径は13.8cm~14cmを測り、器高は3.5cm~4cm程と思われ、やや扁平な形態を呈する。

## II 類 (Fig. 28—11)

墳丘北側より出土している。口縁部は体部より折れまがってつくられ、外側はわずかにくぼみ、内側は外湾し、断面は三角形に近くなる。天井部付近のみヘラ削りしており、他は横ナデを施す。復元口径は18cmを測り、器高は3cm程度である。色調は淡小豆色を呈しており焼成は良好である。胎土には大粒の砂粒を含む。口縁部と体部の境には内外面ともに稜線が入る。

## 杯の身

## I a 類 (Fig. 28—4)

たちあがり1.4cmを測り、直線的につくられており、内傾する。たちあがり端部内側は若干の平坦面をもつ。たちあがりと内傾斜面との境はくびれが著しく明瞭な稜線が入る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。復元口径は小8cm、蓋受け部径は14cmを測る。

## I b 類 (Fig. 28—5)

蓋受け部と体部を一部残すのみである。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は細粒を含む。

## II 類 (Fig. 28—12~14)

ともに墳丘北側から出土しており、磨滅が著しい。

12は低い高台がつく。色調は灰白色を呈しており、焼成は不良である。胎土には細粒を含む。

13は高く、外方へそるしっかりした高台がつく。色調は灰黄褐色を呈しており焼成は良好である。胎土には細粒を含む。底径は7.8cmを測る。

14は低くて内傾する高台がつく。色調は小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。底径は9cmを測る。

埴 (Fig. 28—6・7・8) 6は底部は平底である。胴部最大径はほぼ中央に位置し、この外面には沈線が入り、内面は不明瞭な稜が入る。外面中央部の沈線のわずかに上方には幅のせまい沈線が入り、この間に櫛状器具による刺突文が入る。口縁部は短く、外反きみに立つ。上部と下部には櫛状器具によるカキ目が入るが上方のは広く、下方のは幅が狭い。上方部は2cm幅間に12本、下方には2cm幅間に20本のカキ目である。底部内面には横テデの凹凸が著しく稜線が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。口径は5cm、胴部最大径は13.7cm、器高は9cm~9.5cmを測る。

7は底部はややとがり気味の丸底である。胴部を欠くため全体の形態は不明であるが、全体に丸味を有するものと思われる。口縁部は短くやや外反する。端部は丸くつくられている。内面肩部には一条の沈線が入る。口縁部以下は、外面全部に同一幅のカキ目が入る。色調は明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。口径は7cmを測る。

8は胴部を一部残すのみである。外面はヘラ削りの上からカキ目を施している。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

甗 (Fig. 28-9) 破片であるため円孔の詳細は不明である。球状部中央部には一条の凹線が入り、以下はヘラ削りを、以上は横ナデを施す。肩部には二条の平行沈線が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を多く含む。復元最大径は8.8cmを測る。

台付壺 (Fig. 28-10) 壺の下半部を残存するのみである。外面はヘラ削り後、櫛状器具によるカキ目を施す。内面はなで痕が著しい。色調は外面は灰黒色を呈し、内面は灰色を呈する。焼成は良好であり胎土に細粒を多く含む。

平瓶 (Fig. 28-15) 底部を残すのみである。若干の焼けひずみがある。残存部外面はカキ目整形を施す。底部の中央部を除く全面にヘラ削りを施し、この上からカキ目を施す。内面は底中央部付近はナデで他は横ナデであり、この横ナデの凹凸は著しく稜線が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含む。ブルドーザーによる排土中より出土している。

壺 (Fig. 28-17, Fig. 29-20・21) 17は壺の口縁部と頸部を残存するのみである。肩部と頸部の境は明瞭であり、外湾ぎみにのびて口縁部となる。口縁部は端部は直角に近く断面長方形を呈して外方へ折れまがる。外端は平端面を有し、側端は凹湾する。色調は灰黒色を呈しており焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径は24.5cmを測る。

3・4は壺の破片である。3は17と同一個体の可能性がある。

甗 (Fig. 29-18・19) 1は頸部を一部残すのみである。2cm程の間かくで沈線が入り、この沈線間には櫛状器具による波状文が入る。下方沈線以下には刺突文が入り装飾をそえる。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

2は頸部を残すのみであり、大形の器型と思われる。外面には自然釉が付着しており、ここはタタキを消しているようである。内面にはタタキ痕が残る。

#### 土師器

高杯 (Fig. 28-16) 高杯の杯部の一部と脚部を残存する。脚部内面は磨滅して不明であるが杯部両面と脚部はヘラ研磨を施す。杯部は外反度が著しい。脚部は直線的であり、器壁を端部で著しくせばめる。色調は外面は赤褐色を、内面は灰黄褐色を呈しており焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。脚径は14.4cmを測る。

遺物としては各時代の特徴を最も良く表わしている杯の蓋と身が出土しているの、これをもとに年代を考えてみる事とする。石室内もしくは墓道より出土した土器は第Ⅲ期の後半に比定され、それ以後はずっと降って、第Ⅶ期に比定される須恵器が墳丘東側から出土しているが出土地点の事をも考え合わせると追葬の際の遺物とは考えにくい。従って出土遺物よりの時期は六世紀後半に比定される。(川述昭人)

## 6 原口1号墳

下別当1号墳とは、五毛上池の対岸、東側の丘陵上に位置する。昭和30年代のブルドーザーによる採土工事によって奥壁の大半と天井石・右側壁の一部が破壊された。羨道方向は陥没しており、前壁上部にも盗掘者の侵入口がある。石室天井部の写真が当委員会に数年前にもたらされており「合掌式石室」として注意されていたが、位置の確認はなされていなかった。

### 墳丘の構造 (付図 13 Fig. 31・32,)

下別当1号墳からみると、石室中心から稍北西寄が1段小高くなる程度で小規模墳のように見える。石室横断方向で径約23m、高さは南西側からみて約5mである。旧表はとり除かれ、北西端では土止の機能を兼てか地山がカットされ、裾が画されている。道田1号墳と同じく石室構築終了後、墳丘の盛土が開始されている。墓壙外も一部側壁構築と平行しているが、これは天井石架構の便を考慮してのことである。中央部、裾部を問わず、総じてとにかく中心から外側に向けて積み上げた感があり、カルデラ手法は顕著でない。

### 内部主体の構造 (付図 14 Fig. 33,)

主軸をN55°Eにとり、略南西に開口する全長7.5mに及ぶ複室式横穴式石室を主体とする。石室は地山を3.45~3.83mと極めて深く掘り割った墓壙底の中央に築かれている。長さ6.9~7.3m、巾5.32~5.65mの不整長方形プランを呈し、これに墓道が付設されている。墓壙北コーナー付近には、墓壙掘削時に使用した鉄器の痕跡が明瞭に観察された。

玄室各部の計測値は

長さ	(	左—————4 m	)	奥壁—————2.25m	
		右—————4.06m		巾 (	中央—————2.4m
		仕切石端——4.15m		前壁—————2.35m	

で、長大な長方形プランを呈する。高さは、3.34mに及ぶ。腰石は壙底をさらに30cm掘りこみ、奥壁寄から順次据えつけている。腰石と壙底との間には根石が叩きこまれている。前壁腰石据えつけ後の積み上げは、左側壁では各石の接続状況から、腰石とは逆に前壁から側壁、さ

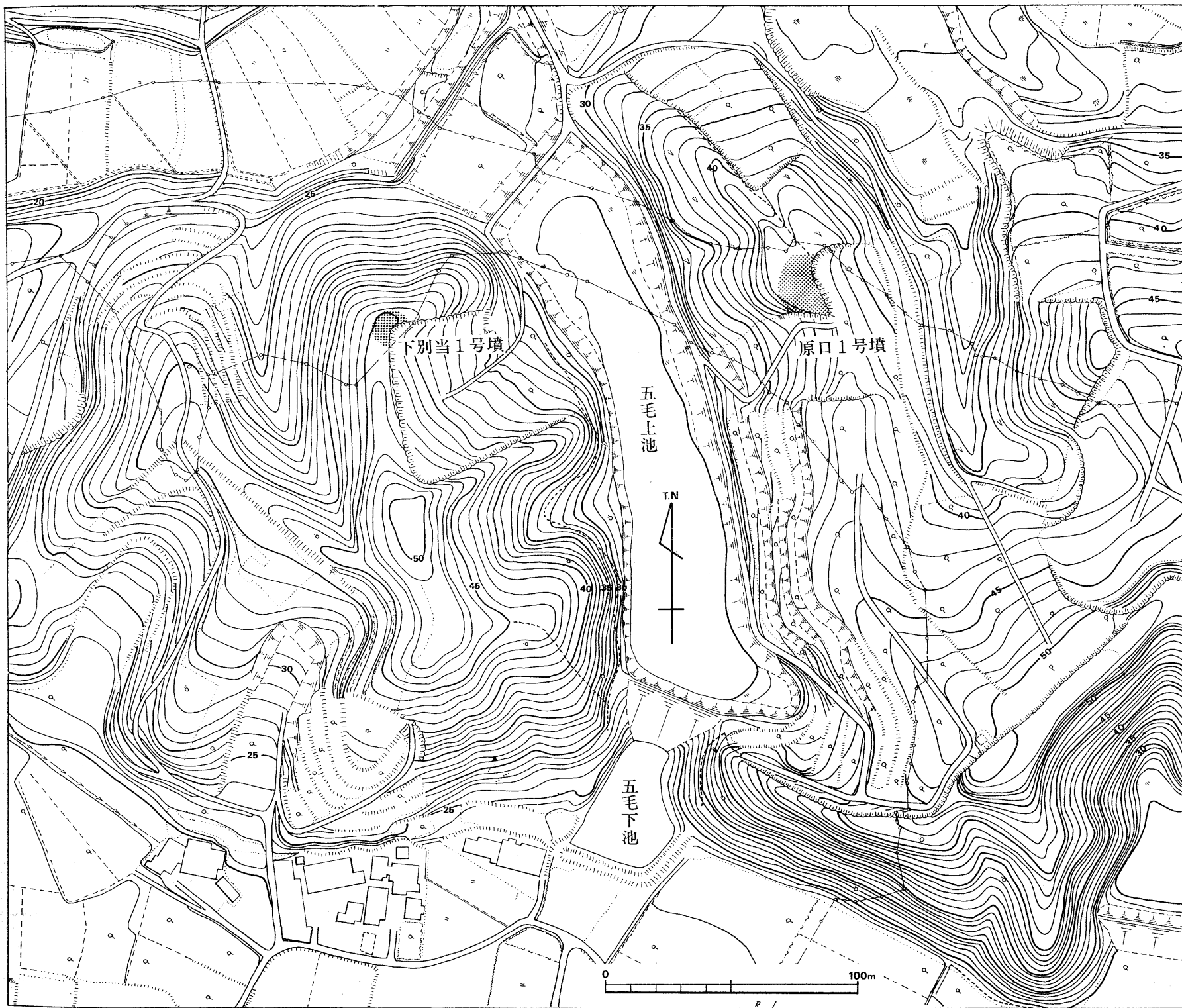


Fig. 30 下别当11号墳, 原口1号墳周辺地形图 (縮尺 $\frac{1}{2000}$ )

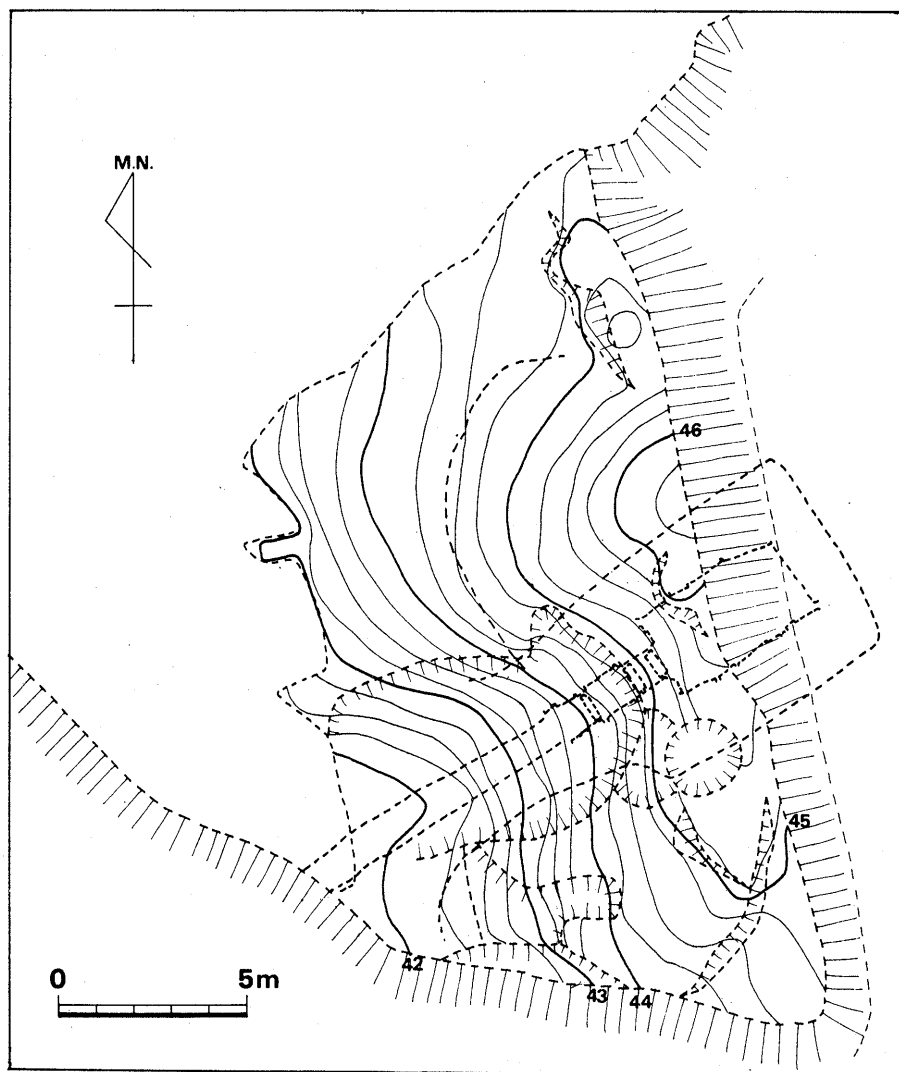


Fig. 31 原口1号墳丘測量図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

らに奥壁へと構築されたことを示す。これは墓壙が極めて深いため、上部は別として石材の搬入路を墓道に求めたことによるものであろう。上部に近づくにつれて一工程毎の上端が水平に近くなるが、これは天井石の架構を意識してのことと思われる。側壁は合掌式とでもいうべく、非常に急角度の持ち送りで、左壁で $1.11m$ 、右壁で $1.26m$ も迫り出しており、ここに本石室構造上の特徴の一つがある。ただ両側壁最上段は密着せず、数 $cm$ の間をおく。天井石は現存2個であるが当初は3個とみられる。各所に亀裂を生じた石があるが、これは天井および奥壁崩壊によって生じたバランスの狂いのみではなく、石材を水平位に保つことにそれ程注意が払

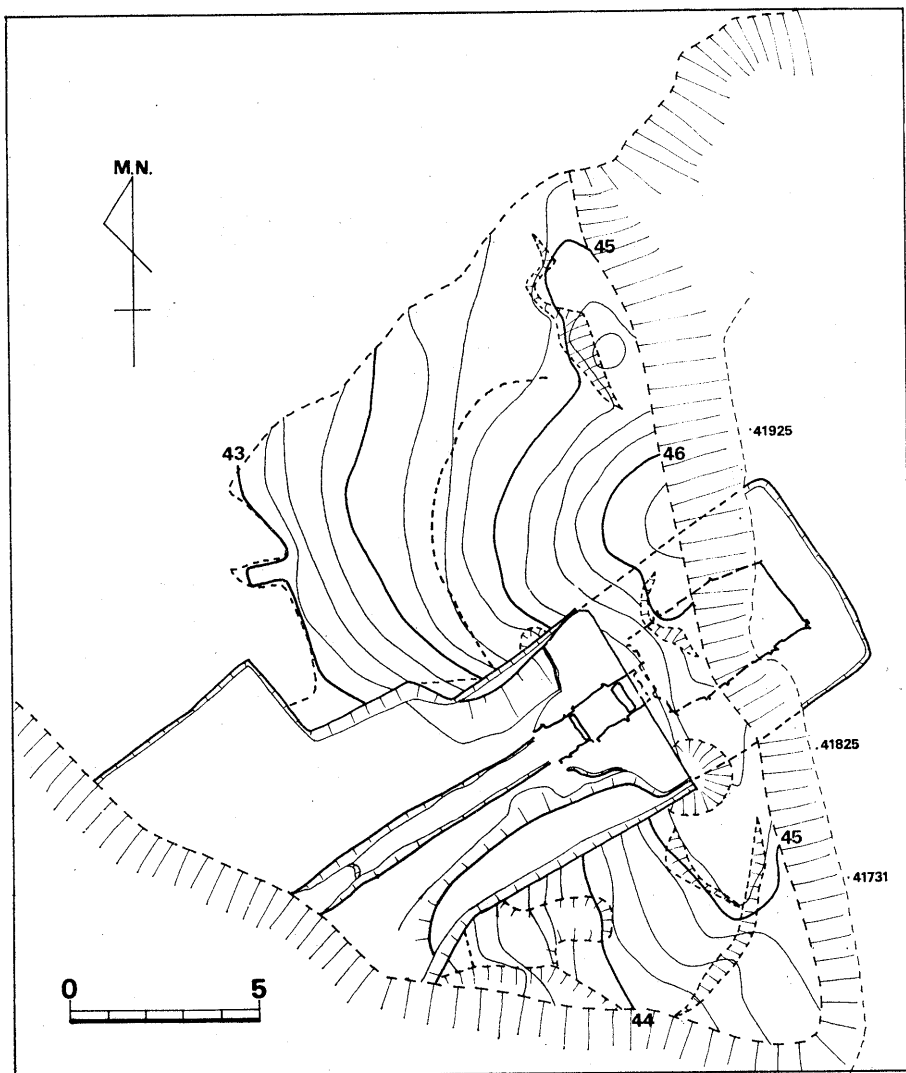


Fig. 32 原口1号墳全体図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

われず、パッキングが不完全であることが主因と思われる。床面は、下層に扁平丸石・割石を混用し、この上に全面に小円礫を敷く。遺物の出土状況からみて、追葬に伴う床面の改造とは思われない。

奥壁前面に、腰石から92~96cm離れてこれと略平行に走る溝が検出され、かつ右コーナー近くにあった板石は原位置を動いてはいるがこれだけに赤色顔料が塗布されていた点、注目される。玄室の巾と長さとはアンバランスであるのも、これを屍床とすれば解消され、興味深い。

玄門は、巾73cm、高1.3mと狭く低い。袖石間には仕切石が置かれているが、これは玄室床



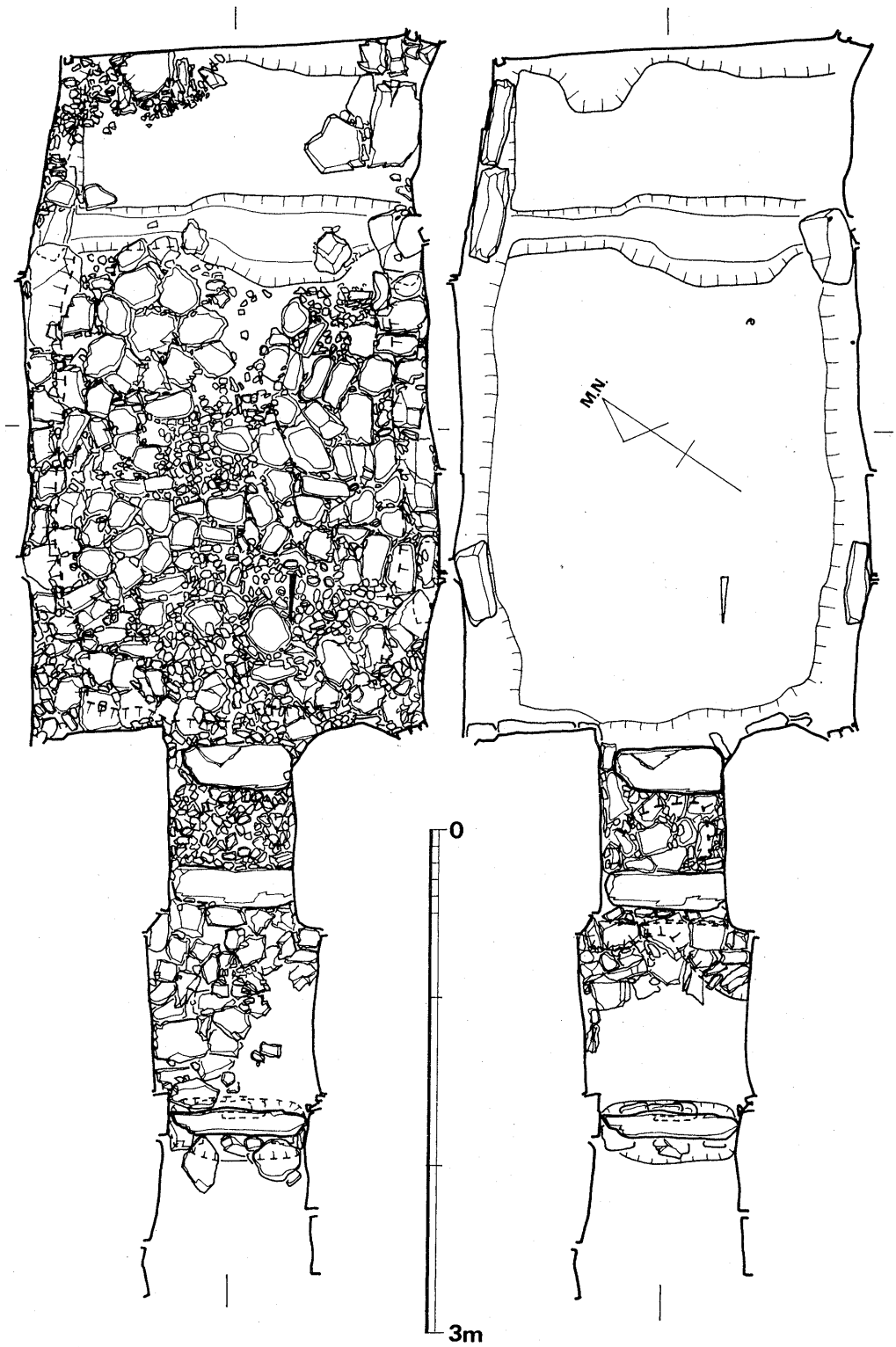


Fig. 33 原口1号墳石室平面図および遺物出土状態実測図（縮尺 $\frac{1}{40}$ ）

面と略同高で立面的には仕切の用をなさない。これから50cm離れて前室との仕切石が置かれているが、これは玄室床面よりも高く、かつ床の構造は玄室のそれと同工である。玄門に二カ所仕切石が置かれるのは異例に属するが、この部分が玄室と一体視されたことによるのであろう。この仕切石先端から奥壁までは、5.19mを測る。

前室は、巾95cmで、玄門よりも少しく広い程度であり、仕切石間は約1.2mと短く、床面は2層であるが、扁平割石上に角礫を敷く点で、玄室とは厳然たる相違がある。仕切石の根石は叩きこまれている。この仕切石前面には閉塞石の一部とみられる数石が現存するが、羨道床面には、敷石は置かれていない。なお、前室・羨道共に最下段の石材は玄室のそれと異なり、壙底直上に据えられている。墓道は、地山を75~98cm、深さ80cmにわたって掘りくぼめた切通状の狭長なもので、羨道寄と最先端とでは、70cmの落差がつく。羨道先端から約2mの間は、両側に巾70cm程度の平坦面が続き、これより前面では左側が急に拡幅されて巾約5mの前庭部が形成されている。

#### 遺物出土状況 (Fig. 33)

確実に原位置を保って床直上にあったのは、鉄銚のみである。銚を右袖石に向け、右壁から85cm離れ、これと平行に置かれていた。前壁左コーナー付近を中心として鉄器片が多数出土した。屍床前面およびこの近くの石壁沿いからは、勾玉・棗玉が検出され、接近して発見されたことから、そう大きく原位置を動いておらず一群のものと考えられる。空玉・ガラス丸玉・耳環・土師器は玄室内攪乱土中から、須恵器・青磁埴は墓道・前庭部堆積土中から検出された。

(石山)

#### 遺物

出土遺物は下記のとおりである。

##### (1) 装身具

勾玉	1
棗玉	5 + $\alpha$
丸玉	1
耳環	1

##### (2) 武器

鉄矛	1
鉄鏃	15 + $\alpha$

##### (3) 工具

刀子	2
----	---

##### (4) 馬具

帯先金具

## 兵庫鎖

## 杏葉

## (5) 土器

## 須恵器

杯身 7

高杯 14

甗 2

埴 1

提瓶 1

器台 4

装飾付壺 1

甕 10

## 土師器

高杯 1

杯 2

## 磁器

碗 3

弥生式土器 25

## (6) 用途不明品

銀製空玉 1

金銅製空玉 1

(川述)

勾玉 (Fig. 34-1, PL, 38-1) 硬玉製であるが質は劣る。全長28mm, 胴部径9mm。硬直化している。片側穿孔。

耳環 (Fig. 34-2, PL, 38-1) 中実の銅胎に金箔を置く。径は23×22mm。断面は3.5×4mm。

ガラス丸玉 (Fig. 34-3, PL, 38-1) 濃紺色を呈する。10×9mmの稍長円形で高さ7.5mm。

棗玉 (Fig. 34-4~7, PL, 38-1) 全て琥珀製で、図示した4個の他に1個体の小片と所属不明の細片若干がある。4は、最大で、長さ29mm, 最大径18mm。5は、長さ22mm, 最大径13mm。6・7の最大径は、14.5, 15mmである。いずれも両端が稍凹んでいる。

不明空玉 (Fig. 34-8・9, PL, 38-2) 8は銀製で、10×11mmの不整長円形で高さ12mm。相対する径1mmの孔を有し、稜を持つ。孔は外方へめくれており、半球の継合わせ以前に穿孔

されたことは明白であるが、接合部は明瞭でない。9はひとまわり大形の金銅製。径16mmの球形。径約2mmの一孔がある。球形である点、鈴の可能性もあるが、コの字形の切りこみ部分が判然としない。(石山)

### 鉄器

鉄鎌 (Fig. 35-1~42) 出土した鉄鎌は玄室床面の玄門寄り、それも中軸線よりも右壁よりに集中していた。完形品は一個体もないが、すべて尖根に属しており、鎌身の形態より2分類でき、篋被と茎の境の形態によりこれも2分類することができた。

#### 第I類 (Fig. 35-1~6)

片丸造鑿筋式に属する。全形を知るものはないが篋被の部分は断面長方形をなす。1と6は鎌身が特に短くやや三角形に近い。

#### 第II類 (Fig. 35-7~13)

片丸造柳葉式に属する。さらに7~10と11・12とに鎌身の長さにより二細分できる。篋被と茎の境の形態は28は棘篋被であり他は棘状突起をもたない。

刀子 (Fig. 35-43・44・45) 鋒と刃部を一部欠損する。身巾10mm, 身厚3mm, 茎は現存長47mm, 茎厚3mmで先細りとなる。

鉄矛 (Fig. 35-46) 玄室内のやや左壁寄りの中軸線上にそった床面より鋒先を墓道部に向けた状態で出土している。鋒の断面は一辺を12mmとする正三角形を呈している。袋部には切り込みはなく、また目釘穴もない。全長は275mmで、鋒部は148mm, 茎は127mmを測る。袋内には木柄の痕跡が遺存しているが、目釘穴は認められない。

### 馬具 (Fig. 36-1~16)

帯先金具 (Fig. 36-4~6) 玄室内攪乱土中より出た。鉄地金銅張りである。それぞれ大きさは異なるが両端部に鉤をうっている。

兵庫鎖 (Fig. 36-7~9) 残存部はわずかである。断面は円形と長方形とがある。

杏葉 (Fig. 36-10~16) 玄室内攪乱土中よりの出土である。鉄地金銅張で杏葉の縁をかたどるものである。ゆるやかなカーブをえがくのと湾曲の著しいものがあり、台板上でのとりつけられた位置がしのばれる。

用途不明 (Fig. 36-1~3) 全長30mm~35mm大のもので断面は隅丸方形を呈する。

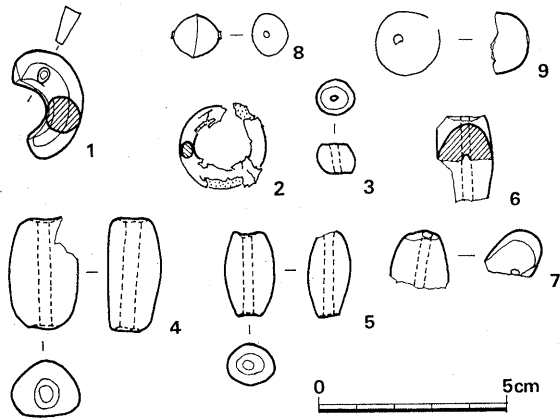


Fig. 34 原口1号墳出土装身具, 空玉実測図(縮尺1/2)

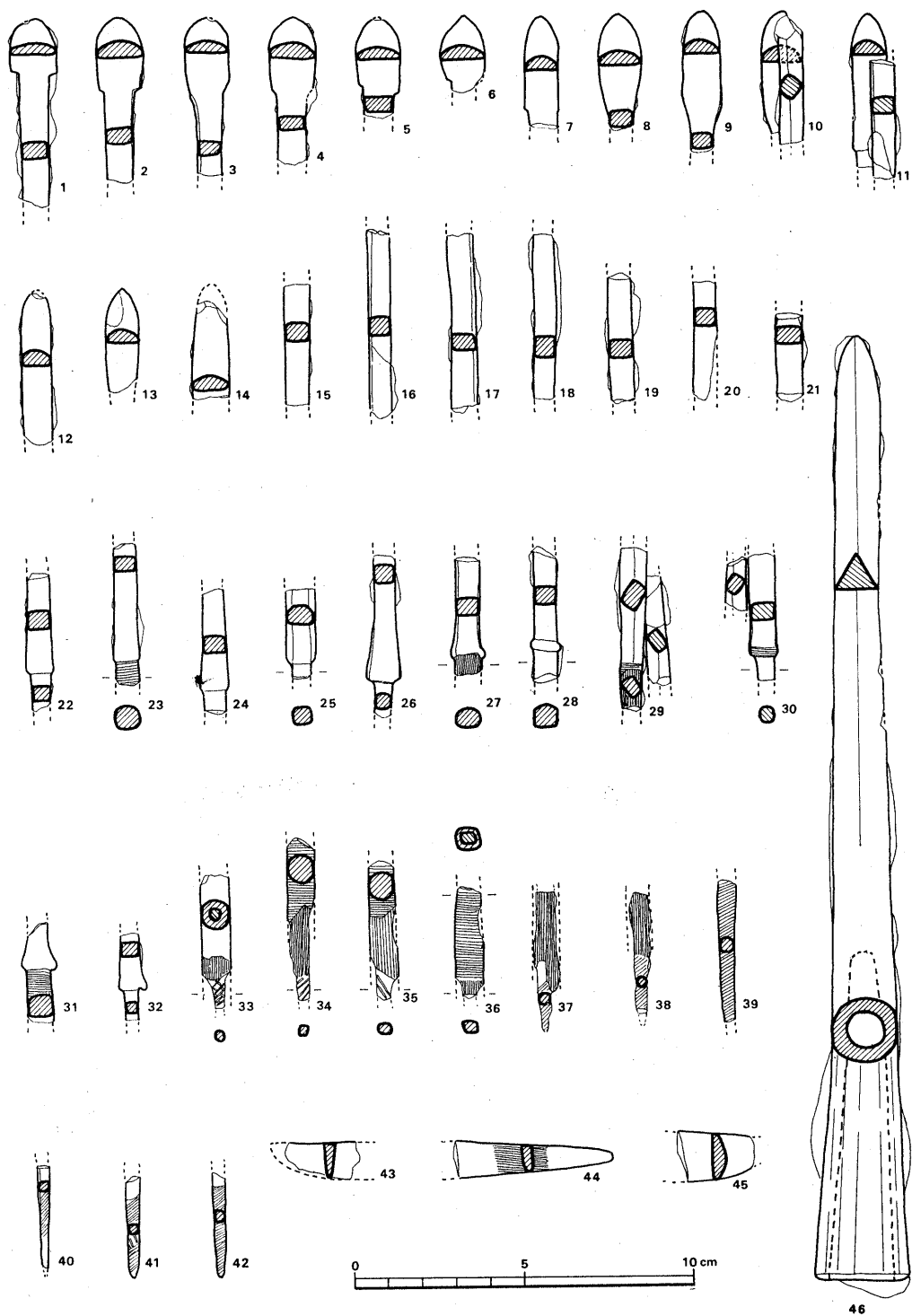


Fig. 35 原口1号出土鉄器実測図 (1) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

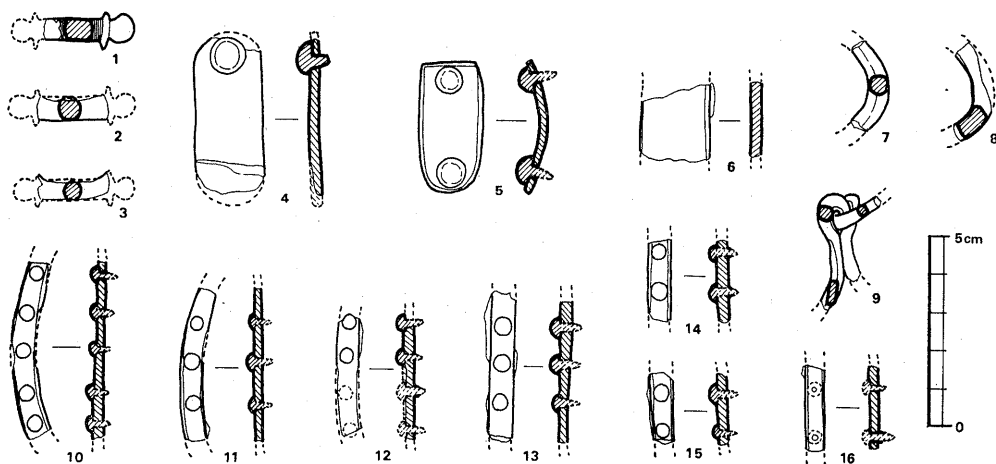


Fig. 36 原口1号墳出土鉄器実測図 (2) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

須恵器 (Fig. 37-41)

杯の身 (Fig. 37-1~7)

I a 類 (Fig. 37-1)

たちあがりは1.3 cmを測り、たちあがり基部より直線的に内傾する。体部は横ナデの凹凸が著しく器壁は厚いが底部に到って急激にその幅をせばめる。口径は13 cm, 蓋受け部径15.3 cmを測る。色調は灰色を呈している。

I b 類 (Fig. 37-2・3・7)

たちあがりはいづれも1.2 cmを測り、たちあがりとの境は大きくくぼみ、たちあがりはほぼ直立する形態を呈する。口径は12 cm~12.8 cm, 蓋受け部径13.8 cm~14.8 cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

I c 類 (Fig. 37-4)

たちあがり端部を欠損するが1.2 cm~1.3 cm程度であると思われる。器壁は一様に薄手造りである。底部はややとがり気味の丸底である。口径は12.3 cm, 蓋受け部径は14.1 cm, 器高は5.1 cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。

I d 類 (Fig. 37-5)

たちあがり端部を欠損するが、内湾気味に内傾する。器壁は一様に薄手造りである。口径は13 cm, 蓋受け部径は14.9 cmを測り、器高は4.2 cmと口径に比して低い。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

I e 類 (Fig. 37-6)

たちあがり端部を欠損している。内傾斜面との境には稜線が入るが、他の土器に比してたち

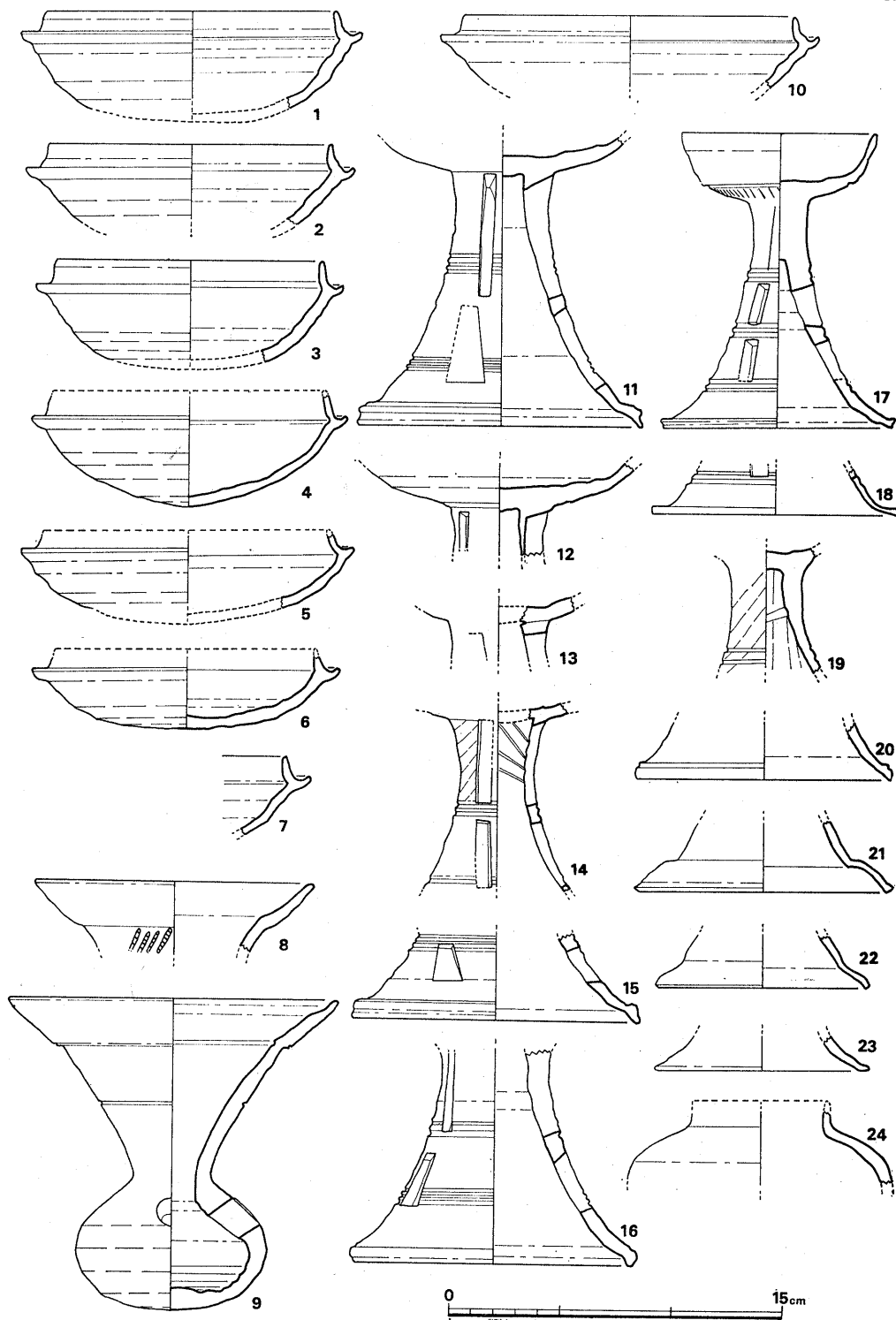


Fig. 37 原口1号墳出土須恵器実測図 1 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

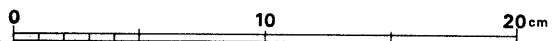
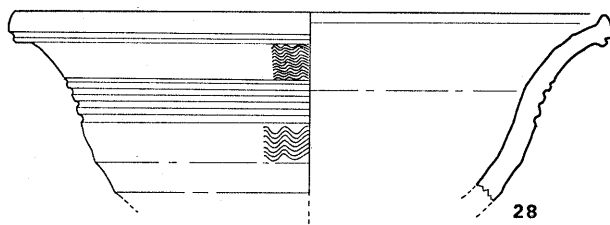
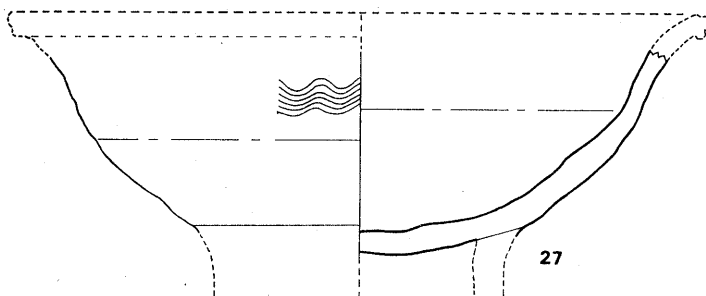
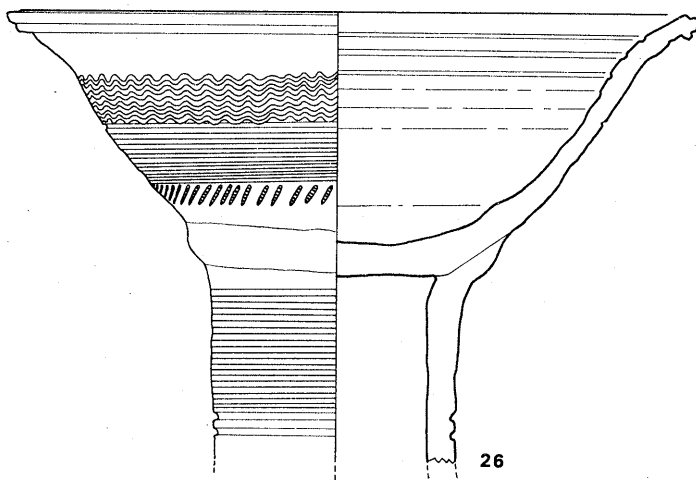
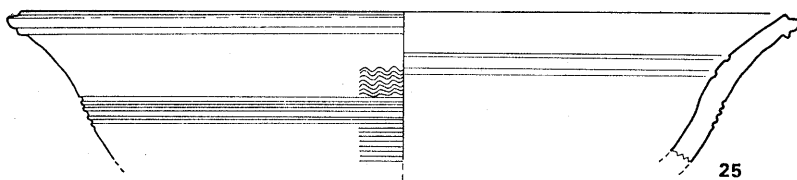


Fig. 38 原口1号墳出土須恵器実測図 2 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )



あがりと内傾斜面との差異は小さい。たちあがりは直立する形態を呈するものと思われる。口径は11.8cm、蓋受け部径は13.8cmを測り、器高は3.5cm～3.7cm程で、底部は平坦に近くなる。

#### 磗 (Fig. 37-8・9)

8は口頸部のみである。頸部と口縁部との境は段を有して外反する。頸部最上部には櫛状施文具による刺突文が入る。色調は暗灰赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に細砂粒を含む。口径は12.4cmを測る。

9は、口縁部と頸部の境に沈線を配している。従って、球状部からのびた頸部は外湾気味に口縁部へとつづく。球状部はその大半をへら削りしてあり、全面にわたって櫛状施文具によるカキ目が入る。底部内面は横ナデによる凹凸が著しい。色調は灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。口径14.7cm、器高13.8cm、球状部最大径8.5cmを測る。

#### 高杯

##### I類 (Fig. 37-10)

有蓋高杯の杯部である。杯の形態はI a類と類似する。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。口径は14.9cm、蓋受け部径17cm、たちあがり1.2cmを測る。

##### II a類 (Fig. 37-11)

杯上部を欠損するため有蓋、無蓋の区別はつかない。透孔は上段が長方形、下段が台形のもので各段に3箇所入る。脚部には3条の平行沈線が上下に入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。内外面ともヨコナデ整形を施しており、脚柱内面はヨコナデの凹凸が著しい。脚裾径は13.7cmを測る。

##### II b類 (Fig. 37-12)

杯部と脚柱上部をわずかに残すだけである。透孔は長方形であり貫通していない。脚柱と杯部の境には一条の沈線が入る。色調は暗灰色を呈しており焼成は良好である。なお透孔は3箇所にある。

##### II c類 (Fig. 37-14)

脚柱を残すのみである。器壁は一様に薄手造りである。透孔は長方形のものが二段、三箇所に入る。脚柱上部には内外面ともにしぼり痕が観察される。脚柱中央部に平行沈線が二条入る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。

15は、台形の透孔が3箇所に入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。脚裾径は12.8cmを測る。

16は長方形の透孔が2段、3箇所に入る。脚端部は丸くつくられている。沈線はいつでも透孔の下端部に入る。色調は暗灰色を呈しており焼成は良好である。

##### III a類 (Fig. 37-17)

無蓋高杯である。長方形を呈する透孔が2段、3箇所に入る。更にその上方には切れ目のみが入る。沈線はいつでも透孔下端部に2条の平行沈線を配している。杯部は口径8.8cmと小さい。杯底部と体部の境には1条の沈線が入り、さらに刺突文が入る。脚端部はわずかに外方へはね上る。色調は灰色を呈しており、内外面とも半分ほど自然釉が付着する。焼成は良好であり、胎土には多量の砂粒を含む。脚裾径は10.6cm、器高は13.1cmを測る。

### III b 類 (Fig. 37-18)

脚柱の下方を残すのみである。器壁は薄手造りであり、脚端は脚柱から折りまげられてつくられており、端面は直線的に造られる。透孔は長方形を呈するものがわずかにうかがわれる。色調は暗灰赤褐色を呈しており、焼成は良好である。脚裾径は11cmを測る。

### IV 類 (Fig. 37-19~23)

透孔を有しないものをIV類とした。

19は、脚柱部を残すのみである。内外面ともしぼり痕が観察できる。

20は脚下方を残すのみであり、ゆるやかに外反して脚裾となる。脚裾外面は丸くつくられ、沈線を配する。

21・22はともに脚裾を脚柱から段を有してつくられている。脚端部は直線的である。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。21は脚裾径13.6cm、22は9.6cmを測る。

23はゆるやかに外反して端部へと続く。脚端部底面は平坦である。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。脚裾径は9.6cmを測る。

### 埴 (Fig. 37-24)

口縁端部を欠損する。肩部以下には櫛状施文具によるカキ目が入る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。復元口径は6.2cm、残存部最大径は11.8cmを測る。

### 器台

鉢部と脚部を別々に説明していく。

### 鉢部 (Fig. 38-25~28)

#### I a 類 (Fig. 38-25~27)

3つのうちで一番残りのよい26を中心に説明する。口縁端部は外方へつき出し上面と側面に沈線が入る。口縁部は体部より外反気味にのびる。内面の体部と口縁部の境部には沈線が入り25は2条、26は3条である。外面の装飾には沈線をはさんで上方には櫛状施文具による波状文を、下方には平行状のカキ目を施す。26はさらに刺突文が入る。27は波状文の下方には叩きをナデで消しているが、若干残る。その下方には叩きそのまま残る。従ってここではカキ目は施されていない。鉢部と脚柱部の接合部には粘土のもりあげが明瞭である。25は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。復元口径は31.4cmを測る。26は外面は灰黒色を、内面は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径は

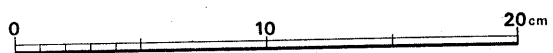
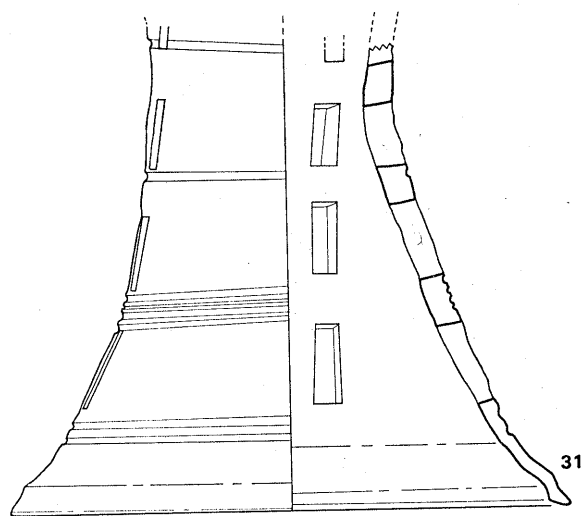
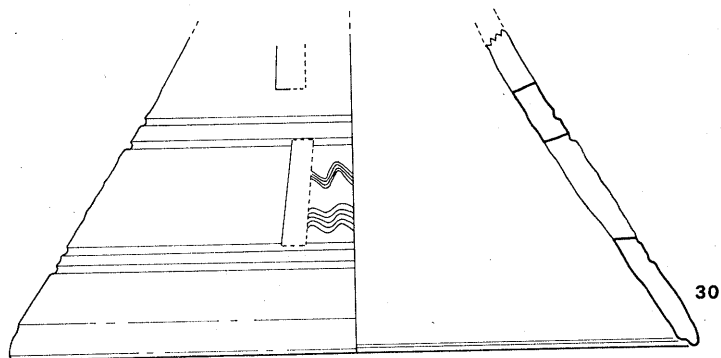
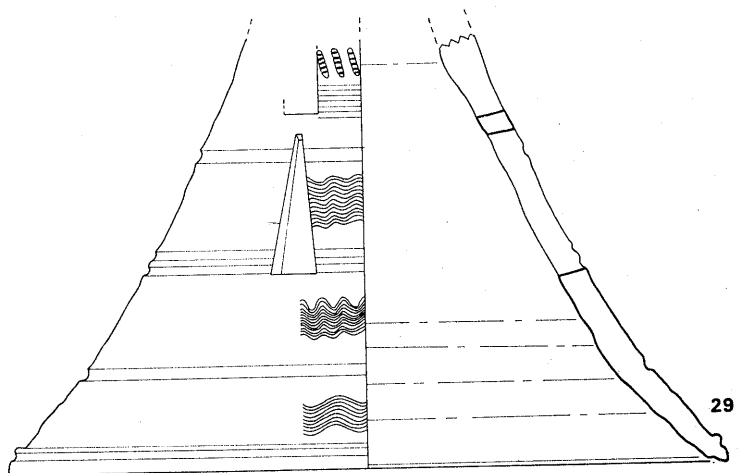


Fig. 39 原口1号墳出土須恵器実測図 3 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

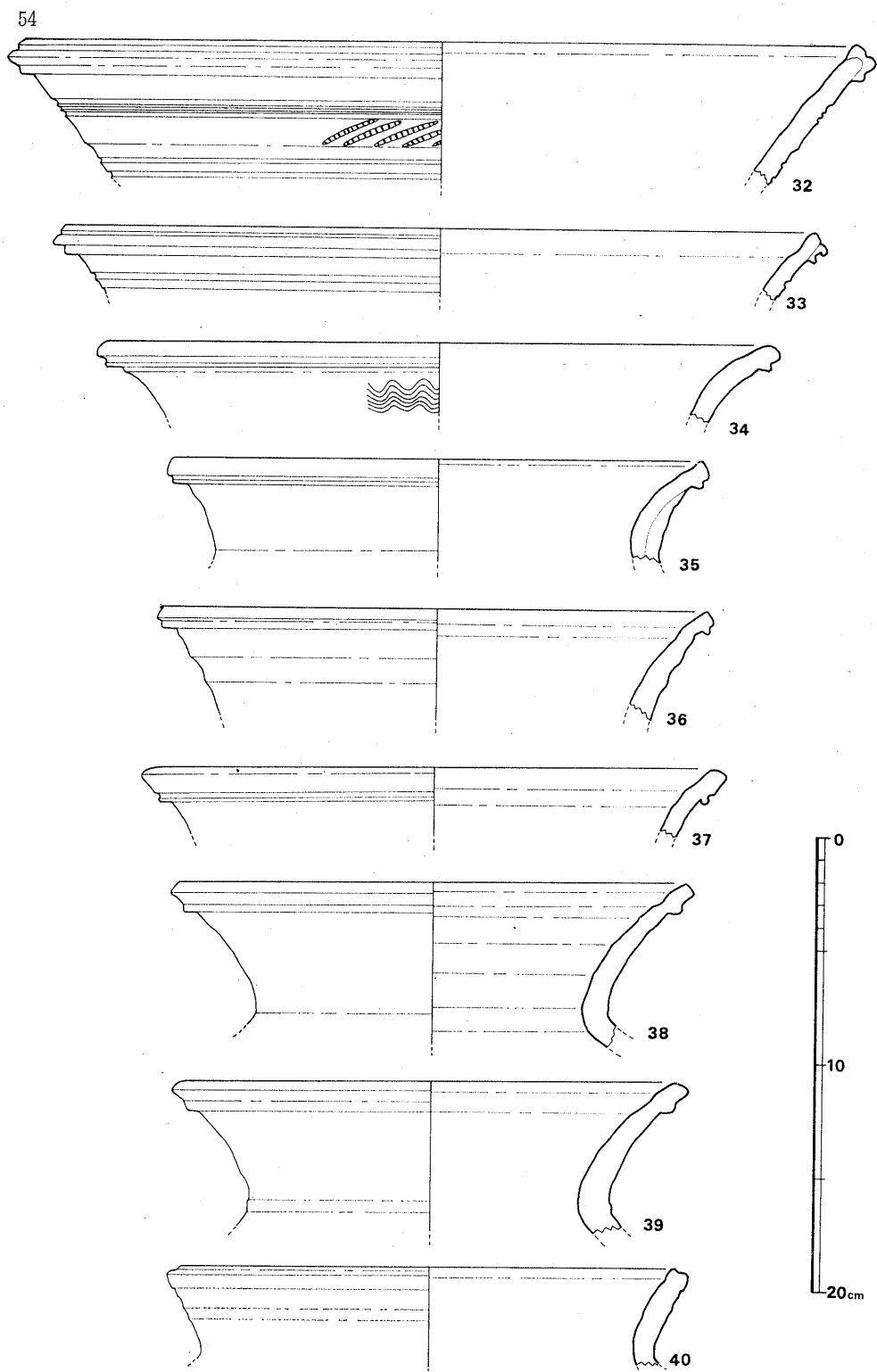


Fig. 40 原口1号墳出土須恵器実測図 4 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

27.6cmを測る。27は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。

#### I b 類 (Fig. 38—28)

I a 類に比して小型となる。口縁部は I a 類に比して外湾の度合いが大きい。口縁端部は下方にのみ沈線が入る。体部と口縁部の境部には平行沈線が 4 条入り、この沈線より上方は細目の波状文が入り、下方は太目の波状文が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径は 23.8cm を測る。

#### 器台の脚部 (Fig. 39—29~31)

29は脚柱中央部をわずかに内湾させる。脚端部外面には一条の凹線が入り、脚端部内側には段がつく。透孔は長方形と三角形のもので 2 段、4 箇所にある。長方形透孔部には刺突文が、下段の三角形透孔部には櫛状器具による波状文が、沈線をはさんで下方には細目の波状文が、更に沈線をはさんで最下方には、ゆるやかな波状文が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。脚裾径は 28.5cm を測る。

30は脚柱の形態は一直線状に脚端部へと続く。脚端部の内面には段を有する。透孔は長方形で 2 段まで確認できたが、何箇所に存在するかは不明である。下段の透孔部に波状文が入るが、他の土器と異なるのは一透孔周辺部に幅の異なる二種類の波状文が入ることである。更に上方の透孔部には、叩目が残る。調整は横ナデ調整であり、内面には横ナデの圧痕が著しい。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでおり、器表はざらつく。復元口径は 27.2cm を測る。

31は細味の脚部である。29・30は器壁が一様であったが、31は最下段の透孔以下、脚端部へと急速にその幅をせばめる。脚端部には屈曲面を有し、脚裾底面は平坦面を有する。透孔はすべて長方形で、4 段、4 箇所に存在する。表面の装飾には波状文は用いられず、沈線のみである。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。脚裾径は 22.2cm を測る。

#### 甕 (Fig. 40—32・33)

##### a 類 (Fig. 40—32)

口頸部を残すのみである。頸部は直線的のびて口縁部となる。口縁端部は方形につくられ上面と側面に沈線が入る。頸部には 3 箇所沈線が入り沈線間には櫛状器具による刺突文が入る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。復元口径は 38.4cm を測る。

##### b 類 (Fig. 40—33)

口縁部を残存するのみである。頸部と口縁部の境は凹湾する。口縁部の形態は a 類と同様、方型を呈しており、上部と側部に沈線を有する。色調は暗灰色を呈しており、内面は灰色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。復元口径は 34.3cm を測る。

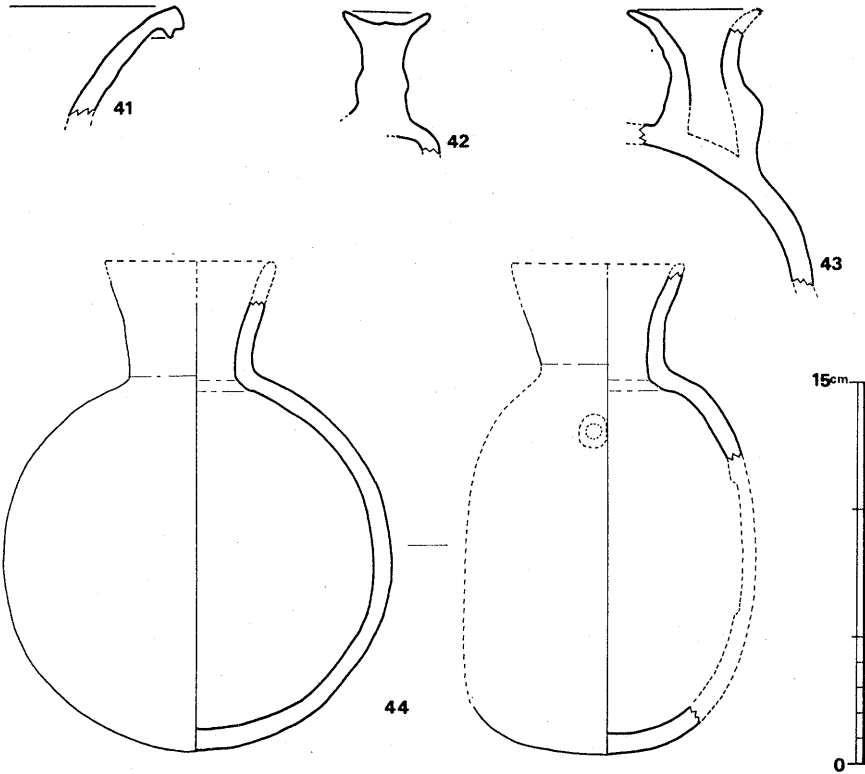


Fig. 41 原口1号墳出土須恵器実測図 5 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

壺 (Fig. 40-34~40)

a類 (Fig. 40-34・35)

口頸部のみを残存する。頸部は著しく外湾して口縁端部へと続く。口縁端部は丸味をもってつくられており、側面下方面に一条の沈線を有する。色調は暗灰色ないし灰黒色を呈しておる。胎土には多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

b類 (Fig. 40-36・41)

a類より頸部がやや長くなり、口縁端面は平坦面を有する。端部側面には一条の沈線が入る。色調は灰色を呈している。胎土には多量の砂粒を含み、焼成はやや不良である。復元口径は24.7cmを測る。

c類 (Fig. 40-37)

口縁部は長方形を呈しており、側面下端部に沈線が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。復元口径は25.9cmを測る。

## d 類 (Fig. 40-38・39)

頸部は長くなり、やや外湾気味に口縁部へと続く。口縁部は長方形に近い型を呈し、外面下方には三角形の突帯が付く。色調は暗灰色ないし灰黒色を呈する。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好である。38は横ナデ調整による凹凸が著しい。復元口径は22.8cm～23.2cmを測る。

## e 類 (Fig. 40-40)

口縁部は頸部がのびただけで特につくり出されない。口縁端部上面には凹線が入るが方型に近い形状を呈する。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。復元口径は23cmを測る。

## 装飾付壺 (Fig. 41-42・43)

42は暗灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。上半部は横ナデ調整し、下半部はナデ調整を行う。

43は装飾部と壺部の一部を残す。壺部は内面は同心円叩き文が外面には櫛状施文具によるカキ目が入る。調整は42と同様上半部は横ナデ調整を下半部はナデ調整を施す。これは装飾部を接合するため、その下方はナデ調整になるのであろう。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

## 提瓶 (Fig. 41-44)

口縁端部を欠損する。球状部は最大幅15.4cmを測り、正円に近い形態を有する。背面残存部より推定すると平坦面を有するのがわかる。側面の幅は約11.5cm程であろうと推定される。器壁は一律な厚さを有している。肩部にはつまみがついていた痕跡が残る。球状部には同心円刷毛目が入る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

## 土師器

## 高杯 (Fig. 42-45)

脚柱部を残存するのみである。外面はヘラ削りを施しており、杯部内面はヘラ研磨している。色調は赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

## 杯 (Fig. 42-46・47)

46は糸切り底である。器壁は一律に厚く、口縁部は丸くつくられる。内面底部はナデ調整であり、指頭圧痕が著しい。口径は15cm、器高は2.7cmを測る。色調は赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。

47は板目が残る。体部内面は横ナデの際の凹凸が著しく稜線がつく。口径は12.1cm、器高は2.2cmを測る。底部外辺には一条の沈線が入る。色調は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。

## 磁器 (Fig. 42-48～50)

## 青磁 (Fig. 42-48・50)

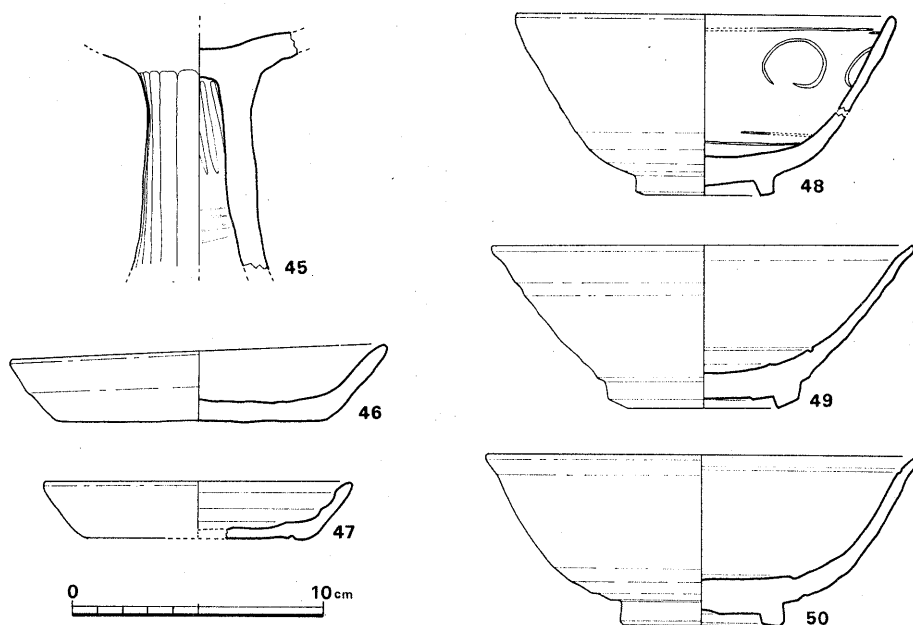


Fig. 42 原口1号墳出土土師器，礫器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

48は内面にヘラ描き文様が入る。底部はヘラ切りにより作り出された削り出し高台である。口縁部はやや肥厚しており端部は丸味をもつ。色調は深緑色を呈する。復元口径は15.2cm，器高は7cm，底部径は5.6cmを測る碗である。

50は完形品の碗である。底部はヘラ切りにより作り出された削り出し高台である。口縁部はわずかに外反し，内面の境部には一条の沈線が入る。なおヘラ描き文様は入らない。色調は暗緑色を呈する。口径は17.2cm，器高は6.6cm，底径は6.5cmを測る。

49は礫器である。体部，口縁部と底部内面に灰白色釉が施されている。底部はヘラ切りにより作り出された削り出し高台であり，底部内側一端が地につくだけであり，切りあげられている。底部に比して体部，口縁部は急速にその器壁を減じており，口縁部はわずかに外反する。端部は平坦面を有する。内面の体部と底部の境部には一条の沈線が入る。口径は16.7cm，器高は6.4cm，底径は7.5cmを測る。

#### 包含層出土の土器

甕 (Fig. 43—51~62, 66~75)

51は口縁部を一部残すのみである。口縁部上端面は若干の丸味をもち外方へのびる。色調は黄褐色を呈しており，胎土には多量の砂粒を含む。復元口径は30.8cmである。52は口縁部上端面はわずかにくぼませて，ほぼ水平に近く3.5cm程のびる。口唇部は平坦面をもつ。口縁部直



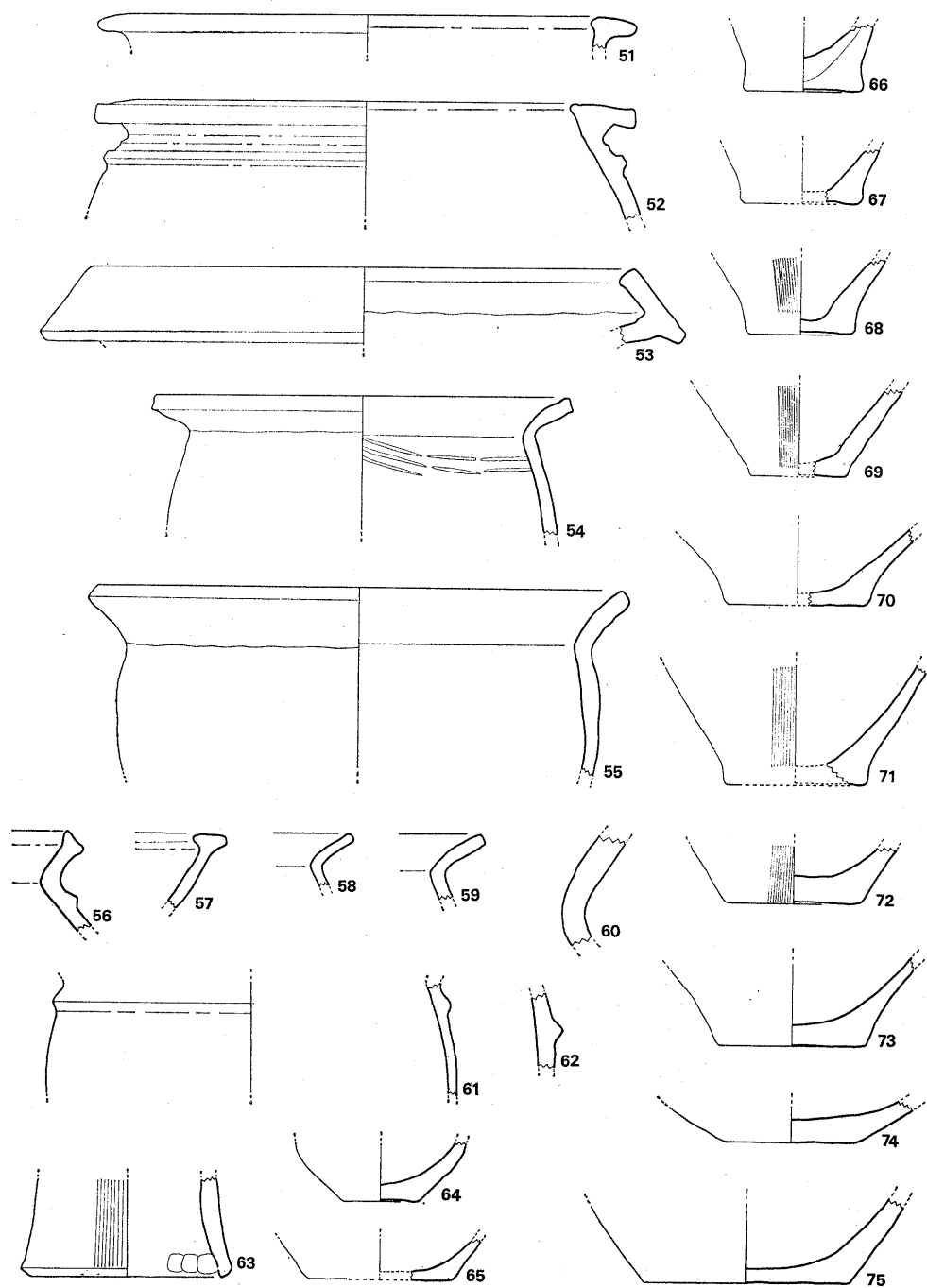


Fig. 43 原口1号墳出土弥生式土器实测图(縮尺 $\frac{1}{3}$ )

下には台形状の貼り付突帯がつく。色調は灰黄褐色を呈しており焼成は良好である。胎土にあまり大粒ではないが砂粒を含む。復元口径は31cmを測る。弥生中期後半に比定される。

54~56・58・59は「く」の字口縁である。54は頸部と肩部の接合部付近は指頭圧痕が観察される。内外面ともナデ調整を行う。色調は褐色を呈している。胎土には多量の砂粒を含んでおり焼成は良好である。口径は24cmを測る。25は24よりも大形であり頸部下の接合部には指頭圧痕が観察される。色調は褐色を呈している。胎土には多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。口径は30cmを測る。56は口縁部直下に三角形の貼り付け突帯を有する。口縁端部は上方にはね上り、口唇部は凹湾する。内面は磨滅して不明であるが、外面はナデ調整を行う。色調は黄褐色を呈する。胎土には細粒を含み焼成は良好である。58・59は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。61は口縁部直下より胴部の一部を残存する。口縁直下に三角形の貼り付突帯が付く。色調は外面は淡赤褐色を内面は黄褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり焼成は良好である。胴部復元最大径は23.6cmを測る。以上の土器は後期初頭頃に比定される。

#### 底部 (Fig. 43-64~75)

64は鉢の底部と思われる。若干上げ底気味につくられている。色調は茶褐色を呈しており焼成は良好である。胎土にはやや大き目の砂粒を多量に含む。底部径4.3cmを測る。

66は厚手の底部であり中期中頃に比定される。67・68・71・72は若干上げ底になる。他は平底である。

#### 器台 (Fig. 43-63)

下部を残すのみである。下部径12cmを測る。外面は粗い刷毛目が入り、内面はナデ調整を行う。下端部内面には指頭圧痕が残存する。色調は淡茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。後期初頭に比定されよう。

本墳より出土した遺物は石室内と石室埋土中それに石室前面の墳丘中より出土している。まず石室内からは原位置を保つものは鉄矛と若干の鉄鏃であり、石室埋土中よりは、金環・玉類・馬具類・鉄鏃・刀子片などであり、石室前面の墳丘中からは須恵器（器台を含む）土師器、さらには当古墳への追葬とは関係は全くないが青磁の壺と磁器の壺が出土しており、また墳丘盛り土中と墳丘裾部付近の包含層より弥生式土器片が出土した。特に墳丘内よりの弥生式土器片の出土は墳丘築造の際に弥生時代の包含層の土を運びこんだためである。出土した須恵器より年代を考えると、大型器台と高杯の一部はⅢA期のものであり、杯身・甌・高杯の一部などはⅢB期に比定され、それより以降と考えられる積極的な遺物はないことより考えて、当古墳は六世紀中葉頃に築造され、六世紀後半中頃までは少くとも使用されていたと思われる。

器台は石室前面の埋土中より鉢部が4個、脚部が3個、バラバラの状態出土しており、いわゆる完形品は無かったが、少くとも4個体は存在していた。鉢部と脚部はどれとどれが同一

個体をなすのか明瞭ではないが、器形・焼成・胎土などにより判断すると、鉢部26と脚部29、鉢部27と脚部30、鉢部28と脚部31の可能性がある。さらに器台の場合はその特性から埋納時には器台のみというよりも器台に壺をのせた状態での埋納が考えられる。当古墳の場合は埋納当時の状態を保っていなかったが、岡山県津山市中宮1号墳の横穴式石室内からは、器台に壺をのせ、さらにその上に2個の壺をのせた状態で発見されており、さらには大阪府信太千塚78号墳出土の須恵器は、器台の上に壺をのせるという別々2個体の組みあわせでなく、製作当初より器台に壺をのせた状態で一個の土器としてつくられている。また大和二塚古墳では造り出し部石室内からは器台5個と大型壺が5個出土しており、原位置は保ってはいなかったがセット的に使われたことが述べられている。このような事から考えると当古墳埋納の器台も壺とのセット関係が必要になってくるが、出土した壺はいずれも口頸部を残存するのみであるため、器台と壺とのセット関係は確かめられなかった。出土した須恵器総数41個体分のうち器台4個体、高杯13個体であり、高杯の出土数が多いのが注目される。もちろん、これらがすべて同一埋納とは思えないが、いずれにしても出土須恵器総数41個体のうち、器台・高杯は17個体で全体の $\frac{1}{2}$ 弱をしめる事は当古墳の一つの特徴である。

#### 参 考 文 献

- 「大和二塚古墳」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告21 昭37  
「日本の考古学、古墳時代下」 河出書房 近藤義郎、藤沢長治  
「陶邑古窯址群工」 1966 平安学園考古学クラブ  
「塚ノ谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告Ⅰ 八女古窯跡群調査団  
「中尾谷窯跡群」 " II "  
「管の谷窯跡群」 " III "  
「立山山窯跡群」 " IV "  
「野添大浦窯跡群」 福岡県教育委員会 昭45  
「鹿部山遺跡」 日本住宅公団 1973

(川述)

#### 葬 法

本石室への埋葬遺体は、屍床内、頭部を右前壁近くにおき右側壁と平行して1体、屍床前面に頭部を右側壁近くに置いた1体の計3体は確実である。左側壁沿いにも葬られた可能性は強く、従って4体以上の埋葬が考えられる。(石山)

## 7 結 語

### 川原庵山6・7・8号墳，下別当1号墳について

川原庵山古墳群では、占地・墳丘規模からみて、1・6号両墳と他墳との間に、等質ではないものが存在することは明らかである。しかし、墳形・内部主体の構造規模・副葬品においては、大差なく、盟主墳と陪冢という程の厳然たる格差は認められない。従って、本群を築造した集団が、該平野部全体を統括していたとは考えにくい。構造上でも、本来竪穴式石室によって覆われるべき木棺<sup>①</sup>が、粘土で被覆されることもなく、墳底直上に組み立てられていることは、単に主体の構造上の推移に帰因するのではなく、なんらかの規制を想定すべきものと思われる<sup>②</sup>。現時点では、至近には該期の方後円墳は認められないが、古賀町の北方、宗像郡津屋崎町には、奴山古墳群を中心として顕著な前方後円墳の集中が認められて、宗像君の奥津城に想定されており、また北接する宗像郡宗像町東郷には前期古墳と推定される高塚前方後円墳が存在しており<sup>③</sup>、これらの地域に中枢が所在したことは明らかである。

本群は、該平野では最も早く出現する群集墳であるが、最近、県内各地でも群集墳の形成が5世紀後半代まで遡ることが明らかとなりつつある。しかも、これらの古墳群は、殆どが同規模墳から構成されることが特徴的である。京都郡勝山町所在の箕田中原古墳群<sup>④</sup>、八女郡広川町所在の平原古墳群<sup>⑤</sup>、福岡市東区所在の飛山古墳群等<sup>⑥</sup>がそれである。これらは、いずれも10基未満の小規模群集墳で、中原古墳群は、径13～15mの計8基、平原古墳群は径5～8mの計6基、飛山古墳群は計3基の円墳によってそれぞれ構成されている。飛山古墳群で竪穴式石室1基を含む他は全て竪穴系横口式石室を内部主体とする。ただし、横口を設けながらも、追葬は行なわれないものが多く、主体構造は異なるが川原庵山古墳群と共通する。墳丘規模・副葬品において、他を凌駕する程の相違は認められず、等質の様相を帯びることは明白であり、短期間に营造が終了していることが注意されるのである。

平原古墳群は、筑紫国造家の兆域である長峰丘陵と谷一つを隔てた丘陵斜面に位置しており、被葬者達が同家の経済的・軍事的基盤の一翼を荷いかつその支配下にあったことはほぼ確実である。従って、群内部に大形墳を含まぬ等質的構成は、同家との関わり方の反映とみてよい。中原古墳群は、京都平野の西縁の丘陵上に営なまれているが、至近には同期の方後円墳は知られていない。先行する円墳で、豊富な副葬品を有するものとしては、隣接する行橋市延永に琵琶隈古墳<sup>⑦</sup>があるが、京都平野全体の盟主的存在ではない。周防灘沿岸の同郡荊田町与原所在の御所山古墳<sup>⑧</sup>は、現在も水をたたえた周濠を有する該期最大の前方後円墳で、これに後続

して北方の同町尾倉に番塚前方後円墳<sup>⑨</sup>が営なまれている。従って、これら両墳の影響下にあったとも思われる。ただし、御所山古墳は、石障を有し、この内部を仕切石によって3区の屍床に分ける古式横穴式石室を主体とし、本平野では特異な内容をもつ。かつ、番塚以後、前方後円墳は、主として北方の北九州市小倉区曾根方面と、西方の勝山町黒田、箕田方面に営造されるようになり、移動・消長が激しく、筑紫国造家のように安定した盟主的存在を想定することは困難である。

これらの等質的様相を帯びる群集墳に対して、川原庵山古墳群ではやや不均等な構成がみられることは既述したとおりである。該期に属し、やはり堅穴系横口式石室を内部主体としながらも陪冢としてのあり方を示すものに、行橋市所在の稲童21号墳<sup>⑩</sup>がある。御所山古墳と同様に周防灘に面して営なまれた石並古墳<sup>⑪</sup>（稲童20号墳）の前面に他の3基の円墳とともに展開して、陪冢群を構成している。この帆立貝式古墳である石並古墳もまた、京都平野の一角を統括するに過ぎないとみられる。

このように、5世紀後半の初期群集墳の構成は一様ではなく、これは、これら被葬者と各地域の盟主的存在との関わり方が多様であることを反映したものであろう。

川原庵山古墳群では、横穴式石室を構築することなしに、その造営を終了するが、留意すべきは下別当1号墳である。石室構造は、堅穴式石室の可能性もあるが、巾は寧ろ堅穴系横口式石室のそれに近く、須恵器を伴わず、鉄鏃の形態、滑石製白玉の存在からみて、川原庵山6・7・8号墳より少しく後出し、鹿部山の浦口3号墳<sup>⑫</sup>よりも稍先行すると思われる。なお、本墳に南接する林の中には、低いたかまりがいくつか認められ、数基の円墳の存在が知られる。また、川原庵山古墳群を西端として、これから約350m東に下別当1号墳、これからさらに約200m東に横穴式石室を主体とする原口1号墳が位置し、平野に面した先端から谷奥へと時期の降るにつれて築造場所が移動し、先行する古墳が破壊されていない点と合わせて、興味深い。

#### 道田1号墳と原口1号墳について

道田1号墳と原口1号墳とは、前者は単室、後者は複室と違いはあるが、基本的には同系統の石室構造に属する。3mにも達する深い墓壙は、高い天井と高い墳丘と省力化との三点を勘案してのことであろう。極めて狭長な切通状の墓道は、墓壙掘削時ではなく、石室完成後に設けられ、排水溝としての機能をも兼ねたと思われる。墓壙掘削時の土砂の搬出、石室構築時の石材の搬入は、墓道両端の一段高い面が使用されたのであろう。<sup>⑬</sup>

原口1号墳の合掌式とでもいうべき極めて持ち送りの強い側壁構成は、近傍では、宗像郡宗像町田熊所在のスペットウ古墳<sup>⑭</sup>、古賀町旦ノ原所在大塚古墳にも認められる。前者は単室で、持ち送りは本墳程ではなく、最上段で約0.7mの間隙があり、前壁もまた持ち送りの強い点で本墳とは異なる。天井石は残存していないが、鹿部山の唐ヶ坪6号墳も、側壁の持ち送りが急で、道

部の構造も本墳に極めて近い。

原口1号墳の奥壁に平行して設けられた屍床は、佐賀・熊本県では幾多の類例があるが、本県では異例に属し、京都郡苅田町御所山古墳<sup>16</sup>、筑紫野市埴安古墳<sup>17</sup>、筑紫野市埴安古墳<sup>18</sup>、久留米市日輪寺古墳<sup>19</sup>、甘木市茶臼塚古墳<sup>20</sup>、八女郡広川町山の前1号墳<sup>21</sup>、八女市真浄寺2号墳例が挙げられるに過ぎない。石屋形を有する例を含めても極めて僅かであり、福岡市剣塚<sup>22</sup>、八女郡広川町弘化谷古墳<sup>23</sup>、嘉穂郡桂川町王塚古墳<sup>24</sup>の3例を加えるに過ぎない。

両墳とも単独墳ではなく、数基からなる群を形成していたとみられるが、既に殆どが消滅しており、群内部での位置づけは不可能である。ただ両者とも、鹿部山の唐ヶ坪・浦口両古墳群のいずれの石室の規模を上まわり、かつ唐ヶ坪6号墳石室が、二墳と類似した石室構造を有することは、彼我の関係を示唆する所が大きい。

道田1号墳と原口1号墳両墳墓壙壁に認められた工具痕について付言しておきたい。道田1号墳では、Ⅰ長方形で平面、Ⅱ先端がU字形で曲面の2種の使用痕が認められた。原口1号墳でも両者が認められるが、Ⅱのカーブが道田1号墳例とは逆の痕跡が、壁最下部に認められた。Ⅱについては現在のスコップ状の曲面を有する器具が想定され、Ⅰについては鍬が想定される。これに関して通常鉄斧とされている鉄器について、これを「手斧鍬<sup>25</sup>」とし、鍬として使用されたものであることが、松本正信、加藤史郎氏によって説かれている。Ⅰについては、横穴式石室に伴出する鉄器でかかる使用痕をとどめる可能性のあるものは、鉄斧のみである。従って、鉄斧＝手斧鍬説は使用痕によっても実証されたといえる。また形態上でも8号墳出土鉄斧のうちの2は断面が二等辺三角形ではなく袋部合せ目寄に刃部が偏している点は、斧とするよりは鍬とする方が妥当性は高いと思われる。刃部の片減りについては、これを斧としての使用によると考えるむきもあろうが、鍬においてもこれはしばしば経験することである。ただ鉄斧の全てが鍬として使用されたのではなく、例えば真直な柄を挿入して現在の山芋堀用の器具的使用法も考えられないではないが、これは小面積の掘削に用途が限定される点弱いといえる。Ⅱについてはこれまでも注意されており、福岡市高崎1号墳<sup>26</sup>、宗像郡福岡町長尾古墳<sup>27</sup>では、巾20cmの使用痕が確認されている。スコップ状の鉄器というとU字形鋤先を想起するのであるが、側面に余り注意が払われないせいもあろうが、まず一般に直線的であり、刃部に曲面をもつ例を聞かないが、原口1号墳のⅡの使用痕は曲面を有する鋤先を使用したとしか考えられない。検討すべき余地は多いがここでは、問題の所在を指摘するにとどめたい。

論すべき点は多々あるが、昭和49年度以降に近接する第5～8地点、追加6・7地点の、円墳・住居址群の調査が予定されているので、この調査の結果を待ち、あらためて言及し、責を果したく思う。

- 註 ① 粕屋郡宇美町所在の七夕池古墳では、狭小な竪穴式石室内に木棺が納められており、豊富な副葬品を有する。1973年11月から74年1月までの間に、福岡県教育委員会にて調査。
- ② 小野山節氏は、5世紀に河内王朝による墳形・規模に対する規制が行なわれたことを説かれている「5世紀における古墳の規制」〈考古学研究16-3〉1970年1月。ここでいう規制は、このような畿内中央政権による規制の意味ではない。山中英彦氏は、筑紫国造による規制を考えておられるが、こうした地域社会でもその盟主的存在が規制を行なった可能性は十分にある。
- ③ 春成秀爾「東郷・高塚古墳」『東郷遺跡群』所収1967年3月
- ④ 定村貴二「箕田中原古墳調査報告」〈美夜古文化〉
- ⑤ 石山勲・川述昭人「平原古墳群の調査」『九州縦貫道関係文化財調査報告Ⅲ』所収1972年1月
- ⑥ 島津義昭・塩屋勝利「飛山古墳群の調査」『和白遺跡群発掘調査報告書』〈福岡市埋蔵文化財調査報告書18〉1972年10月
- ⑦ 鏡山猛「福岡県行橋市琵琶隈古墳」〈日本考古学年報8〉
- ⑧ 『京都郡誌』に、坪井正五郎博士による同墳の調査報告会の要旨が載せられている。
- ⑨ 渡辺正気・松岡 史「福岡県京都郡番塚前方後円墳」〈日本考古学協会第24回総会研究発表要旨〉1959年10月
- ⑩ 大川清・山中英彦『福岡県行橋市稲童古墳群第2次調査抄報』1965年3月
- ⑪ 註⑩。小田富士雄『行橋市石並前方後円墳』〈美夜古文化18〉1967年12月
- ⑫ 木村幾多郎・東中川忠美「浦口3号墳の調査」渡部明夫「浦口古墳群について」『鹿部山遺跡』所収。ただし、前者は「6世紀前半」、後者は「I期後半まで遡りうるもの（須恵器型式一筆者註）」と同一墳の年代比定に食い違いがある。ここでは総括者の「5世紀後半代」を一応とっておくこととした。
- ⑬ 「深さ僅か1m内外という墓壙の規模やきわめて短小な墓道しかもたない古墳例から考えると墓道が果して墓壙を掘る際に土砂搬出の通路として用いられたどうかははなはだ疑しい」とされるむきもある。渡部明夫「唐ヶ坪古墳群について」『鹿部山遺跡』所収。筆者はかつて「土砂の運搬路あるいは石材搬入路としての必要上設定された」と述べたことがある。「鈴ヶ山1号墳」註⑤所収。全ての墓道がこうした機能を兼備すると強弁しているのではない。墓壙の深さと体積が搬出入路の必要性の有無を決定するのは当然のことである。
- ⑭ 波多野鏡三「スベツトウ古墳」『東郷遺跡群』所収
- ⑮ 中間研志「唐ヶ坪6号墳」『鹿部山遺跡』所収
- ⑯ 梅原末治「筑後国久留米市日輪寺古墳」〈京都帝国大学文科大学考古学研究報告1〉
- ⑰ 坂本真鈴「茶臼塚古墳」『埋もれた朝倉文化』所収1969年11月
- ⑱ 松本肇・森田勉・西谷正・川述昭人「山の前1号墳」註⑤文献所収
- ⑲ 岩崎光「八女地方の古墳終末期と副葬」〈九州考古学10〉1960年
- ⑳ 渡辺正気「弘化谷古墳」〈日本歴史〉
- ㉑ 梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』〈京都帝国大学文科大学考古学研究報告

15> 1930年

- ⑳ この他、鞍手郡若宮町竹原古墳玄室には、石棚がある。森貞次郎『竹原古墳』1968年3月
- ㉑ 「手斧鋤考」〈考古学研究15-1〉1968年3月。『天坊山古墳』〈加古川市文化財調査報告5〉1970年6月
- ㉒ 浜田信也「高崎2号墳」『今宿バイパス関係文化財調査報告1』1970年3月
- ㉓ 松岡史・池田善文「長尾古墳」『福間バイパス関係文化財調査報告』1973年3月

(石山)



## Ⅲ 塔ノ原遺跡

筑紫野市所在，住居址・甕棺墓・土塚墓の調査

# 本文目次

1. 位置と環境	67
2. 調査の経過	70
3. 調査の内容	75
a 南半水田面の調査	75
b 北半丘陵部の調査	76
(1) 縄文時代の遺物	79
(2) 弥生時代の遺構と遺物	82
(3) 奈良時代の遺構と遺物	89
(4) 中世の遺構と遺物	106
4. 小結	109

## 目 次

		本文対照頁
PL. 1	(1) 調査前の塔ノ原遺跡（北より）	67
	(2) 調査前の塔ノ原遺跡（南より）	67
PL. 2	(1) 南半調査区全景（北より）	75
	(2) 南半調査区全景（南より）	75
PL. 3	(1) 南半トレンチ土層	75
	(2) 第Vトレンチ全景（南より）	76
PL. 4	(1) 土壙墓及び甕棺墓群全景（南より）	82
	(2) 土壙墓及び甕棺墓群全景（北より）	82
PL. 5	(1) 第1号土壙墓（東より）	82
	(2) 第2号土壙墓（西より）	82
PL. 6	(1) 第3号土壙墓（西より）	82
	(2) 第4号土壙墓（北より）	82
PL. 7	(1) 第4号土壙墓内副葬壺出土状況（西より）	82
	(2) 第6～9号甕棺墓出土状況（東より）	83
PL. 8	(1) 第1号甕棺墓（東より）	84
	(2) 第2号甕棺墓（東より）	84
PL. 9	(1) 第3号甕棺墓（東より）	85
	(2) 第4号甕棺墓（西より）	85
PL. 10	(1) 第5号甕棺墓（北より）	85
	(2) 第6号甕棺墓（東より）	85
PL. 11	(1) 第7号甕棺墓（東より）	86
	(2) 第8号甕棺墓（東より）	86
PL. 12	(1) 第9号甕棺墓（東より）	86
	(2) 1～7区全景写真（最下層遺構，北より）	89
PL. 13	(1) WA～C-1～7区全景（上層遺構面，北より）	89
	(2) WA～C-8～12区全景（北より）	89
PL. 14	(1) 第1号住居址全景（西より）	90
	(2) 第1号住居址竈（西より）	90
PL. 15	(1) 第2号住居址全景（西より）	91
	(2) 第3号住居址（東より）	93
PL. 16	(1) 第3号住居址竈（東より）	93
	(2) 第3号住居址遺物出土状況（東より）	94

PL. 17	(1) 第5号土壙墓(東より)	95
	(2) 第7号土壙墓(西より)	108
PL. 18	(1) 検出時の第2号焼土入りピット(西より)	97
	(2) 完掘後の第2号焼土入りピット(西より)	97
PL. 19	(1) 第6号土壙墓(西より)	107
	(2) 第6号土壙墓内副葬土器出土状況(北より)	107
PL. 20	(1) 縄文土器(表)	80
	(2) 縄文土器(裏)	80
PL. 21	(1) 縄文土器(表)	80
	(2) 縄文土器(裏)	80
PL. 22	(1) 石器(表)	80
	(2) 石器(裏)	80
PL. 23	(1) 甕棺及び土壙墓副葬壺	80
PL. 24	(1) 石器(表)	104
	(2) 石器(裏)	104
PL. 25	(1) 第6号土壙墓出土鉄釘	103
	(2) 鞆羽口	103

## 挿 図 目 次

Fig. 1	塔ノ原遺跡附近遺跡分布図と九州縦貫道路(酒井仁夫作成)	68
2	塔ノ原周辺遺跡分布図(酒井作成)	69
3	塔ノ原遺跡発掘区周辺地形実測図(酒井・岩崎逸男作成, 酒井製図)	72—73
4	南半水田出土遺物実測図(中間研志実測製図)	76
5	第Vトレンチ出土遺物実測図(中間・酒井実測, 中間製図)	76
6	第Vトレンチ平面図と土層断面図(横田賢次郎・中間・内田始実測, 酒井製図)	78
7	発掘区内遺構平面図(酒井作成, 製図)	78—79
8	石器実測図(中間実測製図)	79
9	縄文土器拓影(酒井手拓, 中間実測製図)	81
10	第4号土壙墓副葬小壺実測図(中間実測製図)	82

Fig. 11	土壇墓甕棺墓出土状態実測図（岩崎・内田・酒井・中間実測，酒井製図）	82—83
12	甕棺出土状態実測図（酒井・中間・岩崎・内田実測，酒井製図）	83
13	第4号，第8号甕棺実測図（中間実測製図）	84
14	第6A号甕棺実測図（中間実測製図）	84
15	甕棺出土状態実測図（中間・岩崎実測，酒井製図）	85
16	第9号甕棺実測図（中間実測製図）	86
17	1号住居址実測図（中間・岩崎・内田実測，酒井製図）	90
18	1号住居址出土土器実測図（1）（中間実測製図）	90
19	1号住居址出土土器実測図（2）（中間・酒井実測，中間製図）	91
20	2号住居址実測図（中間実測，酒井製図）	92
21	2号住居址出土土器実測図（1）（中間実測製図）	92
22	2号住居址出土土器実測図（2）（中間実測製図）	93
23	2号住居址出土支脚実測図（中間実測製図）	93
24	3号住居址実測図（中間実測，酒井製図）	94
25	3号住居址出土土器実測図（1）（中間実測製図）	95
26	3号住居址出土土器実測図（2）（中間実測製図）	95
27	5号土壇墓出土土器実測図（中間実測製図）	95
28	5号土壇墓実測図（中間実測，酒井製図）	96
29	1号ピット実測図（中間実測，酒井製図）	96
30	2号ピット出土土師器実測図（中間実測製図）	97
31	2号ピット実測図（中間実測，酒井製図）	97
32	5～7号ピット実測図（中間実測，酒井製図）	97
33	黄褐色土層出土土器実測図（1）（酒井・高橋・中間実測，中間製図）	98
34	黄褐色土層出土土器実測図（中間実測製図）	99
35	茶褐色土層出土土器実測図（1）（中間実測製図）	100
36	茶褐色土層出土土器実測図（2）（中間実測製図）	101
37	茶褐色土層出土土器実測図（3）（中間実測製図）	102
38	土師質竈実測図（中間実測製図）	102
39	黄褐色層出土鉄器実測図（中間実測製図）	103
40	茶褐色土層出土鉄器実測図（中間実測製図）	103
41	甕羽口実測図（中間実測製図）	104
42	滑石製品実測図（中間実測製図）	104
43	黒褐色土層出土土器実測図（1）（中間実測製図）	105
44	黒褐色土層出土土器実測図（2）（中間実測製図）	106
45	6号土壇墓実測図（中間実測，酒井製図）	107

Fig. 46	6号土壙墓出土土器実測図（中間実測製図）	107
47	6号土壙墓出土鉄釘実測図（中間実測製図）	107
48	7号土壙墓実測図（中間実測，酒井製図）	108
49	7号土壙墓出土土器実測図（中間実測製図）	108

## 1 位置と環境 (Fig. 1～3, PL 1)

遺跡は太宰府町の南方、背振山塊の東北端にある標高 257 cm の天拝山麓に位置している。

福岡平野東側の三郡山系山麓を南下した九州縦貫道路は水城堤を横切って天拝山麓に達するのである。この附近は弥生時代から中世にかけての極めて重要な遺跡が相接して埋もれている。弥生時代前期から後期にかけての各所の甕棺群、唐人塚遺跡にみられる弥生時代終末から古墳時代にかけての土壙墓群、剣塚前方後円墳、原口前方後円墳、八熊古墳群、扇祇古墳群、杉塚廃寺、塔ノ原廃寺、武蔵寺、中世天拝城とその出城群等である。そのほとんどが九州縦貫道路の建設予定路線にあり、昭和48年度に緊急発掘調査を実施した。

九州縦貫道が塔ノ原廃寺塔心礎の東約50mを北西—南東方向で通過することになり、その路線内の調査を昭和48年4月5日より6月23日にかけて実施した。調査地点は中央を東西に横切る県道を境として、南半の水田では寺院遺構及び太宰府南限条坊の確認を目的とし、北半の台地は弥生及び古墳時代の遺構確認を目的とした。

塔ノ原廃寺は昭和41年2月及び8～9月、県道5号線建設に際して、福岡県教育委員会主催により小田富士夫・宮小路賀宏両氏を中心として調査が行なわれ、瓦溜り状の落込みを検出したものの、寺遺構を積極的に示すような確証は得られず、寺域さえも不明であった。<sup>(註)</sup> 今回の調査を通じても若干の瓦は出土したものの、条坊を示す遺構は皆無であった。

塔ノ原廃寺の研究史は前記小田氏報告にゆずるとして、調査時に武蔵在住の松尾勝則氏より聞いた話を記して、今後の参考に供したい。塔心礎の現位置の西側に大きな溜池(原口池)があるが、その水門には台座を作り出した礎石状の石が使用されているというのである。塔心礎そのものも現位置を動いていることは前回小田氏調査に際しても認められている事実でもあり、上記の話から想像するに、寺跡は原口池掘削に際して大部分が破壊されたのではなかろうか。またその後の耕地整理等により、現在の塔心礎周辺が削平されたと考えられる。しかし原口池の西側及び北側は削平を受けていない平坦な台地であり、今後残存遺構の確認をぜひとも実施せねばならない区域と考えられる。

北半の台地は天拝山からまっすぐ北へ伸びた丘陵の先端部に位置しているが、その鞍部はすでに耕地及び宅地として削平されており、西斜面のみで遺構が確認された。(酒井仁夫)

註 「塔原廃寺」 筑紫郡筑紫野町大字塔原所在古代廃寺跡の調査

福岡県文化財調査報告書第35集 福岡県教育委員会 1967



Fig. 1 塔ノ原遺跡附近遺跡分布図と九州縦貫道路 (●, ●◐は古墳) (1/25,000)  
 1、塔ノ原廃寺 2、般若寺 3、武蔵寺 4、観世音寺 5、筑前国分寺 6、崇福寺  
 7、安楽寺 8、大野城 9、榎寺 10、杉塚廃寺





Fig. 2 塔ノ原周辺遺跡分布図 (1/5000)

## 2 調査の経過

塔ノ原遺跡の調査は昭和48年4月5日より6月23日にかけて実施した。このうち5月4日までが南半の水田の調査であり、その後北半の台地の調査である。調査団は下記の通りであるが、九州大学考古学研究室の緒方悦子氏の来援を受けた。

調査担当者	福岡県教育委員会技師	酒井仁夫 中間研志
調査員	福岡県立歴史資料館調査課	横田賢次郎 高橋章
調査補助員		内田始 岩崎逸男
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	滝龍二

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

- 4月5日(木) 発掘資材を搬入し、路線内工事用道路分より調査を開始する。4m巾トレンチを設定し、南より4mごとにアラビア数字で区画をもうける。表土及び第2層からは中世・近世の陶磁器、須恵器・黒耀石等の細片が出土するが、遺構は検出されない。
- 4月6日(金) 一部第4層まで掘り進む。2区では第3層を掘り込んだ浅いピットを検出する。
- 4月7日(土) 天候不順のため、室内で整理作業を行う。
- 4月9日(月) 9～20区の表土剥ぎを行う一方、1～8区の東壁土層断面図を作成する。
- 4月10日(火) 天候不順のため、室内で整理作業を行う。
- 4月11日(水) 霧雨の降る中、9～20区を掘り下げる一方、9～18区の東壁面土層断面図を作成する。
- 4月12日(木) 天候不順のため、室内で整理作業を行う。
- 4月13日(金) 21区～48区までの土層断面図を作成する。
- 4月14日(土) 49区～53区の表土を剥ぎ、遺構を検出する。北西一南東方位の溝数条が走っている。
- 4月16日(月) 49区～53区の平板実測図及び土層断面図を作成する。
- 4月17日(火) 天候不順のため、室内で整理作業を行う。
- 4月18日(水) 工事用道路分の調査を終了し、路線内南半全域の調査を開始する。磁北に従って4mグリッドを設定し、それにのっとったトレンチを掘り進める。

- 4月19日(木) 昨日に引き続きトレンチを掘り進めるが、遺構はまったく検出されない。
- 4月20日(金) 工事用道路分トレンチの平板測量を行う。
- 4月21日(土) 終日雨が降り、室内で整理作業を行う。
- 4月23日(月) トレンチを掘り進める一方、平板測量を行う。
- 4月24日(火) 天傾不順のため、室内で整理作業を行う。
- 4月25日(水) 県内遺跡見学のため作業中止
- 4月26日(木) 終日雨のため、室内で整理作業を行う。
- 4月27日(金) 各トレンチの土層断面図を作成する。
- 4月28日(土) トレンチ内を清掃し、写真撮影を行う。
- 4月30日(月) 南端東西トレンチを土層観察のため深さ2mまで掘り下げる。粘土土層中より自然流木が出土する。
- 5月1日(火) 各トレンチ土層断面図を作成する。
- 5月2日(水) 土層断面図作成を続行する。
- 5月3日(木) 南半の発掘作業を全て終了し、北半の丘陵部へ資材を移動する。
- 5月4日(金) 天傾不順のため、室内で整理作業を行う。
- 5月5日(土) 丘陵北斜面に南北方位の4m巾トレンチを設定し、表土を剥ぎ始める。
- 5月7日(月) 表土剥ぎを続行する。
- 5月8日(火) 天傾不順のため、室内で整理作業を行う。
- 5月9日(水) トレンチ南半では遺物の出土が多い。奈良期の土師器・須恵器及び弥生前期の甕棺片等が出土する。
- 5月10日(木) 遺構の存在が予想されたため、発掘区を広げることにする。
- 5月11日(金) ベルトコンベアーを導入し、トレンチ西側の表土を除去する。発掘区はトレンチ東壁を境に東西両区に区分し、南よりアラビア数字で、東西方向はアルファベットでそれぞれ4mごとに区分けする。(Fig. 7 参照)
- 5月12日(土) WB～C-2～4区では第3層(茶褐色土層)上面で遺構の検出作業を進める。WC-5～6区では第2層(黒褐色土層)を除去する。
- 5月14日(月) W7区までの表土及び水田床土を全て剥ぎ終える。WB4～6区では第3層及び第4層(黄色粘質土)の一部を掘り込んだ溝数条を検出する。
- 5月15日(火) WA7区で楕円形ピットを検出する。ピット中には完形の土師質甕が伏せ置かれている。WB7区では方形のピットを検出する。W7ライン及びWAラインの土層断面図を作成する。埋甕ピットの写真撮影を行う。
- 5月16日(水) 天傾不順のため、室内で整理作業を行う。
- 5月17日(木) WA～Bラインの茶褐色土を取り除き、遺構プランの検出を計る。WB7区の方形ピット内遺物出土状況及び全景の写真撮影、実測を行い、遺物を取り上げる。WA7区の埋甕ピット断面の写真撮影する。
- 5月18日(金) WA5～6区で住居址を検出する。WA4区では焼土のつまった楕円形ピットを土層

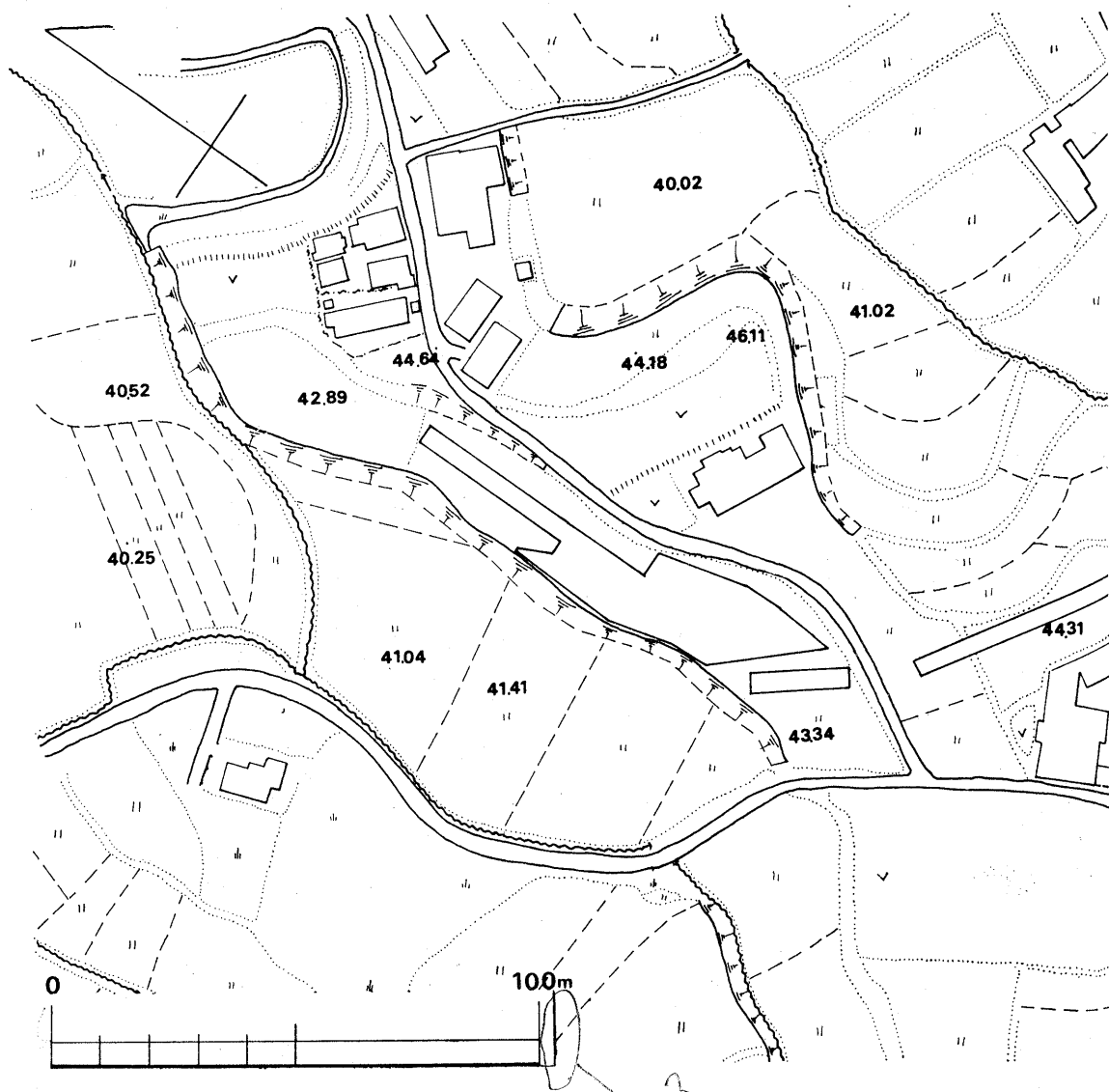


Fig. 3 塔ノ原遺跡発掘区周辺地形実測図 (1/5,000)



- 断面を残して掘る。
- 5月19日(土) WA 7区の埋甕ピットの写真を撮影し、実測を行う。WA 5～6区住居址の床面を検出する。床面上より高杯、甕等が出土する。東壁側に焼土が多く、竈があると思われる。WA 3区楕円形ピットの土層断面図を作成し、写真撮影の後、全掘する。
- 5月21日(月) WA 5～6区住居址の柱穴及び竈を検出する。東半(E区)の表土剥ぎを開始する。
- 5月22日(火) WA 5～6区住居址を完掘する。E区の表土剥ぎを継続する。W区発掘範囲の全景写真及び住居址の部分写真を撮影する。
- 5月23日(水) W区発掘範囲に遣り方を組む。EDラインはすでに削平を受けているため、表土を取り除くと、すぐ地山がみられる。
- 5月24日(木) W区発掘範囲の実測開始。E区では、水田床土を除去する。
- 5月25日(金) EB 2～3区で甕棺4基を検出する。W区の実測作業のうち、平面図はほぼ作成し終える。
- 5月26日(土) W区の断面図を作成する。
- 5月28日(月) E区の遺構検出作業を続行する。
- 5月29日(火) 終日雨が降り、室内で出土土器の実測を行う。
- 5月30日(水) E区の甕棺は9基を数える。土墳墓4基を検出する。3基は小口に溝があり、木棺と考えられる。他の1基は壺を副葬している。2基の甕棺を完掘し、写真を撮影する。
- 5月31日(木) E区各遺構の各別写真及び全景写真を撮影する。甕棺の実測を開始する。この間扇塚3号墳の調査を行い、当古墳群の調査を全て終了する。
- 6月1日(金) EB～C-4～7区で遺構の検出を行う。甕棺の実測を継続する。E区の発掘作業を全て終了する。
- 6月2日(土) W8ラインの水田床土を取り除き、遺構の検出を計る。
- 6月4日(月) 天候不順のため、室内で出土土器の実測を行う。
- 6月5日(火) E区甕棺の実測を終了する。WA～C-9～12区の表土を剥ぐ。E区では遣り方を組む。
- 6月6日(水) 終日雨が降り、室内で土器の実測を行う。
- 6月7日(木) WA 9区で住居址を検出する。竈中に土製支脚が立っている。WA 8区では焼土、炭化物のつまった方形ピットを検出する。E区の1/20実測を開始する。
- 6月8日(金) WA～D-8～10区の黒褐色土を除去し、茶褐色土上面で溝数条を検出する。茶褐色土層は西北に向け著しく傾斜度を増す。WA 8区の方形ピットを完掘する。
- 6月9日(土) WA～D-8～10区の全景写真を撮影する。WA～D-11～13区の水田床上を除去する。
- 6月11日(月) WA 9区住居址の柱穴検出を計る。WA 8区の方形ピットの写真を撮影し、実測する。
- 6月12日(火) WA～C-10～13区で茶褐色土上の遺構を検出する。C区西半は一段と落込み、旧水田面と考えられる。WA 9住居址の写真撮影及び実測を行う。

- 6月13日(水) WA-C-10~13区の全景写真を撮影する。本日でW区の茶褐色土面の遺構検出作業を終了し、下層の黄色粘質土面の作業を開始する。WC 5区で住居址を検出する。
- 6月14日(木) 黄色粘土層上面で遺構を検出する一方、WC 5区住居址の内部落込み土を除去する。
- 6月15日(金) WC 8区は黄色粘質土の凹凸が著しく、その付近には須恵器、韃片、焼土が散乱している。また同区で楕円形ピットを検出する。
- 6月16日(土) WC 5区の住居址床面を清掃し、写真を撮影する。発掘資材を運搬し、本日で発掘作業を全て終了する。
- 6月18日(月) 黄色粘質土層面の遺構実測を開始する。
- 6月19日(火) 平面図作成終る。
- 6月20日(水) 雨のため室内で整理作業を行う。
- 6月21日(木) 文化課会議のため作業を中止する。
- 6月22日(金) 断面図を作成する。
- 6月23日(土) 実測作業を終える。本日で全ての調査を終了する。(酒井仁夫)

### 3 調査の内容

#### a 南半水田面の調査

路線内工事用道路分の調査を先行した。まず方位を無視した4 m巾のトレンチを3本設定して掘り進めた。計192 mの長さである。層位は各トレンチとも基本的には同一で、下記の通りである。(PL. 2)

- |              |         |
|--------------|---------|
| 1. 黒灰色土(耕土)  | 約20cm   |
| 2. 淡茶灰色土(床土) | 15~30cm |
| 3. 暗褐色土      | 10cm    |

以上の3層が遺物包含層であり、特に第3層下面に遺物が集中する。それ以下の各層は自然堆積層と考えられ、遺物の出土を見ない。(PL. 3-1)

工事用道路分を除いた地域は磁北に従って4 m方眼に区切り、相直行する6本のトレンチを掘り進めた。層位は上記トレンチのそれと同様である。

遺物は全て細片であり、実測に供せない程である。1, 2層からは土師器、須恵器と共に近世陶磁器が出土する。3層下面の出土遺物は平安期の土師器、須恵器が主で、近世、中世の遺物は混入していない。なお遺物はいずれも二次堆積と考えられる。(酒井仁夫)

遺物 (Fig. 4-1, 2, 4, PL. 22) 実測に供せられる遺物として、石鏃3例のみをあげ

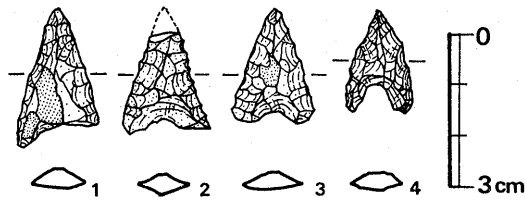


Fig. 4 南半水田出土遺物 (縮尺2/3)

たい。石材は、1が安山岩、2が頁岩、4が黒曜石である。1では原材粗面を残し幾分粗い剥離を加え、2の先端は欠損している。4はやや小形であるが細かな再加工剥離を加えている。3例ともに第3層出土のものである。(中間研志)

### b 北半丘陵部の調査

南半水田面の調査を終了した後、南半丘陵部に3本のトレンチを設定した。うち2本は工用道路分である。

工用道路分北端のトレンチ(第Vトレンチ)ではほぼ東西方位の溝4条が検出された。(Fig. 6, PL 3-2)いずれも深さ20cm弱の溝である。

溝中からは若干の遺物が出土した(Fig 6)。(酒井仁夫)

遺物 (Fig. 5, Fig. 4-3) 1~5は須恵器, 6は内面黒色土師器, 7は土錘, 8は近世陶器である。1, 2は坏蓋で、口縁端部を短く折り曲げ、屈曲端部は鈍い稜をなす。外面天井部はヘラ削り調整を行ない、他内外面はナデ調整である。1は胎土良好であるが焼成軟で灰白色を呈し、2は胎土に僅かに細砂粒を含むが焼成堅緻で灰色を呈す。口径各々、16.3cm, 16.6cmを測り、いずれもボタン様のつまみを有するものであろう。3は高台を有する坏身で、底部径9.3cmを測る。高台は短くその底面は内側へ上がる。体部と底部の境界は丸味をもって立ち上がり、器壁は底部が1cmを測り厚く、体部は薄くなる。内外面ともにナデ調整を行なっているが、底部外面はヘラ切離し後ナデを行ない、底部内面中心部よりでは指縦ナデ調整を施して

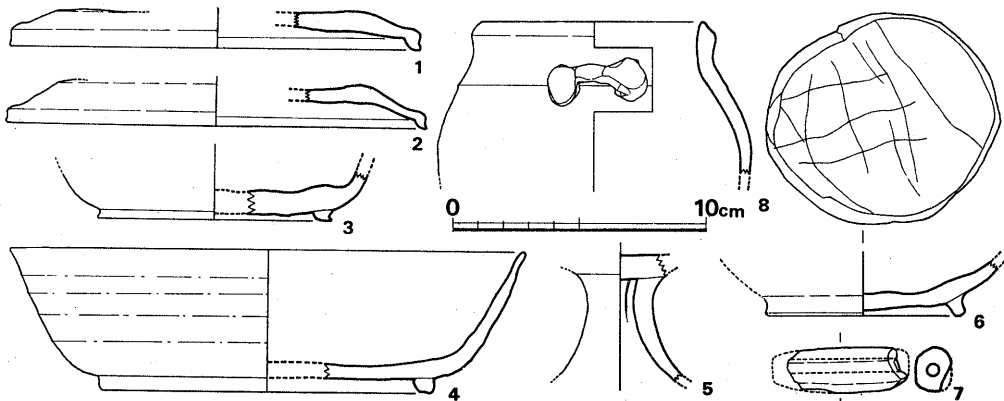


Fig. 5 第Vトレンチ出土遺物 (縮尺1/3)



いる。胎土は僅かに粗砂粒を含み、焼成堅緻で灰色を呈する。4は、大型の坏で、鋭さを欠いた短い高台を有する。口径20.4cm、器高5.6cmを測り、内外面ともに丁寧なナデ調整を行なう。胎土は砂粒が目立ち、焼成やや軟で内面灰白色、外面やや青味がかった灰白色を呈す。5は高坏脚部で、復元器高約8cmを測る。坏部内面には縦ナデ痕が残り、脚部には横ナデ、内面にはシボリ痕が残る。胎土に幾分砂粒を含み、焼成堅く灰黒色を呈す。6は内面黒色土器底部であるが、高台はやや外方へ張り、底部と体部の境が滑らかで丸味を帯びて立ち上がる堦である。内面はヘラ磨きで真黒色をなし、外面はナデ調整である。内面には焼成前の細かい線刻が施されているが、何らかの文字乃至記号であるとは理解し難い。胎土には砂粒を含み、外面淡茶色を呈す。7は断面やや六角形気味をなす土錘である。復元長5.4cm、径1.8cmを測り、孔径4.5mm、胎土に幾分砂粒を含み、焼成不良で淡茶色を呈す。8は、復元口径8.6cmを測り耳を有する近世陶器である。胎土に粗砂を含み、焼成堅緻で灰褐色を呈す。口縁内外面に茶褐色釉が残り、他は丁寧にナデている。耳部は指で押えて貼り付けている。断片の為、四耳になるかどうかは不明である。石鏃 (Fig. 4-3) は、第1層耕作土出土である。頁岩製で、裏面は一次剝離面のままである。

以上のうち、1は最北小溝出土、5は南から2番目の大溝出土、8は最南端小溝出土、他はすべて第4層茶褐色粘質土出土品である。(中間研志)

丘陵西斜面では住居址3軒、土壙墓7基、甕棺10基、焼土のつまったピット5を検出した。

層位の基本は下記のとおりである (Fig. 5)。

1. 灰黒色粘質土 (耕土)
2. 灰褐色土 (耕土)
3. 黄灰褐色粘質土 (水田床土)
4. 黒褐色粘質土
5. 茶褐色粘質土
6. 黄色粘質土、バイラン土 (地山)

遺構は4～6の各層を掘り込んでいる。

黒褐色土を掘り込んだ遺構としてはWA 3～4区の若干のピットとWB 7及びWC 10区の土壙墓がある。またWC 10～14区の水田跡もこの層から掘り込まれている。

茶褐色土を掘り込んだ遺構としてはW区全域にわたる多数のピットと20条に及ぶ溝状遺構がある。なお当層中には多数の花崗岩礫が含まれている。

黄色粘質土 (バイラン土) を掘り込んだ遺構としてはE区の甕棺、土壙墓、WA 5～6、WC 5区及びWAの区の住居址、WA 8区の土壙墓及び6基の焼土のつまったピット等がある。なお、WC 5区の住居址及びWA 8区の土壙墓は附近で整地層下すぐ地山となるため、土層そのものから時期を判定することはできない。(酒井仁夫)

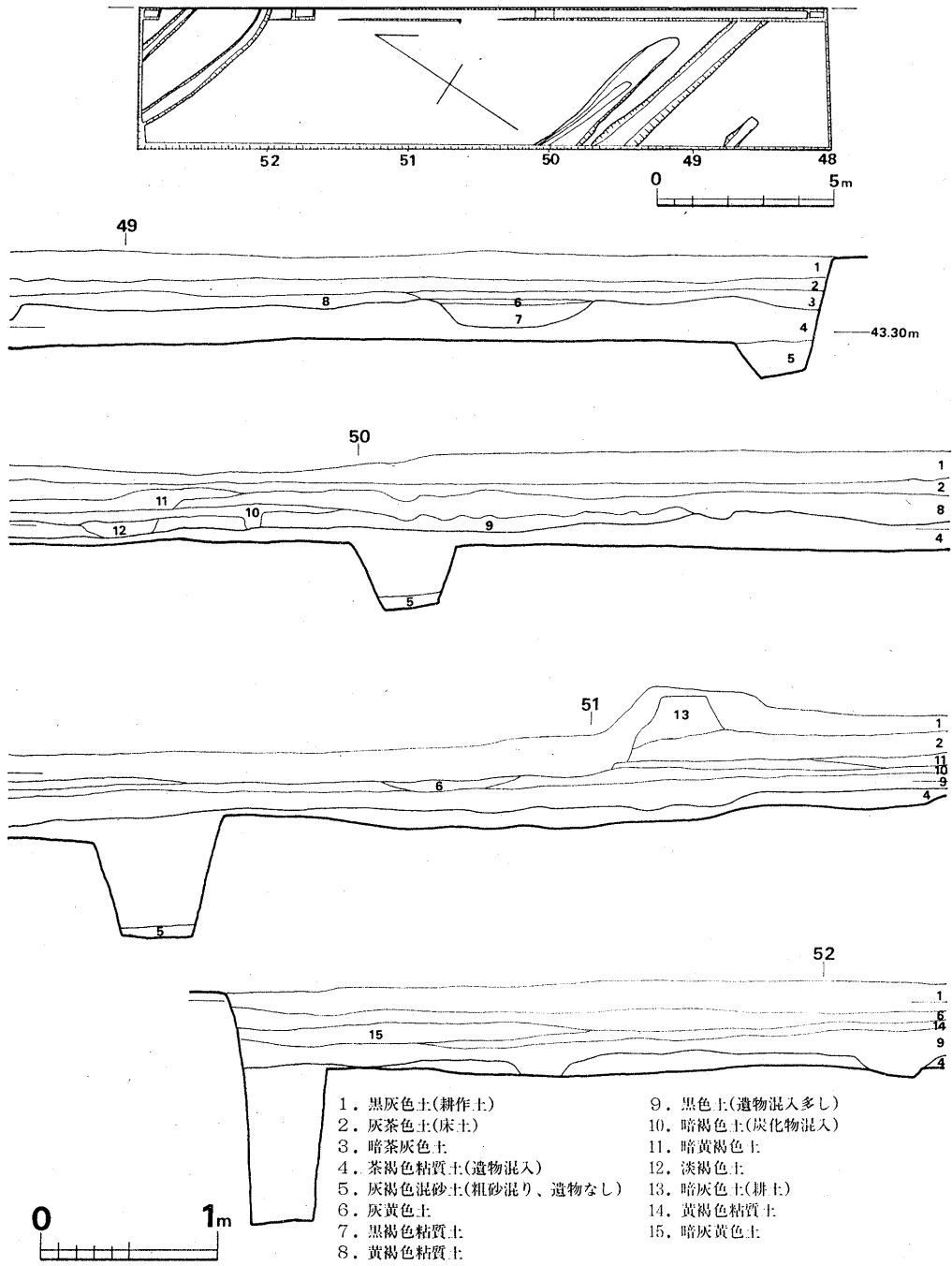


Fig. 6 第Vトレンチ平面図(縮尺1/200)と土層断面図(縮尺1/40)



Fig. 7 発掘区内遺構平面図 (縮尺1/120)

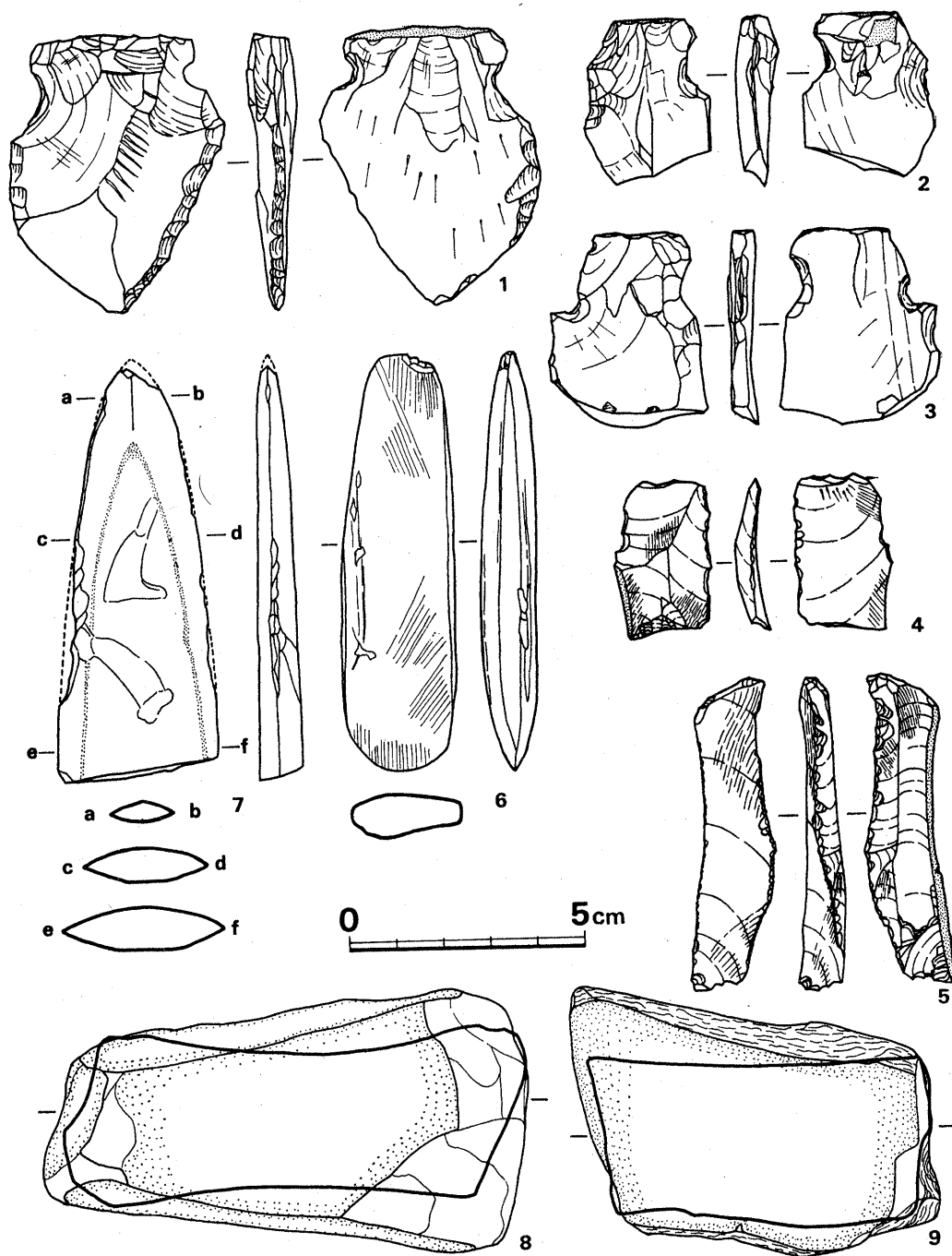


Fig. 8 石器実測図 (縮尺2/3)

(1) 縄文時代の遺物

当遺跡丘陵西斜面のWC 5区を中心として第6層黄色粘質土直上及び茶褐色土層中より縄文

式土器を少量出土した。又各層より縄文式時代に属すると思われる石器類少量を採集した。これらの土器はすべて破片で、縄文式時代遺物のみの包含層も確認されず、又縄文式時代の遺構と思われるものは何ら発見し得なかった。

次に、土器及び石器類について述べたい。

#### 縄文式土器 (Fig. 9, P L. 20, 21)

1, 2, 3は、波状口縁の深鉢形土器である。1は口縁部が三角形に肥厚して外面に2条の沈線を有し、山形頂部は指押圧によって窪みをなす。図の左上縁部には縄文が残っているが、他口縁部位には認められない。胴部との境目は「く」の字に屈曲し、細竹管文が巡らされ、以下沈線、ヘラ磨き面、沈線、縄文、沈線と胴上部に巡らされている。内外面ともに丁寧な横方向ヘラ磨きが施される。胎土には細砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色を呈する。2, 3は同一個体と思われ、ともに器形施文は1と同種であるが、焼成不良で内面黒色外面暗褐色を呈し、やや1に比べ小型である。4, 5は口縁湾する碗形の器形をなすものと思われる。6もこの種に含められるかもしれない。4は、口縁端がやや尖り外面に4条の沈線と斜行する直線の沈線が施文される。内面は僅かに条痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶色を呈する。5は口唇部やや平坦面をなし内傾しており、外面に2条のやや太めの沈線の下に逆「コ」字形沈線文を施し、更にその下に1条の沈線を巡らす。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面淡褐色外面暗茶褐色を呈す。6は中央に稜を有し以上に沈線斜向文及び縄文を残す。内外面ともにヘラ磨きを行なう。焼成良好で外面稜線以下は煤で黒色を呈し、他は茶色を呈する。7はやや外開きの口縁片であるが、口唇部平坦をなし外傾する。外面には1条の沈線が施され胎土に粗砂粒を多く含み茶褐色色調を呈する。表裏ともにヘラ磨きを施す。8は横位に平行沈線6本、右端の縦位沈線で区切っている。胎土に粗砂粒を多く含み暗褐色を呈す。9, 10, 11は、粗製土器で粗い条痕を残す。9は横位の太く浅い沈線がみられる。10は表裏口唇部まで粗い横位条痕を施す。胎土はいずれも細砂粗砂を多く含み、暗褐色乃至茶褐色を呈する。

以上、深鉢形、碗形、粗製土器を含めて、縄文時代後期西平式土器の類に含められよう。

(中間研志)

#### 石器類 (Fig. 8-1~6, P L. 22)

耕作土～黄色粘土層(地山)直上まで6点の石器が出土している。その内容は、石匙3, サイドブレイド1, 磨製石斧1, その他1である。

石匙(1, 2, 3) 　　いずれも縦形石匙とみられるもので、1は完形品、2, 3は先端半分が折損しており快入部も粗であり、かつ刃部再加工剝離痕もみられず、未製品とも考えられる。いずれも粗製品である。

サイドブレイド(5)は、ブレイド両側面に細かい再加工剝離痕がみられる。

磨製石斧(6)は、小形の狭長な石斧である。研磨が不十分な為一部に製作時の敲打痕を残して

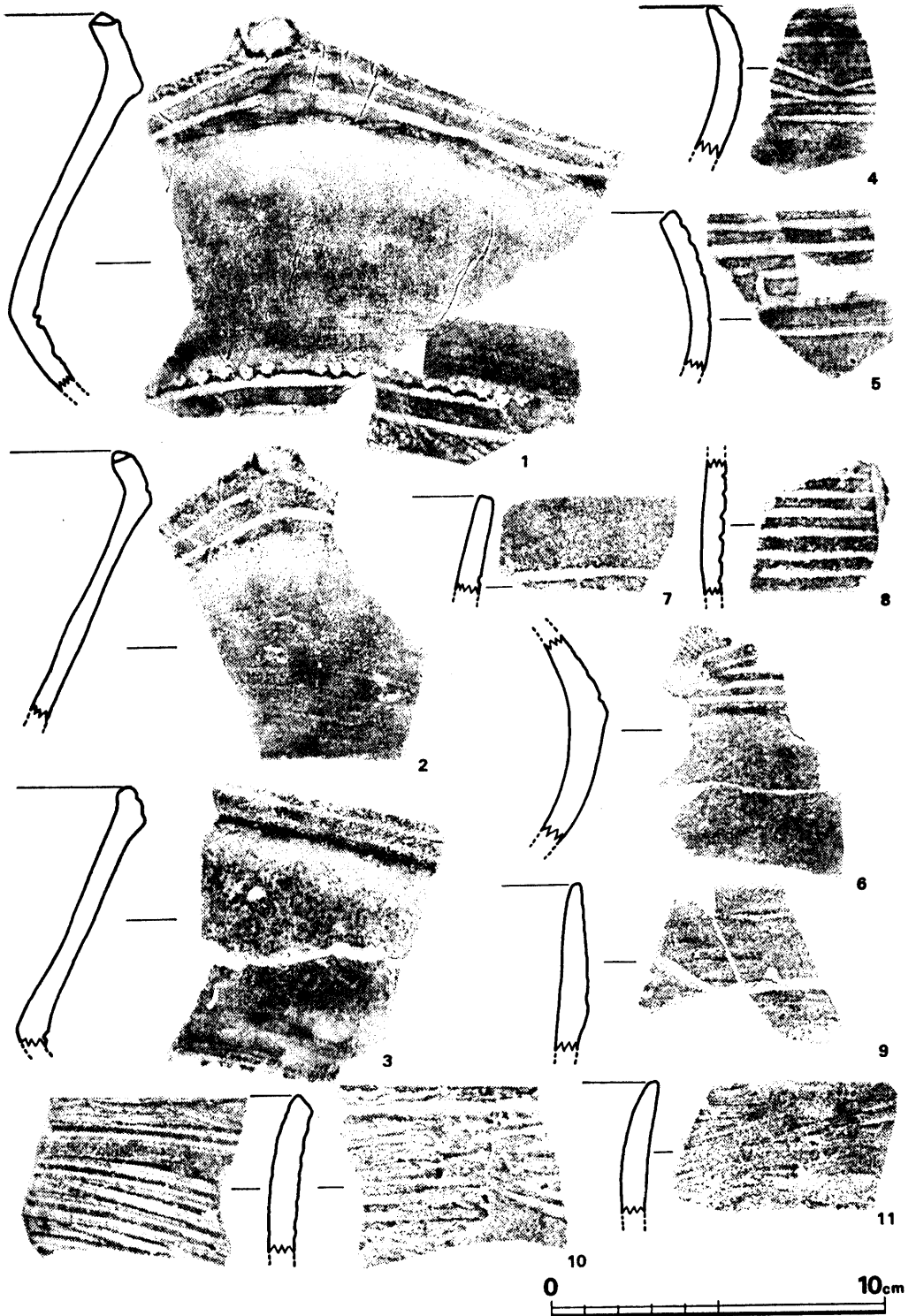


Fig. 9 繩文土器拓影 (縮尺1/2)

いる。刃部には先端縁と直角方向に擦痕がみられ、上端も同様の擦痕がみられ、両刃石斧の様相をみせる。

石材は、1～3が頁岩、4、5が半透明良質な黒曜石、6が蛇紋岩を用いている。

(中間研志)

## (2) 弥生時代の遺構と遺物

### (a) 土壙墓 (Fig. 11, P.L. 4～7)

EC 1～3区の地山面にL字形の掘り方が検出された。この掘り方は検出時には深さ10cmを計るにすぎなかった。しかし周辺出土の甕棺を完全に推定復元すると、現在高より50cmは高くなる。つまり当時は少なくとも60cm以上掘り込んだと考えねばならない。このL字形掘り方を詳細に観察すると、3個所の掘り方の切り合いであると認められた。EB 2の掘り方はEB 3の土壙墓(4号)を切っており、その中に2個所の土壙墓(2, 3号)が検出された。つまり2基連続の2段掘り土壙墓と認められた。

**第1号土壙墓**(P.L. 5-1)は170×80mの長方形を呈し、深さは50cmを計る。床面四方の壁側には木棺用材をすえたと思われる溝が掘られている。

**第2土壙墓**(P.L. 5-2)は第3号と同一掘り方中にある。190×70cmの長方形を呈し、深さは20cmを計る。南側小口に溝が掘られている。北側小口附近は凹凸が著しい。

**第3土壙墓**(P.L. 6-1)は第2号と同一直線上に並ぶ。230×80cmの長方形を呈する。3方の土壙上面には花崗岩を4個すえ置いている。南側小口には溝がうがたれている。

**第4号土壙墓**(P.L. 6-2, 7-1)は第3号に切られ、それに直交する。245×90cmの長方形を呈する。床面の中央にはピットが掘り込まれている。床面より約10cm浮いた状態で壺が副葬されていた(Fig. 10, P.L. 23)。(酒井仁夫)

底部径6.8cm、復元高16cm内外を測る。頸部は上方へすぼまり、頸部と胴部の境目に1条のヘラによる沈線を有する。胴上部には平行した2条のヘラ描き鋸歯文が巡らされ、胴最大径は胴上半部にあり張りを有する。底部は平底である。頸部～胴部外面は横方向のヘラ磨きがなされ、頸部内面は縦方向ナデ、胴上半部は指横ナデが施されている。底部側外面は指オサエ痕が残る。胎土に砂粒を極めて多く含み、焼成は淡茶褐色を呈しやや不良である。文様が不均一な個所があったり全体的に歪む点など、弥生前期小壺としてはやや粗いつくりである。弥生前期板付Ⅱ式に比定される。(中間研志)

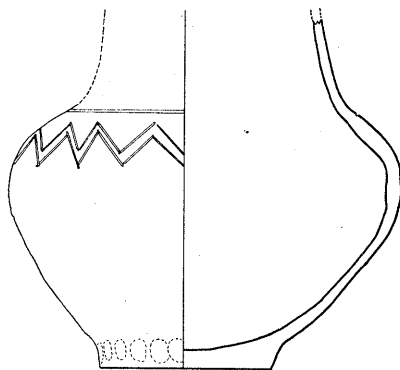


Fig. 10 第4号土壙墓 (縮尺1/3)

### (b) 甕棺墓 (Fig. 11～15, P.L. 7～12)

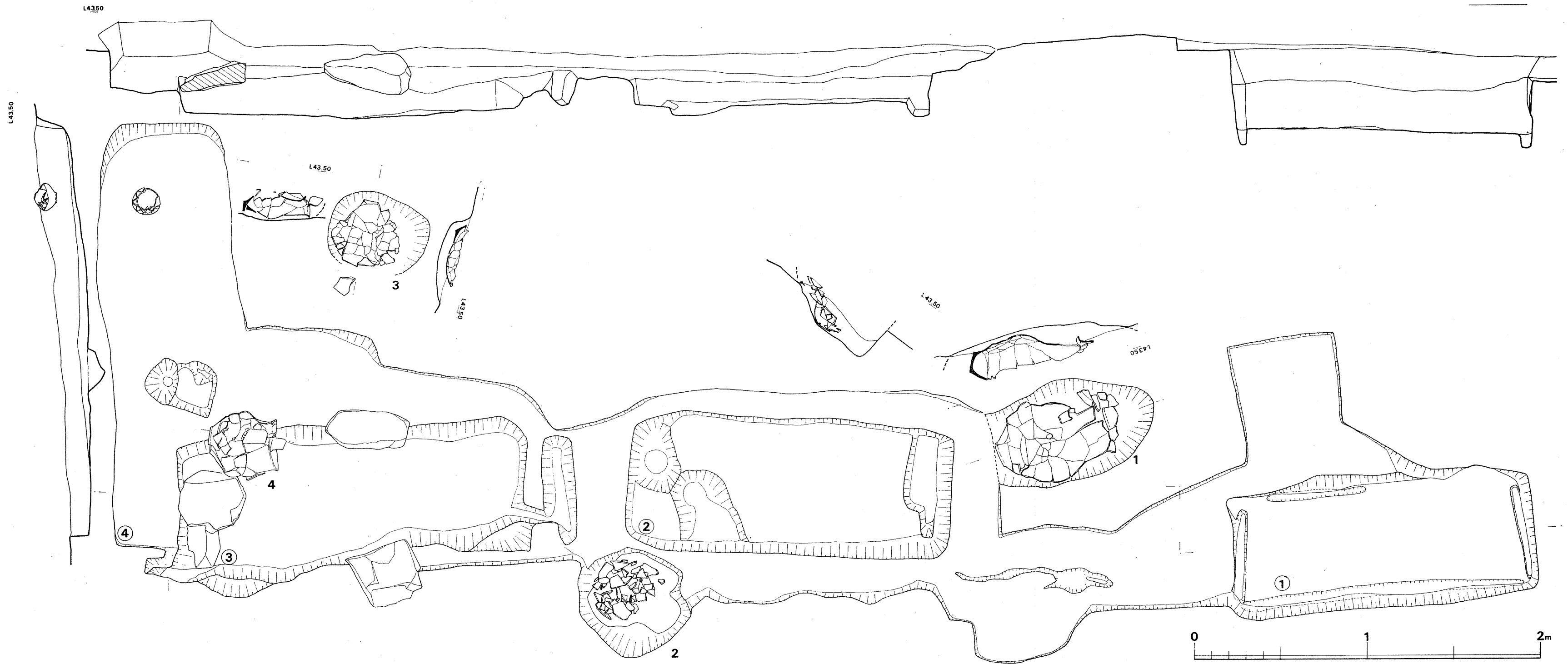


Fig. 11 土壙墓, 甕棺墓実測図 (縮尺1/20)



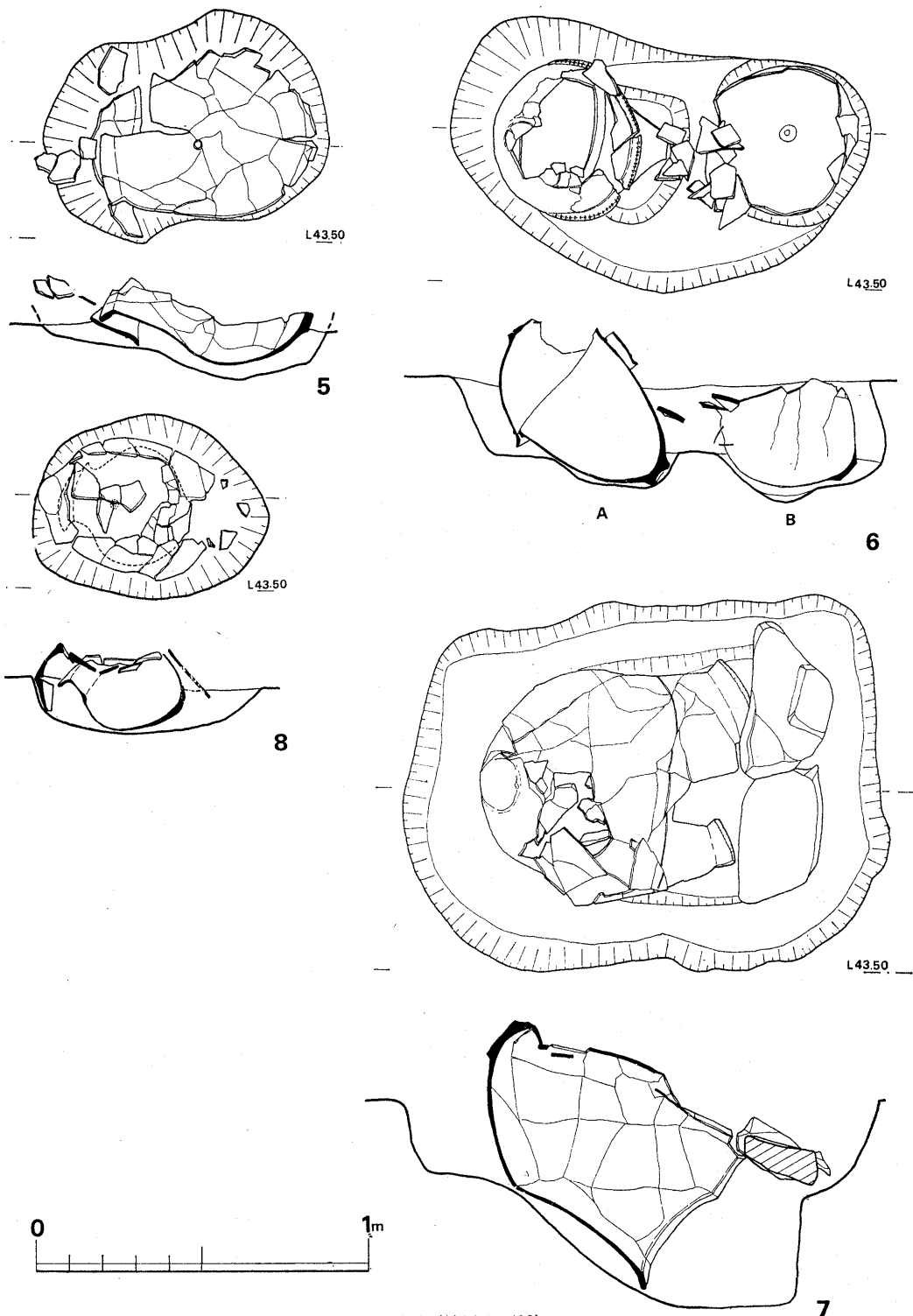


Fig. 12 甕棺墓出土状態実測図 (縮尺1/20)

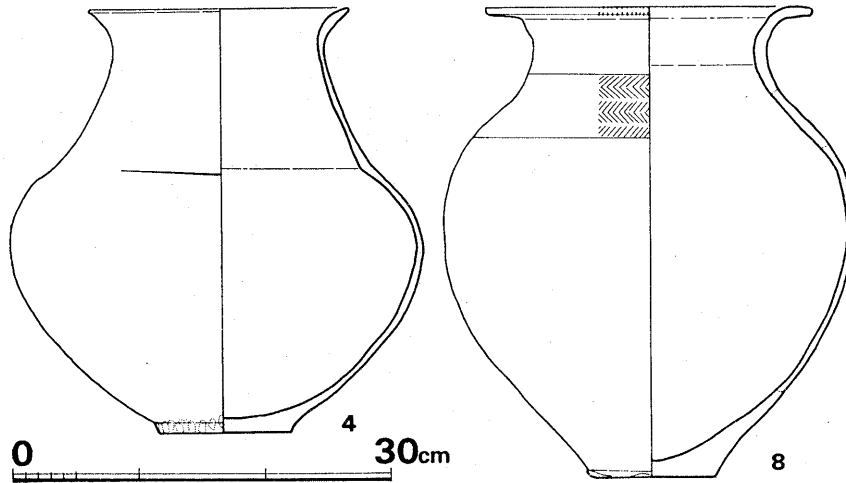


Fig. 13 第4号, 第8号甕棺実測図 (縮尺1/6)

丘陵西側斜面の遺構群のうち、甕棺墓は地山の上がっている東半部に群集して発見された。それらのうち、1号甕棺は2号土壙墓を、2号甕棺も2号土壙墓を、4号甕棺は3号及び4号土壙墓を切っている。いずれも、土壙墓同様地山（花崗岩パイラン土）まで掘り込んで埋置しているが、6A号、7号、9号を除いて他はすべて後世の削平により上半部を失っていて復元不能のものが多い。以下各甕棺について出土状況を述べたい。

**1号甕棺** (Fig. 11, PL. 8-1) は2号土壙墓を切っており、上甕の大部分と下甕の半分以上を失っている。上甕は口唇部に刻目を有さず、丹塗り痕のある鉢形土器であろうか。下甕はやや上げ底気味の底部を有する甕形土器である。胴部中心に径3cmの一孔を有する。

**2号甕棺** (Fig. 11, PL. 8-2) は2号土壙墓を切っているが、下甕一部のみ破片で出土した。胴部には一孔が穿たれており、羽状文を有する壺形土器と推

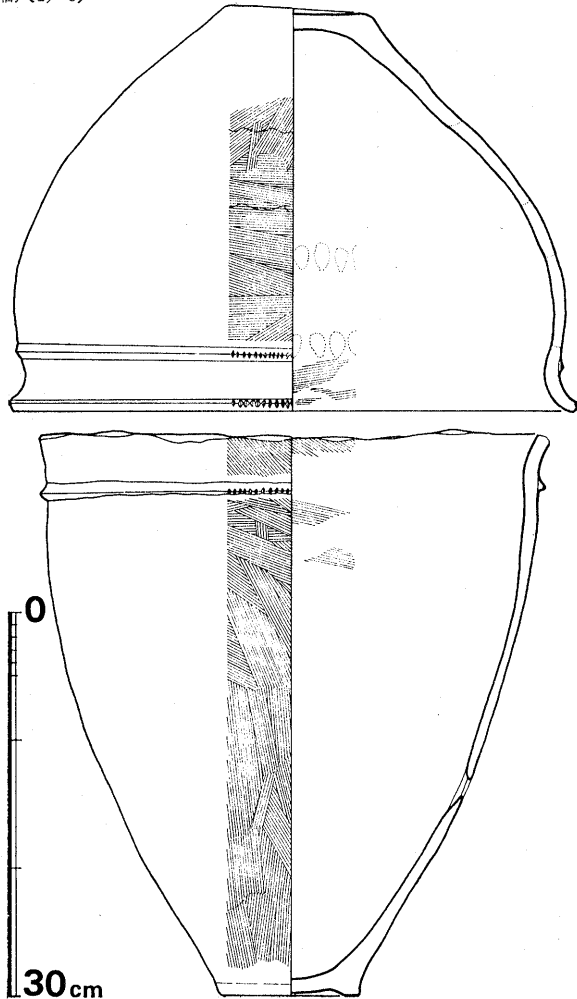


Fig. 14 第6-A号甕棺実測図 (縮尺1/6)

定される。

**3号甕棺** (Fig. 11, PL. 9-1) は、下甕の下半部のみ残っており、平底の底部を有する甕形土器と推定される。胴部穿孔は不明である。

**4号甕棺** (Fig. 11, PL. 9-2) は、3号、4号土壌墓墓墳を切っており、上甕は大部分を失っている。下甕 (Fig. 13, PL. 23) は壺形土器で、復元可能であった。口径20.4cm 器高33.2cmを測り、頸部が上方へすばまり、口縁部はやや肥厚して外湾する。頸部、胴部の境はそれ程明瞭ではないが、内側に稜が認められ、又外面には、一部分のみに1条のヘラ描沈線が残ることは注目される。胴部最大径は32.4cmで、胴上半部にありかなり張りがみられる。底部は1mmほどの上げ底で平底としてよい程度である。口縁内外面は横ナデ、頸部内面は丁寧な縦ナデ調整を行なっている。頸部胴部内面は調整不明、外面は明確ではないが一部にヘラ横方向磨きの痕跡が認められる。底部外面には指オサエ痕が残る。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成不良で淡茶色を呈する。二次焼成は認められない。

**5号甕棺** (Fig. 12, PL. 10-1) は、上甕のほとんどと下甕の半分以上とを失っている。上甕は口唇端と頸部凸帯とに刻目を巡らし、口縁外反する甕形土器である。下棺は外反する口縁が肥厚し、頸部と胴部の境目に二条のヘラ沈線を有する壺形土器である。胴上半部に一孔を穿つ。

**6-A号甕棺** (Fig. 12, PL. 10-2) 6号甕棺は、当初A棺上甕を発見して掘方を検出したが、後同一掘方内と思われたA、B棺のうちB棺が、A棺掘方を切っていることを確認した。A棺上下甕ともに残存状況は良好で復元可能であった。傾斜角は41度を測る。上甕 (Fig. 14, PL. 23) は、口径44.8cm 器高31.6cmを測り、口縁が丸味を帯びて外反する、傘蓋形土器である。口唇部と頸部凸帯に

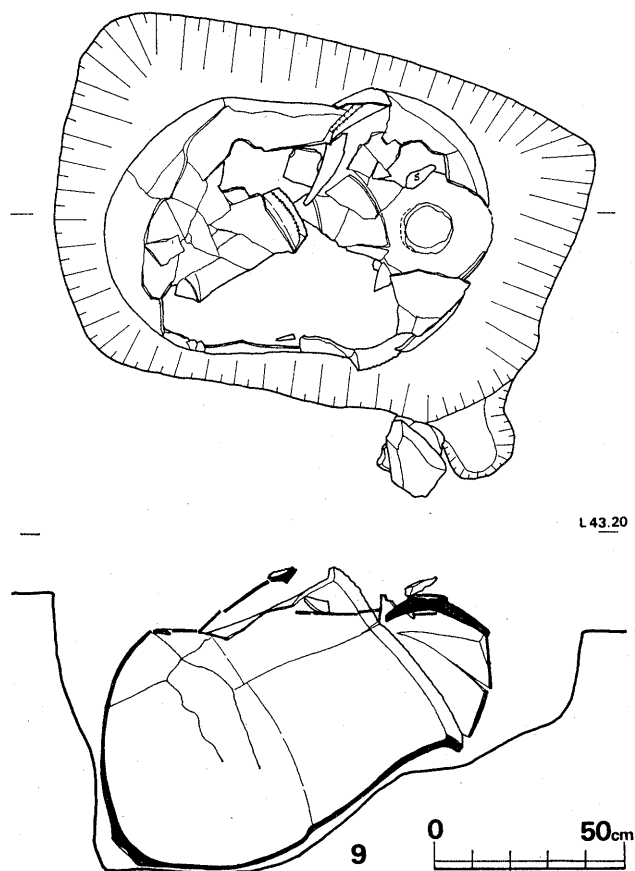


Fig. 15 第9号甕棺出土状態実測図 (縮尺1/20)

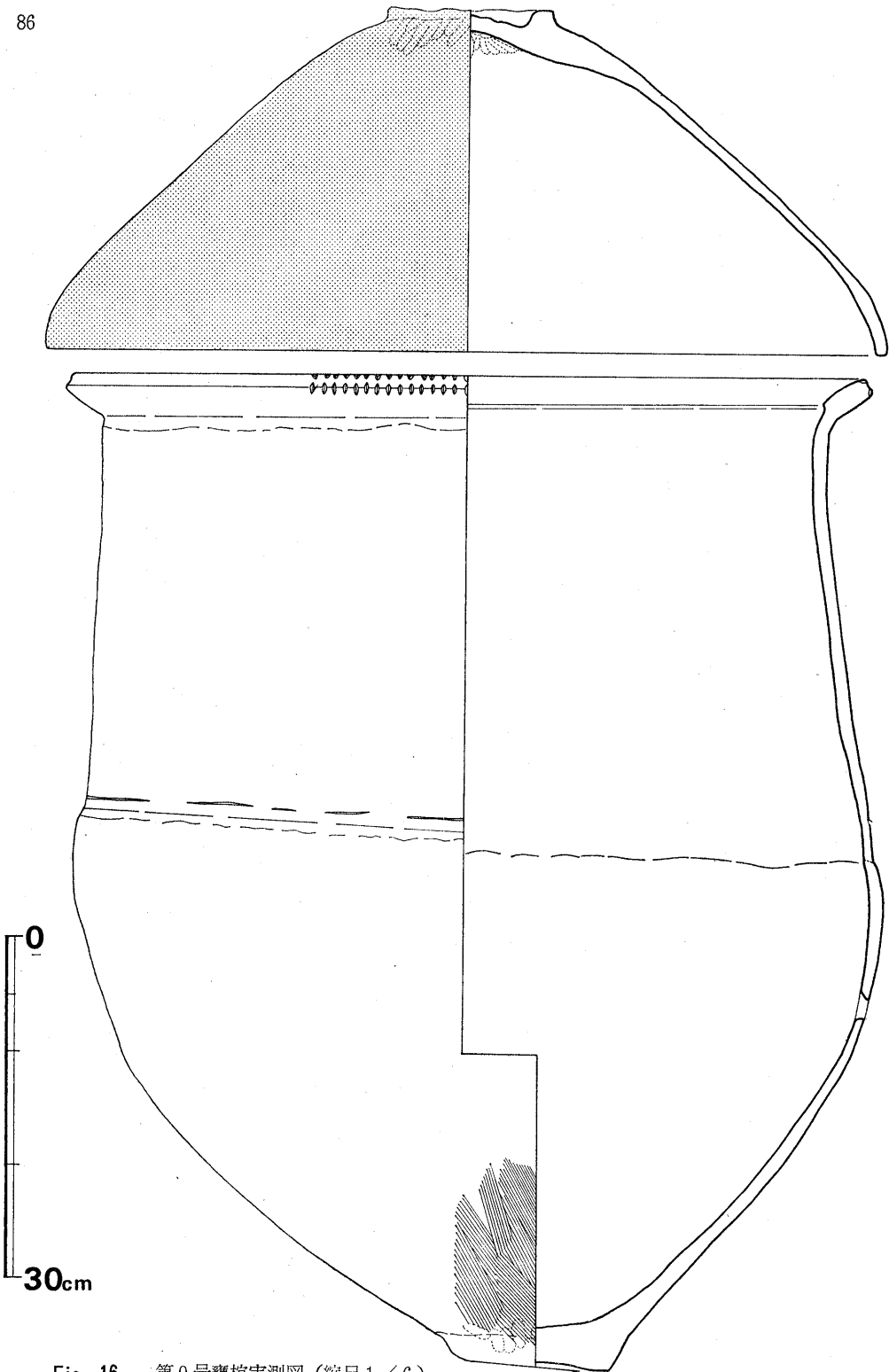


Fig. 16 第9号甕棺実測図(縮尺1/6)

刻目を巡らす。前者刻目の方が後者のそれより大きく刻んでいる。胴部は僅かに張って下へすばまり、底部は僅かな上げ底をなす。口縁～頸部内面は横方向のハケ目の上をナデており、胴部と頸部継ぎ目内面と、胴上部内面とで指オサエ痕が認められる。口縁外面はナデてハケ目をきれいに消しており、胴上半部外面は略横方の粗いハケ目調整を施し、底部に近い胴部外面では指ナデによって消えている。胎土に粗砂粒を多く含み、外面は黒褐色乃至褐色、内面は黒褐色を呈し、全体的に作りは精製である。

下甕は、口縁部を打ち欠き上甕に挿入出来るように調整している。口縁部外反して、口唇部及び頸部凸帯に刻目を巡らす甕形土器であったと思われる。胴部は張らず、現存口径40.2cm同器高43.9cmを測る深い器形である。底部は上げ底で指オサエ痕がみられる。口縁部外面は右下がりの斜めハケ目を施し、胴上半外面は横乃至右下がり方向の粗いハケ目、胴下半に下がるに従って下方への縦方向ハケ目を施す。口縁部内面は右下がりのハケ目が残り、以下はナデ調整によりハケ目を消した痕がみられる。凸帯下縁は下からの指オサエによって波状をなす。胴下半に径1.5cmの円形孔が穿たれている。外面から、焼成後穿孔されている。

**6-B号甕棺** (Fig. 12, P.L. 10-2) は、上棺のほとんどと下棺の上半分を失っており、特に上棺は胴部破片のみで不明である。下棺は胴部の丸く球形状をなす壺形土器である。胴下半部に一孔を穿つ。

**7号甕棺** (Fig. 12, P.L. 11-1) は、大型の甕に花崗岩二板をもって蓋をした単棺であったと推定される。発見時状況は、Fig. 12の如く底部が上方にあり口縁が斜め下方へ開いていた。この棺の埋置状況は後で詳察したい。甕は、推定器高82cm、同口径75cmを測り、焼成極めて軟質で黄白色を呈す。口縁部内面に貼り付けを行ない肥厚させ、内面頸部との境に段をつくる。口唇部端には上下両縁に刻目を巡らし、頸部は長く下方へ広がり、胴部との境目で緩やかに屈曲する。頸部下半に1条のヘラ沈線が巡らされる。底部は平底で、胴部～底部より頸部～口縁部の方が長く、壺形土器の特徴をより顕著に示す土器である。胴部の穿孔は認められない。

**8号甕棺** (Fig. 12, P.L. 11-2) は、上下ともに略上半分を失っており、このうち下棺のみはかろうじて復元可能であった。上棺には底部平底なる甕形土器が使用されていた。下棺 (Fig. 13, P.L. 23) は、口縁が水平に外方へ延び、口唇部上下稜縁に刻目を施し、頸部下半に綾杉文を巡らす壺形土器である。胴部は球形状をなし、頸部は短く、胴部頸部の境の屈曲は不明瞭である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成極めて不良で黄白色乃至褐色を呈す。仕上げ調整は胴外面はヘラ磨きかと一部確認できるが、他は焼成不良の為不明である。胴上部に一孔を穿つ。

**9号甕棺** (Fig. 15, P.L. 12-1) は、大形の甕を下棺に、鉢形土器を上棺にした合わせ甕棺であるが、地山下70cmまで掘り下げて埋置しているので、後世破損はわりと少なく旧状

を留めていた。墓壙は隅丸長方形プランを呈し、上から真直ぐに掘り下げ、下甕の部位のみを更に深く掘り下げていたが、この大甕を埋置するのには最少限度に近い墓壙であるといえよう。なお墓壙縁に接して東隅に2個の花崗岩が上下に重なって検出されたが、墓標的或いは他種性格を有していて、この甕棺への関連の有無は明確ではない。後代における礫群がこの西側にみられるので、そちらへの関連の可能性も強い。上棺 (Fig. 16, P.L. 23) は、口縁部がやや内湾気味に上がる大形の鉢形土器である。底部上げ底面は打ち欠き或いは磨損によって剝落が著しい。口唇部上面は平坦面を示す。口径75.2cm, 器高30.2cmを測るが、器形及び大きさの点からみて大甕胴下半部と類似点が多い。外面は丹塗りであるが手法は粗い。体部内面には細かいハケ目が斜め方向にかすかに残りナデている。口唇上面及び口縁部内面には横方向のナデ調整を行ない、底部内面及び体部外面最下部に指による縦方向オサエ痕が認められる。胎土に粗砂粒を含み、焼成やや不良で内面淡褐色を呈す。下棺 (Fig. 16) は、口径71.0cm, 器高87.8cmを測る大型甕である。口縁部内面を肥厚させて下に段をつくり、口唇部上下稜縁に各々刻目を巡らす。頸部は上へすぼまり、胴部との境で屈曲を見せる。この屈曲部直上にヘラによる沈線がとぎれとぎれに施される。胴部は頸部とほぼ同じ長さで、境目以下でややふくらみを持ち、底部は浅い上げ底を呈する。壺形土器の特徴を残した器形である。全体的に歪みをもつ。口縁直下頸部との境目には指によるオサエナデがみられ、又頸部胴部接続部分もオサエナデが認められる。胴部下半には右下がり斜めハケ目調整が残り、底部付近では指オサエ痕が認められる。外面他部位は横方向ヘラ磨き及び縦横のナデ調整が入り乱れ、内面においても縦横のナデ調整が認められる。胎土には粗砂粒を多く含み、焼成は当甕棺群のうちでは最も堅緻で上半部が黄灰褐色、下半部が茶褐色を呈する。胴部上半に径1.6cmの焼成後穿孔の円形一孔を有す。9号棺の埋置主軸の傾斜角は $39^{\circ}40'$ を測る。

以上当甕棺群を詳述したが、検出した10基に関して言えば、すべて粘土目張り等は認められず、うち9基が上下二個の甕、壺乃至は鉢の組合せによる覆口式の甕棺墓であり、7号棺のみが形態上単棺として考えられるものである。7号棺に関して更に詳細に観察を試みると、まず墓壙断面の形状が9号棺のそれに極めて類似していること、及び蓋石の如く口縁上部に乗っている二枚の石によって蓋となすという埋置法は考えられない。そして、本来ならば9号棺の如く墓壙の深い位置に底部を据えるべきところを何らかの理由で逆に口縁を下方に倒してしまい、然る後棺口縁と墓壙中段部に平石を渡し遺体を覆ったと解される。又木蓋の痕跡も何ら認められなかった。ただこの場合は遺体の甕棺内納入は甕を墓壙に据える以前と考えねばならない。以上のような見解に立つとすれば、この7号棺は葬送当初から単棺石蓋を意図したものと解し難い点も見受けられる。

又墓壙に関してみれば、7号棺、9号棺を除いて、他はすべて浅い為後世削除によってその様相を知ることはできない。ただ7号、9号は大形で墓壙が深いため、全貌を知ることはでき

ないが下半部からある程度観察できる。両棺墓壙においては、弥生中期に盛行するような堅穴後横穴を掘り棺を挿入するという墓壙形態ではなく、堅穴を掘り下げ更に下甕の坐るように片半分を掘り下げるという方法を用いている。墓壙プランは正方形に近い隅丸長方形である。

当甕棺群では人骨出土が全く見られない為断言は出来ないが、いわゆる大型成人用甕棺は2基のみで、他はすべて小型の生活土器を用いた小児甕棺と思しきものである。これらのうちには、ほとんど下甕胴部に穿孔が認められ、孔部位をすべて主軸方向の下位になるように据えている。穿孔不明の数例を除くと7号棺のみが穿孔無しである。9号棺は7号棺とともに大型のいわゆる甕棺用として作られた甕棺であるにも関わらず穿孔がみられるのは、穿孔慣習の形式化を示すものとも考えられ、興味深い。(中間 研志) (註)

(註) 桐原健「仮器の系譜」古代文化25-12(1973年12月)によれば、埋葬容器として用いられる穿孔土器を「日常什器を仮器に転ずる為の穿孔という至極もったもな考察」としてとらえ、弥生甕棺に関しては「什器転用の甕棺には穿孔があり、その土器が当初より甕棺として作成されたものならば完全な形で発見されてよい」と論じているが、この論で当甕棺群をみるとすれば、9号甕棺の場合はあてはまらない。甕棺用土器として作製された甕棺編年の流れの中で当甕棺群の時期を考え、更に先の論文を併考するとすれば9号甕棺穿孔は日常什器を仮器となす意図的な穿孔作業の形式化が見出されると考えられよう。

Tab 1 甕棺墓一覽表

(単位cm)

№	方位	傾斜	墓壙 長さ×幅×深さ	土器	形式	時期	下甕 穿孔	備考
1	N26°W			鉢?+甕	覆口式		○	2号土壙墓を切る
2	N35°E			?+壺	?		○	2号土壙墓を切る
3	N86°E			?+甕	?		?	
4	S6°E			甕?+壺	覆口式	弥生前期後半	○	3号4号土壙墓を切る
5	N1°30'W			甕+壺	覆口式		○	
6A	S4°W	+41°		傘蓋+甕	覆口式	弥生前期後半	○	下甕打欠
6B	S2°E			?+壺	?		○	
7	S15°E	-38°	144×105×85+α	甕	単棺	弥生前期後半	×	石蓋 (花崗岩2枚)
8	N5°30'W	+28°		甕+壺	覆口式	弥生前期後半	○	
9	N25°W	+39°40'	135×95×80+α	鉢+甕	覆口式	弥生前期後半	○	

### (3) 奈良時代の遺構と遺物

#### a) 住居址

3軒の住居址が検出された。うち2軒(1, 2号)は東壁に竈を設けており、1軒(3号)は西に設けている。

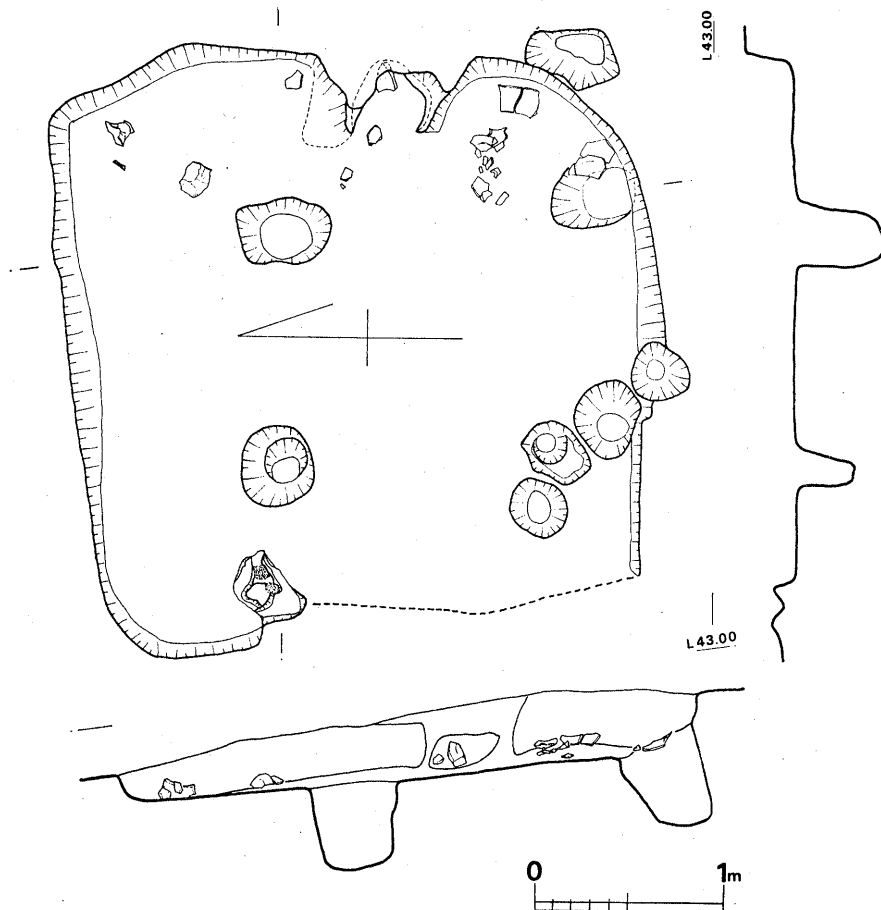


Fig. 17 第1号住居址実測図 (縮尺1/40)

**1号住居址** (Fig. 17, PL. 14) WA 5~6区で検出された。3×3.2mの方形を呈し、東壁側に竈を設けている。北壁側中央に壁上面より深さ30cmのピットがある。このピットの内壁面は加熱により焼けている。また西壁側の床面上には焼土塊及び鉄鏝が集積していた。竈は黄色粘土を盛って作られており、竈中には花崗岩を用いた支脚が立っている。柱は4本である。床面からは土師器、須恵器が出土した。これらはいずれも竈周辺に集中していた。(酒井仁夫)

**1号住居址出土遺物** (Fig. 18, 19, PL. 26) 須恵器坏 (Fig. 18) は内外面ナデ調整で薄手の器壁を有する。器高5.3cm口径15.9cmを測り、胎土精良にて焼成軟質であり淡褐色を呈する。

土師器坏 (Fig. 19-1) は口径13.8cm, 器高5.0cmを測り、高台を有する。胎土は精良で、焼成軟質、剥落著しいが、横ナデ調整と思われる。高坏脚部(2)は、胎土中に砂粒が目立ち、全面横ナデとみ

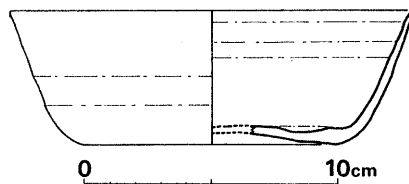


Fig 18 第1号住居址出土器実測図(1)  
(縮尺1/3)



られ脚先端はやや丸味をおびて尖る。3は口縁部が外方へ開き、胴部にふくらみを有し、丸底様平底を呈する。口径14.6cm、器高13.8cmを測り、外底面は二次焼成による煤付着黒変部がみられる。4は内面全体に煤付着し器壁剥落著しいが、外面は右下がりの細かいハケ目調整がみられる。胎土は3と同様、砂粒多く含む。壺(5)は、頸部でしまり、反転して口縁が外方へ開く。胴外面はハケ目が残り、口縁部内外は横ナデ、内面頸部稜線以下は粗い縦ナデ調整を行なう。外面に丹塗り痕が残る。6は直口してやや開き丸味を帯びる口縁を有する。把手接合部が残るので甑と考えられる。外面は荒い縦方向ハケ目がみられ、内面は粗な上向き縦ナデ調整を行なう。胎土は5と同様、粗砂粒多く含む、焼成やや不良で茶褐色呈する。(中間研志)

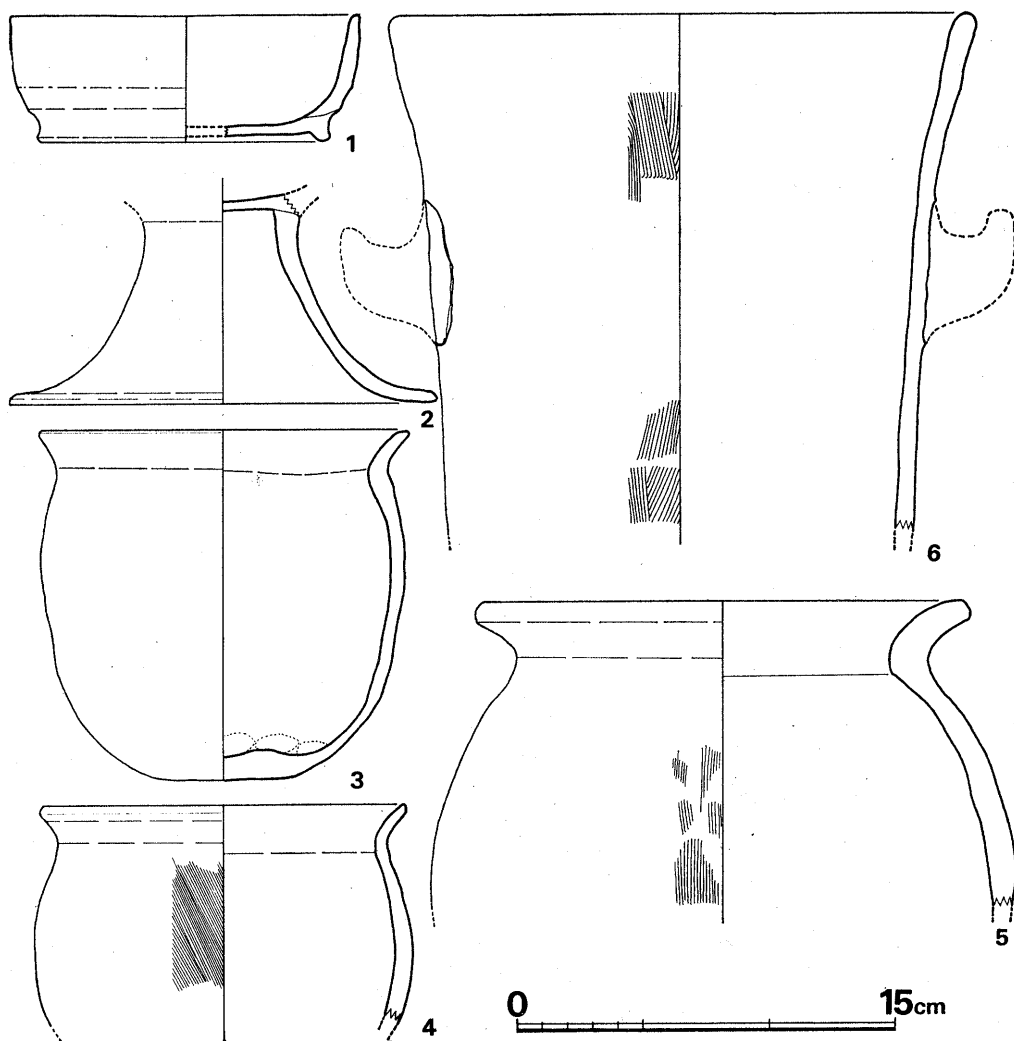


Fig. 19 第1号住居址出土土器実測図 (2) (縮尺1/3)

2号住居址 (Fig. 20, P.L. 15-1) WA 9区で検出された方形の住居址である。地山へ

の掘り込みが浅いので、東壁及び北壁の一部をみるにすぎない。竈は東壁側中央に設けられている。床面上に小さなピットが数多く穿たれており、その範囲から床面積を割り出すと東西長2.8m、南北長3.1mで8.7㎡となる。竈は東壁側中央に設けられている。中央には土製筒形支脚が用いられている。床面の東北隅には壁を広げたかっこうでピットがある。床面には小さなピットが数多く掘られているが、柱穴と考えられるピットは検出されなかった。竈周

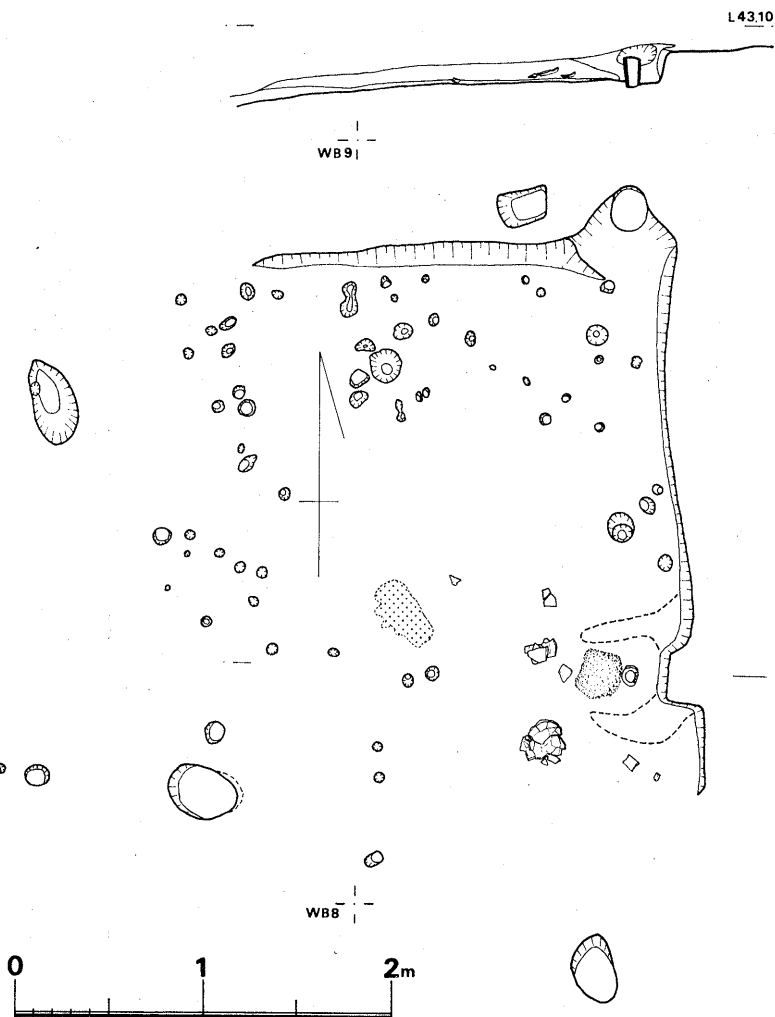


Fig. 20 第2号住居地実測図 (縮尺1/40)

辺の床面上には須恵器、土師器が散乱していた。(酒井仁夫)

**2号住居址出土遺物** (Fig. 21, 22) 須恵器坏 (Fig. 21) は高台を有し口縁やや外開きを呈し、口径12.9cm、器高4.3cmを測る。胎土精良にて焼成堅緻で灰茶褐色を呈し、体部内外面ともにナデ調整を行ない、底部内面は指縦ナデ調整を行なう。

土師器坏 (Fig. 22-1) は、口径11.3cm、器高3.2cmを測るが、器壁外面は剥落極めて著しい。胎土精良にて色調は明茶褐色を呈する。調整不明である。2は口径13.4cmを測り、口縁外反し、胎土に粗砂粒含み焼成軟質で、調整不明である。3は、丸味を帯びる胴部をなし、全体的に二次焼成を受けて黒色乃至暗褐色変している。胎土に粗砂多く含み、底部内面には

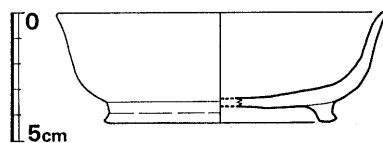


Fig. 21 第2号住居地出土土器実測図(1) (縮尺1/8)

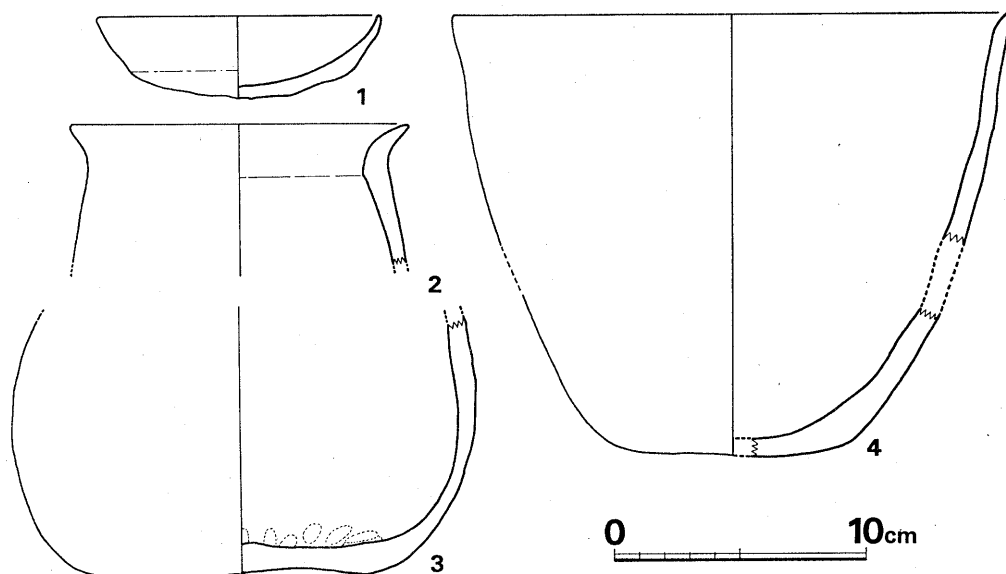


Fig. 22 2号住居址出土土器実測図 (2) (縮尺1/3)

指オサエ痕が残る。4は復元高17.3cm, 口径22.1cmを測り, 体部から口縁に開き, 底部はやや丸味を呈する。胎土に粗砂多量に含み, 焼成軟質で器壁の剥落著しく調整不明であり, 釜様の用途かと考えられる。

土製支脚 (Fig. 23) は竈中央に床面中に垂直に下半部を埋め込まれていたものであり, 現存長17.1cm, 最開部幅10.0cm, 孔は径6.5~3.2cmを測る。床中に埋め込まれた半分下端が黒変折損しており, 当初鍛治用鞆羽口に用いられていたものを転用して基部を上にして支脚として使用したものと考えられる。胎土に粗砂粒極めて多く含み, 褐色乃至灰褐色を呈するが, 外面はヘラ或いは強いナデにより多角形的断面をなす。(中間研志)

3号住居址 (Fig. 24, PL. 15-2) WC 5区を中心に検出された。3.8m×2.8mの長方形を呈する。西壁側に竈が設けられている。竈は壁を掘り窪め, 凹形になった中に黄色粘土を塗り込めて築いている, 地山と黄色粘土との境が一部すいており, 煙道となっている。竈の南わき壁の隅にはピットが2ヶ所あり, いずれも床面と同一レベルの深さである。床面には7個所のピットがあるが, 北壁に近い3個所では深さ10~30cmを計るが, 他はいずれも浅い窪みにすぎない。

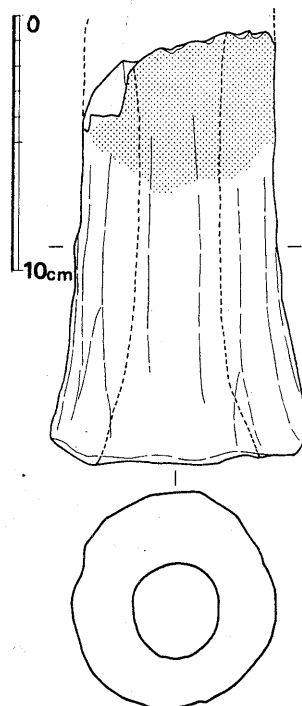


Fig. 23 2号住居址出土支脚実測図 (縮尺1/3)

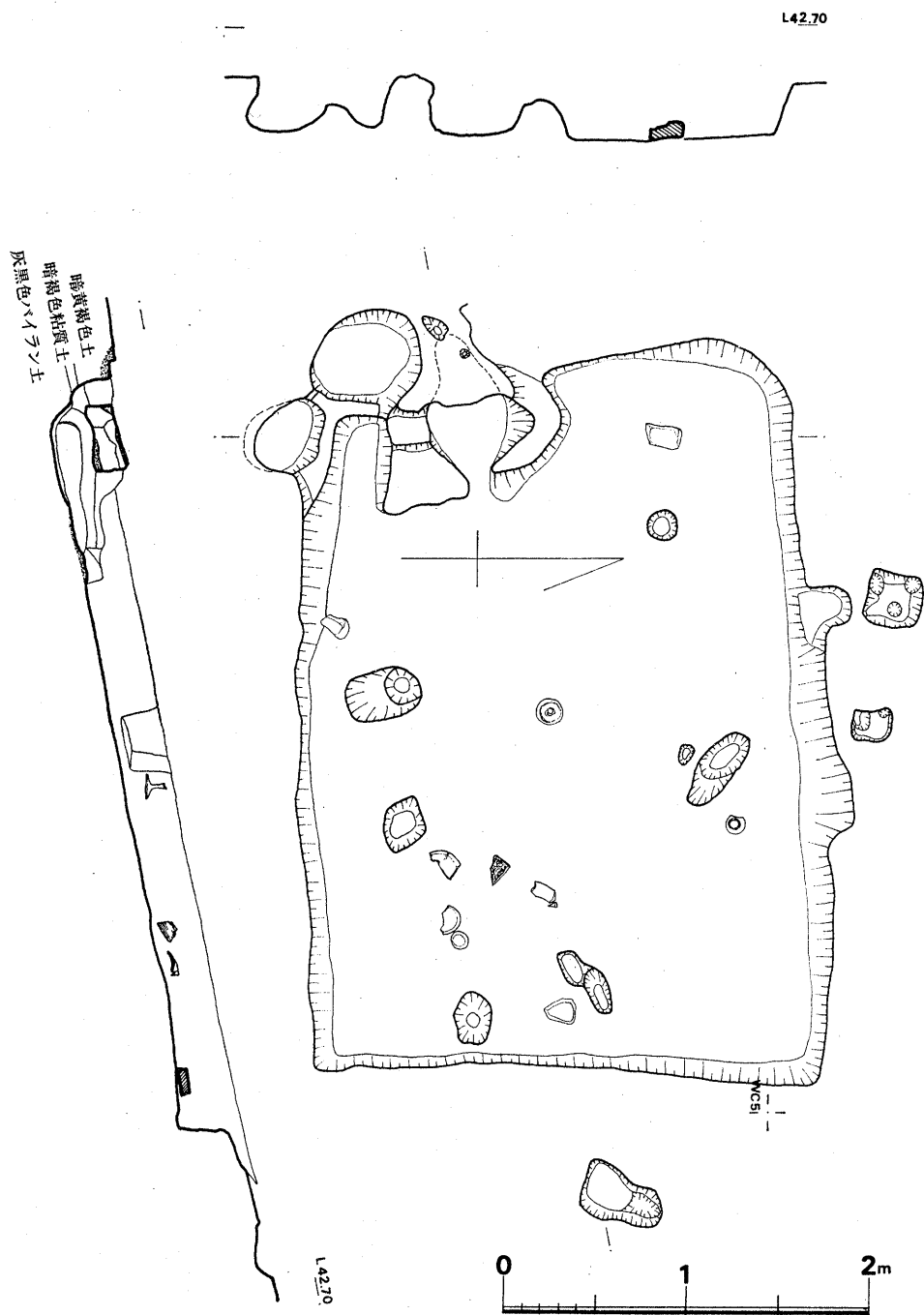


Fig. 24 3号住居址定測図 (縮尺1/40)

床面中央には頭部及び胴上半部のみを残す長頸壺が置かれていた。(酒井仁夫)

3号住居址出土遺物 (Fig. 25, P L. 26) 須恵器坏蓋 (Fig. 25-1) は, 器高3.1cm,

口径15.0cmを測り、丸味をおびた返りがつく。内外面ともにナデ調整を行ない、天井部外面では特に強い。焼成やや軟質で灰茶色呈し、胎土に粗石英粒多く含む。2は、高台付きのやや深い器形をなす坏身である。口径10.5cm、器高5.4cm

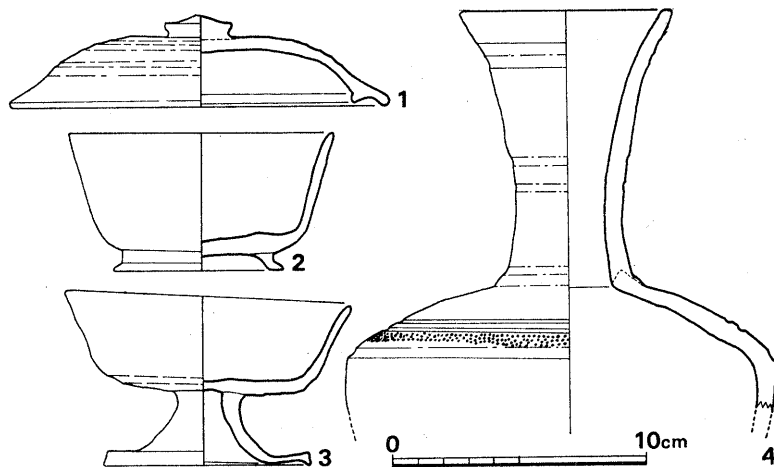


Fig. 25 3号住居址出土土器実測図 (1) (縮尺1/3)

を測り、底部内面に指縦ナデ調整を行ない、他部分も横ナデ調整を施す。胎土、焼成ともに良好で精製なつくりである。3は、口径11.4cm、器高6.6cmを測り、坏部底辺にヘラ削り痕残るが、他は丁寧なナデ調整を行なう。胎土、焼成ともに良好で、2と同様精良なつくりである。長頸壺(4)は胴部に稜を有し口がやや開く器形をなす。口唇部は平坦面をなし、長頸部には凹線部が数本巡らされる。胴部稜線上部には凹線

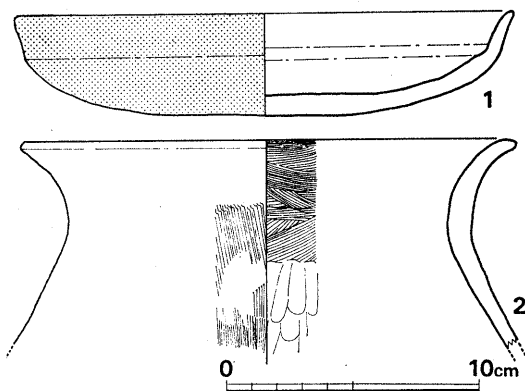


Fig. 26 3号住居址出土土器実測図(2) (縮尺1/3)

にはさまれて刺突連点文帯を有する。頸部内面下半はヘラによる強い縦ナデがみられ、他部は回転ナデ調整を行なう。外面一部に自然釉を残す。

土師器は2点出土している。坏 (Fig. 26-1) は、浅い皿状の器形で、口径19.8cm、器高4.0cmを測り、外面は丹塗り磨研である。胎土精良で、焼成軟質、肌色を呈する。2は、口径19.6cmを測り、胴部の張る器形をなすと考えられる。外面頸部以下は縦ハケ目がみられ、以下は荒い縦ナデ調整を行なう。胎土に砂粒多く含み、黄褐色を呈する。(中間研志)

## b) 土 壙 墓

5号土壙墓 (Fig. 28, P.L. 17-1) WA 8で検出された160×80cmの不整長方形の土壙である。床面の凹凸は著しい。床面の上には炭化木材、藁、焼土が散布していた。しかし壁面、床面とも加熱を受けた痕跡はみられない。火葬墓とするには疑問の点も多いが一応

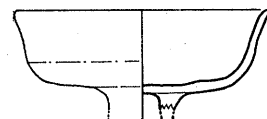


Fig. 27 5号土壙墓出土土器実測図 (縮尺1/3)

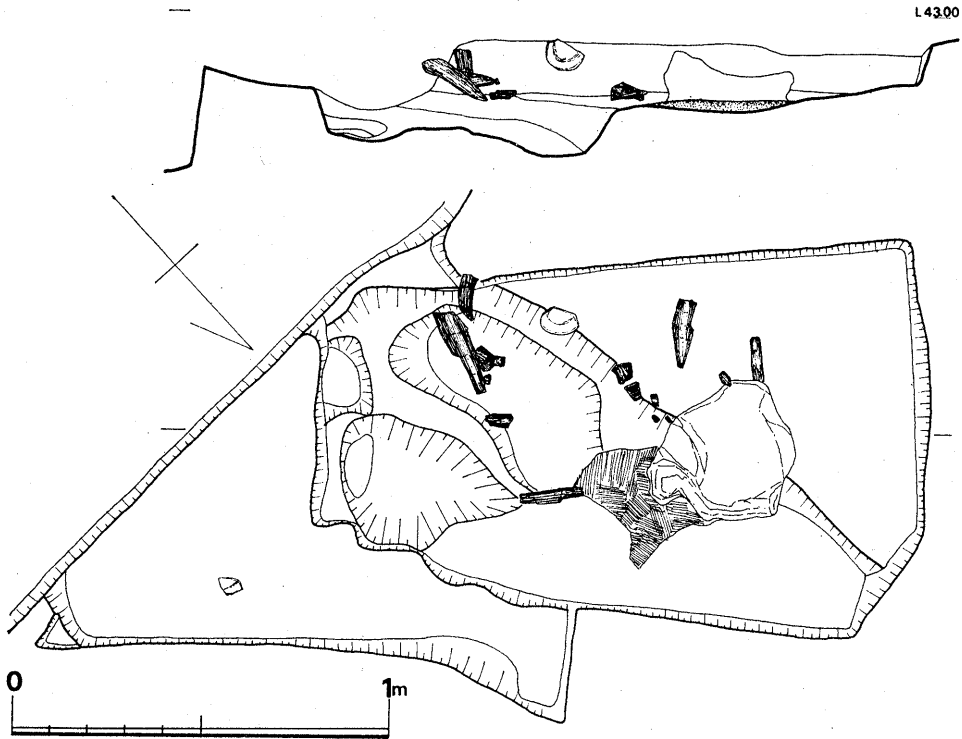


Fig. 28 5号墳墓実測図 (縮尺1/20)

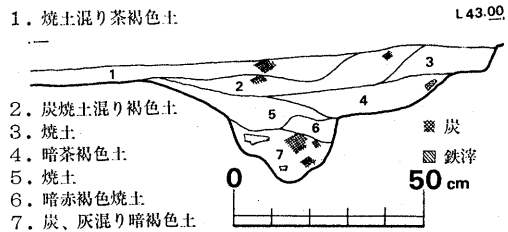
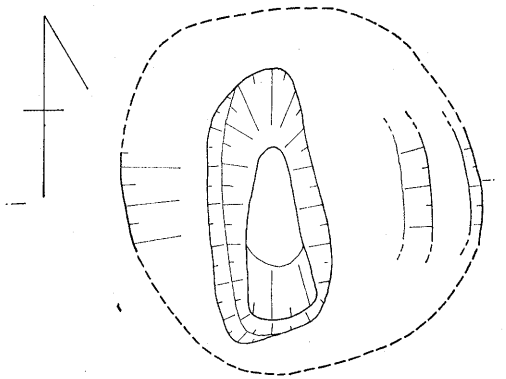
墓と考えた。内部からは床面より約10cm浮いた状態で須恵器が出土した。(酒井仁夫)

**5号土墳墓出土遺物** (Fig. 27) 須恵器高坏坏部1点である。胎土に粗砂粒含み、焼成堅緻にて灰黒色を呈する。口径10.1cmを測り、全体的に薄手精製の短かい脚部を有する器形であろう。内外面ともにナデ調整を行ない、坏部内底面は指縦ナデを行なう。

(中間研志)

c) 焼土入りピット

7個所のピットの内部から多量の焼土や炭化物が出土した。いずれも黄色粘質土から掘り込まれており、壁面は焼けていない。また1, 2号ピットは1号住居址の, 3, 4号ピットは2号住居址の, 5~7号ピットは3号



- 1. 焼土混り茶褐色土
- 2. 炭焼土混り褐色土
- 3. 焼土
- 4. 暗茶褐色土
- 5. 焼土
- 6. 暗赤褐色焼土
- 7. 炭、灰混り暗褐色土

Fig. 29 1号ピット実測図 (縮尺1/20)

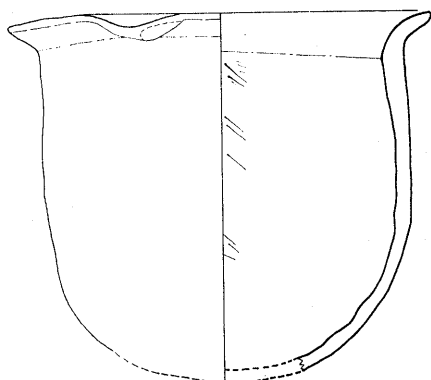


Fig. 30 2号ピット出土土器実測図(縮尺1/3)

住居址にそれぞれ隣接しているところから、竈の灰捨て用のピットとも考えられる。

1号ピット (Fig. 29) WA 4~5で検出されたピットで、径1m程の浅い円形掘り込み中に長さ70cmの楕円形ピットを掘り込んでいる。内部からは多量の焼土、炭とともに須恵甕片、鉄鏝が出土した。

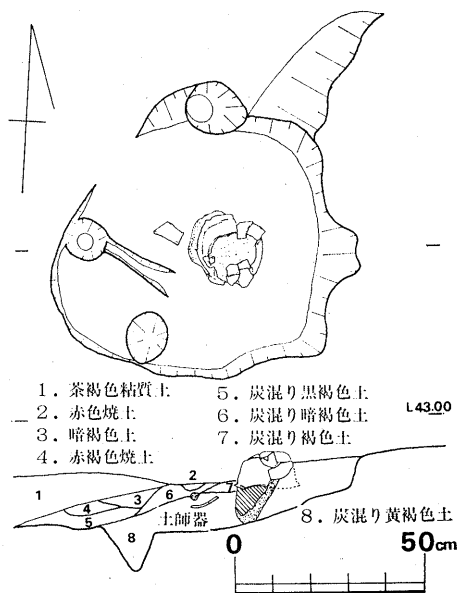


Fig. 31 2号ピット実測図(縮尺1/20)

2号ピット (Fig. 31, PL. 18) WB 7で検出された径70cmの不整形ピットで第1号住居

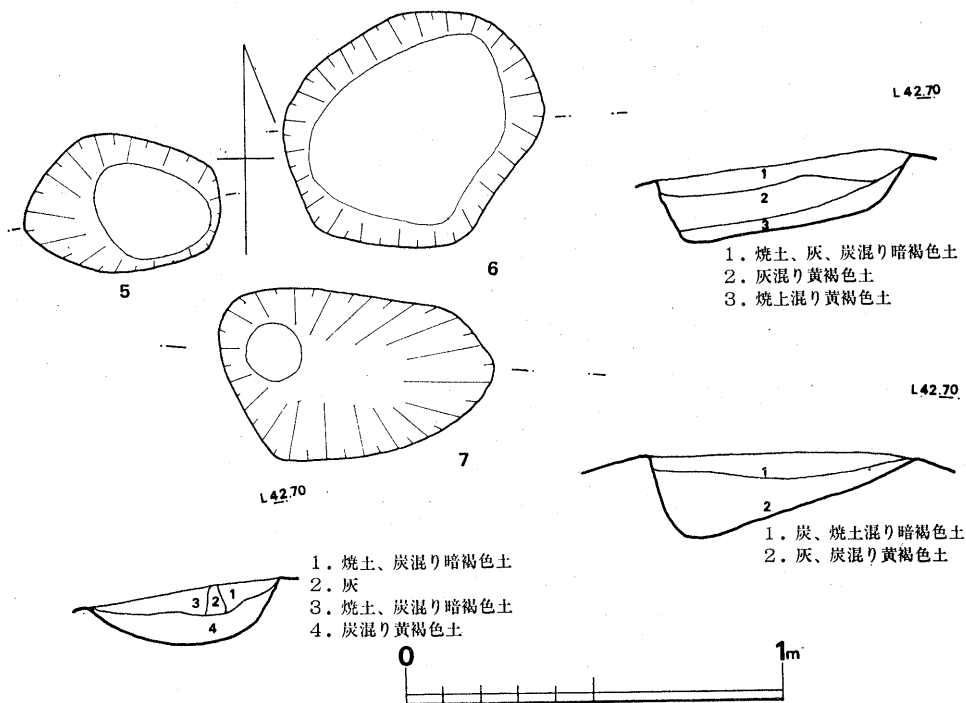


Fig. 32 5~6号ピット実測図(縮尺1/20)

址の北に位置する。斜面に掘り込まれているため、西壁は検出されなかった。壁側の3個所に小ピットが掘られていた。ピット内中央からは焼土のつまった甕が伏せた状態で出土した。

(酒井仁夫)

**2号ピット出土遺物** (Fig. 30, PL. 26) 丸底を呈し、口縁外反する器形の土師器である。口径16.6cm, 器高14.3cmを測り、頸部内面に一部不明瞭な稜を残す。口縁は一部歪んでおり、指オサエにより下方へ曲変している。口縁部内外面は横ナデ調整, 内面稜以下は斜行の荒いナデを行なう。外面は調整不明で下半部には剝落がみられる。胎土に粗砂粒多く含み, 赤褐色の色調を呈し, 高熱に付せられた形跡がみられる。(中間研志)

**3, 4号ピット** WA 8で検出された径約10cmの円形ピットである。2号住居址に隣接している。

**5～7号ピット** (Fig. 32) WC 4で検出された3基のピットである。いずれも第3号住居址に隣接している。(酒井仁夫)

d) 黄褐色土層出土遺物 (PL. 25)

**須恵器** (Fig. 33)

坏蓋 (Fig. 33-1~4) 1は壺或いは高坏の蓋と考えられ, 天井部 上面カキ目調整が行なわ

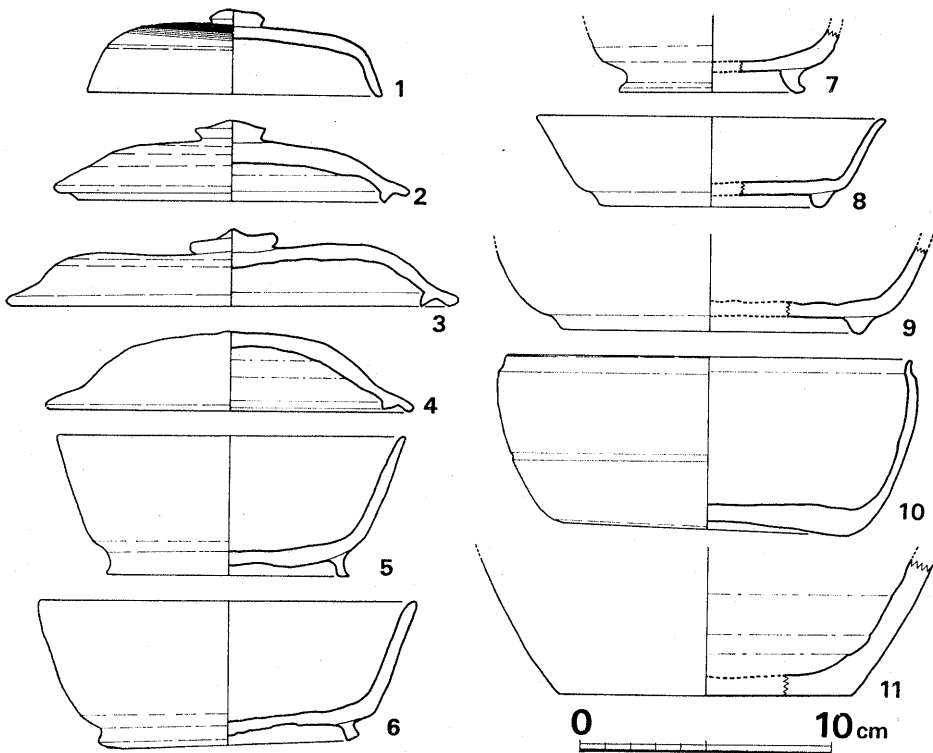


Fig. 33 黄褐色土層出土土器実測図 (1) (縮尺1/2)



れ、かえりがみられず下縁端は平坦面をなす。口径11.7cm, 器高3.3cmを測る。2, 3, 4はかえりを有するものであるが, 4はつまみを持たない。2, 3は, 外面にヘラ削りを行なう。2は, 口径14.1cm, 器高3.2cm, 3は口径18.0cm, 器高3.0cm, 4は口径14.6cm, 器高3.1cmを測る。いずれも胎土に砂粒を含み焼成堅緻である。

坏身 (Fig. 33-5~9) いずれも高台を有するが, 5, 6は, 体部が真直ぐに上方へ開く。7は高台が反転気味に張り出し, 8, 9は低く丸味を帯びた断面梯形の高台を有する。5, 6, 7は`底部体部間がヘラ削りを残し`8, 9は全面にナデ調整を行なう。5は口径13.8cm, 器高5.5cm, 6は口径15.0cm, 器高5.7cm, 8は口径13.9cm, 器高3.5cmを測る。7, 8においては底部内面に指縦ナデ調整が認められる。5, 6, 8は, 胎土に砂粒を僅かに含み, 7, 9は精良である。焼成は9のみ軟質で灰白色を呈し, 他は堅緻で灰色~灰黒色を呈す。10は, 口縁部が細まり少しく外反して器壁薄く底部の厚くやや上げ底の器形をなし, 体部には凹線がみられる。全体に赤褐色を呈し胎土には大きな砂粒が含まれており, 焼成はやや良好である。底部から側面一部にかけてヘラによる調整をしている。口径16.0cm, 器高6.7cmを測る。11は, 平底の壺底部で内面は強いナデ調整を行ない, 他面もナデ調整による。胎土に幾分砂粒を含むが焼成堅緻で灰色を呈す。

#### 弥生式土器 (Fig. 34-1)

底部円盤貼り付けを行なった胎土精良な土器である。焼成軟で, 茶褐色を呈し, 板付I式小壺形土器底部であろう。

#### 手捏ね土器 (Fig. 34-2)

胎土に砂粒を多く含み, 高坏形の器形をなす。坏部下位から脚部まで指によるオサエ及び強いナデがみられ, 他面は丁寧にナデ調整

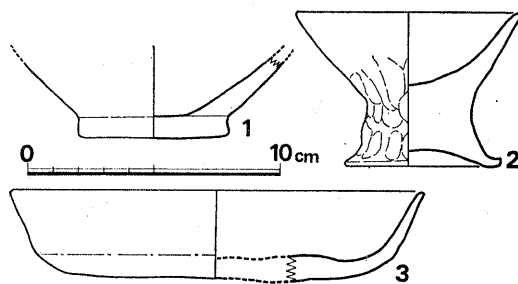


Fig. 34 黄褐色土層出土土器実測図(2) (縮尺1/3)

を行なう。脚部底面は上げ底状におさえて, 焼成は軟で灰褐色を呈する。口径8.9cm, 器高6.0cmを測る。

#### 土師器皿 (Fig. 34-3)

口径16.4cm, 器高3.4cmを測り, 底部肥厚する。内外面ともナデ調整を行ない, 胎土精良で焼成軟黄茶褐色を呈する。(中間研志)

#### 磨製石剣 (Fig. 8-7)

先部及び側刃が一部欠損しているが, 全体的によく磨かれている。現在長8.6cmを測るが, 基部は新しく折られた形跡はなく同様に磨かれており, 石戈様に斜めに切れている。鋒先部のみ稜が残り以下は不明瞭である。裏面中央部はやや平坦部をなし磨きが雑になっている。黄褐色土層出土品で, 石材は粘板岩を用いる。(中間研志)

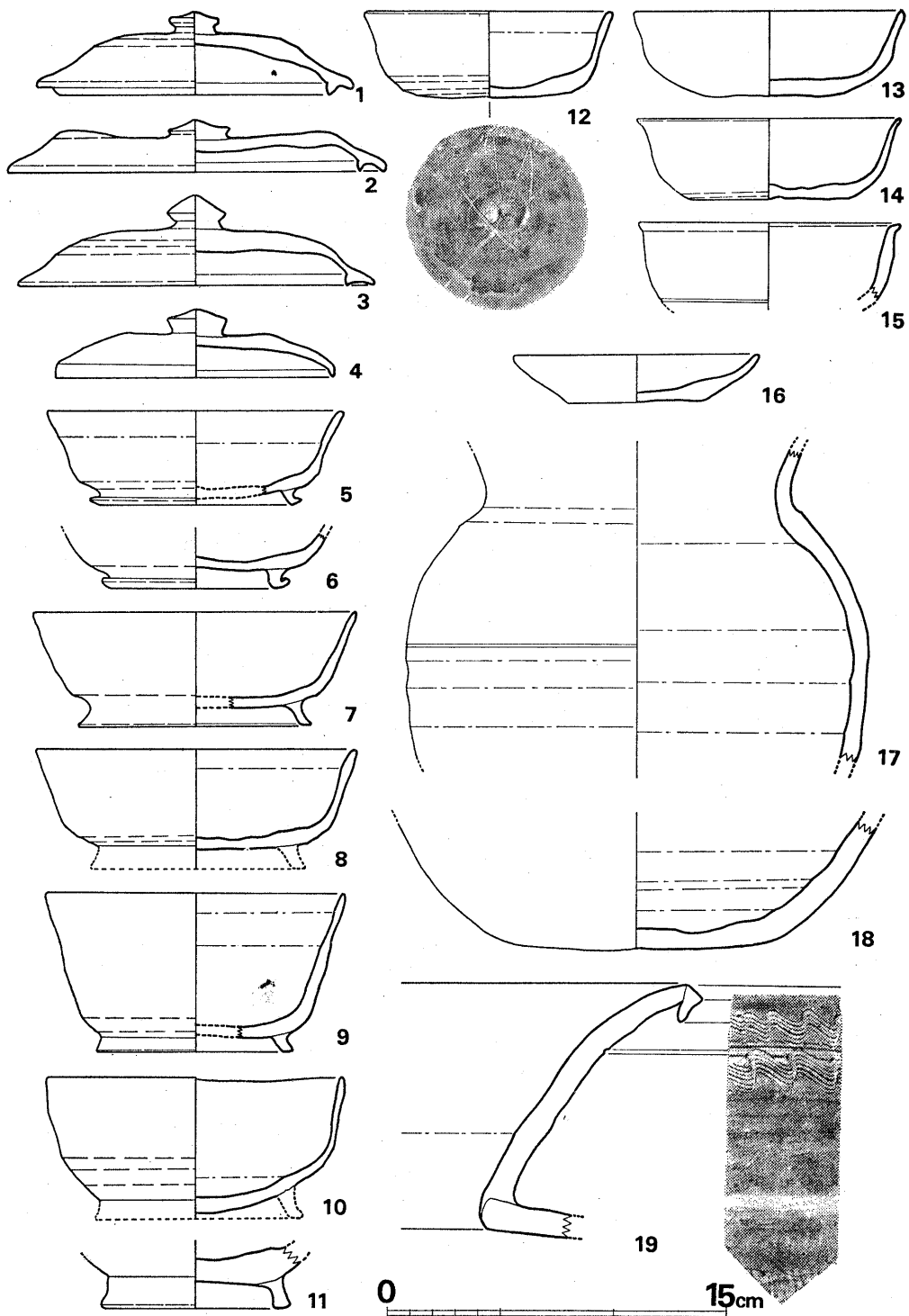


Fig. 35 茶褐色土層出土土器実測図 (1) (縮尺1/3)

e) 茶褐色土層出土遺物 (PL. 25)

須恵器 (Fig. 35, 36)

坏蓋 (Fig. 35-1~4) いずれもつまみを有するが、返りのやや長いもの (1), 返りの短いもの (2, 3), 返り無く、先端が下方へ折れ尖るもの (4) などがある。1~3は天井外面にヘラ削りを行ない, 1, 2, 4は, 天井内面に指縦ナデ調整を行なう。焼成いずれも堅緻にて灰黒色乃至青灰色を呈する。胎土はいずれも砂粒を含み, 特に4は多い。1は口径14.0cm, 器高3.6cm, 2は口径16.7cm, 器高2.3cm, 3は口径15.8cm, 器高3.9cm, 4は口径12.3cm, 器高3.0cmを測る。

坏身 (Fig. 35-5~16) 高台を有するもの (5~11), 高台を有しないもの (12~15) に大別できる。高台を有するものにも, 浅いもの (5~8), 深いもの (9~11) がある。5, 6は高台端が曲げられ外方へ跳上がり, 特に6は甚だしい。5, 6の底部外面はヘラ切り離し痕残る。11は高台高く深い器形をなすと思われる。いずれも焼成堅緻で灰黒色乃至青灰色を呈する。胎土は5, 9が精良で, 他はいずれも砂粒を含む。5, 6, 8, 10は底部内面に指縦ナデ痕を有する。5は口径13.2cm, 器高4.1cm, 7は口径14.3cm器高5.0cm, 8は口径14.2cm 9は口径13.2cm, 器高6.9cm, 10は口径13.2cmを測る。12, 14は底部ヘラ切離し痕が残り, 12, 13は, 底部内面に指縦ナデ痕がみられる。12は, 底部にヘラ記号がみられる。15は口縁端が外方へ押し広げられ, 体部下部に沈線を有する。12~15は, いずれも砂粒を含み, 12, 13は, 焼成

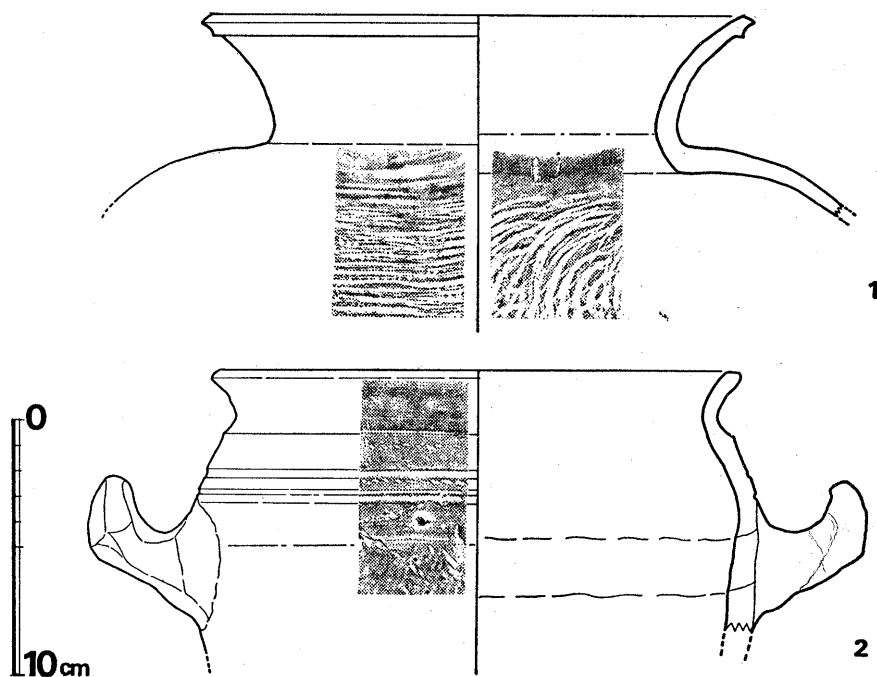


Fig. 36 茶褐色土層出土土器実測図 (2) (縮尺1/2)

やや不良で灰褐色を呈するが、14, 15は、焼成堅緻で青灰色を、灰黒色を呈する12は口径11.0cm, 器高3.7cm, 13は口径11.9cm, 器高3.7cm, 14は口径11.6cm, 器高3.5cm, 15は口径11.6cmを測る。16は小皿様の器形で口径11.0cm, 器高2.1cmを測り、焼成不良で調整不明である。壺 (Fig. 35-17, 18, Fig. 36-1) 17は口の広い器形を有し、胴部に浅い沈線をみる。内外面ともにナデ調整を行なう。18は丸底であるが内面に強いナデ痕がみられる。ともに焼成不良であり、18は胎土に粗砂粒をかなり含む。Fig. 36-1は、広口で胴の張る器形を示し、胴部外面に横条状叩目を、内面に青海波文叩目を施し、頸部は横ナデ調整を行なう。胎土に粗砂粒極めて多く、焼成堅緻で鼠色を呈する。

甕 (Fig. 35-19) 口縁端下方へ折れ、頸部大きく開く。口48cm内外になり、頸部外面には沈線の下に櫛描波状文を施す。胴外面には、格子目様叩目を、内面には荒い青海波文叩目を施す。胎土に粗砂粒を含み、焼成堅緻で青灰色を呈す。

甌 (Fig. 36-2) 指による手捏ねのままの把手を有し、口縁外反する。胴上部に強いナデを残し、その間に沈線を巡らし、連点文帯を2条有する。把手接合部裏面には指オサエ痕が残り、又輪積み痕も明瞭である。胎土に僅かに粗砂を含み、焼成堅緻で青灰色を呈する。

#### 土師器 (Fig. 37)

1, 2は皿状の器形をなすが、1は立ち上がり部内外に稜をなすが、2は滑らかに立ち上がる。2は外面にヘラ痕が認められ、1は精製、2は粗な感を与える。1は胎土精良で焼成軟、白茶色を呈し、2は胎土に粗砂粒をかなり含む、焼成軟、灰茶色を呈する。口径各

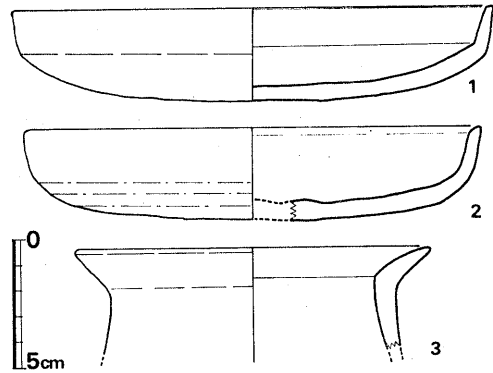


Fig. 37 茶褐色土層出土土器実測図(3) (縮尺1/3)

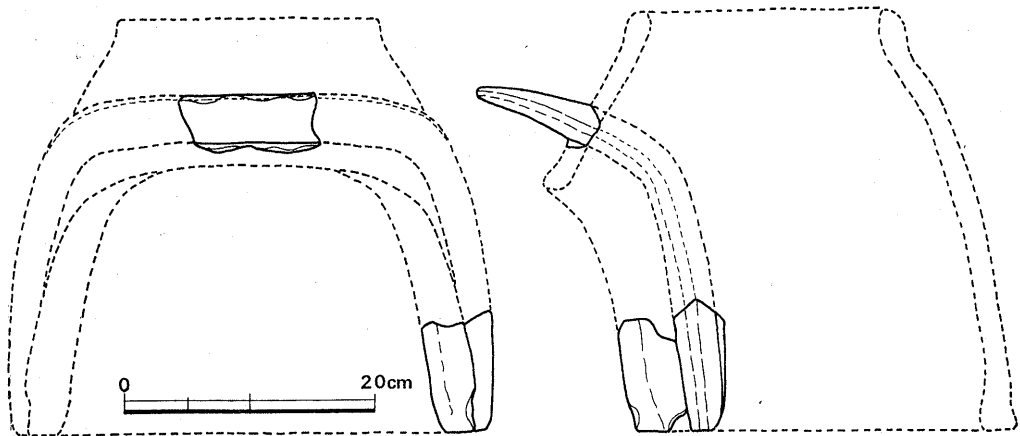


Fig. 38 土師質甕実測図 (縮尺1/6)

々, 19.0cm, 18.1cm, 器高3.6cm, 3.6cmを測る。3は, 先端細まる口縁が開き, 頸部内面は稜をなす。胎土に砂粒極めて多く含み, 焼成不良で暗灰褐色を呈す。調整不明でナゲと思われる。(中間研志)

#### 土師質竈 (Fig. 38)

WC 3区茶褐色土層より出土した3破片である。破片の為, 想像復元の域を出ないが, 底部破片は上向きで長く, 底の続きとなると思われる底部位の凸帯片と焚口部前面底部片とが接合し, その前後, 左右の傾きにより復元した。全体の高さ及び上面孔部の大きさは, 当遺跡出土土師器甕類の最大胴部径及びそれ以下の長さを加味考慮した。胎土に粗砂粒多く含み, 底部辺及び内面は二次焼成の為黒変している, 大きさなどからみても実用に供したと思われる。復元には諸論文, 報告書を参考とした。(中間研志) (註)

- 註 1. 鏡山 猛 「土師質竈の新例」九州考古学 1号 (1957)  
 2. 齋藤 忠 「日本考古学図鑑」図版 81 (1955)  
 3. 坪井清足 「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 (1956)  
 4. 亀井明德・横田賢次郎 「成屋形遺跡」 (1970)

#### 鉄製品 (Fig. 39, 40)

Fig. 40 は, 茶褐色土層出土の鉄製品である。1は先端部, 基部が欠損しているが, 鋒先がややそり返り, その形状から鉈と考えられる。

4は断面角形を呈し, 両端とも欠損している, 詳細は不明である。2,

3, 5は, 用途不明鉄器であるが, 断面一定せずU字形に曲げられたもの(3)や, いくらか曲がったままの棒状のもの(5)など, 小鍛冶による半製品と解されるものである。Fig. 39も, 黄褐色土層出土の鉄製品であるが, 1は基部折損し, 先端部のみ片刃をなし, 刀子様工具かと思われるが, 2の未製品様の鉄片と同様半製品と考えられる。(中間研志)

#### 鞆羽口 (Fig. 41, P.L. 25-2)

多量の鉄滓とともに黄褐色土層, 茶褐色土層より出土したものであり, いずれも土製である。1は, 現存長12cm, 孔径2.3~1.9cm, 2は現存長11.5cm, 孔径2.6~1.9cmを測り, いずれも折損していて復元長は定かではない。孔は, 1が中央部でやや細まり先端部へ開き, 2は先端部へ一様にすばまる。2の断面形はいくらか多角形的である。胎土にはいずれも多量の粗砂粒を含み, 先端部には鉄滓がこびりつきそれに接する外面は黒変している。1は特に部分的に

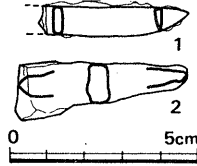


Fig. 39 黄褐色土層出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

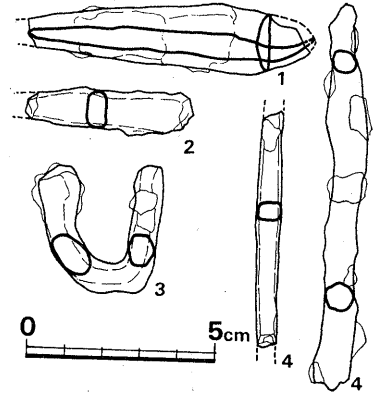


Fig. 40 茶褐色土層出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

落剥が著しくその部は灰白色を呈する。

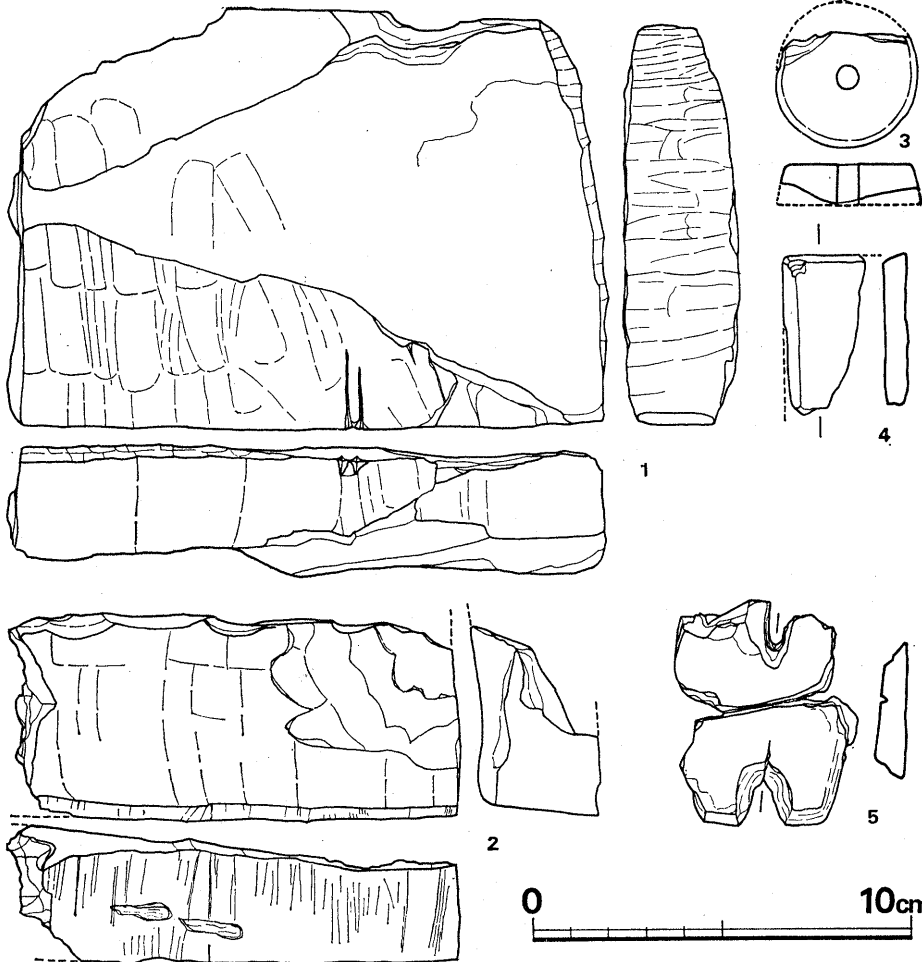
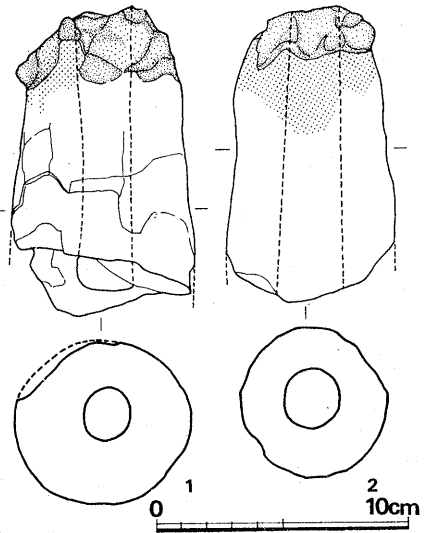
**滑石製品 (Fig. 42, PL. 24)**

茶褐色土層のうち、WC 5～6区に集中出土したもので、板状加工品2点、紡錘車1点、他不明加工品2点がみられる。1は一部欠損しているが、 $15.5 \times 10.9\text{cm}$ の略長方形、厚さが最大 $3.5\text{cm}$ の板状のもので、四側面及び表面にノミ痕が残る。下側辺部には、半裁しようとした痕跡と思われる二本の小溝が刻まれており、現に左下半部のノミ痕の明瞭な部分と左上部とは破片として発見され、

**Fig. 41**

1の如く3個が接合したものであり、滑石小形製品の為の原材と考え

鞆羽口実測図  
(縮尺1/3)



**Fig. 42** 滑石製品実測図(縮尺1/2)

られる。2も1と同様のものと考えられる。3は紡錘車で、径3.8 cm、厚さ1.0 cm、孔径6 mmを測る。4は不明加工品であるが、表及び両側面を面取りして丁寧に磨いている。5は、十字方向に外方より抉りが入り、上下の抉りはやや丸味を帯びて大きく、左右の抉りは鋭く、この間は表面のみに小溝によって継がれている。裏面はほぼ平らであるが、調整を行なった形跡はなく、表面は磨かれ、左下端面は丁寧に面取りされ磨かれている。石錘として使用されたものか、或いは岩偶的性格を有するか、又或いは、小溝の上下で同様のもの（例えば、勾玉のようなもの）を作る為に中央小溝で折半しようとしたものであるか、諸説入り乱れて不明である。

#### 砥石 (Fig. 8-8, 9)

2個出土したが、8が茶褐色土層、9が黄褐色土層中よりの出土品である。わりと小型であり、8は表裏面ともに中央が磨滅しへこむまで使用しており、更に両側面も面取り後使用している。砂岩質の粗砥石に用いられたものであろう。9は、頁岩製で、両側を自然面のまま残り、裏面も使用せず、専ら表面のみを使用して、きめ細かな面を仕上げ砥石として用いたものと思われる。(中間研志)

#### f) 黒褐色土層出土遺物

##### 須恵器 (Fig. 33, P.L. 26)

坏蓋(1, 2) 1は断面三角形かえりでつまみを有するが、焼成時歪みがみられる。口径12.9 cm、器高2.0 cmを測る。内外面とも回転ナデを行なうが、天井部内面は指縦ナデ調整がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成堅緻にて灰黒色を呈する。上外面に「T」字状のヘラ記号がみられる。2は、外縁端部押し曲げ、鈍い先端をなす。天井上部にはヘラ調整を行ない、他

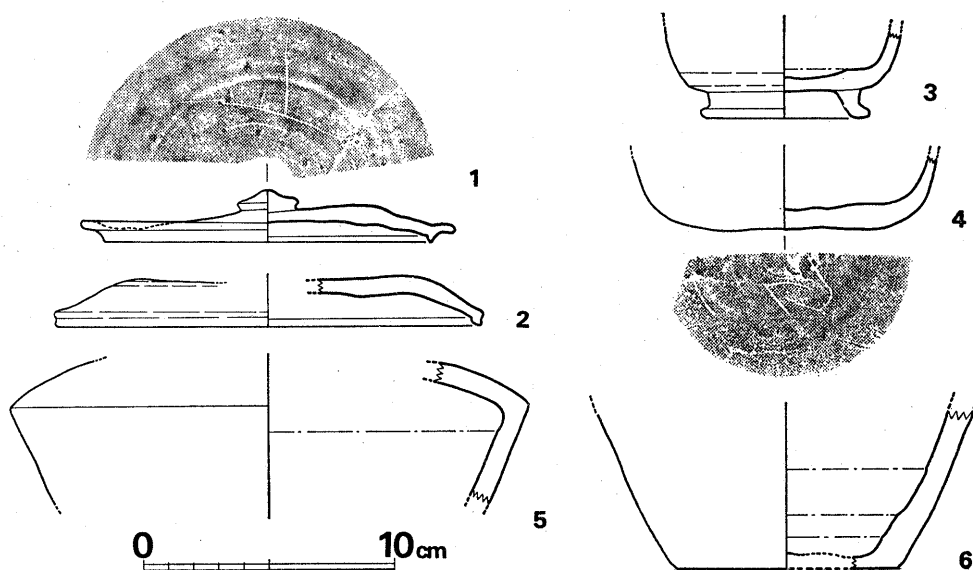


Fig. 43 黒褐色土層出土土器実測図(1) (縮尺1/3)

はナデている。擬宝珠様つまみを有するものであろう。焼成やや良で灰色を呈し、胎土に僅かに粗砂粒を含む。

坏身(3, 4) 3は、太く丸味のある高い高台を有して、深い器形であろう。体部から底部への部分にヘラ削りを残し、他はナデ調整である。幾分砂粒を含み、焼成堅緻灰黒色を呈する。4は、底に矢印様のヘラ記号を有し、丸底の器形をなす。底内部に一部指縦ナデ痕がみられ、他は回転ナデによる。焼成堅緻である。

壺(5, 6) 5は、長頸壺胴部でやや鋭い稜をなす。内外面ナデ調整で、僅かに粗砂粒を含むが焼成やや良にて灰色を呈す。6は、内面に強いナデ痕を残し、底部の器壁が薄くなっている。体部と底面は明確な稜をなし平底である。焼成堅緻である。

#### 土師器坏 (Fig. 44)

F B 3区柱穴中り出土し、器壁の厚い糸切底を有す。口径11.4 cm, 器高2.9 cmを測り、胎土に砂粒を含み、色調は茶褐色を呈する。(中間研志)

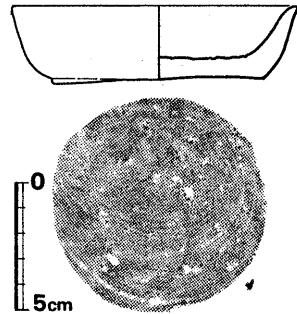


Fig. 44 黒褐色土層出土土器  
実測図(2) (縮尺1/3)

#### (4) 中世の遺構と遺物

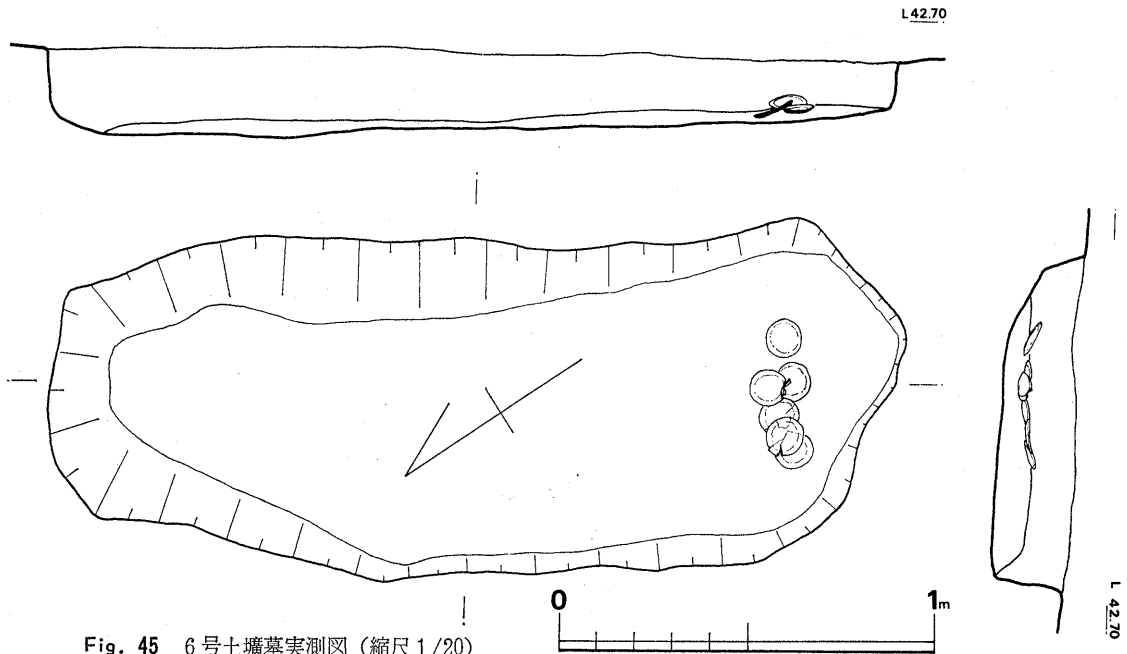


Fig. 45 6号土壙墓実測図 (縮尺1/20)



### 6号土壙墓 (Fig. 45, PL. 19)

WB 7で検出された長さ230×80 cmの不正長方形土壙である。床面は南から北へ向ってやや傾斜している。床面の南側隅には土師坏が6枚重ね置かれていた。(酒井仁夫)

### 6号土壙墓出土遺物 (Fig. 46, PL. 27) 土師器の浅い小皿6枚である。粗砂粒を少量含む胎

土で、焼成不良淡褐色を呈し、底部と体部の区別が付きにくいことなどいずれも同一規格のものである。口径10.0~10.6 cm, 器高1.2~1.5 cmを測り、内外面強いナデで全体に歪み、底部はヘラ起こし痕及びすのこ圧痕がみられる。

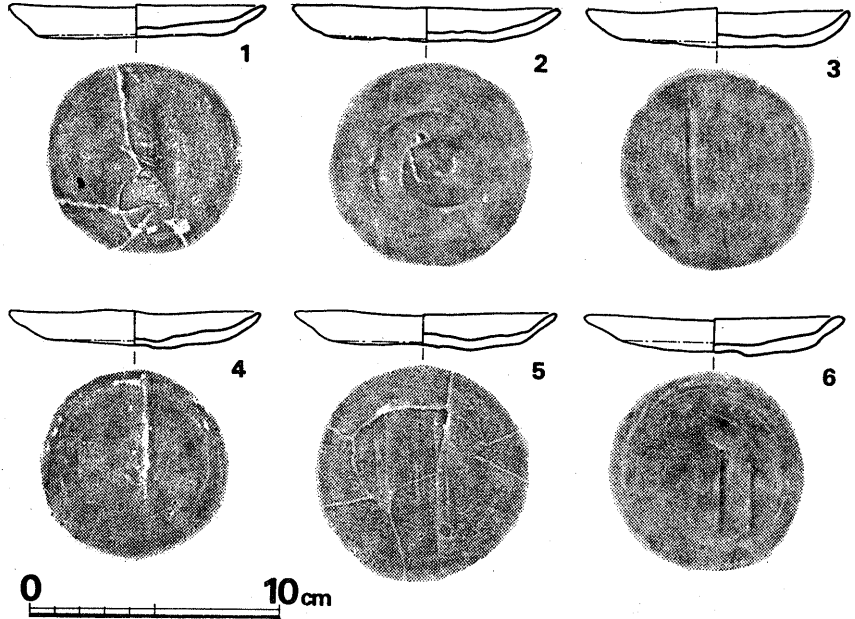


Fig. 46 6号土壙墓出土土器実測図 (縮尺1/3)

鉄釘 (Fig. 47, PL. 25-1) 土壙北端上面のみにかたまって出土した。この土壙に伴うものであるか明確さを欠く。個体数4本以上を検出したが、いずれも木質を付着している。頭部は丁字形をなし、断面をみるといずれも正方形乃至長方形の角釘で木心である。1は完形で、9.9 cmを測り、他も同規格であろう。頂部以下2 cmは横位の柁目のある木質を付着し、それ以下は縦位の柁目の木質が付着しており、2枚の直交する板を打ちつけていたことを示す。ただ、4は斜め方向の木質がみられるが、これも柁目と直角の厚さは2 cmで、同様の板に打たれたものと考えられる。或いは木棺に使用されたものか、と推定される。

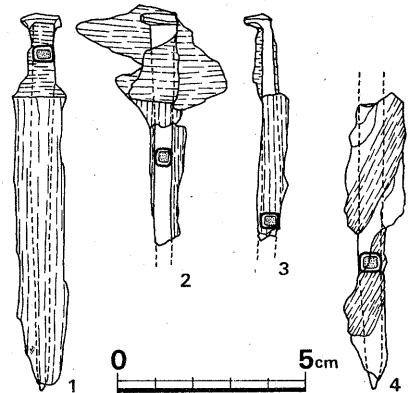


Fig. 47 6号土壙墓出土鉄釘実測図 (縮尺1/2)

(中間研志)

**7号土塚墓 (Fig. 48, PL. 17-2)**

WC10で検出された130 cm程の長さの楕円形土塚である。北壁は水田法によって切られている。床面は南から北にむかって傾斜している。土塚中央の床面上からは土師坏が伏せた状態で出土した。

(酒井仁夫)

**7号土塚墓出土遺物 (Fig. 49)**

底部糸切りの土師器坏身である。口径12.8 cm, 器高2.8 cmを測り, 内外面とも

に指ナデが強く外面は稜三木が残る。胎土精良で, 全体として薄い器壁をなし, 焼成不良で茶褐色の色調を呈する。(中間研志)

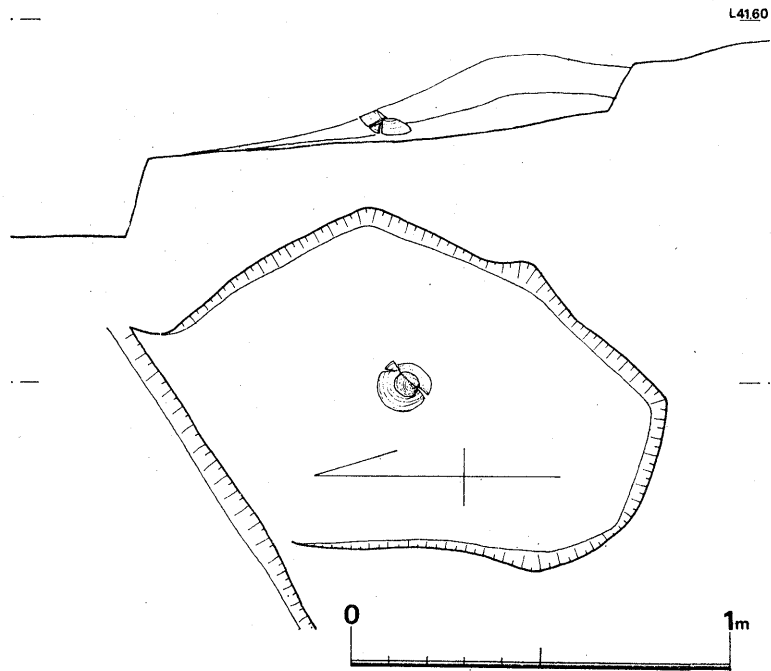


Fig. 48 7号土塚墓実測図 (縮尺1/20)

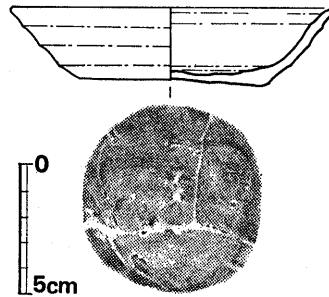


Fig. 49 7号土塚墓出土土器実測図 (縮尺1/3)

## 4 小 結

### (1)

弥生時代から中世に到る各種遺構、遺物の概要を記してきた。その中で集中的に検出された遺構、遺物は7世紀後半を中心とする例である。

太宰府郭内及びその周辺における7世紀から8世紀の集落調査例は極めて少なく、また1遺跡ごとの検出された住居址軒数も5軒以下である。

今回検出した各住居址の規模は次の通りである。

1号	方 形	2.7m×2.8m	7.6㎡
2号	方 形	2.8m×3.1m	8.7㎡
3号	長方形	3.7m×2.6m	9.6㎡

これらは床面出土遺物の検討によって、並行関係にあったと考えられる。また1, 2号間の距離は9m, 2, 3号間は12m, 3, 1号間は5mあり、並列しうる間隔である。なお丘陵鞍部は耕地整理や宅地造成によってすでに削平されており、若干の家屋軒数の増加は考慮せねばならない。

### (2)

太宰府周辺で調査された7世紀から8世紀の住居跡、検出例は他に3遺跡ある。

太宰府政庁跡中軸線に接した菅公館跡は現在太宰府天満宮の末社、榎社となっている。この周辺から2地点計6軒の住居跡が検出されている<sup>註1</sup>。うち1軒は榎社南辺畑地より検出された奈良期の例、5軒は榎社西辺字鼓石の平安期の例である。鼓石の5軒の規模は次の通りである。

1号	不正円形	6m×5m	27㎡
2号	橢円形	5.5m×5.3m	25㎡
3号	長円形	4.5m×3.5m	13.5㎡
4号	橢円形	4m×3m	13.5㎡
5号	円 形	3m×?	?

家屋規模には大小2種があり、小さい家屋の床面積は塔ノ原の例に近い。

太宰府郭内西北隅より西北方約1.5Kmの太宰府町大字水城字成屋形からは3軒の住居址が検出されている。規模は次の通りである<sup>註2</sup>。

1号	方 形	3×3.22m	9.66㎡
2号	方 形	3×3.15m	9.45㎡
3号	円 形	径3m	7.07㎡ <sup>註3</sup>

1, 2号住居址は切盛りしているが、いずれも7世紀後半に、3号は8世紀後半に位置づけられている。周辺の発掘調査によっても同時期の住居址は検出されていない。なお成屋形遺跡の南東300m程の裏ノ田遺跡では27軒の6世紀前半の住居址がみつまっている<sup>註4</sup>。

朝倉郡夜須町大字三並字八並の調査<sup>註5</sup>によって5軒の住居址が検出されたが、うち4軒は弥生時代のものであり、8世紀中葉の住居址は1軒のみである。周辺では広く遺構の検出を計ったが、他には同時期の住居址はみられなかった。(附編参照)

この住居址は5.3×5.7mの方形を呈し、面積は30㎡と、この時期にあっては大規模である。床面中央には4本の柱穴があり、北壁には造り付けの竈がある。内部からは附編2に記す74個体分の須恵器が出土した。土師器を伴わずに、かくも多量の須恵器が出土したということは、まったく異常としか思われぬ。須恵器の貯蔵をも兼ねた住居とでもいうのだろうか。

以上3例と塔ノ原遺跡調査例を比較すると、各住居址の規模は25~30㎡と10㎡前後の2種がある。さらに集落は5軒以下の家屋より成り立っていたといえる。これら集落は立地という面では、いずれも前代の集落を踏襲していない。つまり、何らかの社会的変化に伴って居住地を移動させたものと考えられる。弥生時代から古墳時代にまたがる集落遺跡は、福岡県内でも最近各所で大規模に発掘されているが、8世紀まで及ぶ集落は極めてまれで、山門郡瀬高町大道端遺跡に見られる程度である<sup>註6</sup>。それでも検出された177軒中数軒にすぎず、調査者をして「条里制の施行とこの大道端集落の終焉とが関連するのではなかろうか。」といわしめている<sup>註7</sup>。律令制の実施と当時の集落が深いかかわり合いを持っていたことは、いうまでもない事であろう。

以上指摘される諸点のもつ歴史的意義を解明するためには、当時の家族戸口構成を別の面から追求されねばならない。

### (3)

奈良時代の某集落構造については、古代歴史家によって数多くの提言があり、門外漢の小生などが口を挟むゆとりなど到底持ち合わせていない。「盲へびにおじず」の諺どうりに若干の考察を行ってみたい<sup>註8</sup>。

令によりつくられた戸籍を分析することは当時の家族構成を知る上での常套手段であろう。当時の家族は戸主の直系親族、傍系親族、寄口、奴婢よりなる家父長制的世帯共同体である。大宝2年の美濃国戸籍帳残簡は飛鳥浄御原令に基づいて作製されたらしく郷戸、房戸のの区別はみられない。それによると味蜂間郡春部里28戸611人、本簀郡栗栖太里21戸、371人、山方郡三井田里50戸、885人、加毛郡半布里54戸、1,092人であり、1戸当りの構成人数は13人から30人の間に集中する。

養老5年の下総国葛等郡大島郷の戸籍記載をみると郷戸内における房戸構成が明確に示されている。このうち甲和里44戸(房戸1, 452人、嶋俣里42戸、370人である。1戸あたり平均10

人前後の家族構成である。しかし戸別にその構成をみると、むしろ5人から10人の間に集中する。また1郷戸が含む房戸数は2から3である。

以上の点を要約すれば次の通りとなる。1) 美濃国戸籍により1郷戸当りの人数は13~30人と思われる。2) 下総国大島郷の戸籍により1郷戸内の房戸は2~4と思われる。また1房戸内の人数は5~10人と思われる。

塔ノ原遺跡の調査例をもって、先述したように、検出した住居址3軒は同時存在であり、床面積から1軒当りの構成人数は4~5人と考えられる。この点戸籍をもととした家族構成人数と矛盾しない。つまり、塔の原遺跡の場合12~15人の人間が生活しておったものとする。

#### (4)

大嶋郷の戸籍をもって、当時の家族構成を検討してみたわけであるが、下総国周辺でも同様なことが考古学的に裏付けられるものであるかどうか千葉県須和田遺跡及び東京都中田遺跡を例にとって考察してみる。

関東における土師器の編年上、8世紀の土器にいかなる型式を位置づけるかは、かなりの問題点となる<sup>註9</sup>。しかし真間期の土器が国分寺系瓦を伴う点等を考慮して、8世紀を中心とする関東の土器は、真間式土器と認められる<sup>註10</sup>。

須和田遺跡A区で7軒、B区で6軒の真間期の住居址が検出されている<sup>註11</sup>。須和田遺跡全体で100軒以上の住居址がありながら、真間期のものは1割程度である。前時期の鬼高各時期の集落が20~30軒を一単位とするのに対して、住居の分布が粗であり、かつ各住居がいずれも1辺3m前後と小さい点が調査者によって指摘されている。

調査者の意見を聞かなければ誤りを犯す恐れがあるが、当遺跡においても、立地の点で1時期3~4軒を単位とするように思われる。特に第24号、31号、37号は遺物の上からも同時期と認められる。

中田遺跡の場合、鬼高を3時期に区別しその後の真間期も2期に区分される可能性が言われている<sup>註12</sup>。

A~E区合わせて145軒のうち27軒が真間期の住居である<sup>註13</sup>。須和田に比べて全戸数に占める割合は高い。住居址床面積が10~15㎡前後のものが多いが、一方D7号のように53.6㎡に及ぶものもある。各住居址の小型化の傾向は鬼高Ⅲより始まり、国分期に到っている。また3~4軒を単位とする傾向についても同様である。

両遺跡を概観しただけでも一般に各住居址は10~15㎡と小型であり、3~4軒を単位とする<sup>註14</sup>と窺い知れた。遺跡全体を考えた場合、中田が前代から引き続いた集落であるのに対し、須和田では前代に比べて分布が粗になっている。それが何を意味するのか。福岡県大道端遺跡と同様、8世紀前後の社会的変化の一端を見るようである。つまり須和田は下総国の中心地にあり国府、国分寺造営等の国策事業に伴って村落の構成も変動せねばならなかったのだろうか。

## (5)

太宰府周辺の集落も須和田と同様、というよりむしろ強烈な圧力によって、集村構造の変動を余儀なくされたのではなかろうか<sup>註14</sup>。

塔ノ原遺跡は塔ノ原、杉塚両廃寺の中間に位置するところから、それらと何らかの関係を持つのもかもしれない。いづれにしても古代史の大きなうねりの中で当時の集落が大きく改変されていったろう事は想像に難くない。

また鉄器未製品、轡羽口及び多量の鉄鏝が出土したことは、当遺跡における生業問題を考えるうえで、多くの示唆を与えてくれる。(酒井仁夫)

- 註1 鏡山 猛 「奈良期の集落遺跡について」 史淵 №66 1947
- 2 亀井明德・横田賢次郎 「成屋形遺跡」 古代住居址発掘調査報告 福岡県教育委員会 1970
- 3 報文では径3.4mとあるが、床面積で統一したため、径3mとした。
- 4 1972年、九州縦貫道の建設に伴って福岡県教育委員会が発掘調査した。  
「教育福岡」 №274 1972年参照
- 5 1970年、工場建設に伴って緊急発掘調査した。鈴木重治 「福岡県八並遺跡」  
考古学ジャーナル №56 1971
- 6 西谷 正 「福岡県大道端遺跡の調査」 考古学ジャーナル №75 1972
- 7 4に同じ
- 8 丸茂武重 「奈良朝聚落の考察—生活様相の復原—」 考古学 11巻 第8号 1940  
門脇楨二 「日本古代共同体の研究」 1960  
弥永貞三 「律令制的土地所有」 岩波講座 日本歴史 3 1962 を主として参考とした。  
また佐田 茂 「群集墳の形成とその被葬者について」 考古学雑誌 58—2 1972 は美濃国半布里及び下総国大嶋郷の戸籍をもとにした群集墳被葬者についてのアプローチであり、参考とした。
- 9 岩崎卓也 「真間式土器小考」 大塚考古 第8号 大塚考古学会 1967
- 10 最近の千葉県下での調査例による。
- 11 杉原荘介他 「市川市誌」
- 12 「八王寺中田遺跡」 古墳時代集落址の調査 資料篇 I～III 八王寺市中田遺跡調査会  
1966, 1967, 1968
- 13 E23号住居址は本文中では真間期、まとめでは鬼高Ⅲ期とされている。ここでは鬼高期のものとした。
- 14 石母田 正氏は「大化改新以降、国家の編戸の対象となる6, 7世紀の共同体は、個々の集落または家族共同体による自由な開墾と定住、それによる『自然集落』の成立という牧歌的過程ではなかったことは確実である」とのべている。石母田 正 「日本の古代国家」 日本歴史叢書 1971

## IV 附 編

## 本文目次

	頁
1 杉塚廃寺跡の調査	113
1 調査の経過	酒井仁夫 113
2 検出遺構	酒井仁夫 114
3 検出遺物	114
(a) 礎石	酒井仁夫 114
(b) 土器	酒井仁夫 114
(c) 瓦	高橋章 116
4 まとめ	高橋章 120
2 八並住居址出土遺物	川述昭人 122

## 図版目次

PL. 1 (1) 杉塚基壇遺構発掘状況 (西より)	114
(2) 杉塚瓦溜り (西より)	114
2 (1) 杉塚出土軒丸瓦	116~118
3 (1) 杉塚出土軒平瓦, 鬼瓦, 土器	114~120
4 (1) 杉塚出土丸・平瓦	121

## 挿図目次

Fig 1 杉塚出土礎石 (酒井実測製図)	114
2 杉塚出土土器実測図 (1) (横田実測, 酒井製図)	114
3 杉塚調査地点土層断面図 (横田・中間実測, 酒井製図)	115
4 杉塚出土土器実測図 (2) (酒井実測製図)	116
5 杉塚出土軒丸瓦拓影 (横田・高橋手拓)	117
6 杉塚出土軒平瓦, 鬼瓦拓影 (横田・高橋手拓)	119
7 八並住居址出土須恵器 (1) (川述実測製図)	123
8 八並住居址出土須恵器 (2) (川述実測製図)	125
9 八並住居址出土土師器 (川述実測製図)	127
10 八並住居址出土須恵器 (3) (川述実測製図)	128



# 1 杉塚廃寺跡の調査

## 1 調査の経過

塔ノ原の西北方約 600 m の杉塚部落内には現在でも礎石及び基壇の一部が残っており、杉塚廃寺として著名である。

塔ノ原遺跡発掘調査を実施していた昭和48年4月、隣接した杉塚部落内の市道側溝工事が筑紫野市土木課の手によって計画された。市教育委員会社会教育課員山野洋一氏より連絡を受けた我々は塔ノ原遺跡の調査と並行して5月3日より一週間杉塚廃寺の発掘調査を手伝った。また日曜、祭日を利用して杉塚出土土器類、瓦類の実測、写真撮影、及び部落内のトラバース測量を行った。

杉塚在住の萩尾孫太郎氏御一家の方々からは、氏採集の古瓦類を借り受けることができた。本編に集録した瓦類の大部分は萩尾氏積年の採集によるものである。

なお、調査参加者は次のとおりである。

筑紫野市教育委員会社会教育課	山 野 洋 一
福岡県立歴史資料館調査課	横 田 賢次郎
”	高 橋 章
福岡県教育庁文化課	酒 井 仁 夫
”	中 間 研 志
九州大学修士課程	緒 方 悦 子
調査補助員	内 田 始
同	岩 崎 逸 男
同	副 島 源 司

発掘調査は現在残存する礎石群の西南60mの工事予定側溝部分及び一部の道路面だけに留まった。側溝部分は巾1mのトレンチを掘り、その断面観察を行った。その結果、U字形に落ち込む掘り方基壇が検出されたので、道路部分に限って、遺構の検出を計った。道路部分からは建築物北東隅の基壇、瓦溜り及び雨落ち溝状遺構が検出された。また以前より側溝に落ち込んでいた礎石をチェーン・ブロックを利用して引き上げ、実測を行った。(酒井)

## 2 検出遺構 (Fig. 2, PL. 1)

側溝部分のトレンチ断面観察によって4本の落込みが認められた。北より1, 2, 3, 4号溝と呼ぶ。各溝の中及び現道路面の深さは下記のとおりである。

	巾	深
第一号溝	310 (cm)	50 (cm)
第2号溝	130	35
第3号溝	560	130
第4号溝	320	80

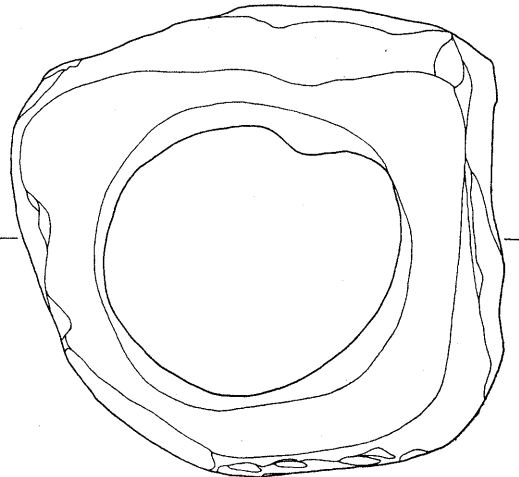
第1号溝は断面梯形を呈し、内部からは瓦が出土した。第2号溝は浅いが、内部からの瓦出例は著しい。第3号溝は第2号溝に接し、掘り込みの中段より上は版築が明瞭に観察される。第4号溝中の内部埋土は茶色土の単純層で、遺物は出土していない。

3号溝は道路部分での平面観察によって、建物東北隅を示す掘り方基壇と判明した。(酒井)

## 3 検出遺物

### (a) 礎石

礎石 (Fig. 1) 直径約 110 cm の柱座をしつらえた礎石である。柱座の作り出しは高さ 5 cm と低く、角も不明瞭である。この点は東北方建物礎石群と特徴を一にする。花崗岩製である。なお当礎石は現位置を動いてはいるものの、検出した建物に附属するものと考えられる。(酒井)



### (b) 土器

坏 (Fig. 2) 瓦溜り状落込みから多数の瓦と伴に出土した土師器である。口縁部は軽く外反する。体部は内外面ともヨコナデにより調整しているが、底部外面はヘラ切り痕

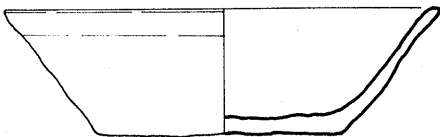


Fig. 2 杉塚出土土器実測図 (1) (縮尺 1/3)

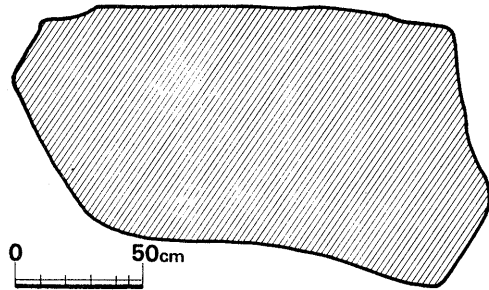


Fig. 1 杉塚出土礎石 (縮尺 1/30)

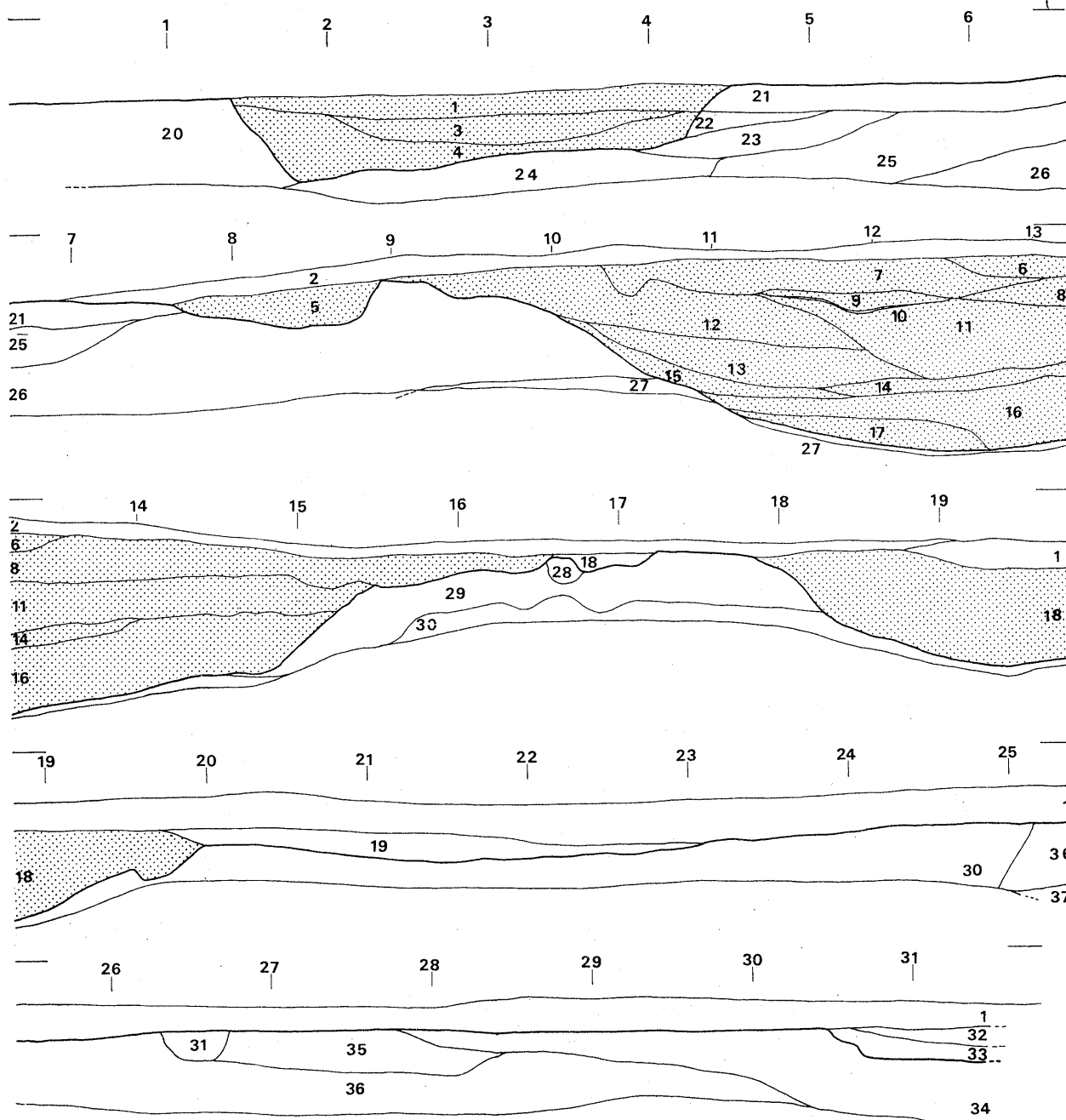


Fig. 3 杉塚調査地点土層断面図 (縮尺1/40)

1. 黒灰色土(道路面)	7. 灰茶色粘質土 (版築が明瞭)	12. 暗茶色土 (遺物含む)	19. 黒褐色土(攪乱層)	27. 灰白色細砂土	35. 灰茶色粗砂土
2. 黒色土(表土)	8. 灰茶色砂質粘土 ( " )	13. 暗茶褐色土( " )	20. 淡茶色混砂土	28. 灰茶色混砂土	36. 淡灰茶色粗砂土
3. 暗茶色土 (遺物含む)	9. 灰茶色砂質粘土	14. 黒褐色土	21. 茶色粘質土 (遺物含む)	29. 暗灰色粗砂土	37. 淡灰色細砂土
4. 灰黒色土( " )	10. 茶色土	15. 赤褐色粘質土 (遺物含む)	22. 淡灰茶色土	30. 灰白色細砂土	
5. 茶色土(雨落ち溝 か?瓦多量に含む)	11. 淡茶色土 (不明瞭な版築)	16. 淡茶色土	23. 淡茶色土	31. 暗茶褐色混砂土	
6. 暗灰色粘土 (砂混入、瓦含む)		17. 灰茶色土(瓦含む)	24. 茶黄色砂質粘土	32. 暗灰色土 (道路埋土)	
		18. 茶色土	25. 茶黒色砂土	33. 暗褐色土	
			26. 淡灰茶色砂土	34. 茶色土	

を残し未調整である。  
灰白地を呈し、胎土中  
に砂粒を含んでいる。

#### 甕 (Fig. 4)

調査後、萩尾孫太郎氏  
宅地内より出土した完  
形の土器である。外面  
を刷毛により調整し、  
口縁部内外面はその上  
をナデによって整形し  
ている。体部内面はへ  
ラによって削り上げた  
ままで未調整である。  
底部は丸味を帯びる。  
外面は明橙色を呈し、  
焼成良く堅緻である。  
底部附近は加熱により  
赤変し、煤が附着して  
いる、この土器の出土  
により、杉塚周辺では  
寺院址の下層には弥生  
時代後期の集落跡の存  
在が考えられる。(酒井)

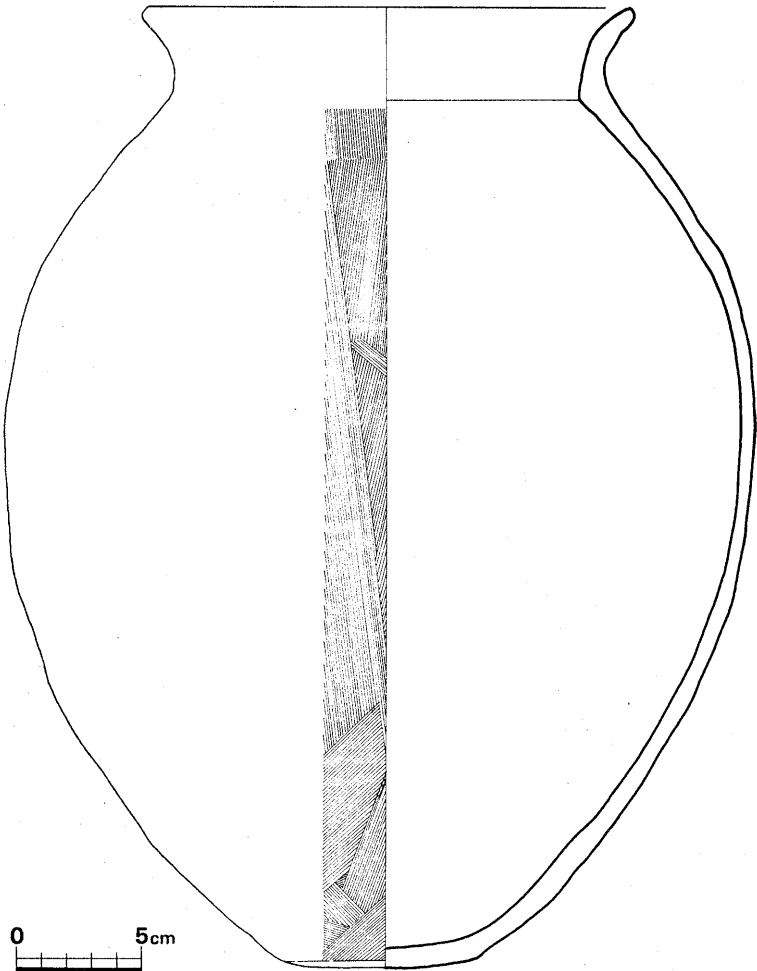


Fig. 4 杉塚出土土器実測図(縮尺1/3)

#### (c) 瓦

今回の発掘調査で検出した遺物のほとんどは古瓦類である。これらは雨落溝、瓦溜等から検出したもので、文様瓦はわずかに軒丸瓦5、軒平瓦6で、他は丸・平瓦片である。調査範囲狭少なため、出土遺物から十二分な検討ができないのが残念である。

尚、ここに挙げる軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦は出土した瓦類と、杉塚在住である萩尾孫太郎氏の採集によるものであり、合せてここに紹介する。以下それぞれの概略をのべる。

#### 軒丸瓦 (Fig. 5, PL 2)

軒丸瓦は、単弁、複弁など文様により5種類に分類でき、大きくI~V類とする。

第I類 (Fig. 5-1, 2, 3, PL 2-1, 2, 3) 三重弧文縁八葉単弁蓮華文, 中房径4.6, 蓮子1+6, 弁幅4.3, 外縁(幅2.0, 高さ1.0)

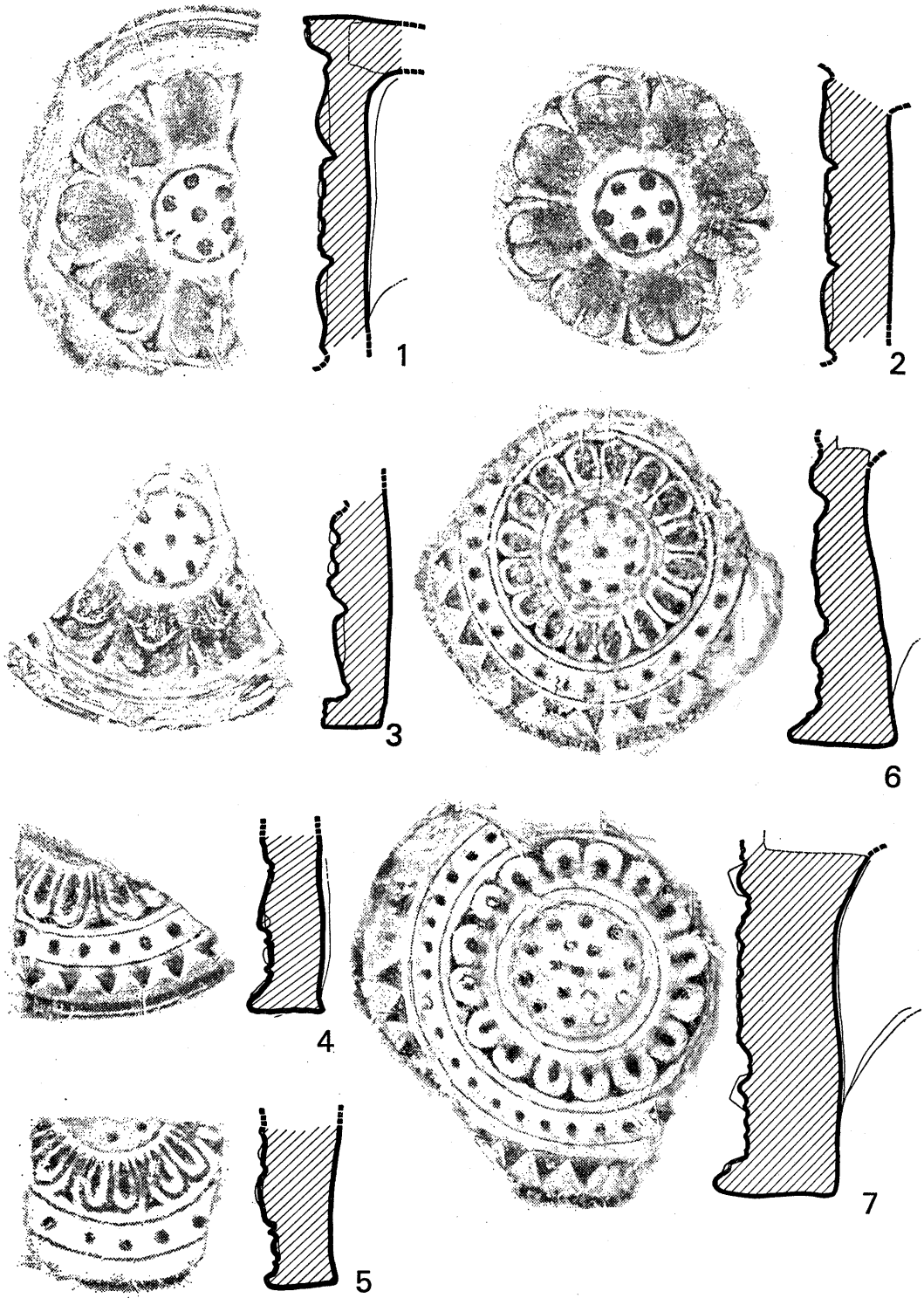


Fig. 5 杉塚出土軒丸瓦拓影(縮尺1/3)

八葉単弁軒丸瓦で、中房は高く、蓮子は丸く平たい。花卉は八葉で、弁中央は線状陰起し丸味をおびる。弁と弁の間には低い間弁を配す。胎土は砂粒が若干含み、焼成は硬質のものが多  
い。

第Ⅱ類 (Fig. 5-4, PL. 2-4) 鋸齒文縁複弁蓮華文, 弁幅2.8, 珠文帯幅1.2, 外縁  
(幅2.0, 高1.5)

通称老司式と呼ばれているもので、今回の調査で断片1を出土した。中房は欠損して不明である。胎土には砂が少量含有し、焼成はやや軟質である。花卉の陰起と珠文、鋸齒文の関係から「老司一式」と呼ばれているものと思われる。

第Ⅲ類 (Fig. 5-5, PL. 2-5) 複弁蓮華文, 弁幅2.5, 珠文帯幅1.5,

いわゆる鴻臚館式と呼ばれるもので、今回の調査で2片出土した。小片で瓦当文様については不明であるが、太宰府史跡等の発掘出土品(註1)と比較して、中房蓮子は1+4+8で八葉複弁のものであることが判る。胎土には砂粒が多く焼成は軟質である。

第Ⅳ類 (Fig. 5-6, PL. 2-6, 7) 鋸齒文縁八葉複葉弁蓮華文, 中房径5.3, 蓮子1+8弁幅2.3, 珠文帯幅1.5, 外縁(幅1.8, 高1.5)

中房は第Ⅱ類の老司式にくらべてやや小さくなり、花卉は丸く小型で間弁はない。珠文2で凸鋸齒文は正三角形に近い。胎土には砂粒が少く、焼成は軟質である。

第Ⅴ類 (Fig. 5-7, PL. 2-8, 9) 鋸齒文縁八葉複葉弁蓮華文, 中房径7.3, 蓮子1+5+10, 弁幅2.5, 珠文帯幅1.4, 外縁(幅2.0, 高1.5)

老司式の退化したものと思われる。中房の外側を細い圈線がめぐり、花卉は丸く小さくなる。間弁の陰起が目立つ。胎土は砂粒が多く、焼成は軟質である。瓦当と丸瓦の接合部は剝離して明瞭である。

軒平瓦 (Fig. 6, PL. 3)

軒平瓦は、大きく扁行唐草文と均正唐草文とに分類でき、それらをⅠ～Ⅳ類までとする。

第Ⅰ類 (Fig. 6-1, 2, 3, 4, PL 3-1~4) いわゆる老司式と呼ばれるもので、文様別に3種に分類(Ⅰ-A, Ⅰ-B, Ⅰ-C)できる。

Ⅰ-A (Fig. 6-1, PL 3-1) 瓦当厚5.2, 段顎, 右外区凸鋸齒文3

右から左に流れる扁行唐草文で、右端のみ逆反転となる。唐草はⅠ-Bと比較して波状線の起状は小さい。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は硬質である。

Ⅰ-B (Fig. 6-2, 3, PL 3-2, 3) 上弦幅31.7, 下弦幅31.2, 弧深7.4, 瓦当厚4.9, 段顎, 上外区珠文25, 下外区下向凸鋸齒文23, 左脇区凸鋸齒文4, 右脇区凸鋸齒文4。

老司2式と呼ばれるもので、唐草は右から左に流れる。Ⅰ-Aと比較して、波状線の起状はやや高い。上面はヘラ削りで丁寧仕上げている。胎土は砂粗を少量含み焼成は硬質が多い。

Ⅰ-C (Fig. 6-4, PL 3-4) 瓦当厚4.9, 段顎

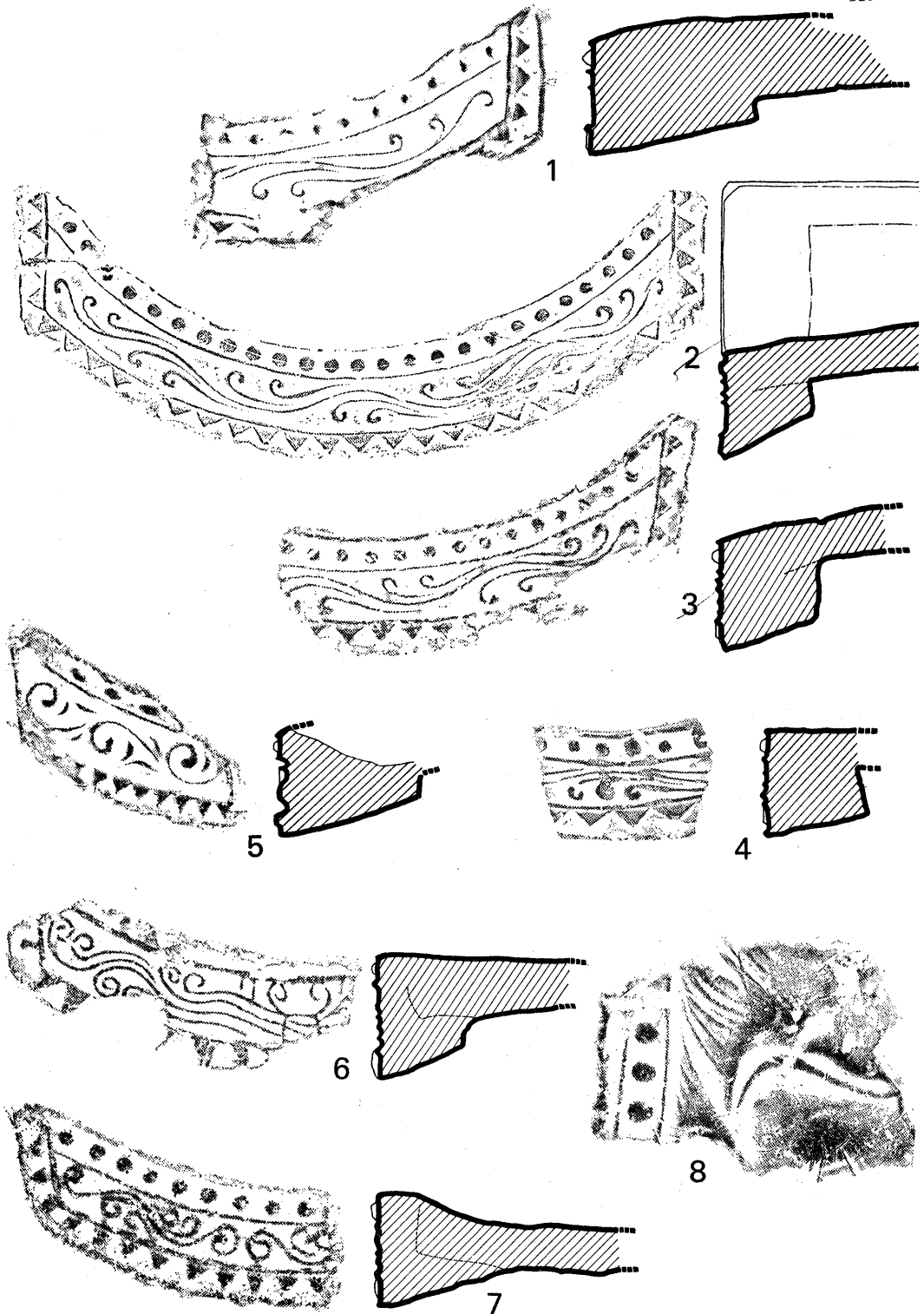


Fig. 5 杉塚出土軒平瓦, 鬼瓦拓影(縮尺1/3)

小片で全体に粗雑さを感じる。唐草は右から左に流れ波状は平行的である。I-A, Bに比較して唐草が1本多い。胎土は砂粗が少く、焼成は硬質である。

第Ⅱ類 (Fig. 6-5, PL. 3-5) 瓦当厚4.7, 段顎

鴻臚館式と呼ばれるもので、3片出土した。瓦は均正唐草文で、全体に黒色を呈す。胎土は荒い砂粒を若干含有し焼成は軟質である。段顎下部はヨコナデである。

第Ⅲ類 (Fig. 6-6, PL. 3-6) 瓦当厚5.6, 段顎

全体に退化した文様である。中心飾は円形状で、上部左右から内巻きの唐草がのびる。唐草は中心飾から曲線で3回反転する。下外区下向凸鋸齒文は大きく不定形なものである。胎土には砂粒が多く含有し、焼成は軟質で磨滅がはげしい。

第Ⅳ類 (Fig. 6-7 PL. 3-7) 瓦当厚5.2, 曲線顎, 左脇区凸鋸齒文3

内区は、左右に2回反転する唐草文を単位状態から憤怒の形相を思わせる。鬼面外区珠文は丸く高い。胎土は砂粗を若干含有し、焼成はやや軟質である。側面、裏面はヘラ削りで仕上げている。(高橋)

## 4 ま と め

杉塚廃寺跡は以前、古瓦資料などから、故中山平次郎氏、近年では小田富士雄氏によって詳しく説明されている。

今回は緊急調査で、はじめて杉塚廃寺跡の発掘調査を実施するに致り顕著な遺構として建物基壇一部を検出した。これから出土した古瓦を中心に以下概略する。

軒丸瓦は全部でI~Vに分類できるが、そのうち第I類は九州地方において、数種発見されている。以前、小田富士雄氏(註2)により、杉塚廃寺跡出土瓦は、文献、類似品等から奈良時代中期と示されている。これ等第I類単弁系瓦は、寺跡附近において、観世音寺(講堂跡出土)、四王寺、さらに観興寺(筑後)、塔ノ塚廃寺(肥前)に類例の瓦を求めることができる。第I類と比較すると、四王寺出土のものは、観世音寺、杉塚廃寺のそれと若干質が異り、花卉の肉盛りが退化し、中房、瓦当面は粗雑になる。また文献から(註3)太宰府四王寺の建立年代を宝龜5年(774年)に、観世音寺の造立は天平18年(746年)に求めるとすれば、その間約30年ぐらいに、第I類がおかれるものと考えられる。

Ⅱ類、Ⅲ類は従来、観世音寺、太宰府跡等から多く検出するもので、相互のセット関係はのべるまでもない。ここでは軒丸瓦Ⅱと軒平瓦Ⅰ、軒丸瓦Ⅲと軒平瓦Ⅱで、前者は老司式、後者は鴻臚館式と呼ばれている。

Ⅳ、Ⅴ類は、その原点を太宰府系瓦に求めることができ、奈良~平安に降るものと考えられ



る。

軒平瓦は、Ⅰ～Ⅳ類まで分類できるが、Ⅲ、Ⅳは各々1点のみで、軒丸瓦Ⅳ、Ⅴと同じくその原点は太宰府系瓦に求めることができる。Ⅰ類のⅠ-AとⅠ-Bを比較すると、まず上外区珠文幅が異りⅠ-A (1.5cm)、Ⅰ-B (1.2cm) で前者は珠文先端が丸く、後者は扁平となる。また唐草においても、Ⅰ-Bは波状高が大きいのに対し、Ⅰ-Aは低く蔓と蔓の間隔が広くなる。このことから、いわゆる老司Ⅰ式と比較すると、Ⅰ-Bが文様的に酷似していることから、Ⅰ-Bが先行するものと思われる。その他の瓦は断片であるため、検討するのは不可能であった。

その他、丸、平瓦として縄目文、斜格子目文(大小)、無文と多量に出土した。

太宰府管内における古代寺院跡は、観世音寺をはじめ、塔ノ原廃寺、般若寺等があるが、そのうちでも杉塚廃寺跡は、基壇、礎石の保存がよい。

今回の調査では、一部トレンチによる発掘調査であり、それらを十二分に解明するためにも今後の調査に大いに期待したい。(高橋)

- 註1. 太宰府史跡発掘調査概報 福岡県教育委員会 1970
2. 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考」史淵 1965
3. 太宰府天満宮 太宰府太宰府天満宮資料 1, 2 1964, 1966

## 2 八並住居跡出土遺物

### 遺物の出土状況 (P110 参照)

遺物の若干は住居址内の覆土中より出土しているが、床面からは、須恵器では椀蓋23個体、椀身22個体、その他皿などが若干点出土しており、椀の身と蓋との数がほとんど近似しているのは、セットとして使用されていたと考えられる。また大甕が1個体出土している。土師器では、甑の把手が4点と、甑などの口縁部以下、胴部の半分程が12個体、椀1個体が出土しており、住居址内からの一括資料としては貴重である。椀の類では須恵器23個体に対し、土師器1個体と圧倒的に須恵器が多い。

### 須恵器

#### 椀蓋

A類 (Fig. 7-1) 口縁部は嘴状に鋭く屈曲する。頂部には中央がややとがった扁平なボタン状のつまみがつく。かえり内面には稜線が入る。口径は12cm、器高は2.1cmを測る小型品である。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

B類 (Fig. 7-2, 4) 口縁部はやや肥厚し、内側へ屈曲する。かえり内面には稜線が入る。4は扁平なボタン状のつまみがつく。2は口径11.5cm、4は口径12.9cm、器高2.7cmを測る。色調は灰白色を呈しており、焼成は不良である。胎土には細粒を含む。

C類 (Fig. 7-3, 5) 天井部から体部への移行が直線的である。即ち角張った形態を呈する。つまみは中心部がわずかにとがった扁平なボタン状のつまみがつく。色調は暗灰色と灰色を呈しており、焼成は良好である。なお3は焼成時に焼けひずみを生じている。胎土には細砂粒を含む。5は天井部内面は凹凸が著しい。つまみは低くこれでは実際につまみとしての役目を果たしたとは思われないほどである。口径は13.4cm~13.9cm、器高は1.7cm~2.1cmを測る。

D類 (Fig. 7-6~11, 22) 器高の低い扁平な形態を呈する。天井部は水平に近く、口縁部のみはほぼ垂直に屈曲する。かえり内面には不明瞭な稜線が入る。外面には稜線が入るものと、入らないものがある。口径は14.2cm~16.4cmで22のみ19.8cmを測る。器高は残存部で1.5cm程である。色調は11は灰白色、21は灰色、その他は暗灰色を呈しており、焼成は11を除いてすべて良好である。胎土には砂粒、細粒を含んでいる。

E類 (Fig. 7-12~14, 18) つまみと天井部を残存するのみである。つまみは疑宝珠形つまみである。口縁部の形態は不明である。

F類 (Fig. 15~18) つまみは頂部をおさえた扁平形を呈する。口縁部先端は一たん外方へつき出し、内湾して、口縁下端部へつづく。従って口縁部外面には段がつく。口縁部内面は体

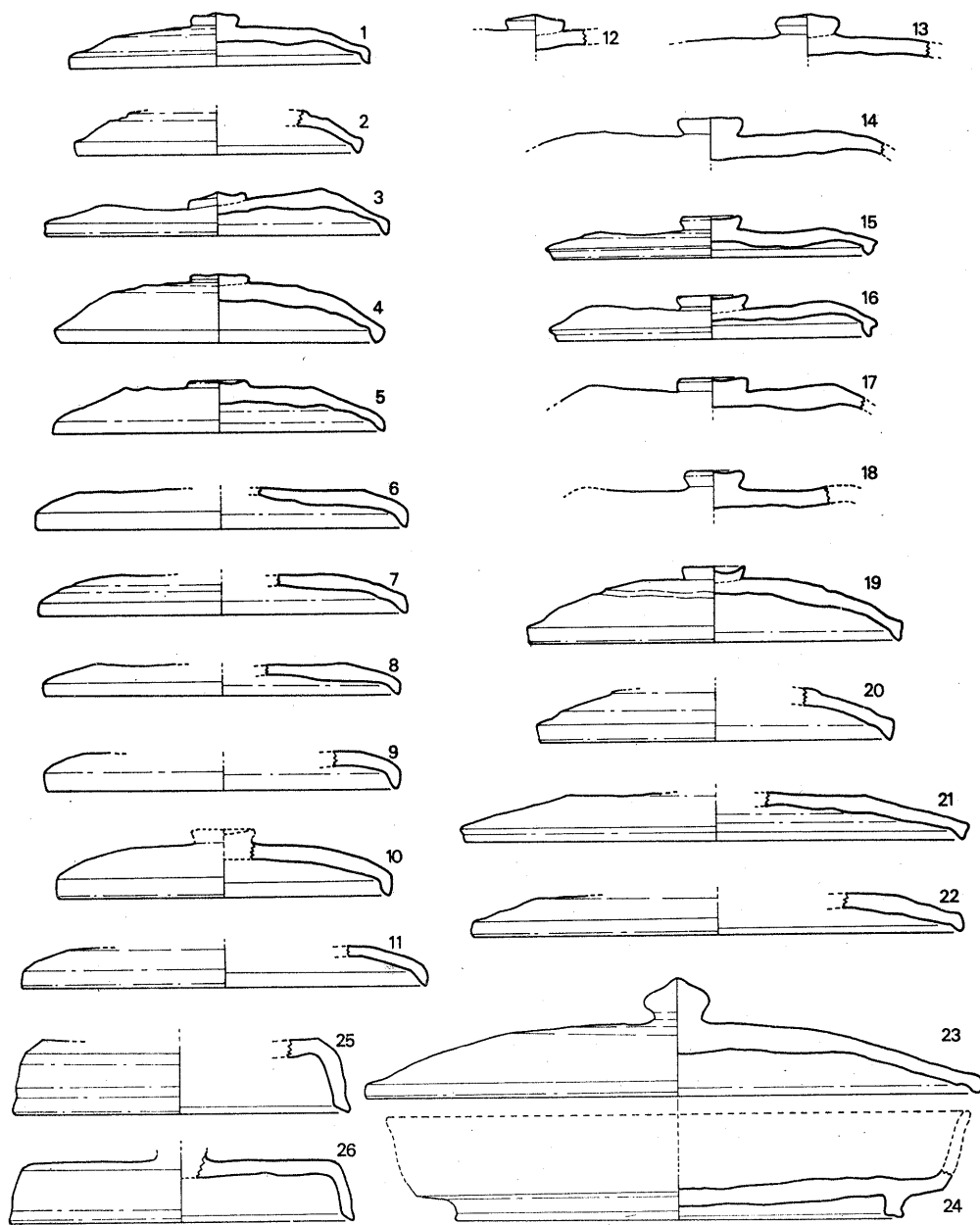


Fig. 7 八並住居址出土須恵器(1) (縮尺1/3)

部との境に一条の沈線が入る。色調は灰色ないし灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径は12.6cm~12.8cm, 最大径は13.3cm~13.4cm, 器高は1.7cmを測る。  
 G類 (Fig. 19~21) 口縁部先端はF類の様に外方へつき出さないが、内湾ぎみに下端へつ

づくのは似る。天井部と体部の境にはわずかに段を有する。19は頂部をくぼませたつまみがつく。口径は14.2cm~15.1cm, 器高は19は3cmを測る。なお21は, 口径20.2cmと大型である。色調は19は暗灰色, 他は灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には細粒を含むが, 19は多量の砂粒を含んでいる。

H類 (Fig. 7-23) 宝珠形のつまみを有する大型品である。天井部から体部への移行はなだらかであり, 口縁部は丸くつくられている。口縁内部の身受け部は凹線が入る。調整は, つまみ周辺部はヨコナデを施し, 天井部から体部にかけては丁寧へら削りしている。口径は24.8cm, 器高は4.7cmを測る。色調は灰色を呈しており, つまみの部分のみ暗灰色を呈する。焼成は良好であり, 胎土には細粒を含む。24とセットである。

I類 (Fig. 7-25, 26) いずれも天井部を一部欠損している。26は残存部の形態からつまみを有していたことがわかる。天井部は平坦であり, 口縁部は長くて口端部は外方へつき出している。先端部は丸味を有する。天井部と口縁部の境は角張っており, 稜線が入る。口縁部内面には下端から3mmの位置に稜線が入る。色調は灰色と淡小豆色を呈しており, 焼成は共に良好である。胎土には細粒と砂粒を含んでいる。口径は13.6cm~14cmを測る。

#### 椀

A類 (Fig. 8-27, 29, 33, 34, 37~39) 高台は内側の一端のみが地につく形態のものである。27は高台の底面は若干くぼんでいるが大半は直線的である。体部は若干, 外反ぎみに立ち, 口縁端部は丸くつくられている。27, 29は高台部径7cm~7.9cmと小型である。34はこの代表的な器形で, その計測値は, 口径14cm, 器高3.6cm, 高台部径10cmである。色調は灰色ないし暗灰色を呈しており, 焼成は良好である。

B類 (Fig. 8-31, 32, 36, 40) 高台は内側の一端のみが地につく形態でありA類と変わりはないが, 地につかない方の端部が外方へつき出す。高台のはりつけ部には, 粘土のつき目が明瞭に見えるもの(31, 32)がある。体部はほぼ直線的に外反し, 口縁端部は丸くつくられている。口径は12.6cm~14cm, 器高は3.5cm~4.8cm, 高台部径は8.4cm~9.9cmを測る。色調は31のみ灰黒色で, その他は灰色を呈している。焼成は良好であり, 胎土には細粒と砂粒を含む。

C類 (Fig. 8-28, 30, 39, 41) 高台の底面全てが地につく形態のものである。体部と口縁部を残存しているのは39のみで, これをみると口縁部の外湾度は著しく, 端部は丸くつくられている。高台部径は28と30は6.8cm~7cmと小さく, 39と41は8.5cm~8.7cmを測る。なお39は口径12.8cm, 器高4.5cmである。色調は灰色と暗灰色を呈しており, 焼成は良好である。

D類 (Fig. 8-24, 42, 43) 高台底面は外側の一端がやや外方へつき出して地につく形態のものであり, 体部と口縁部の形態は43をみると, 39と同様に口縁部の外湾度が著しい。24は大型品であり23とセットであるのは前述した通りである。43は復元口径15.4cm, 器高4cm, 高台部径10.2cmを測る。色調は灰色と暗灰色を呈しており, 焼成は良好である。

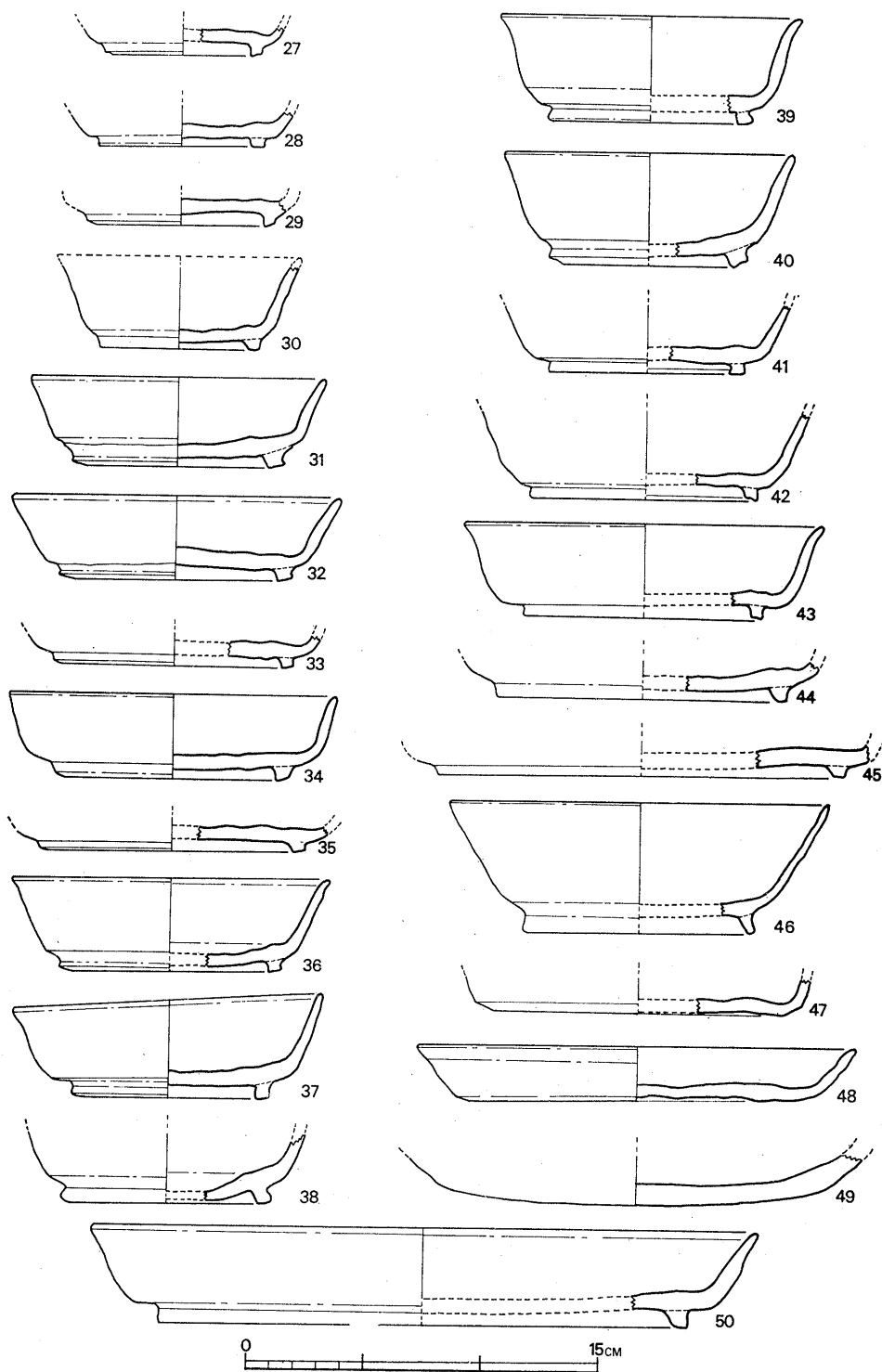


Fig. 8 八並住居址出土須恵器実測図(2) (縮尺1/3)

E類 (Fig. 8—44, 45, 50) 高台底面の外方一端のみが地につき、高台のつくりは直線的である。口縁部の形態のわかるのは50であり、それによると底部と体部は厚手であるが、口縁部にいたって、その幅をせばめる。50は口径 28.4cm, 器高 4.1cm, 高台部径20.6cmを測り、口径に比して器高の低い器型である。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

F類 (Fig. 8—46) 高台は細くて長い。体部、口縁部はうすでづくりであり、底部から口縁部まではほぼ直線的にひらき、口縁端部は丸くつくられている。口径 16.2cm, 器高 5.5cm, 高台部径10cmを測る。色調は灰褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土には砂粒を含んでいる。

皿 (Fig. 8—48) 口径 18.6cm, 器高 2.2cmを測る。底部は内外面とも凹凸が著しく粗雑であり、外底には粘土稜の接合痕が認められる。体部と口縁部の境付近は若干くぼませている。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。調整は底部は内外面ともナデであり残りの部分はヨコナデを施している。

#### 甕

A類 (Fig. 9—51) 口頸部は短く外湾する。復元口径は17.9cmを測る。茶褐色を呈しており、胎土には多量の砂粒を含んでいる。

B類 (Fig. 9—53) 口頸部は直線的に外反してのび、口唇部は下降する。体部は若干張る形態を呈している。復元口径は27cmを測る。茶褐色を呈しており、胎土には多量の砂粒を含む。

C類 (Fig. 9—52, 54~59) 口頸部は著しく外湾する。口頸部と体部の境には若干段がつくものもある。52は口唇部下と頸部内面に沈線が入る。全体に体部はいくぶんふくらんでくる。口径は25.6cm~30.2cmを測る。色調は褐色ないし茶褐色を呈しており、胎土には多量の砂粒を含んでいる。

D類 (Fig. 9—60~62) 小片であるため、口径の復元が不可能である。60の頸部は細身で外湾する。体部は内傾する。暗褐色を呈しており、胎土には砂粒を含む。61の口頸部は短く、外反する。体部は張らない。赤褐色を呈しており胎土には砂粒を含む。62は口頸部は外反し、口唇部で水平方向に再び屈曲する。褐色を呈しており、胎土には砂粒を含む。

E類 (Fig. 9—63~66) こしきの把手である。色調、器形からみてすべて別個体のものである。63は把手先端部は、はね上った様な形態であり、64, 65はやや前方につき出す。66は太くて、しっかりしている。

#### 椀 (Fig. 9—67)

内黒土師器である。高台の底面は全て地につく形態のものである。内面は底部から口縁部までなめらかに移行し、口縁端部は丸くつくられる。口径は 12.1cm, 器高は 4.1cm, 高台部径は 7.3cmを測る。色調は外面黄褐色で内面は淡黒色を呈している。胎土には少量の砂粒を含む。

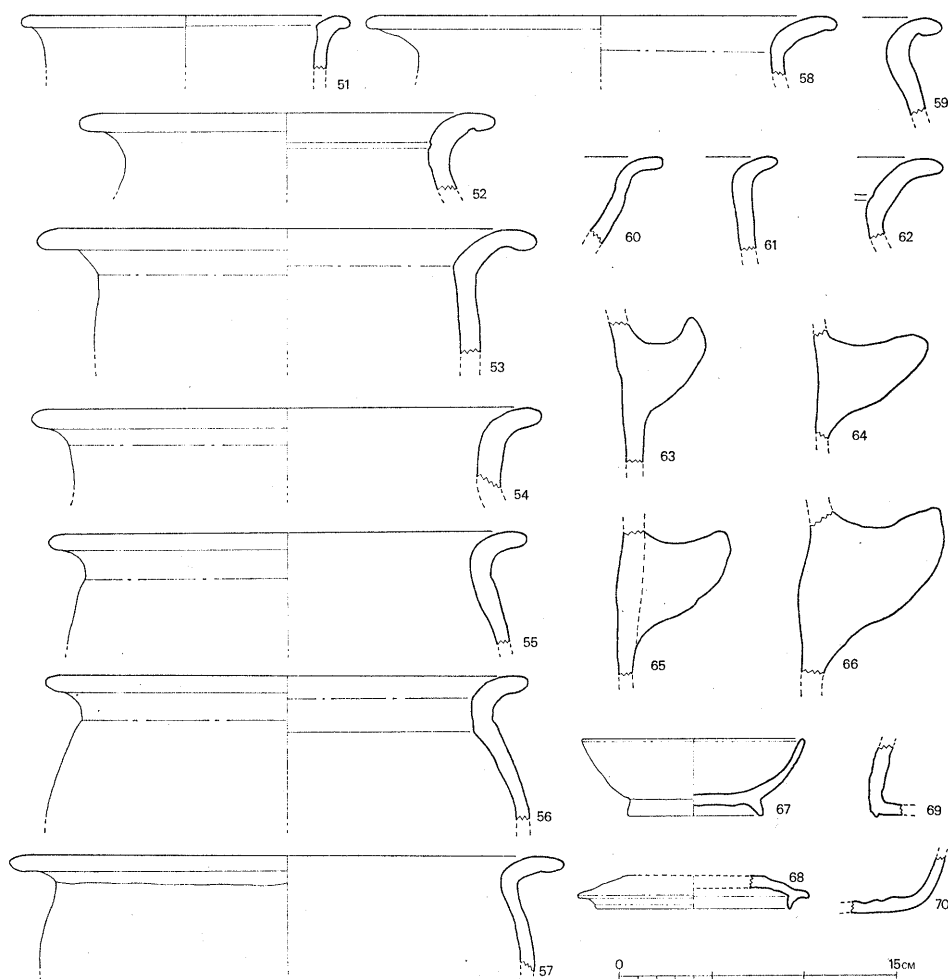


Fig. 9 八並住居址出土土師器 (縮尺1/3)

杯蓋 (Fig. 9-68)

須恵器である。天井部を大半欠損しているため、つまみの有無は不明であるが、天井部は著しく平坦である。かえりは0.7 cmと小さく、かえり端部はとがる。復元口径15 cm、最大部径12.5 cm、器高1.8 cmを測る。色調は外面灰色で内面は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。住居址内への流れ込みである。

不明土器 (Fig. 69, 70)

69は平瓶の頸部と思われる。残存部は内外面とも凹凸が著しい。色調は灰色と黒色のまじりである。

大形甕 (Fig. 10)

口頸部は17 cmと長く、外湾する。頸部から口縁部の間には、ほぼ等間隔で沈線が三箇に入

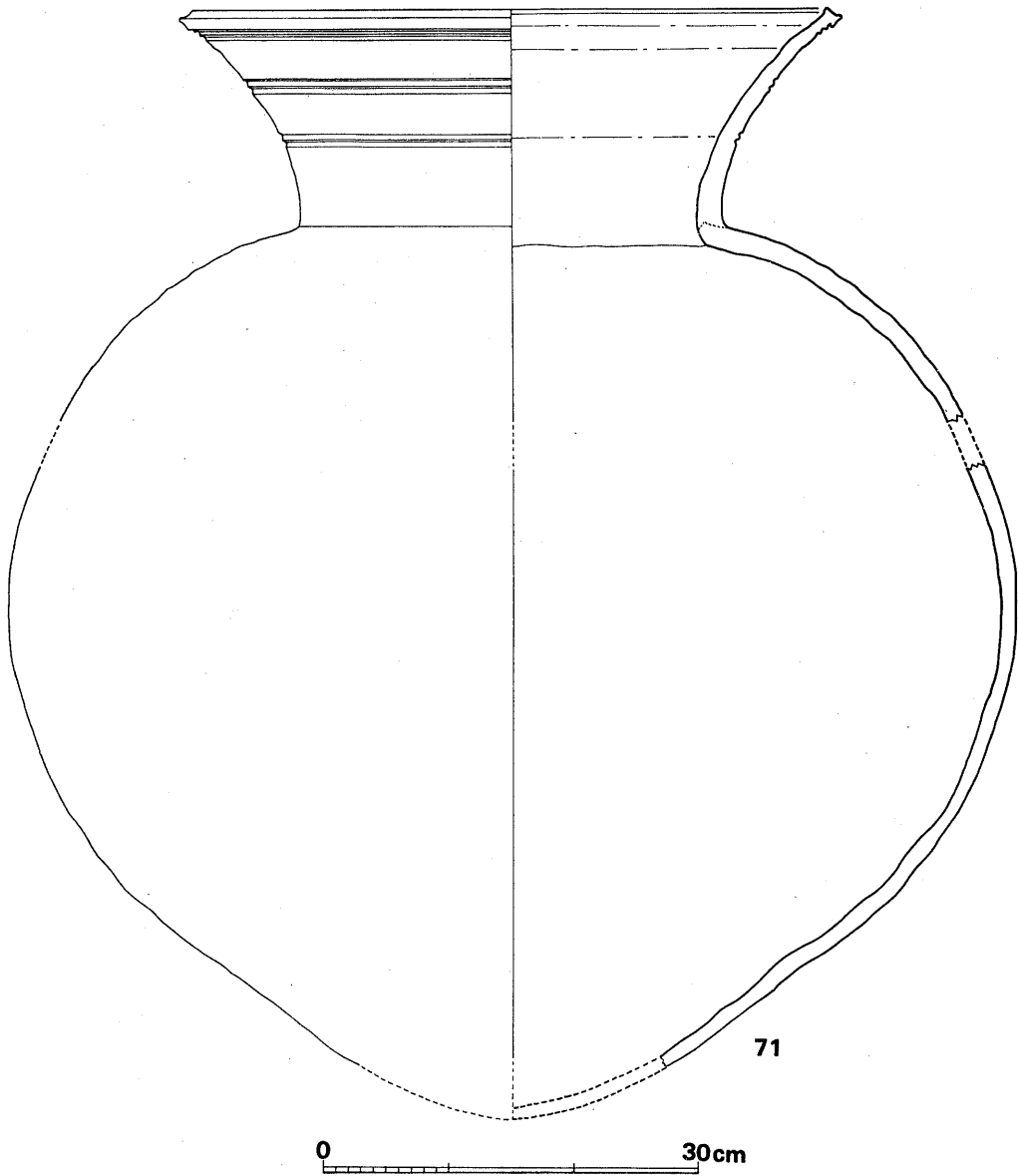


Fig. 10 八並住居址出土須恵器(3)(縮尺1/3)

る。口縁上部は三本で、他は二本の沈線が入って頸部に装飾を添える。肩部、胴部はなめらかな円弧を描く。胴部最大径は80cmを測る。底部を欠損する。肩部以下、外面には平行条線叩きが、内面には同心円叩きが行なわれている。頸部の接合に際しては、叩きを施して器壁を圧縮したあと、頸部を接合しているため、接合内面にも叩目が入っている。口径52.4cm、頸部径34cm、器高97cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。(川述)



九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—IV—

(本文編)

昭和49年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 福博総合印刷株式会社

福岡市東区堅粕3丁目16番36号

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— IV —

(本文編)  
付 図

1974

福岡県教育委員会

## 付図断面図色名表

付図1 川原庵山6号墳墳丘北東～南西断面図

1 黄褐色土	6' 混黒斑暗赤褐色土	13 暗緑黄褐色土
2 暗褐色土	7 緑斑赤褐色土	14 明灰褐色土
3 赤褐色土	8 暗緑斑赤褐色土	15 混赤褐色粘土灰色土
3' 赤褐色砂質土	9 暗黄褐色土	16 赤褐色粘質土
4 褐色土	10 赤斑黄褐色土	17 灰褐色土
5 黒褐色土	11 赤色土	18 黄赤褐色土
6 暗赤褐色土	12 緑黄色土	

付図2 川原庵山6号墳墳丘北西～南東断面図

1 表土	4' 混緑色土赤褐色土	8 褐色土
2 黄色土	5 赤色土	9 混赤色土暗緑黄色土
3 黄褐色土	6 黒褐色土	9' 混褐色土暗緑黄色土
4 赤褐色土	7 緑黄色土	10 暗褐色土

付図3 川原庵山6号墳内部主体実測図

1 暗赤茶色粘質土	6 赤茶色粘土	11 混赤斑暗茶色粘質土
2 暗茶色弱粘質土	7 黄茶色粘質土	12 暗黄茶色粘質土
3 濁赤茶色粘質土	8 混赤斑黄茶色粘質土	13 濁黄茶色粘質土
4 黒茶色粘質土	9 明赤茶色粘質土	14 淡赤茶色粘質土
5 混赤斑暗茶色粘質土	10 明黄茶色粘質土	15 淡黄茶色粘質土

付図4 川原庵山7号墳墳丘南～北断面図

1 表土	3 混砂利黄褐色砂質土	5 緑黄色地山ブロック
2 褐色粘質土	4 混緑黄色土茶褐色土	

付図7 川原庵山8号墳内部主体実測図

1 暗緑黄色砂質粘着土	4 2 + 黄褐色粘質土	7 淡緑黄色砂質粘土
2 黒斑暗緑砂質粘着土	5 3 + 黄褐色粘質土	8 灰褐色砂質土
3 緑黄色砂質粘土	6 3 + 暗褐色土	9 3 + 暗褐色土

付図10・11 道田1号墳墳丘北東～南西，北西～南東断面図

1 表土	9 黒色土	17 茶褐色土
2 灰色土	10 淡黒褐色土	18 暗褐色土
3 灰褐色土	11 黒褐色土	19 混砂利黄褐色土
4 淡褐色土	12 黄色・黒褐色混り土	20 黒色・茶褐色混り土
5 黄褐色土	13 混砂利灰褐色土(硬)	21 赤色土
6 赤褐色土	14 混砂利灰褐色土(軟)	22 赤褐色粘土
7 明赤褐色土	15 赤褐色・茶褐色混り土	23 赤色・黄色・黒色混り土
8 暗赤褐色土	16 暗黄褐色土	

付図13 原口1号墳墳丘南～北断面図

1 表土	15 赤黄褐色砂質土	29 赤褐色粘質土
2 淡茶褐色土	16 淡赤褐色粘土	30 赤黄褐色粘質土
3 茶褐色土	17 暗赤黄褐色土	31 混砂赤黄褐色土
4 暗緑黄褐色土	18 混砂粒子白黄褐色土	32 強黄色赤褐色褐質土
5 赤褐色土	19 赤黄褐色土	33 混黒色粒赤褐色褐質土
6 黒褐色土	20 混赤色暗緑灰褐色土	34 混赤土ブロック赤黄褐色土
7 暗黒褐色土	21 混黄粒子赤褐色土	35 暗黄赤褐色砂層
8 混赤斑粘土暗黒褐色土	22 暗緑黄褐色砂層	36 暗赤褐色砂層
9 混赤斑粘土黒褐色土	23 淡緑黄褐色砂層	37 混黒色ブロック赤黄褐色土
10 暗黄褐色土	24 暗緑黄灰褐色砂層	38 暗黄褐色砂層
11 黄色土	25 淡赤黄灰褐色砂層	39 暗赤褐色褐質土
12 暗黄色土	26 赤黄褐色砂層	40 暗茶褐色土
13 淡黄褐色砂粒	27 赤黄褐色砂質粘土	41 混赤色粒子暗茶褐色砂層
14 暗褐色土	28 暗黒赤黄褐色土	42 混赤色ブロック暗茶褐色砂層

- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| 43 暗赤灰褐色砂層       | 59 淡赤緑灰褐色砂質土         |
| 44 混赤色ブロック暗灰褐色砂層 | 60 混白色粒赤黄褐色粘土        |
| 45 灰白色砂質土        | 61 混白色粒赤黄褐色砂質土       |
| 46 混赤色粒茶褐色土      | 62 混白色及び黑色粒淡赤黄褐色砂質土  |
| 47 灰黄褐色砂質土       | 63 混赤色ブロック淡緑黄灰白褐色砂質土 |
| 48 茶褐色土          | 64 混黒色粒淡赤緑灰褐色砂質土     |
| 49 暗赤緑灰褐色砂質土     | 65 混白色ブロック淡赤緑灰褐色砂質土  |
| 50 暗黄褐色砂質土       | 66 混白色及び黑色粒淡緑黄灰褐色砂質土 |
| 51 黒黄灰褐色砂質土      | 67 混白色粒淡赤黄褐色粘質土      |
| 52 混緑色粒子暗赤褐色土    | 68 混白色粒淡赤黄褐色砂質土      |
| 53 混白色粒暗赤褐色土     | 69 混黄色ブロック黒褐色土       |
| 54 混緑色粒子黒赤褐色土    | 70 黒赤褐色土             |
| 55 赤黄灰褐色砂質土      | 71 淡赤黄褐色砂質土          |
| 56 赤黄灰白色砂質土      | 72 淡赤黄褐色粘質土          |
| 57 淡赤白褐色砂質土      | 73 暗赤黄褐色粘質土          |
| 58 淡赤黄灰白色粘質土     | 74 赤黄褐色砂層            |

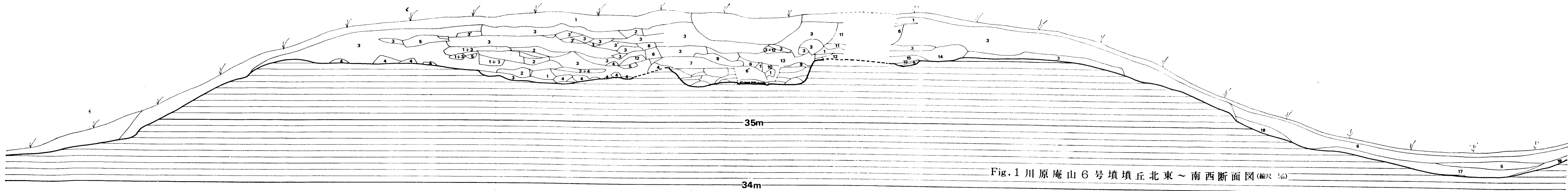


Fig.1 川原庵山6号墳墳丘北東～南西断面図(縮尺 1/40)

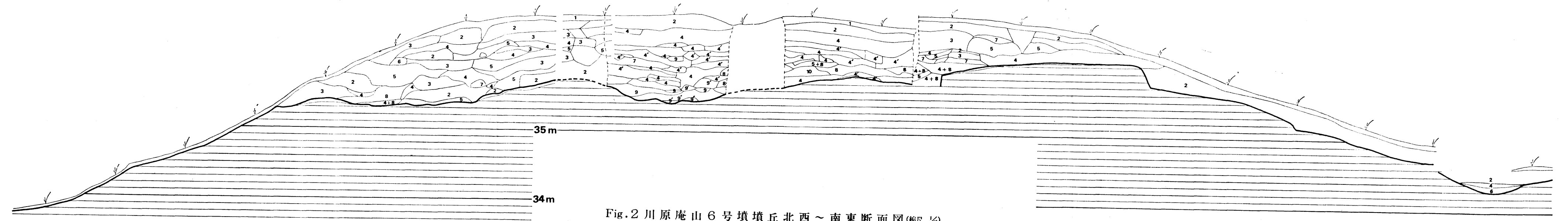


Fig.2 川原庵山6号墳墳丘北西～南東断面図(縮尺 1/50)

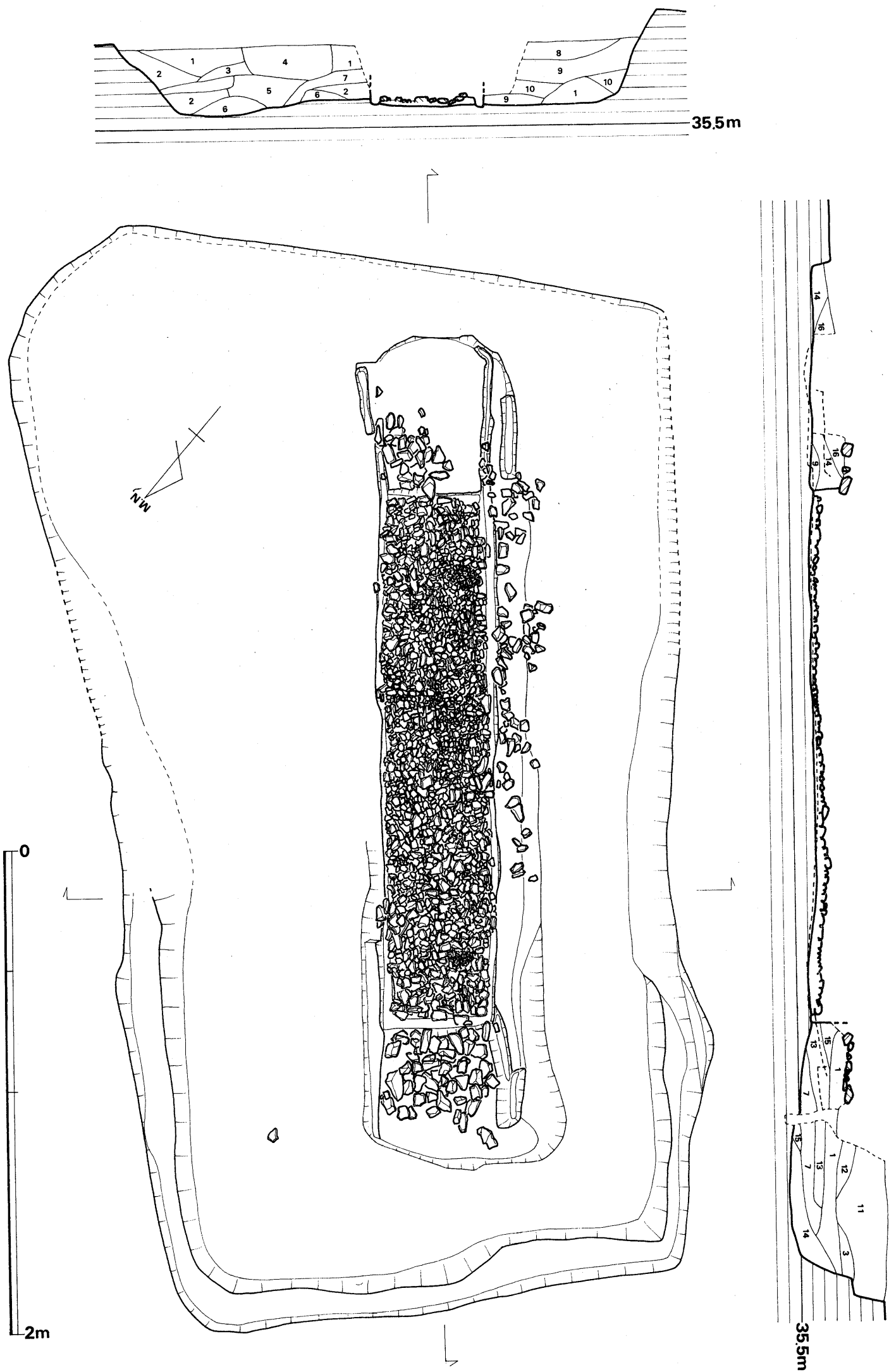


Fig.3 川原庵山6号墳内部主体実測図(縮尺 1/20)



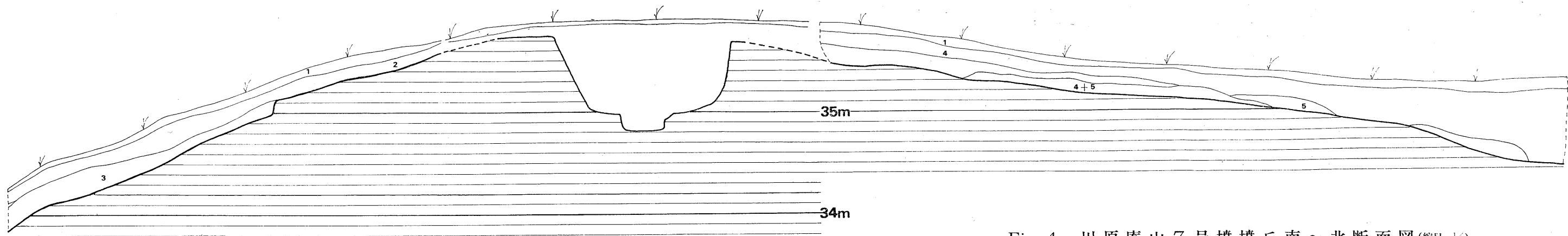


Fig.4 川原庵山7号墳墳丘南～北断面図(縮尺 1/40)

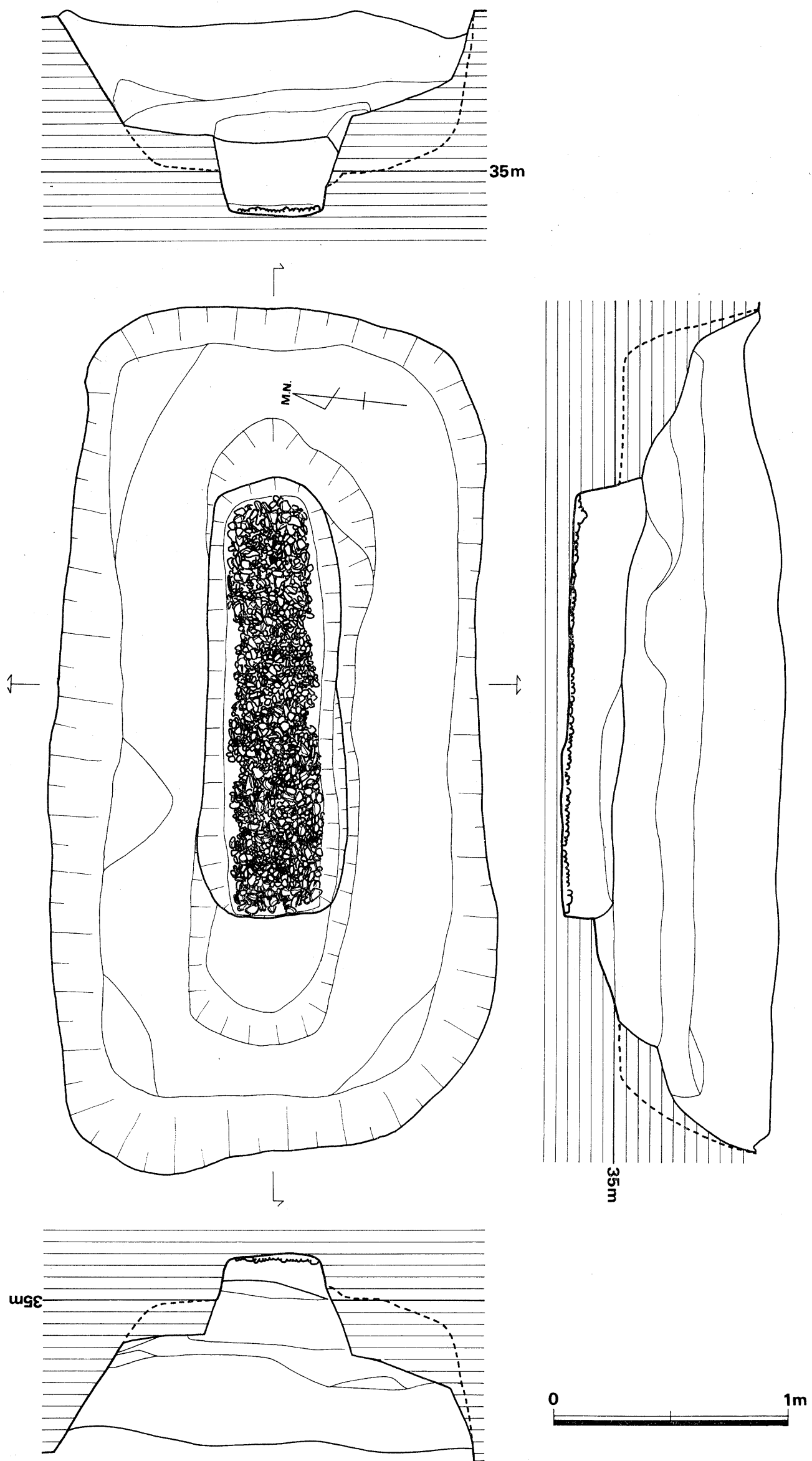


Fig.5 川原庵山7号墳内部主体実測図(縮尺 1/50)

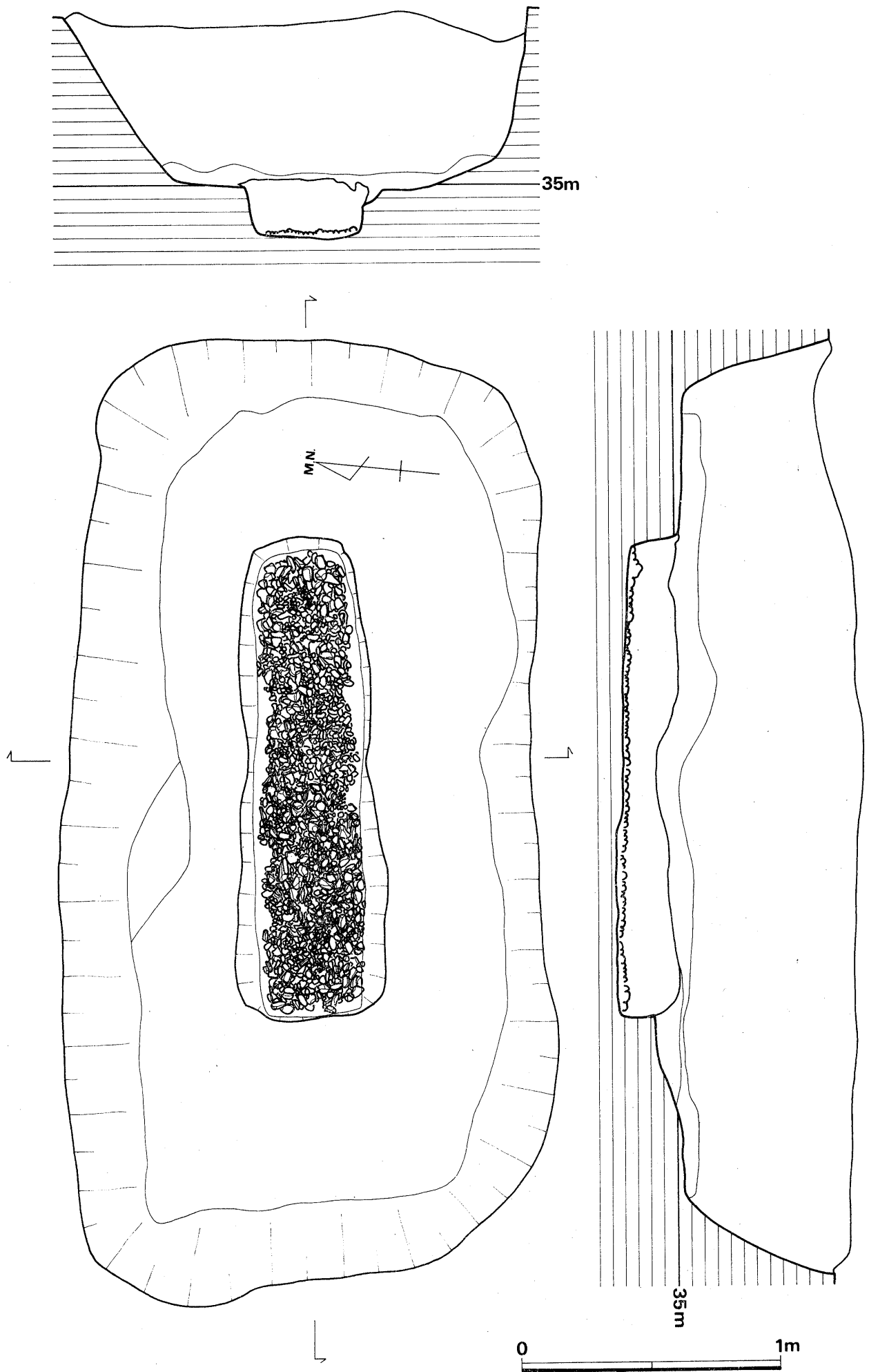


Fig.6 川原庵山7号墳墓塚実測図(縮尺 1/50)

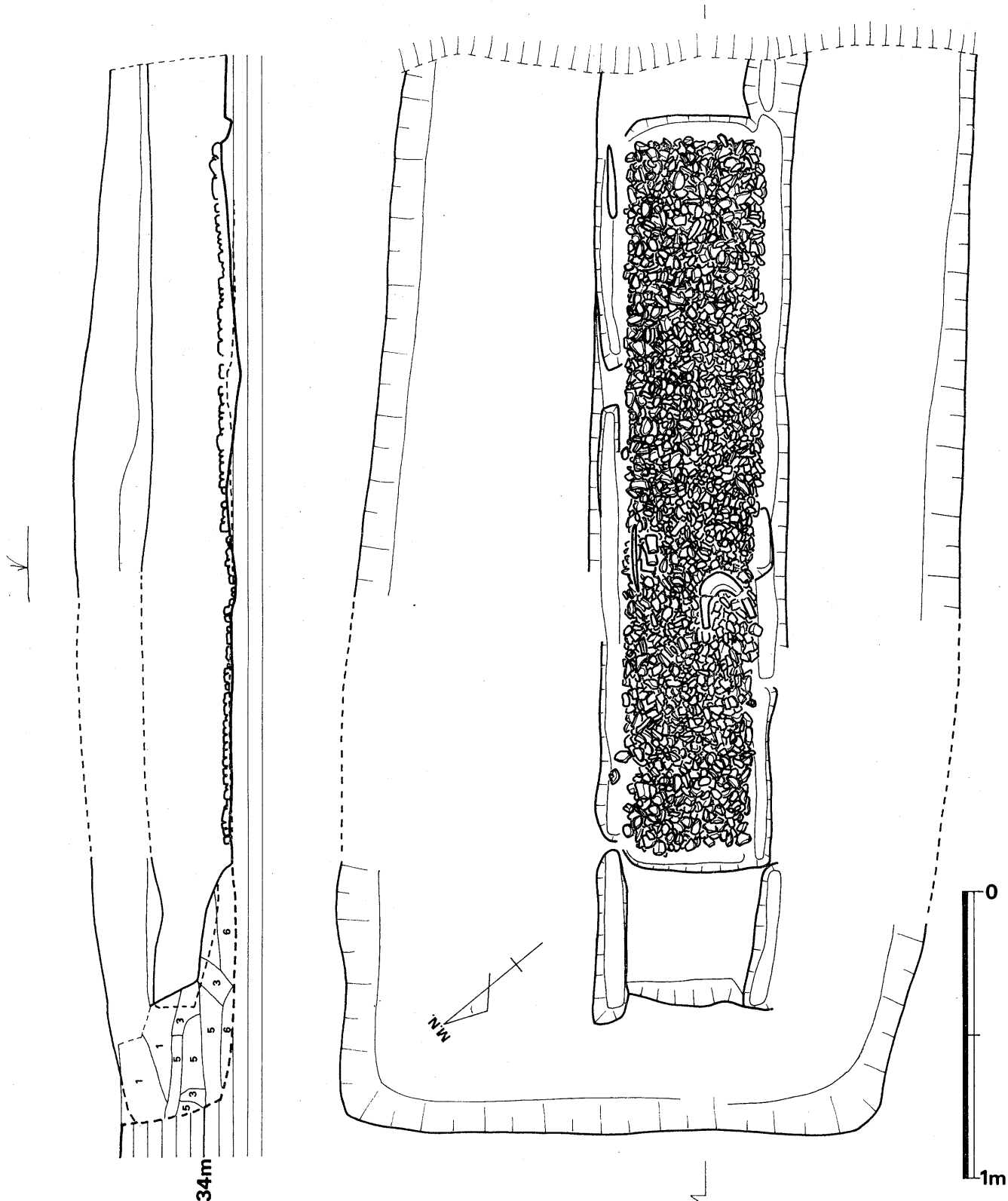


Fig.7 川原庵山8号墳内部主体実測図(縮尺 1/20)

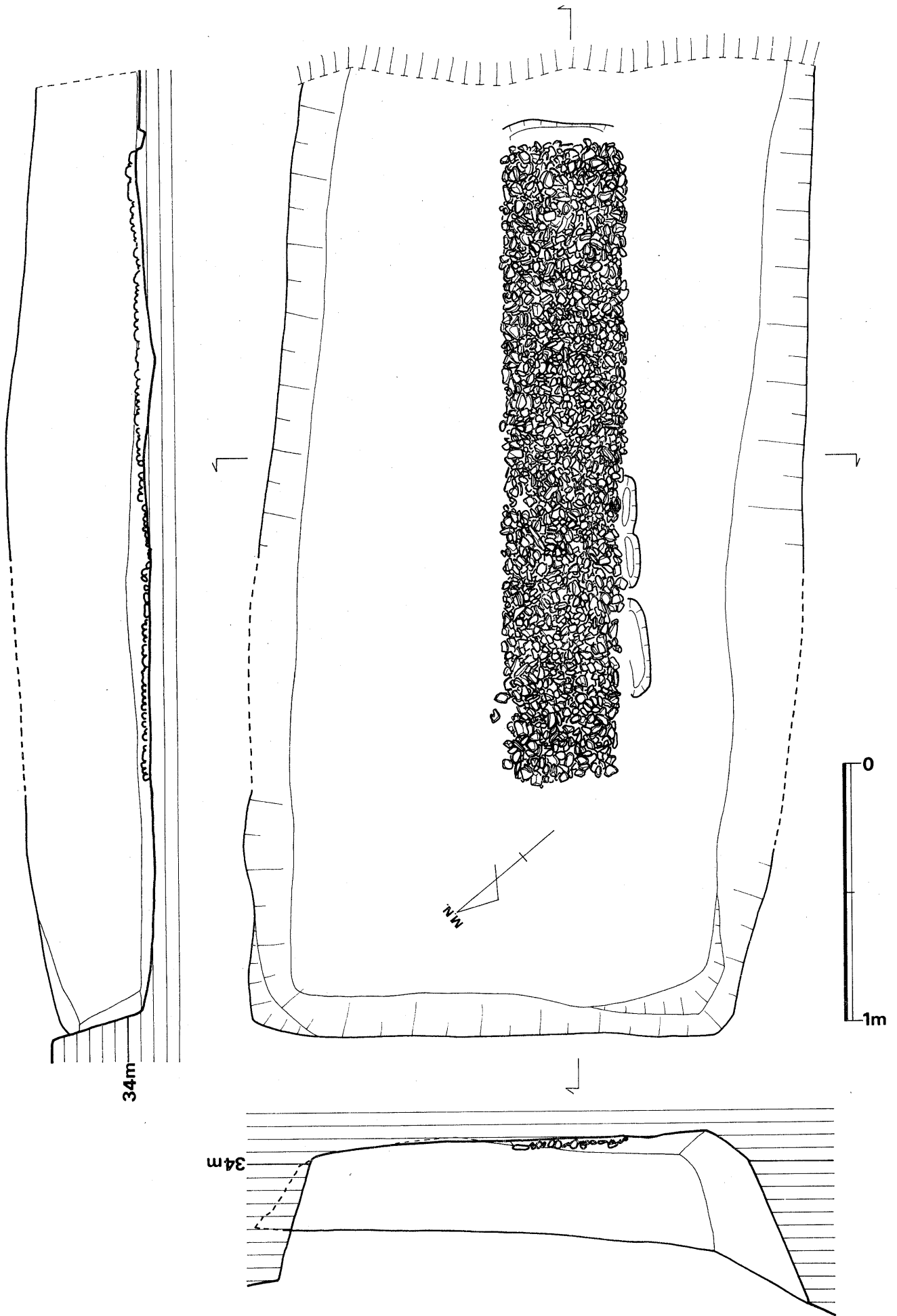


Fig.8 川原庵山8号墳墓坑実測図(縮尺 1/20)

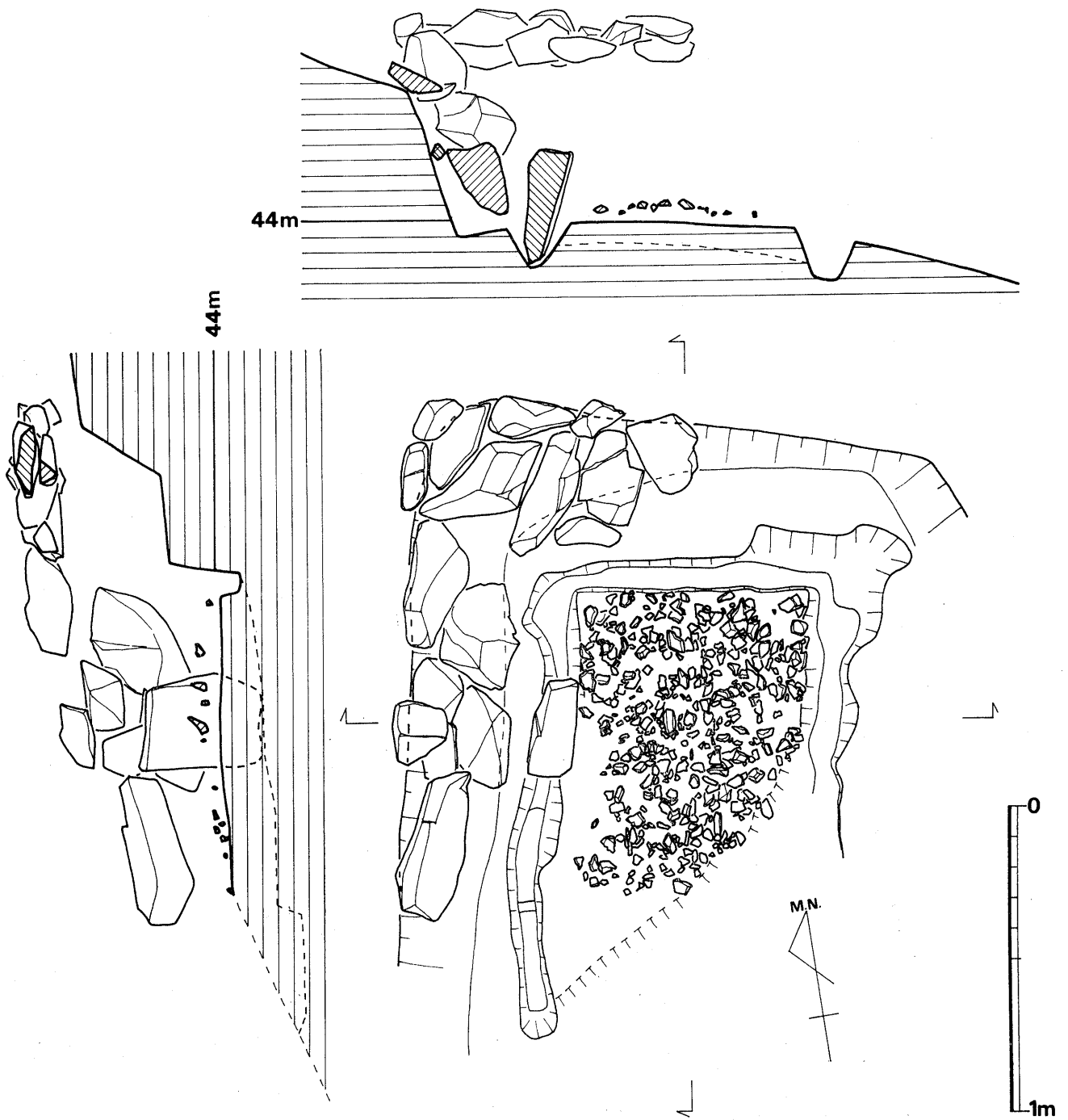


Fig.9 下别当1号墳内部主体実測図(縮尺 1/40)

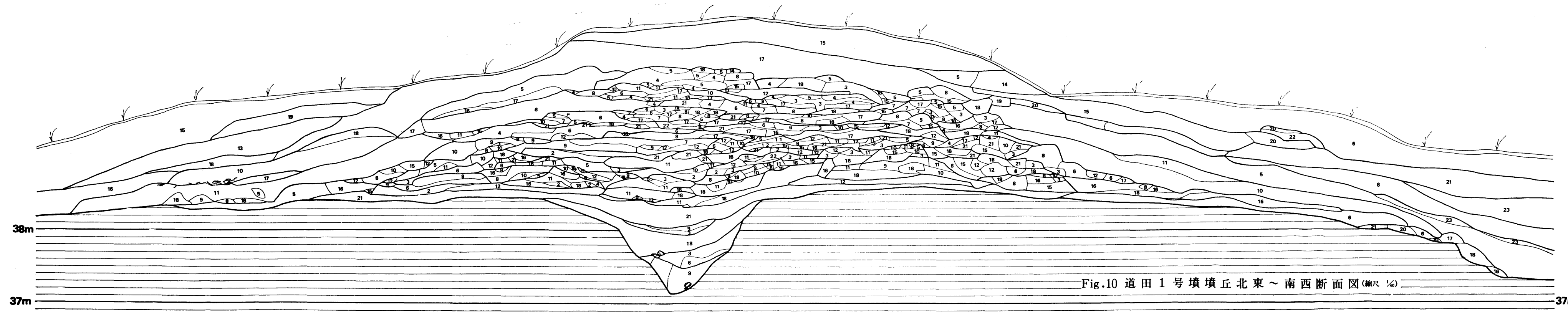


Fig.10 道田 1 号墳墳丘北東～南西断面図(縮尺 1/6)

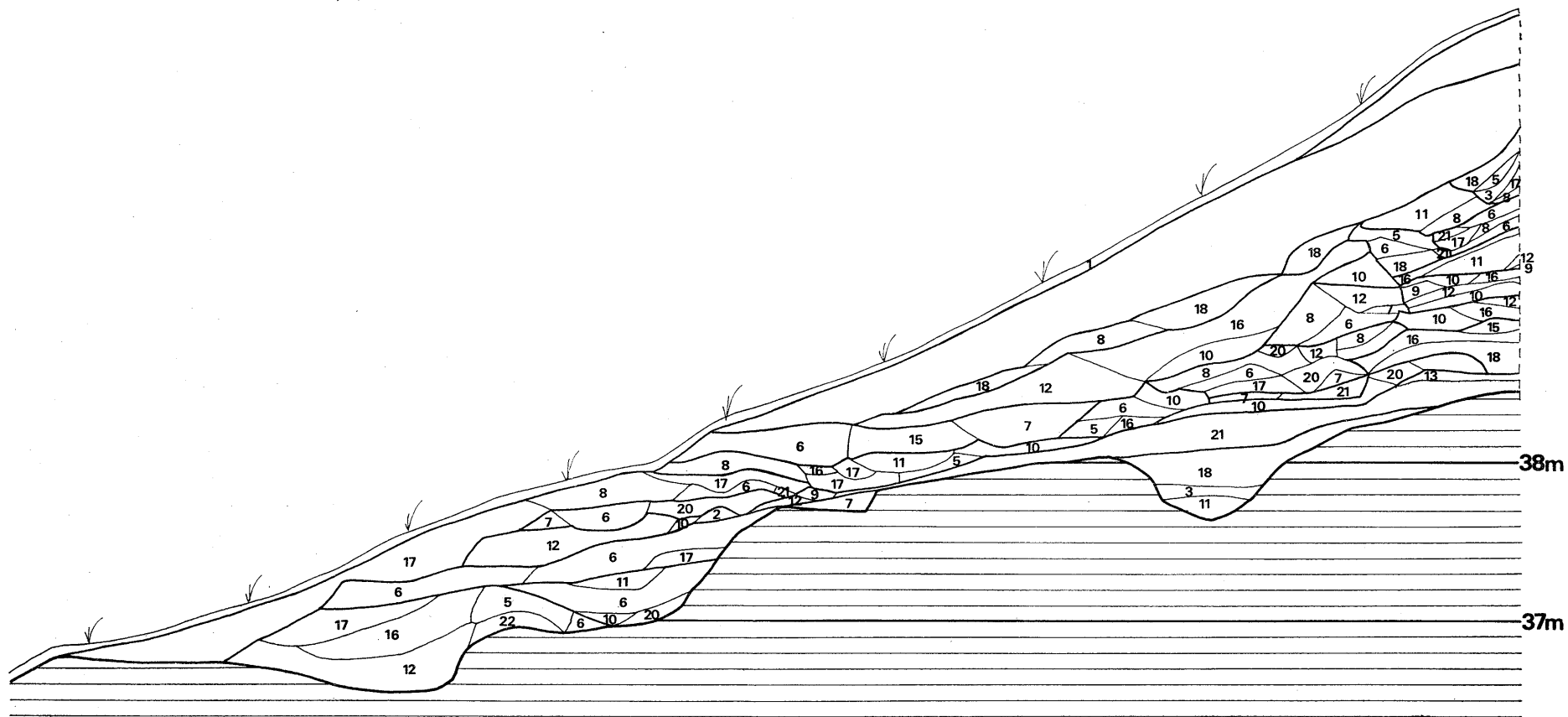


Fig.11 道田 1 号墳墳丘北西～南東断面図(縮尺 1/40)



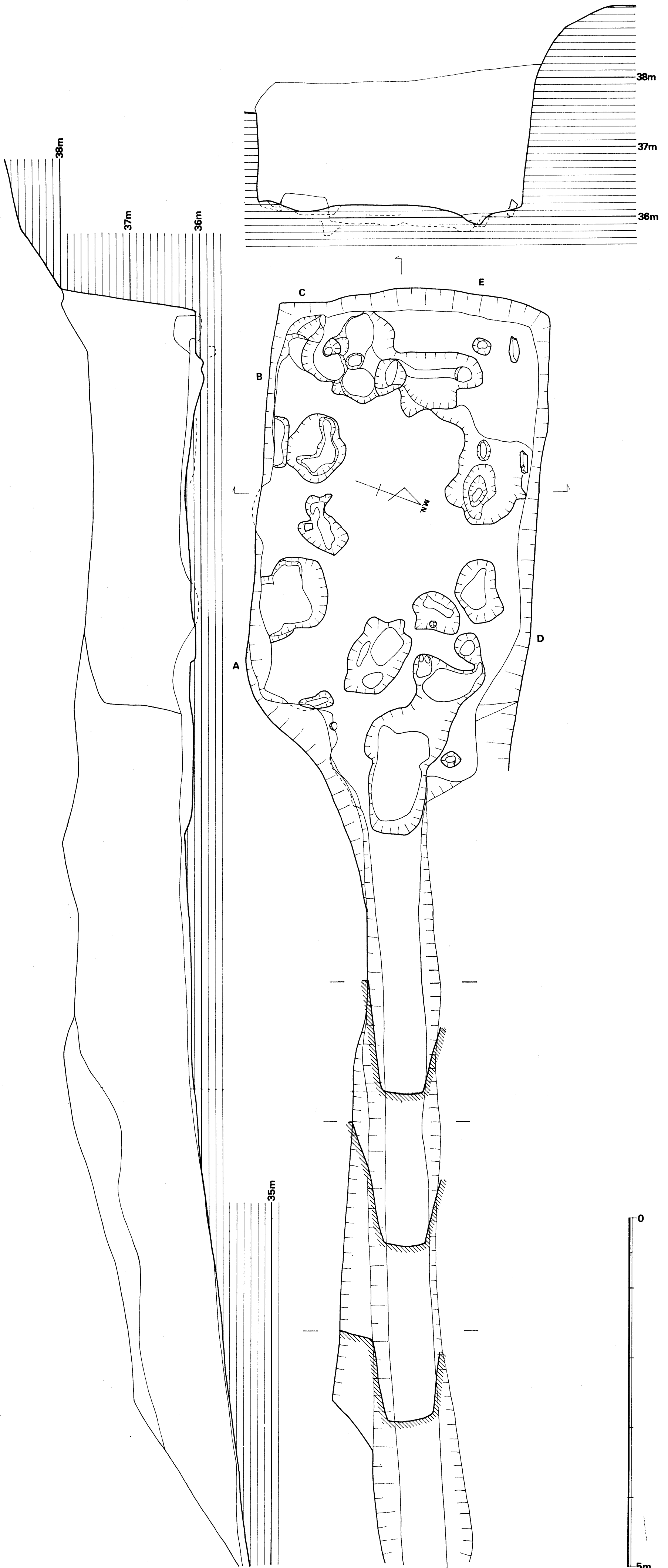


Fig.12 道田1号墳内部主体実測図(縮尺 1/4)



Fig.13 原口1号墳墳丘南~北断面图(縮尺 1/40)

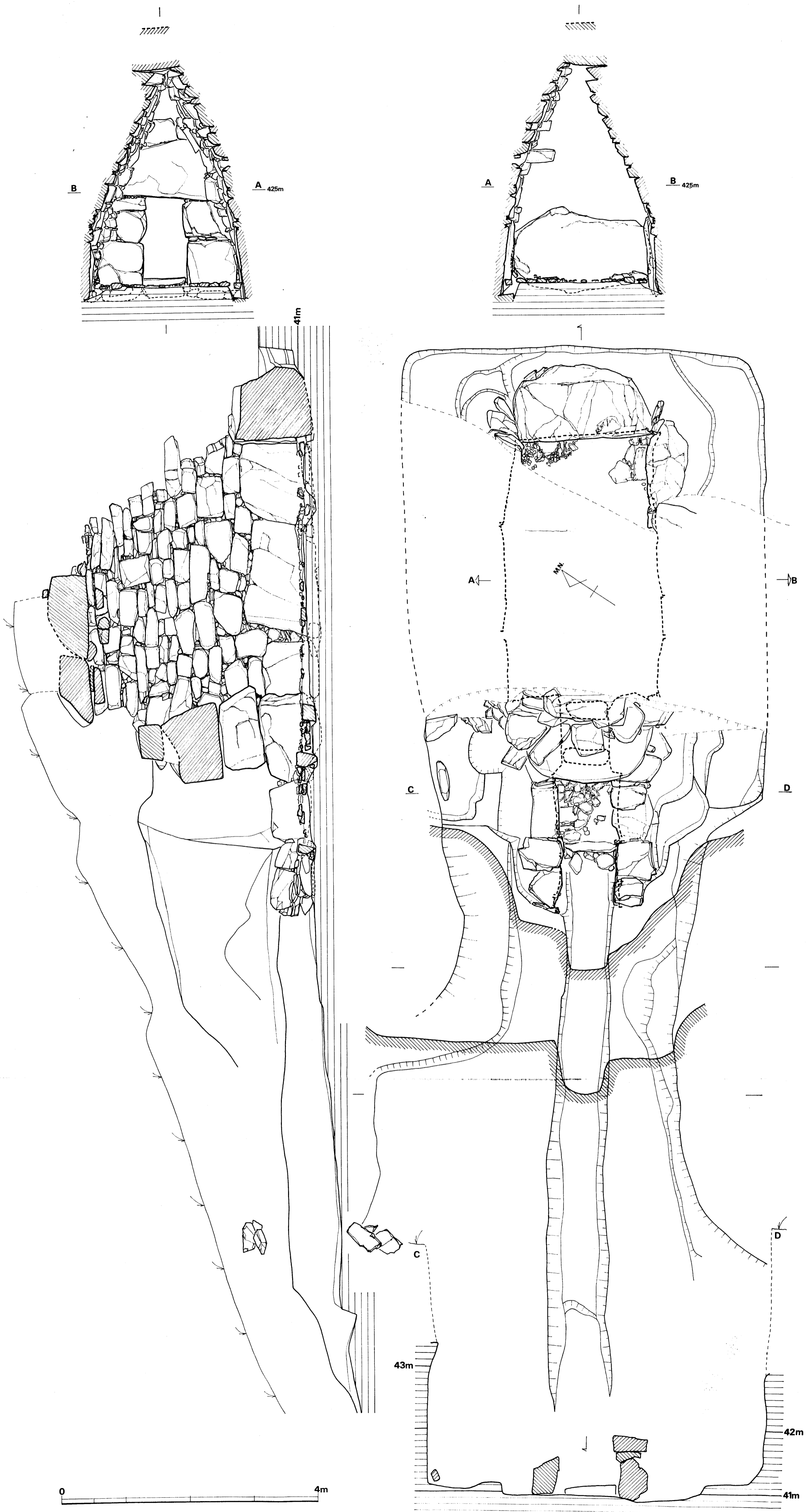


Fig.14 原口1号墳内部主体実測図(縮尺 1/50)

## 付 図 目 次

- Fig. 1 川原庵山6号墳墳丘北東～南西断面図
- Fig. 2 川原庵山6号墳墳丘北西～南東断面図
- Fig. 3 川原庵山6号墳内部主体実測図
- Fig. 4 川原庵山7号墳墳丘南～北断面図
- Fig. 5 川原庵山7号墳内部主体実測図
- Fig. 6 川原庵山7号墳墓壙実測図
- Fig. 7 川原庵山8号墳内部主体実測図
- Fig. 8 川原庵山8号墳墓壙実測図
- Fig. 9 下別当1号墳内部主体実測図
- Fig. 10 道田1号墳墳丘北東～南西断面図
- Fig. 11 道田1号墳墳丘北西～南東断面図
- Fig. 12 道田1号墳内部主体実測図
- Fig. 13 原口1号墳墳丘南～北断面図
- Fig. 14 原口1号墳内部主体実測図